# 新・水滸伝「四」（吉川英治）

## 一　蓮咲く池は子を呑んで、金枝の門にお傅役も迷ぐれ込むこと

ここに鄆州県城の町与力では、雷横とならんで古顔でもあり人望家の、美髯公の朱同がある。

女太夫殺しの件もややしずまった一週間ほどの後のことだ。

済州奉行所へと差立てる一囚人に付いて、朱同の人馬は、旅途にあった。囚人はきのうまでの刎頸の友、同役の雷横なので、馬上の、彼の顔も快々として、つね日ごろのものではなかった。

するとその途上、一旗亭を見かけ、彼は護送の部下に、酒を振舞った。また彼らの好きな袖の下をたんまり握らせ、そのあいだ囚人の雷横を、そっと裏の雑木林へつれて行き、手鎖を解き首枷を外してやった。

「朱同。どうするのだ俺を」

「わかっているじゃないか。君とおれとは十年の友だ。なんできさまを獄へ送れるものか。逃げてくれ」

「ばかをいえ。あとで君の難儀は知れたこと。舎利（骨）になっても、男として、そんなまねができるものか」

「うんにゃ、雷横。ここは考え直せ。きさまには、大切な老母がある」

「……言ってくれるな。そのことは」

「この朱同は独り身同然だ。しかもな、君は獄へ行けば殺される。けれど俺が君を逃がした落度を背負ッて帰っても、知事は俺までを殺しはせん。……なぜならばよ、知事は自分の情婦を殺された怒りでかっとなったものの、知事にも世間への弱みがある。俺もそこを突いてやる。さあ、あとはいいから梁山泊へ突ッ奔れ」

「え、梁山泊へ」

「おう、かつて俺たち二人が年来のご恩返しにお助けした名主の晁蓋さんは昨今あの山寨の統領。宋江先生もおいでだと聞いている」

「かたじけない。じつは先頃の旅帰りの途次、はからずお目にかかっていたのだ。そのことは、君にもちょっと話したと思うが」

「だからよ。君が行けば一も二もなく匿ってくれよう。さあ行き給え。あとはおれがひきうけた」

「だが、老母の身が」

「いや心配するな。県城を立つときからおれは腹をきめていたので、確かな者に、君のおふくろの身を頼み、すでに先へ山東の旅へ立たせてある。ここから急げば、きっと途中で追いつくだろう。ああ、長いつきあいだったな雷横、達者でいてくれ」

「すまん！　……この恩は忘れぬぞ。では朱同」

「おお、銀はあるか」

「持っている、持っている。じゃあ、いつかまた」

友の情に涙しながら雷横は疎林を走ッてたちまち東へ姿を消した。

朱同はぶらんと居酒屋へ戻って来て、

「さあ大変だ。雷横に逃げられちまった。だがあわてるな。罪はおれ一身が着る。飲むだけ飲め。どうせこれから帰りは空身だ」

と、カラカラと打笑った。さてはと、部下は暗にさとっていたが、誰あって雷横に憎しみを抱いていた者はなく、またみな朱同の友情も知っていたので、黙々と彼のいうがままに元の道へもどって行った。

ただこの報告に釈然としきれなかったのは女の情人でもある新任の知事殿だった。不快至極であったには違いない。しかし事件は自己の情事にもふれてくるので、これをあっさり済州奉行所の処置に廻してしまった。ところが済州奉行所でもこれは困った。罪跡といってもすこぶる不明瞭でただ単に「公務怠慢」というだけな差紙なのだ。そこで即時これをまた滄州の苦役場の方へ七年の刑期付きで送りつけた。――七年という刑期は滄州の大苦役場としては、もっとも軽罪のほうなのである。

「ほ。美髯公。この髯男は、鄆城県では評判のいい与力だったはずじゃないか。よろしい、苦役には就けんでもよい。わが屋敷で雑用に使ってみよう」

滄州牢城の牢営長は、公文の差紙を見た日すでにこう呟いた。そしてなお、じっさいの人間を白洲で見るにおよび、いちばいその骨柄に惚れ込んだ容子で、

「なるほど、髯も見事だ！」

と、大いに唸った。すっかりお気に入ってしまったのである。また日をふるに従い、長官公邸の下役から下僕にまで、お髯さん、お髯さん、と朱同を呼ぶ愛称はその人柄への好意とともにたかまっていた。

或る日の如きは、長官が独り小酌している席へ呼ばれて、身の上を訊かれ、何で流罪になって来たかと仔細をたずねられたので、朱同は、友人雷横のことから女太夫と新知事とのいきさつまで、何のかざりもなく話してしまった。

「ふウむ……」と、長官は苦笑して、「なかなかその知事もやっとるな。よほどな色男だと見える。……しかし何か。君はその雷横の親孝行に感じて、わざと逃がしてやったというのか」

「いえいえ。そんなわけではありません。まったく、役目の落度です、油断からです」

「そうではあるまい。友情だろう。まア何しても、さしたる重罪ではなし、七年間はわしの邸に仕えていろ」

「は。こんなことなら、どうか一生でも」

「はははは。うい奴だ。ま一杯飲め」

ところへ、チョコチョコと、唐子人形みたいな愛くるしい四ツばかりな男の子が入って来て、そこらで悪戯していたと思うと、朱同の髯が童心の好奇をそそったものとみえる。ひょいと、朱同の膝へ乗って、その長やかな黒髯を、おもしろそうに弄びはじめた。

「長官。お孫さんでございますか」

「ばかをいッちゃいかんよ。わしだってまだ若い。わしの末子だ」

「それは、それは。……ア痛。お坊っちゃま、そんな引ッ張ると、この小父ちゃんが泣き出しますよ」

子供はよく大人を観る。さあこれからというもの、この唐子

は、おヒゲの小父ちゃんを見かけると、彼のあとを追っかけ廻して離れない。
とんだいいお傅役として、彼はいらい、坊ッちゃん付きを兼任の恰好でもあった。するうちに、いつか一ト月、盆の七月十五日をここで迎えた。
お盆には地獄の釜の蓋も開く。
大牢の城門外にある獄神廟と地蔵寺では、例年盂蘭盆会の当夜、さかんなる燈籠流しの魂祭がおこなわれる。
「さ、お坊っちゃま。お供して参りましょう」
昼からさんざんせがまれていた朱同は、たそがれ、まだ燈籠流しには早すぎるが、主人の唐子を肩ぐるまに乗ッけて、長官邸から遠くもない地蔵寺へ出かけて行った。
いやたいへんな人出である。地獄極楽の見世物やら、刀玉採りの大道芸、皿廻しの掛け声、煮込屋の屋台、焼鳥屋の煙など――。山にはひびく梵音の鐘、池には映る俗衆の悦楽。これやそのまま浄土極楽か、地獄の四生六道か。なにしても、うごきもとれない人の流れだ。
「おヒゲ。おヒゲってば、お待ちよ」
「はいはい、坊ッちゃま。おしッこですか」
「ちがうよ。乳母が見えなくなっちゃったよ」
「え。乳母さんが。……ああいけねえ、どこかへ迷子にしちまった」
探し歩いたが見当らず、施餓鬼から裏の大きな蓮池をめぐり、石の反り橋を渡って来ると、こんどはほんとにお坊ッちゃんが、オシッコだと言い出した。――ここらは余り人通りもなしと、朱同はてんぐるまの坊ッちゃんを肩から降し、橋の欄干に立たせて後ろから抱きささえていた。
「さ。なさいませ……。ホラ、ホラ、ホラ、下は紅蓮白蓮の花ざかりですよ。観音様のオシッコみたいでさ。蓮の花や葉の上に、瑠璃白玉となって、オシッコがすぐ成仏しているでしょ。ネ……お坊ッちゃま。……さあもういい。もう出ないんでしょ」
すると、誰か。
朱同の後ろへ来ていた男が、
「兄弟。ちょっと、彼方の森の蔭まで、顔を貸してくれないか」
「えっ……？」と振向いて。「おおっ、君は」
「叱ッ。ここでは人目につく。話は彼方で」
「うむ、合点だ。そうそうもしお坊ッちゃまえ。いま小父さんのお友達が、御用があって来ましたから、ちょっくら行って参りますからね。……あれ、ベソをお掻きになっちゃいけません。すぐです。すぐ戻って来ますから、ここでおとなしく蓮の花でも見ていらっしゃいよ。ようございますか」
言い残すやいな、池塘を駈けて、彼方の森の中に人目を避け、
「雷横！　どうして君はここへ来たのか」
「朱同！　よかったなア、まず無事で。――じつはあれから、君の情けで、母とともに梁山泊へ落ちてゆき、お蔭でこちらの身はひとまずおちついたが、しかし忘れられないのは君のことだ」
「いやそんな心配しないでくれ。牢城の長官に目をかけられて、俺もなんとかやっている」

「だが、君の流刑を聞き、また君が俺にしてくれた友誼の厚さに、山泊の頭目連中は、どうしても一度君に会いたいといってきかないんだ」
「だって、俺は牢城の刑囚だ。どうにもならんさ！」
あたかも、彼のこの言を待っていたもののように、そのとき、木蔭から別人の声が、否と答えた。
「美髯公！　あなたほどな男一匹が、なにもそんな鎖にとらわれていることはない。ひとつ、まかせてくれませんか。われわれに」

何者か、と朱同は驚いた。その目の前へ、にこやかに出て来た者は、山泊の軍師呉学究、あの呉用学人であったのである。
晁蓋、宋江をはじめ、泊中の一統は、どうしても朱同を仲間に迎えたいとなって、衆議、ここへ雷横をさしむけて来たもので、呉用はその説得役をひきうけて来たことらしい。
だが、呉用のどんな説得の弁にも、朱同は「うん」といわなかった。彼には彼の信条がある。たとえ官憲の手先といわれ、刑囚の身と落ちても、真人間の潔白は維持していたいとする性来の背骨があった。
「どうも、それほど、いやだと仰っしゃるものならぜひもない。……可惜、あなたほどな人物を、七年もこの地の牢城長官の小使みたいに朽ちさせておくのは勿体ないし、また将来とても、とうてい、官界の堕落腐敗のなかに長く晏如としていられるあなたでもないことは知れきっていると思ったからだが……」
と、さすが才略の弁に富む呉用もいまはあきらめ顔して。
「ま。……お話もこれまでとしたら、ひとつ、ぶらぶらその辺まで、ご一しょに歩きましょうか」
と、連れ立った。
そして蓮花の池畔から前の石橋の上までかかると、朱同はアッと顔色を変えた。どこへ行ったのか、主人の子が見えないのである。
彼はウロウロした。気のどくなほどうろたえて探し廻る。それを呉用は他人事に見ながら言った。
「いや朱同さん。探してもムダだろう。じつはもう一人、てまえが供人を連れていたから、その供の男が、気をきかして、どこかへ遊びに連れて行ったものとみえる」
「冗談じゃあない！」と、朱同はなぐさめられているどころか、憤然として。「大事な大事な長官の乙子（末子）さまだ。いったいどこへ連れて行ったんだ、人の気も知らないで」
「ま、お怒りあるな。ご一しょに探しましょうわい」
それから附近を尋ね廻ったが、影も形も見当らない。――のみか、いつのまにやら日はたそがれ、盂蘭盆会の熱鬧のちまたも遠く夕闇の楊柳原まで来てしまった。
「おい、雷横」
「なんだね」
「なんだネじゃあるまい。おかしいじゃないか。なんでこんな方へ探しに来るのだ」
「いや、ことによったら、その供の男ッて奴は、ケタ外れな人間だから、旅宿へ連れて帰ってしまったんじゃないかと思ってさ」

「旅宿へ。――どこの旅籠だ、その家は」
「ずっと町端れの、まだ十里も先だが、軒先に馬繋ぎの杭を打ち並べてある土蔵二階の家さ」
「供の男というのは」
「一見して分る黒奴だ。名は、黒旋風の李逵といって」
「げッ。そいつは、かつて江州城内を暴れ廻り、得意の二丁斧で、人を殺した奴じゃないのか」
「その李逵だが」
「と、とんでもない！　そんな野郎にかかった日には、抱かれただけでも、お坊ッちゃんは泣き脅えに泣き死んでしまうだろう。ええもう、乳母には迷ぐれるし、夜にはかかるし、長官もきっとご心配し抜いているにちがいない。……そうだ、こんなブラブラ歩きなどしていられるものか。雷横、おれは先へ行くぞ」
　朱同は二人を捨てて教えられた旅籠の方へ馳け出した。すると、行くこと数里、薄刃の二丁斧を持った風の如き黒い人影とすれちがった。てッきりと思ったから朱同はいきなりその男の襟がみを引ッつかんで一喝をくれた。
「やいッ李逵っ。お坊っちゃんをどこへ置いて来た」
「あっ、お髯の朱同か」
「すぐ返せ、大事なお子様を」
「そいつア気の毒しちまったな」
「な、なんだと」
「おれの顔を見たら泣いて逃げ廻りゃあがるんだ、あの石橋の上でよ」
「あたりまえだ、そしてどうした？」
「呉用先生のいいつけだから、どうでも旅宿へ連れて行こうと思ってよ、こっちも夢中で追ン廻しているうちに、あの蓮池へ落ッこちてしまった」
「や、や、や。うぬ！　さてはてめえが殺したな」
「とんでもねえ、いくら李逵が鬼だって、あんな可愛らしい子を殺せるものか。しまったと思ったが、あの蓮池にゃあ人間を引きずり込む河童がいるっていうことだ。ぶくぶくといったきりで姿も見えねえ。そこで仕方なしに落ちていた坊やの髪の珠纓だけを拾って来たよ。これで勘弁してくれやい」
「しゃッ畜生っ」
　朱同はかッとし、襟がみの掴みを一ばい深く取って、李逵の体を、力まかせに投げつけた。
　でんと、九尺も先へ、投げられたかと見えた李逵の体は、ぴょいと蛙立ちに彼方へ立って、へへへへ、と白い歯で笑っていた。
「おやんなすったね、お髯さん……。さあ、やるなら来いっ」
「うごくな、黒ンぼ」
「オオ、二丁斧が見えねえのか。ふん、知らねえな、俺を」
「くそっ。もう生かしてはおかねえぞ」
　だが朱同は刑囚の身だった。身に一剣も帯びてはいない。しかるに相手は手練れの二丁斧だ。李逵は充分見すかしている。
　ところがその李逵もだんだん持て余した。斧は空振りに空振りをかさね、朱同の姿は飛電の光にことならない。なにせい鄆州随一の捕手頭、乱捕りの達人なのだ。むしろ空手が得意であったとみえる。

「こいつはいけねえ」
李逵は逃げ出した。逃げはじめるやこの男廉恥もない。山坂また山坂をころげ降りた。すると蒼々たる松の林が十里もつづく。松風が耳を洗う。
「はて、どこへ失せたか」
朱同は追いに追った。どうせおめおめ空身では長官邸へは帰り難い身でもある。いつか夜が明けかけ、チチチチと鳥の音はしていたが心にも耳にも入らない。そして彼の血眼はふと奔る鹿のごとき影を見た。李逵だったのだ。ところがそれは村道へ出て彼方のすばらしい土豪の門内へ馳け込んでしまった。いぶかしいとは思ったが、朱同もつづいてその豪勢な大門の内へ、盲目的に、
「野郎っ、待てっ」
とばかり追ッかけて入った。
すると、泉石見事な庭苑の彼方で、すらと、鶴のような姿の人が立ってこなたを振向いた。髪に紫紐金鳳の兜巾をむすび、裾長い素絹の衣を着し、どこか高士の風がある。
「たれじゃ、何者じゃ」
その涼やかにして射る如き眼光も尋常人とは思われなかった。
「あっ。つい、どなたのお屋敷ともわきまえなく、無断立ち入りましたこと、重々の不埒、どうぞお見のがしを」
膝を折って、朱同は詫びた。われに醒めればこの仕儀は恥かしい。
高士はほがらかに笑った。
「美髯公。あんたはまあ、よほどあの黒助にからかわれなすったの」
「えっ？　てまえをご存知でしたか」
「されば、山東の及時雨宋江から手紙をもらっていましたのでな」
「そしていま、黒助と仰っしゃったのは」
「李逵のことですわい。……じつはの、かねて宋江からの密書で、この館の内に、呉用、雷横、黒旋風の三名を泊めてやっておりましたのじゃ」
「あっ、ではここが彼らの旅宿で」
「さよう。あんたには、さまざま解けぬご不審だろうが、すべてはただ、梁山泊の輩が、あんたを山泊の仲間に加えたいという願望から出たことじゃ。しかし、その否やなきご承諾をうる手段に、あの長官の和子を、李逵の手に預けてつい死なせてしまったのは、何としてもちと呉用の誤りじゃったな。……軍師にもまた智恵の行き過ぎはあるものか。……」
と、やおら長い袂を揚げて奥なる一閣の人々をさしまねいた。
おうっと答えて、そこからこなたへ歩いて来る三人を見れば、紛うなき昨日の呉用であり雷横であり、また一ばんどんじりから、のそのそ来るのは黒旋風の李逵だった。
呉用と雷横とは、こもごも自分のした偽態を詫び、またかさねて、梁山泊一同の希望を切にくりかえした。ともに、かたわらの高士もそれをすすめるし、ここにいたっては、朱同もついに、その熱意に、冷ややかではいられなかった。
「わかりました。もうぜひもない、梁山泊入りと腹をきめま

しょう。……ですが、一条件がある。それは叶えて欲しいんです」
「おっ、おきき入れ下すったか。やれかたじけない。して一条件とは何ですか。この呉用一存で出来ることなら何でもしますが」
「ほかでもありません。ご三名お立会いの前で、そこにおる李逵と決闘をさせて下さい」
「ほ。それはまた、いかなる意恨で」
「ひとり自分の意趣だけでなく、たとえ牢城の長官でも、この流囚の身を一時たりと温かに養ってくれたあの人の恩顧を踏みにじッては去れません。いや和子を亡くしたことは重々に申しわけない。せめてその下手人李逵の首をひッさげて、お詫びのしるしにご門前へ呈し、それから山泊へ落ちて行きたいと考えます」
　聞くやいな、李逵は飛び退いて、バッと気早な身構えを取り、
「な、なんだとお髯。あんなにも、わけを話してあるのに、まだ俺が坊やを殺したと疑っていやがるのか。勝手にしやがれ。さ、恨むなら恨むでいい、勝負をしてやる」
「こらっ、止さんか李逵」
「だって、先生」
「待てっ。おまえにいいつけたのはこの呉用だった。無知野蛮、李逵の如き者に、子供を預けたなどは、かえすがえす呉用の落度」
「ひでえや、先生。おらは無知野蛮という奴なのかね」
　すると、朱同の顔いろを中心に、相互を見すましていた館の主が、
「いや呉用先生。朱同が申した自責の念も、ないがしろにはできません。それはそれで尊ぶべきじゃ。ですから、こうなされたらいかがかの」
「何かよいご一案でも」
「ム。李逵の身は、ひとまず当家で預かりおこう。そして、おふたりは朱同ひとりを伴うて、ひとまず梁山泊へひきあげ、宋江そのほかの一統へ、首尾よく朱同を迎え入れたよしをご披露なすっておいたらどうか」
　かくまでの取りなしに会っては、朱同もなおそれでも不服とはいえなかった。ではそうしてと、やがて主客五名、一閣のうちに卓を囲み、
「いずれ次には、お預けの黒猫を、迎えに来ずばなりますまい」
　などと、大いに笑い合った。
　いや李逵はムクれた。無知だの野蛮だの黒猫だのと、さんざんな玩具である。忌々しさよと、朱同を睨むと、朱同もまた、胸中千丈の焔がほんとにはまだ鎮んでいないので、ぐッと睨み返す。心火の闘いだ。それへ酒が注がれる。物騒なことといったらない。
「これは」
　と気づいたので、館の主は、侍女にいいつけて、弾琴をとりよせた。主は七絃琴のたしなみを持ち、朗詠が上手であった。微吟、風流、おのずから荒ぶる男たちをも優しくなだめた。
「ははは。つまらんお耳よごしじゃったな」

一曲を終って、また酒になる。朱同はそこで、さっきから独りしていた自問自答を率直にきいてみた。いったいこの地方などにはあるはずもない宏壮萃麗なこの邸館は、どういう由緒の家なのか。またお主は何者なのか、と。

そのつぶさを知って、朱同はあらたに、一驚を喫した。

ここの家は、五代の末期、宋の太祖の時代に地方へ降りたもので、祖先の柴世祖は、帝位にあった幼君だった。時に契丹との大戦あり。幼君では国政軍事、成り難しとあって、周の一将軍趙氏が、全軍から推戴されて、その帝位を代って即いだ。――これが宋の太祖であり、この史事を世に「陳橋ノ譲位」という。

ところで、帝位を譲った柴氏の先祖へは、以後の朝廷から、丹書鉄券が下賜された。そこで野にくだっても、これが代々皇統の家柄たるを証拠だて、ずいぶん尊敬もされ、特権も持ちつたえて来たことでもある。――――けれど、世は滔々と紊れ、宋末の朝廷朝臣もいまはそんな古事などてんで忘れ去っていよう。――そしてただ滄州の片ほとりに、その昔の庭園や館の美に、かすかなる金枝玉葉の家の名残りを保ち、地方人の畏敬と、あるじの徳望とによって、なお門戸に、いくたの客を養い、荘丁を抱えなどしているもので、その今日の当主を誰かといえば、

柴進、あだ名は「小旋風」その人だった。

ここまで聞けば、当然、おもい当って来よう。

いまでは梁山泊にいる一手の旗頭、豹子頭ノ林冲も、かつては滄州の大苦役場に送られて来たさい、柴進の厚い世話になり、また柴進の助けによって、牢城を脱し、やがて梁山泊の人となったものだった。そのほか、泊中には、柴進の庇護をうけ、柴進と相識のある者は、数知れぬほどあるといっていい。

「ああ、さしたるお方とも知らず」

と、朱同はことごとく感動に打たれ、ひとしお、その人を見直した。そしてこういう人物までが、人知れず肩持ちしている梁山泊という男どもの巣をもまた、あらためて考え直さざるをえなかった。

翌日。――その梁山泊へさして、呉用、雷横、朱同の三人はここから立って行った。

しばらくの、別れにさいし、呉用は言った。

「李逵よ。ま、当分はおぬし一人、こちら様のごやっかいになるわけだが、しかしくれぐれ、うぬが持ち前の粗暴だけはつつしめよ。……いいか」

「へい。無知野蛮とかいうやつを、噛み咏えていりゃあいいんでしょ」

「それ、その通りきさまは性なしだ」

「また性なしが一ツ殖えましたか」

「たわけ。困ったものだ。だが何ンといってみても貴様のような人間も縁の端。いずれ朱同の腹もおさまり、晁総統や宋江先生から、よしとお言葉がかかったら迎えに来てやる。おとなしくお庭の掃除でも毎日していろ」

「下がったね、あっしも」

李逵は、黒いお出額を叩いた。

その日、柴家の荘丁は、大勢して、旅立つ客の三名を、関外まで送って行った。関の番卒といい、牢営内の役人までも、

柴進の家の者と聞けば、疑いもしない。
それとこの両三日は、城外城内、ひと通りな騒ぎでなかった。牢営長官の愛児が、盂蘭盆会の夜、地蔵寺の池で溺れ死んだ。そして傅役の朱同が当夜からいなくなったという、それの詮議や家ごとの町調べだった。
しかし、こういう捜査の手すら、柴家の内へは決して臨んで来ることはない。治外法権の門といったかたちである。かくてはや四、五十日はいつか過ぎた。その或る日のことだった。——どこから来た使いやら飛脚やら、秋、静かなここの門へ、一封の書がとどけられた。
「大旦那さま。ただ今、高唐州からこんなお手紙でございますよ」
あわただしく、侍女はそれをすぐ、柴進の室へ持って来た。
「おや、火急とある」
柴進は、封を切った。読みゆくうちに、やや手がふるえてみえる。何かよほどな大事でも起ったらしい。
「柴の旦那え。……もし大旦那」
「あ、李逵。そこにいたのか」
「おいいつけで、外から窓框の拭き掃除をしておりやしたが、何か、えらいこッても持ち上がったんでございますか」
「むむ……ちとなア。……だが、おまえに話してみたところで仕方がない」
「李逵じゃお話し相手にならねえと仰っしゃるんで」
「うるさいのう……。ひとが物を思案しているのに。ああ、どうしても、これはひとつ、わし自身、高唐州まで出向いてゆくしかあるまいなあ」
李逵はそれを小耳にはさむと、窓際の踏み台を降り、庭から廊へ廻って、のそっと柴進の部屋へ首を突っ込んで来た。

## 二　狡獣は人の名園を窺い。山軍は泊を出て懲らしめを狙うこと

もちろん誇張したことばだが——常二家二飼ウ食客三千——といったような野の名門、柴家のことである。日ごろ居候はめずらしくないが、けだし李逵のごとき居候は珍しい。まるで黒面猿を家に置いているようなものだった。
ゆるしも待たず、あるじ柴進の室へ闖入して来た彼は、柴進の身に降って湧いた急な旅行がどんな心配事であるかなどは一こうに無頓着で、
「ほい、ありがてえ。お供ができる！」
と、まずまず自分を祝福してから言ったものである。
「ねえ大人。大人が高唐州へお旅立ちなら、あっしだって、いや、あっしもすぐ身支度にかからなくっちゃなりません。ご出発は今日中ですか。それとも明朝で？」
「なに。たれが連れて行くといった。物見遊山とはわけが違うわ」
「でも大人の側を離れたくねえんですよ。それにご当家へ預けられてからもう五十日。あれッきり李逵は一歩だッて門の外を踏んでもいねえ。ぜひ連れて行っておくんなさい」
「ちッ、ひとの心配も知りおらんで」
柴進は、舌打ちした。それどころではないといった憂色なのだ。そしてさっそくその日、旅途についた。荷持ち男三人、

家来七騎。それへ交じって黒旋風李逵もついに供人として従いて行った。

旅は半月余りつづいた。やがて高唐州に着く。その城内街もずっと北郊に一叢林の大邸宅があった。土地でも著名な名園でまた名族でもある柴皇城の家である。――が、そこで馬を降りるやいな、柴進は、

「あっ、まに合わなかった。叔父君は早や世を去ったか」

と、茫然、希望のむなしさに、涙となった。門は喪に閉じられていたのである。すなわち、柴進の旅は、叔父皇城の危篤の報に急いで来たものだが、こう早くとは、日ごろ強健な叔父だっただけに、よほど意外であったらしい。

だが、あとで聞けば、皇城の死は、やはりただ事ではなかった。彼を待ちかねていた皇城の妻や一族は、その夜、柴進にむかって、次のようないきさつを涙ながら物語った。

――ちかごろ、この地方の軍司令を兼ねた一奉行が、都から赴任して来た。

時めく宋朝廷の大臣高俅の従兄弟で高廉という人物。

これが地方民を蔑視して、権勢をふるッているのみか、女房の弟の殿直閣という青二才が、これまたいやに貴公子ぶッた官僚臭の男で、いつも大勢の取巻きとともにのさばり歩いているやつだが、或る日「庭を見せてくれ」といって不意にここを訪れ。「――これはすばらしい。庭園もいいが、水亭閣廊、四門の造り、おまけに粋な数寄屋まで、どうしてこんな田舎にあるのか。さっそく義兄に話して、下屋敷におすすめしよう」と、まるで自分の持ち物みたいに言って帰った。

でも、まさか。

と思っていると、ほどなく、十日以内に他へ立ち退けと、殿直閣から言って来た。もちろん、当主の皇城は一笑に附していた。「――他郷者だ。わが家の来歴を知らないのも無理ではない」と。

ところが「なぜ明け渡さんか」と再三な催促である。あげくには直閣自身が呶鳴り込んで来た、で、皇城は親しく柴家の由緒を話して聞かせた。――代々この地方に住んではいるが、祖先は金枝玉葉の出であり、宋の太祖の丹書鉄券も家に伝えられている。――「ご存知ないか？」その迂愚を嘲ったのである。

すると直閣はかえって威猛高となり、ではそれを見せろと迫った。ここにはない、と答えると、いきなり皇城を足蹴にし、「われらは、現朝廷に並びなき高俅閣下の一族だぞ。そんな偽系図に驚くような田舎者と同一視されてたまるか」と、なおも左右の取巻きと一しょになって蹴るやら撲るやらさんざんな侮辱を加えて立ち去った。

皇城の死は、これが因だった。どっとその夜から病床につき、大熱のあいだにも「くちおしい、ざんねんだ、無念だ！」といいつづけ、さいごの息をひくときには「――甥の柴進に告げて、この恨みをはらしてくれ！」とくり返し言い遺して逝ったという。

柴進は一ぶ一什を聞いて腸をかきむしられた。が、取り乱しているときでない。

「いやどうも、お互い、何といっていいか悲嘆のことばもありません」

と、未亡人以下、親族一同へむかって。

「この上は、てまえの滄州の家にある伝来の丹書鉄券をとりよせ、他日、都へのぼって、宋朝の天子へ直々に訴え出ましょう。……朝廷歴代の文書庫には、祖先柴世祖から宋の太祖へ世を譲ッた――『陳橋ノ譲位』――の写シ文もかならず収めてあるはずですから、明判たちどころに、殷直閣の暴を懲らし、おかみも叔父皇城の霊を悼んでくださるにちがいありません」

と、なぐさめた。

すると、祭壇の間の端で、これを聞いていた李逵が、場所柄もわすれて、ヘラヘラと笑い出した。

「そんな手間暇は無駄事ときまッてらあ、訴えの筋が通ったり、ちゃんと、掟が立つようなお上なら、天下に謀反のおきる道理はねえ！」

親族たちは変な顔して、みんな李逵の方を振り向いた。柴進もその人たちの手前、勢い叱らざるを得なかった。

「これッ李逵。駄弁を弄すな。きさまこそ、供部屋へ退がって、ほかの供人のように神妙にしていろっ。どうも仕方のない黒面猿だ」

その日は折も折だった。柴家では故人皇城の七々忌に当たり、典儀のあと、型のごとく、法事の宴に移っていた。――と、そこへ、どやどやと一群の〝招かれざる客〟が門へおしかけて来たものだった。

「当主の病死はわかっておる。だが、誰か口のきける奴は残っているだろう。あいさつに出せ」

と、中の一人が門内でわめいている。

見れば、従者、取巻き、無頼漢、およそ三十人余り、城外へ遊山にでも出た帰りか。半弓、吹矢、笛太鼓、蹴毬、酒瓢などを持ちかざし、おそろしく派手に飾った化粧馬の鞍上には、例の兼軍奉行の義弟、殷直閣がニタニタと乗っていた。

「これは、これは」

と、やがてその前へ家の内から柴進が会釈に出ていた。そしてあくまで下手に。

「何の御用か存じませぬが、あいにく今日、当家はかような取混み中。おかまいも出来ません。どうかまた他日でもお立ち寄りを」

「こら、こらッ。きさまは何者だ。雇人か、家職の者か」

「いえ、柴進と申す親族の一人で」

「では滄州の」

「はい」

「オオその柴進なら話はつけよい。皇城の病死、つづいて葬儀、やむなく今日まで待ってやったが、早や七々の忌も今日で相済もう。さっそく明日はここを明け渡せよ。よろしいな」

「ご冗談を」

「なにッ」

「こんりんざい、当館はお譲りできません。たってお望みなら、天子のご裁可をうけておいでなさい」

「大きなことをいうな、大きなことを」

「いや広言ではない。時代こそ降るが、わが柴家は天子の裔だ。しかも証拠の丹書鉄券も伝わっている」

「見せろッ、それを」

「いま、滄州へ人をやってとりよせている。奉行の威をかさ

にきて、余りな非道を押すならば、こちらにも考えがある」
「あはははは」と、直閣は馬上で大きく身を反らして笑いながら「こいつも死んだ皇城と同じことをいっておる！　虚構歴然だ！　明日まで猶予しておこうと思ったが、もはや仮借にはおよばん。それッ、法莚の奴らを追っ払って、ここの邸宅に封印をしてしまえ」
あらかじめ、そんな腹でもいたのだろう。従者、手下の無頼漢、同勢わッと土足のままで邸内へなだれ込んだ。柴進さえ防ぐいとまもないほどな瞬間だった。――すると、どうしたのか。
いちど押し入った人間どもが、ど、ど、どッと屋鳴りのうちにまた、外へ転び出して来た。どれもこれも朱に染まり、手足満足なのは一人もない。そして、それを追ッかけ追ッかけ続いて二丁斧を振りかざしながら躍り出して来た黒面の阿修羅がある。――あッと、これには殷直閣も仰天して急に、馬首を向けかえた。
だが、一喝、
「てめえだなッ」
李逵の一斧が、馬の脚を払った。また間髪を入れず、ころげ落ちた直閣の体へ、次の一閃が下っていた。噴血、ひと堪りもあろうはずがない。
あとの手輩はもう蜘蛛の子だった。――柴進は、この瞬間の出来事に、ただもう茫然のていだったが、やがて。
「李逵！　きさまは、とんでもない事をしてくれたな。ああ、とり返しはつかん」
「大人。いけませんでしたか」
「知れたことを。いかなるわけあいでも、人を殺していいという法があろうか。だが今は何を言ッてみたところで始まらぬ。きさまはすぐ梁山泊へ落ちて行け」
「どうしてです。こうなる以上、逃げる気なんざありません」
「なんでもいいからここに居るな。あとは柴進がひきうける。万が一、きさまが縄になったら続いては梁山泊一統に禍いがおよんで行こう。この柴進なら出る所へ出ても、堂々と、正しい申し開きは持っておる。早く行け。路銀を持って」
と、ふところの金をつかませ、遮二無二、彼をこの場から落してしまった。そして彼自身は、甘んじて、その直後に襲せて来た捕手の群れに身をまかせ、われから司直の裁きの庭へすすんで坐ったものだった。
しかし、上司の奉行高廉は、直閣の姉の良人である。でもなおその高廉が吏として公平な人物であったら正しい裁判も見られたろうが、いずくんぞ知らん、稀代な妖人だったのだ。やがてそのことは後章でも説くが、ともあれ小旋風柴進が、なお時の政道を信じて身の処置に出たのは、かえって彼一個の大難を求めたばかりでなく、予想もしなかった一大波瀾を逆にこの地方に捲き起すものとはなった。
ここで、視野を一転。――山東の梁山泊へ目を移してみると。
泊中の聚議庁では今、高唐州から山寨へ帰って来た黒旋風の李逵が、衆座の前に、おそれ入った恰好で、目をパチクリさせていた。
「いやもう、あきれた奴だ。またぞろ、その二丁斧で、思慮もない事件を起してしまったのか！」

彼の報告をきいた晁蓋以下の領袖たちは、頭ごなしに、こう叱りつけて。
「ところで、きさまは難をのがれて来たようなものだが、あとの柴進大人はどうなるのか。ただではすむまい」
「すまねえでしょうが、あとはご自分でひきうける。なんでも、きさまはこの場を逃げろ、と仰っしゃるんで、是非もなく」
「はアて、後難が案じられる」
と、呉用、宋江、林冲などもみな眉をくもらせた。これらの者はみな王道政治の糜爛腐敗を身に舐めて知っている。かならずや柴進の主張などは通るまい。一刻もはやく恩人柴進の安否をまずたしかめぬことにはと、さっそく、
「ご苦労だがひとつ、高唐州へ行って、仔細、調べて来てくれまいか」
と、神行太保ノ戴宗へ、一同から声がかかった。で、戴宗は、
「おやすいこと」
と、即日、彼が得意とする神行法を利用して高唐州へ飛び、日時およそ半月ほど経て、ふたたび泊中へ帰って来た。
「さてこそ、やはり！　……」
戴宗の報告を聞きすました満座の眉色は、一瞬、しいんと恩人の受難を傷み、また鬱々たる義憤に燃えた。
果たせるかな、柴進は以後、獄中につながれ、故人皇城の邸館とその名園は、そっくり門の相を変え、〝官没〟の名のもとに、今では奉行高廉の別荘になっているという。
のみならず、高廉の妻は、いわゆる外面如菩薩の美夜叉ときている。そこで弟の恨みを良人へケシかけ、白洲の拷問、獄中の責め、やがては柴進に〝直閣殺シ〟の罪名を着せて、いやおうなく、死にいたらしめるのではないか。――ともあれ柴進の一命は今や風前のともし灯にある――という戴宗のつぶさな話は、いよいよ、聞く者をして、
「うぬ」
と、高唐州の空を睨まえさせずにはいなかった。
「この梁山泊にとって、柴進さまは大恩人だ。その人の受難や柴家の抹殺されるのを、よそに見てはいられまい。まして事の起りは、山寨の一人、李逵から出たこと」
期せずして、この声は一致した。そして軍師呉用の案の下に、七千の泊兵は、二十二人の領袖が将として編制され、ここに柴進救出の軍をくり出すことになった。
七千の泊兵は、寨員の大半である。なぜにこんな山軍をうごかすかというに、相手の高廉はただの奉行ではない。一面軍権をにぎっている司令であるのみならず、その配下には、山東、河北、江西、湖南、両淮、両浙、各省の軍管区から選抜された「飛天神兵」と呼ばれる精鋭隊があると――これまた戴宗の探りによって分っていたからだった。

## 三　官衣の妖人があらわす奇異に、三陣の兵も八裂の憂き目に会うこと

高廉とは、まことに不思議な人物というしかない。
宋朝廷に時めく高俅一門といえば、あたかも当時の日本における平家一門に似て、栄花も権勢も意のままな大貴族だっ

た。――だからその高俅の従兄弟とあれば、白馬金鞍で京師の夕風を追って遊ぶも、廟に立って大臣を欲するも、自由だろうに、なぜか彼は、それを求めない。

そして若年頃から、荒公達の名をとり、背には〝太阿ノ剣〟とよぶ長剣を負い、また好んで黒衣黒帽という身装で、

「わが目には、列臣の勲爵も、羨ましい物でなく、禁軍八百万の旌旗といえど、物の数ではない」

と、つねに豪語して憚らぬような変り者だったのである。

――で、怖らくは、開封東京でも一門の持て余すところとなり、軍司令官兼民政奉行となって、この高唐州へ地方下りしてきたものではなかろうか。

「なに、梁山泊の賊兵七千が、柴進のため義を唱えて、この地へ近づいて来るというのか。いや。おもしろい！」

高廉は丹い口をあいて笑った。黒紗の帽、黒絹の長袍、チラと裾に見える袴だけが白いのみで、歯もまた黒く鉄漿で染めているのであった。

「いつかは、我れより出向いて、天下の恐れとなっている梁山泊とやらの野鼠の巣、一ト蹴散らしに踏みつぶしてやろうと思っていたに、彼らから旗を掲げて出て来たとは、いや、待っていたと言いたいような誂え向きだ。すぐ城外に出て布陣するぞ。全軍、営を出ろやい！」

と、大号令をもって令した。

黄色な布に黒で八卦を画いた中軍旗も、すぐさま彼の騎馬に先んじて進められた。――装いはといえば、例の、太阿ノ剣を背に高く負い、つねの黒衣へ金帯を締め、豹皮の胸甲に鎖下着を覗かせているのみで――将軍か、公卿か、軍属の道教僧か――得態の知れぬ姿であった。

しかし麾下の軍団は、幾段、幾十隊か数も知れない。そしてそれぞれ金甲鉄鎗の燦然たる部将のもとに楯をならべ――ござんなれ烏合の賊――と弩弓の満を持して待ちかまえていた。

するうちに。

「梁山泊の賊将、林冲、花栄、秦明、李俊、孫立、鄧飛、馬麟など……およそ三千余りが、漠々と、これへ近づきつつあります」

と、物見の者から報らせがある。

つづいては、また、

「本軍は宋公明を主将とし、朱同、雷横、戴宗、李逵。――さらに張横、張順、楊雄、石秀らの部隊など、ぞくぞく到着して、すぐ前面に陣を布いている様子です」

とも急調子に聞えてきて、ようやく迫る緊迫感に、野面の風は不気味に熄み、雲間の雁も行く影を潜めてしまった。

――と、たちまちわっと揚がる金鼓、銅鑼、角笛のあらしを分けて、梁軍のうちから丈八の蛇矛を横たえ持った林冲をまん中に、秦明、花栄の二将が、左右に添って、馬を進め、

「高廉高廉。――高俅一門の悪代官高廉はどこにいるか。これは天に代って当今の悪官人どもを誅伐に来た天軍だ。手間ひまかけず、素ッ首をわれらに渡せ」

と、大声で呼ばわった。

聞くやいな高廉もその旗本「飛天神兵」をまン中へ押しすめ、そのまた中に駒を立てて、

「しゃら臭い草賊どもめ！　泡を吹いて逃げ出すな」

と、まず飛天隊の一騎、于直を出して、林冲にあたらせた。が、とても林冲の敵ではない。矛と鎗、十合とも戦わぬうち、于直はもんどりうって馬から落ちる。――つづいて、飛天神兵中の随一、温文宝が喚いて出た。――しかしこれも秦明と闘ッて斬られ、第三、第四、と猪突して出た者までことごとく打ち果たされてゆくのを見ると、高廉はその青粘土のような面にたちまち吹墨のような凄気を呼んで、

「かっッ」

と、背にある太阿ノ剣をぬきはなった。そして剣の刀背を眉間に立てて何やら一念、呪文をとなえるらしい姿であった。――と見た花栄は、わけもなくぞッとして「あっ、妖人？」と、思わず引きしぼッた弓の弓弦をぶンと切った。その矢はあやまたず、高廉の真額を射た。いや射たと思われたのに――一道の黒気が矢をも高廉の影をも、墨のごとく吹きつつんでしまっていた。そしてとつぜん、大地は鳴り、天もゆすれ、怪しい風が、ゴオッと翔けたあとから、小石のような雹が、人馬の上へ降ッて来た。

「や、や？」

「これは？」

と、梁軍七千の人と旗は黒い風に吹きちらされ、揉み舞わされ、冬の木の葉に異ならない。あれよあれよの、叫喚だった。ただ見る日輪だけが赫く、雹に交じって砂礫を吹きつける。しかもまたその中を、長髪鬼のような飛天神兵の数百が槍を持って馳けまわり、逃げまどう梁山泊軍は、そのため、またたくうちに、千人の兵を失ってしまった。

「退けっ。ひとまず、退けい」

さしもの軍師呉用すら、また宋江も、すっかりこれには狼狽して、ただもう逃げ奔るしか、一時の処置も知らなかった。

さて、残軍六千を、からくも城外五十里の遠くに、陣を引きまとめて。

「軍師。じつに辟易しましたな。いったい、何であったのでしょう？　今日の異変は」

と、宋江の驚き顔に、呉用は沈痛な声で答えた。

「察するに、高廉は妖法を使う術者でしょう。よほど道教の方術――すなわち幻術を――修得した妖人に相違ない」

その夜、宋江は、陣幕に灯を掲げて、独り例の天授の「天書三巻」をひらいてみた。内に〝破邪ノ兵法〟一巻がある。それには〝破術破陣ノ法〟があり、また〝回風返火ス法〟も見えた。

「よし」

彼は自信を持ち、あくる日、さらに鼓を鳴らして、城門へ迫った。

けれど、この日も、次の日も、梁山泊軍はさんざんに破られた。なぜならば、高廉の妖法は、ただ宇宙の天色や気象に異変を呼び起すだけでなく、忽として、炎を大地に生ぜしめ、また大洪水を捲きおこし、そうかと思うと、豺狼、貔貅、虎豹などの猛獣群を、一鞭の下に呼び出して、これを敵のうちへ追い放つなど、千変万化、じつに極まりのないもので、宋江が身の護符としている「天書」の活用も、これには、ほとんど用をなさないからであった。

こう出たら？　ああ突いたら？

とかくして、戦い十日、兵は半数に減ってしまった。宋江

も呉用も、いまは面目なくて、このまま梁山泊へも帰れなかった。

さりとて、この苦慮苦戦を、あえてつづけていれば、残る三千も、野に白骨をさらすだけのものでしかない。――さらには、開封の都から、官の援兵が馳せくだって来る惧れなども大いにある。

「……どうしたものか」と、宋江と呉用とは、ついに最後の腹のすえどころにせまられていた。

「じつはの、宋先生。ここに、たった一つの残る策がないでもない」

「なに、軍師には、ご一案があるというのか。ではなぜ早く、その一計を」

「いや」と、呉用はあわてて手を振った――「それがさ、すぐ可能と思えるなら、決して猶予はしていません」

「何か、難かしい計略でも」

「いや行方のわからぬ人物を、急遽、探し出して来ねばならん。ところが、その消息といったら、皆目あてがないのです」

「ははあ。では彼の――一清道人とも呼ぶ公孫勝――を、あなたも思いだしておられたか」

「さよう。仰っしゃる通りだ。高廉の妖法をやぶるには、我れにおいても妖法に通じた道者を味方の内に招くしかありませぬ」

「それならひとつ、薊州へ人を派して、八方、探させてみたらどんなもので」

「しかし薊州といっても広い」

「なんの、戴宗が陣中にいる。いずれ一清道人のこと。名山大川の奥深くにいるかもしれぬが、戴宗の神行法で馳け探せば」

「なるほど、むなしくいるよりは」

「それに如くなしです。すぐ戴宗を呼びにやりましょう」

伝令をやると、その戴宗は、何事ならんと、すぐここの帷幕へやって来た。――そして呉用、宋江の二大将から托命の仔細をきくと、彼も、梁山泊軍三千の運命を担う一期の働きはいまだとして、勇躍、すぐ例の神速法の甲馬を脚に結い付けてここを出発した。

いや、彼にはもひとり付いて行った者がある。

例の黒旋風李逵である。――李逵などは無用な相棒、ヘマは仕出来しても、ろくな足しにはならぬと退けられたのだが――事件の起りは自分が殿直閣を殺したことにある。かたがた、柴進大人へのお詫びにもと李逵としてはいつにない神妙な哀願なのでついに連れて行くことになったのだった。

「だが李逵。断わっておくぞ」

「へ。何をで」

「きさまにも神行法を授けるが、わしが呪文をとなえると、たちまち身は雲を踏んで飛行する。呪を解かねば、止まるにも止まれんのだから、心得ておけよ」

「院長（戴のこと）そいつア困るよ。小便する間もなくっちゃ」

「そんなことはどうでもいい。問題は道中では一切精進潔斎だ。守らねば神行の神力が破れてしまう。守れるか」

「酒を呑まず、肉を食らわず、で居りゃあいいんでしょ」

「そうだ。きっと、貪婪をつつしめよ」

かくて二人は、雲を翔けた。

耳に風がうなり、睫毛に霧が痛いほどぶつかッて後ろになる。地の物象すべて――町、森、原野、山波、渓流――点々たる部落の羊や牛の影までが見る見るあとへ過ぎられて行く。

さて、まことに怪奇な談になった。

そもそも水滸伝物語は、その発端、百八星のことからして、いわゆる怪力乱神を「世にあり得ること」として話の骨子にとり入れてあるものだが、中には多少、宋朝の史実も酌みいれ、編中人物の行動などにはかなりリアルなふしもある。

――かと思うと突として、高廉の妖術やら戴宗の神行法なども平気で駆使するし――つまりここらが、いわゆる大陸古典の大陸小説らしい筋であって、日本での話なら役ノ行者の伝説でもなければ見られないところである。これは一に道教による幻想らしく、かの白楽天の長詩「長恨歌」の中で、玄宗皇帝が術者の方師をして、夢に、亡き楊貴妃の居るところを求めさせるなどという着想も、民話的な道教信仰を詩化したものといってよい。とにかく、このへんの章は読者も中古大陸の民土を念頭におかれて、風誦するが如く、共に空想を遊ばすことにしておいていただきたい。

「戴院長。今日でもう七日目ですぜ」

「もう七日か。はて、知れんなあ」

「いくら雲霞に乗って、こう空ばかり素ッ飛んでみたところで、これじゃあ、知れッこありませんや。毎日毎日、下に見えるのは、山岳だの大川だの渺々とした田舎ばかり。ちッたあ、人里へも出てみなくッちゃあ」

「きさまのいうのも一理はある。だが、公孫勝は元々薊州の生れで、梁山泊へは入ったものの、田舎の母恋しさに山寨の仲間に別れて、一時郷里へ帰った者だ。それに彼のごとき修道者であってみれば、市井に住まっているはずはない」

「ですがねえ院長、薊州の田舎ときたら、山また山だ。そんな山の襞にいる一人の人間をつかまえるなんてことあ、まるで縫い目の虱をさがし出すより大変ですぜ。やっぱり人を探すには人中を歩かなくっちゃあ」

「きさま、そろそろ美味い物でも食いたくなってきたのだろう」

「そいつも察しておくんなさいよ。いくら精進潔斎だって、この七日ほどは、干団子しか食ッちゃいません。きのうからもう目が眩りそうなんで」

「よし、向きをかえて、ひとつ人混みを探してみよう」

翌日は、脚の咒符を解いて、薊州の城内を一日歩いた。また次の日も、寺院、祈祷所、道行く僧侶、少しでも由縁がありそうなと思えばやたらに訊ねあるいてみた。しかし、手がかりは皆目ない。

そして十一日目のことだった。城外のいぶせき飯屋でひるめしの白麺を二人してすすっていると、隣の床几でも一人の老人がお代りを急いでいた。折ふし客が混んでいたのでなかなかお代りの麺が来ない。出来て来たかと思うと隣の李逵が逸早く横から取って食ってしまう。それが八杯にもおよんだので、ついに老人も腹を立てた。

「なんじゃい、この人はまあ。わしが誂えたのを、そばからそばから、喰べてしまいくさる。馬か豚腹か」

「なに。豚腹だと。やいッ、いい加減にしろとはなんだ。外へ出ろ、この老いぼれめが」

「これっ、李逵。きさまが悪い」
「だって、院長。ものの言い方もあろうッてもンでさ」
「うんにゃ。大体、きさまがガツガツしすぎておる。ご老人、ゆるしてください」
「これはどうも、そう仰っしゃられると、年がいもないことで……。じつはこれからお山へのぼって、羅真人さまのご法話を伺いたいと思いましてな」
「ほ。……山にご法話の会があるのですか」
「はい。時刻におくれると、羅真人さまのお話が聞けませぬ。それでついわしも心が急ぎましてな」
「オ、また一碗、麺ができて来ましたよ。さあさあ、おさきにお喰りください。して何ですか、そのお山というのは」
「この薊州郊外から四十五里、九宮県の二仙山というお山の麓でしてな」
「真人がいらっしゃるほどなら、ほかのお弟子の道人たちもたくさんいるのでございましょうな」
「おりますとも、なんといっても、真人さまは、諸道人のうちでも、いちばん修行を積み、位も一段高いお方ですな」
「もしや、公孫勝という道人を、そこでご存知はありますまいか」
「ああの、おふくろ様と一つの庵に住んでござらっしゃる公孫一清さんなら、わしが家のつい近所じゃが」
「えっ、ご近所なので」
まさにこれ、何かのひき合せと、戴宗は雀躍りしたいばかりだった。なお仔細に道をたずね、老人には厚く謝して、いちど旅籠へひっかえした。そして身拵えをあらためるやいな、四十五里を神行法の一ときに馳けて、まもなく九宮県から五里の奥に二仙山とよぶ幽境を目に見ていた。

## 四　羅真人の仙術、人間たちの業を説くこと

「ちょっと、伺いますが」
と、ひとりの樵夫を見かけたので、戴宗が訊いた。
「一清道人の庵室はどちらでしょうか」
樵夫は、白雲のうず巻いている峰と峰との間をさして。
「一条の白い滝が見えまっしゃろ。あの下の細道をめぐって、南へ出ると、山の角に、琴のような石橋がありますわな。そこらでもいちど訊きなされ」
その通りに行ってみると、上の杣道から山の果物を手籠にして降りて来た女があった。女は振り仰いですぐ教えてくれた。
「ほれ。あそこに、柱が十本も並んでいる草舎の廊がある。あの廊の端れに見える小さいお堂がそれでございますよ」
「ありがとう。して、一清道人はおうちでしょうか」
「ええ、今日はたしか、裏で丹薬を練ッてござらっしゃッたが」
思いはとどいた。戴宗は胸もわくわくそこへ近づいた。しかし、李逵は遠くへおいて、彼ひとり草庵造りの家の扉へ寄って行き、
「ごめんください。ごめんください」
と、訪うこと数度であった。
何処かでは、淙々と水のひびき、松籟の奏でがしている。

それに消されてか、いつまでも返辞はなかった。するうちに、
「どなたじゃの」
内の葭すだれをサラと掲げて、白髪の媼がふと半身をあらわした。つづれの帯に半上着、貧しげなこと、山姥といってもよいが、霞の目皺、丹い唇、どこやら姿態も賤しくない。
「オ、ご老母で」と、戴宗は一礼して——
「一清どのにお目にかかりたいことがあって、はるばる参った者でございますが」
「あなたさま。お名まえは」
「山東の戴宗と仰っしゃって下されば、たぶんおわかりのはずですが」
「それは、あいにくな。せがれは旅に出て居りませぬ」
「はて。里人のことばでは、たしかにおいでだといっていたが」
「いえ、おりません。どうぞお帰りくださいませ」
すると、いつのまにか、戴宗の後ろへ来て佇んでいた李逵が、腰の二丁斧を引き抜いて両手に持ち、
「うそをつけ！ この山猫め。よしっ、居留守をつかうならあらためてやる」
と、いきなり草堂の横から裏へおどりこんだ。あわててそれを遮る老婆の悲鳴やら、李逵を叱る戴宗の声が、ここの静寂を破ッたと思うと、彼方の薬園から身に白衣をつけた一壮士が、
「なんですッ？ おっ母さん！ 何があったんですか」
と、脱兎のごとく馳けつけて来た。そしてふと、そこの二人を見るや、
「おっ、戴院長。また、李逵ではないか」
「やあ、いなすったね、公孫勝！」
「ひどいじゃないか。おふくろさまを二丁斧で脅すなんて」
「あやまる、あやまる！ 毛頭わる気でしたンじゃねえ。こうでもしなければ、おまえさんが出て来ないと見たからだよ」
「戴院長。まずお上がりください。……おっ母さんもご心配はいりません。決して悪い人たちではない。ま、お茶でも差上げて」
と、一房へみちびき迎え、さて、一別以来の旧情なども叙べ終ると、戴宗はあらたまって、
「じつは、かくかくの次第です。もしあなたが起って、高廉の妖軍を打破ッてくださらぬなら、宋江先生以下、三千の泊兵は高唐州の野に白骨となるしかなく、ひいては梁山泊の本拠も総くずれの破目にたちいたるでしょう。……まげてひとつ、廬を出て、お助けくださるまいか」
と、逐一のわけを語って頼みに頼んだ。
公孫勝は、ありありと、苦痛な色を眉に見せた。
「——ひとたび、義友と契った人々の頼みでは」
と、心にもだえるらしかった。で、しばらく頸を垂れていたが。
「いや遠路のお使い、旧友たちの危急、よくわかりました。若年、江湖を漂泊うての果て、はしなく梁山泊の諸兄に会い、幾年月のお世話になったことは今も忘れてはおりませぬ。しかし何ぶんごらんの如き一人の老母がありまする。あわれ母は、ひとり子の私が、唯々たよりなのでして、私もここを離

れがたく、かつは師匠の羅真人さまも、どうしてもてまえを山からお手放しになりません」
「ごもっともだ。そこを強っても言いかねるが、梁山泊一期の浮沈です。なんとか、母御にご得心はいただけまいか」
「母は暇をくれましても、いま申したその師匠がどうも」
「羅真人さまへは、われら三名が膝をそろえて、お願いしてみようじゃありませんか」
「ま、よく考えてみましょう。今夜一ト晩」
「――と、仰っしゃらず、すぐご同道くださるまいか。高唐州の戦場は、はや朝々の霜。危機は冬と共に迫ッているのです。一日のまも気が気でないのでして」
戴宗もいう。李逵も拝まんばかりに頼む。ついに公孫勝は身を起した。ともあれ、師の羅真人さまの許へ伺って、そのご意見をきいた上で――と。
遠くはなかった。谷向うの峰ふところ。道をたどるうちに、針葉樹の密林低く、紅い日輪が沈みかけている。やがて羅真人の住す道教寺の石階を踏み、上を仰ぐと、山門の額に、
紫虚観
の三文字が金色もくすんで見える。
廟道は奥深い。つねに道士が寄って経を談じ、山翁は法を説いて、修行三昧、宇宙と人魂とのかたらいをなす秘壇とある。祭るものは、虚空三千大世界の天つ星や地宿の星とか。ここへ鸞に乗って仮に世へ降りてきたような一仙人と、江湖の俗から拝まれている羅真人は、いま、松鶴軒の椅子に倚って、ふと瞑想から醒めていた。
「真人さま。……今朝、仰っしゃっていたお人が、一清道人に連れられて見えました」
一童子が、椅子の前に、拝をしてつたえていた。
「お、来たかの。すぐ連れておいで」
羅真人は、すでにこの日の客を、予知していたらしい。
――一方、更衣亭で身なりをただした戴宗、李逵、公孫勝は二人の童子に伴われて長い廊を渡り、やがて、松鶴軒の廂の下にかがまって九拝の礼をした。
「お師匠さま」と、まず公孫勝が――「折入って、この客二名が、尊意をお伺いにまいりました。これは私の旧き友」
言いかけると、羅真人は、鶴の羽衣のような袂をぱっとひらいて、その法冠の星よりするどい眸をきらと三人の上へ射向けた。
「一清。多くをいうな。山東の人々だろう。わかっておる」
「では、はや疾くに、二人がこれへ来た事情も」
「よろしいか、一清、おまえはやっと世の火宅をのがれ、そして母と共に、人生の長養長寿をここで習んでおる者だぞ」
「はっ」
「惑ってはならん」
「もし、老師！」と、戴宗は思わず躍り出るように進み出て再拝した。
「高唐州の悪奉行高廉の妖法になやまされ、いまや泊軍三千、かつての公孫勝の仲間は、死地に立っておりまする」
「悪と悪、業と業との入りみだれ、さようなことは、この山の知ったことではありません」
「ですが……。いや、さもございましょうが、なにとぞ、御弟子の公孫勝に、ここしばし、暇をおつかわし給わりませ。かく

のごとく、伏してお願いつかまつりまする」
「いけません。この羅真人の教え子を、そのような血の巷へやることはできぬ」
「では、どうありましても」
「くどい！　一清、客をお連れして、はやはや浄門の外へ退がんなさい」
　取りつく術もなかったのである。悄然と三名は〝紫虚観〟の門を去って、黙々と宵の星明りの下を帰って行った。
　途中、ムカッ腹をぶちまけて、独り悪態口を叩いてやまなかったのは、もちろん、黒旋風李逵だった。
「けッ、ふざけやがってよ！　羅真人か糞羅漢か知らねえが、オツに取り澄ましゃアがって、教え子も聞いて呆れら。――久米の仙人だって赤い裾を見りゃ雲から落ッこちたっていうじゃねえか。そこが人間のいいところだ。それを義も情も知ッたことじゃねえと吐かしゃあがる。よしっ、人間でねえならば獣だろう。みてやがれ、けだものめ、化けの皮をひン剥いてやるから」
「李逵李逵。いいかげんにしろ。……一清の身にもなってみるがいい。むッそりと顔をしかめているじゃないか」
「ほい。いいお弟子だ。師匠をケナされちゃ癪にもさわろう。だが、こっちの腹もおさまらねえんだ。ごめんなさいよ、公孫勝」
「いやなに、きさまの悪口などいま知ったことじゃないさ。気になどかけるものか。ははははは」
　しかし、一清公孫勝の立場はつらい。自然、口かずも少なかった。また戴宗も、このままでは高唐州へ帰りもならず、何かと、思案顔である。――とかくして、その夜は、一清の家の草堂に、床を分けて眠り合った。――眠る前の精進料理と一酌の酒がまわって、三人はやがてぐッすり寝込んだようであったが、かねて思うところのあった李逵は、
「……よし。ちょっくら、いまのうちに」
　とばかり室から這い出し、そして二丁斧を手に、風のごとく、峰道から谷、谷から峰のふところへと、馳け躍ッて行った。――それはあたかも一個の黒猿が両手に白い焔を振りかざして行くようだった。
　もう勝手は知っている紫虚観の門、松鶴軒の廂。そっと、李逵が法院窓の障子に舌で穴をあけて内を覗いてみると、なんと、この森沈たる深夜なのに、羅真人はなお、椅子に端座したままであり、唇に玉枢宝経を小声で誦している態なのだ。
　薫々と匂う糸は香炉のけむりか。二本の赤い絵蝋燭の灯があかあかと白髯の横顔、頬のクボを描いている。李逵はあさはかにも思い込んだものだった。――この糞仙人さえ亡き者にしてしまえば公孫勝もいやとはいわないはずである――と。
　だから彼の眼気たるやまさに殺気の炎で、そこの窓障子を蹴やぶるがはやいか、
「けだもの。化ケの皮を剥ぎさらせ！」
　と、内へ躍り込んでゆき、かっと、薄刃の斧を振りかざすやいな、羅真人のあたまをめがけ、その脳天から真二つにたちわってしまった。
「ははははは。なんてえ応えのねえ化け物だろう。おや、仙人の血は白いのかな？　まるでこりゃ水じゃあねえか。うんわ

かった。ろくな物は食っていず、一ぺんも女を抱いていねえせいだろう。……どれ行くかな」
　すると、物音を知ったのか、廊の彼方から、青衣の童子が飛んできて、ひらと彼の前にたちはだかった。
「これっ待て。お師匠さまを殺して、どこへ」
「そこ退けッ。うぬ、退かねえか」
　またもや、一閃の斧の下――童子の首はコロコロところがった。そしてころがって行った闇の隅から泥人形のような白い首が、こっちを見た。ニコと笑ったように見えた。
「うへッ」と、李逵もなんだか、へんな気がした。骨の髄をぶるッとさせて。「――くそっ、俺としたことが」と、山門をとびだした。そして後ろを振向くと、山月が青かった。それからはもう一足跳び。――まだ暁にもなっていず、戴宗、公孫勝は夢深々と何も知らない。――彼もまた夜具の中にもぐりこんで、なに食わぬ顔のあくる日をむかえていた。
　朝から午まで、その日も、戴宗は公孫勝と対座しづめで、切願、熱弁、情や義にもからませて、どうかしてと、説きつけている。それは李逵には、くすぐッたかった。ちゃんちゃらおかしくてたまらない。
　午食の点心をすますと、一清はぜひなげに、
「では、おことばにまかせ、もう一度、松鶴軒へ伺ってみましょう。はたして、お師匠さまが、昨日の言をひるがえして、おゆるし下さるかどうか知れませんが」
　と、ふたたび、きのうの如く、連れ立って草廬を出た。
――これもまた、李逵の内心ではヘソ茶ものだった。「行ってみれば分るだろう。分った上は、公孫勝もいやとはいえめえ、知らぬ仏だ」と、あとに尾いて行きながら独りひそかに舌を出していたものだった。
　やがて、紫虚観をくぐる。訪鉦を鳴らすこと三打。青衣の童子がひとり出て来て、来意を問う。待つことしばし、ふたたび現れて。
「どうぞ、更衣亭で、おきものや手をお浄めください。そして、いつもの長い廊を、ずっとお通りあるように」
　李逵はセセラ笑った。が、なお白ばッくれて、更衣亭でかたのごとき身浄をした後、二人のあとに尾いて廊を進んで行くと、彼方からまたも一人の童子が見え、一清と話していた。
「もし、侍童さん。お師匠さまは、いつもの松鶴軒ですか」
「ええ、お椅子に倚って、しずかに、皆さんをお待ちになっていらっしゃいます」
「今日は、ごきげんは」
「おかわりもございません。はやくおいでなされませ」
　青衣の童子は、そう告げて、李逵のそばをスレちがった。李逵がしんそこ、ぎょッとしたのはその一瞬であった。童子がニコと笑ったのである。その顔が、いやその首が、ゆうべ斧にかけたあのせつなの童子とまったくおなじなのだった。さらには、やがてまた、「おお、また見えたの」
　と、内から聞えたのも紛れなき羅真人の声であり、またその人の姿だった。しかも、きのうよりは、うちとけて、
「ま。すすめ……。そこな、後ろの方に、うずくまっておる黒猿も、ここへ来い」
　と、あるではないか。
　李逵はただもう度胆をぬかれ、総身の骨もガクガクしてい

た。元々、この男は天上界における天殺星という魔星であって、かりに人の世に生れ、文明の灯が江湖にかがやくまでは地獄仕事をしなければならない宿命となっている。――ということが、羅真人の神眼には、ちゃんとわかっているのらしい。この黒面の殺人猿をあつかうこと、まるで子供を観るにひとしかった。

「李逵よ。どうした。なぜ前へすすんで出ぬ」

「へ、へい」

「おかしな奴よの。ところで、両人」

「はっ」

「願いの儀、かなえてつかわそう。一清の母は、わしが見ておく。さっそく下山するがよい」

「えっ、ではこの一清に、おいとまを給われましょうか」

「む。しかし一清、汝はなおその修行も法術も、かの高廉とひとしい程度の者にすぎん。依って、下山に先だち〝五雷天罡〟の秘法をさずけつかわそう。――それをもって宋江を助けてやれ。また民ぐさを力づけ、世の道をただせ」

「は。必ず、お教えを忘れぬようにいたしまする」

「そもそも、汝の宿命は、天にあっては天間星。地にあっては草華の露。人と人との間に情けをこぼす性のものだ。しかし世はまだ冥々の混沌時代。まことの世造りと人拵えの成るまでには、なお五千年もかかるだろう。それまでは地上の人間も鬼畜の業を脱しえず、殺し合い、憎しみ合い、悪と悪との血みどろを這い廻るのもぜひないとするしかない――。それゆえ、今生一生の業ではしょせんおぼつかないが、今も暗冥の世造り時期。そうこころえて汝も修羅へ行くがいい。くれぐれ、人欲に迷うなよ。あやまるなよ」

こう、ねんごろな諭しをうけて、次の日早朝、一清公孫勝は母にわかれ、旅の支度もそこそこ、戴宗と共に、二仙山を降りた。

このさい、李逵はどうしたのか、前の晩からいなくなってしまった。戴宗が不審がってたずねると、一清は事もなげに笑って答えた。

「なあに、ご心配にはおよびません。たぶん羅真人に可愛がられて、当分、紫虚観に居れと、止めおかれてしまったものでございましょう。……あの天殺星に修行を積ませ、もすこし撓めておかねばならんという思し召しから。……いえ、いえ。いくら李逵が嫌のなんのといったって、師の呪縛にかかっては、羽ネを抜かれた禿鷹も同様で飛び立つことはできません。奴もきっと今ごろは、もうすっかり往生して、食堂の粥でも食べているでしょうよ」

## 五　法力競べの説。及び、李逵を泣かす空井戸の事

高唐州の城外、一望百里の戦陣は、がらりと模様が変ってきた。

ほかでもない、かの方術師にしてまた州奉行でもある妖官人高廉の妖術がまったくきかなくなってしまったことに起因している。すなわち高廉の魔陣「飛天神兵」の疾駆も、また得意の「太阿ノ剣」の呪文も妙に威力を失ってしまい、戦えど戦えど、軍はヘマばかり踏む始末で、

「これはいったい、どうしたことか」
と、怪しみつつも、ついに総勢を城内へ退き入れて、鉄門堅く、ただ守るのほかない頽勢に傾いてきたものだった。
「お奉行。こいつはどうも方針をお変えにならずばなりますまい」
「やあ薛元輝か。わしの戦法に過りがあるというのか」
「決して間違ッてはおられません。しかし敵の中には先頃からとんでもないやつが一人加わっている。それへお気づきにならんのはご不覚でしょう」
「一清道人の公孫勝だろうが」
「そうです。――二仙山の道聖、羅真人の秘蔵弟子とか。そいつを呼んで来て、破邪の術を行わせているんですから、さしもわがお奉行の方術も、いちいち這奴の秘封で、その効を現わさなくなったものと思われまする」
「そ、そんなことはないッ。そんなことは！」と高廉は、事わが方術にふれてくると青白い焔を眉に燃やして言った。
「――紫虚観の羅真人その人がみずから山を下って来たのなら知らぬこと。一清道人なんていう一弟子のために、わしの方術が破られるはずはない。道教界における修行からして、彼と我れとは段がちがう。高廉をそんな底浅い修行の道人輩と同列に見て申すのか」
これはむりもない。
道教の世界にはおごそかな階級があった。修行によって法力の度もおたがいにわかっている。が、このたびだけは羅真仙人が、暗冥時代の世造りの手助いに下山する一弟子のため、特に〝五雷天罡〟の秘法を一清にさずけていた。ということを、高廉は知っていなかったのだ。あくまで自分の方術は上位と信じていたのである。
だからなお、彼が自身に恃んだ妖術戦は、彼を大きなうろたえと焦燥にかりたてた。――そのあくる日の城下戦でのこと。――梁山泊軍三千は、怒濤をなして、はや城壁下に鼓噪していた。時に高廉は、一だんたかい将台にあって、
「おうっ、めずらしや、あれに賊の軍師呉用、賊の大将宋江、またそのわきに一清公孫勝が駒を並べて指揮している。――元輝、一軍をひッさげて、一清の首をねじ切ッて来い。怯むな！ 高廉がこれにあって、法力の加勢をするぞ」
と、太阿ノ剣を抜き払い、眉間に当てて咒を唱えた。
するとたちまち、あたりは暗くなり、雲のごとき気流のうちから、数千の貔貅（大昔、中国で飼い馴らして戦場で使ったという猛獣のこと、貔は雄、貅は牝）が敵陣めがけて飛躍していった。――同時にそれに力を得、官軍の猛将薛元輝もまた、城の一門を押しひらかせ、金甲鉄鎗の光り燦々、奔流となって敵中へむかって吶喊して行った。
ところがである。
ほとんどの将士が城へ帰らなかった。薛元輝もむなしく討たれてしまったらしい。
それも道理、妖法が吹き放った貔貅は、梁山泊軍の上まで行くと、みなハラハラただの枯葉になったり紙キレになって、何の加勢にもならずに仕舞ったものである。つまり妖術競べにおいて、完全に、高廉が破れた証拠だ。さすが高廉もこれにはガックリ自信を失って、急遽、隣の東昌と寇州の二州へ援軍の急を求めた。

「二州の奉行は、いずれもわが従兄の高俅大臣におひきたてをうけた者だ。大挙、かれらが援けに来れば」

と、それからは一切、城門の鉄扉を閉じ、壁を高うし、殻の如くただ守っていた。しかし城塁の中ではこんどは不思議な現象がおこりだしていた。冬なのに蛇トカゲの爬虫類がうようよ這いまわり、毒蛾、サソリ、赤蟻、種類も知れぬ毒虫が群れをなして兵の眠りまで苦しめる。さてはこれも一清の妖術攻勢だなと、高廉は必死な咒を行ってみたが、さっぱり自分の破邪の印には効き目がない。――時も時、こんなところへであった。

「――東昌、寇州の援軍がつきましたぞ！」と、望楼番の歓声だった。

「来たか」

と、彼が雀躍りしたのもむりはない。

高廉も望楼へあがってみた。打ち見れば、暁の曠野には、敵の梁山泊軍が、算をみだして騒いでいる。

おそらくは寝込みの朝討を食ったものか。支離滅裂となって逃げまどう中を、あざらかな紅い州旗を朝陽にかがやかせ、約三、四千の州軍がその中を割って、はや城壁の下まで来ていた。

「開けろ、開けろ。疾く城門をあけてやれ」

高廉は上から下知した。

わあっと、城内には歓声がわいた。しかるに何ぞやである。歓呼は、一瞬に阿鼻叫喚と変じていた。「――すわ」といったがもう追いつかない。援軍とみせてなだれこんで来たのは、梁山泊の山兵だったのだ。軍師呉用と宋江の智略によって偽装した山将それぞれ――花栄、秦明、呂方、郭盛、林冲、――また戴宗、公孫勝、孫立、馬麟、朱同、欧鵬などの錚々が指揮するもの。

いやなお、将とも兵ともいえない妙な男もひとりまじっていた。はやくも二本鉞斧を両手に振って縦横無尽城兵を追い廻しているのでもすぐわかる。黒旋風の李逵だった。

李逵はついきのう仲間たちの戦場へ帰っていた。――一清公孫勝を探しに行った行きは戴宗と一しょだったが、二仙山では、羅真人に止め置かれてしまい、彼にいわせると、

「あれから紫虚観で、真人にチクと熱いお灸をすえられて来た」

ものだという。

それがどんなお灸だったかは、李逵はまだよく語っていない。が、おそらくは羅真人のお懲らしめだ。真人の仙術やら妖法を目に見せられたに相違ない。一匹の黒ンぼ猿が十方無限の大宇宙へ抛りあげられ、羅刹金剛の変化にも会って、いやというほど、なぶり者とされて帰されて来たに違いなかろう。だから妙におとなしくなり、また李逵に似げなく、その話だとはにかんでいた。

しかし彼は、帰る途中で、一人の奇異な男を知って連れもどっている。顔ばかりでなく体じゅうに菊石のある銭豹子という鍛冶屋さんだ。

もとより銭豹子は本名ではない。苗字は湯、名は隆、つまり湯隆という者で、父はもと延安府の軍寨長官だったそうだが、軍人の子にもやくざは多い。ばくち、女、かたのごとく

流れ流れてきたすえ、武岡鎮の町はずれで、テンカンテンカンやっているところを、こんど通りがかりの李逵と知って、
「ぜひおれも梁山泊へ入れてくれ」
とばかり一しょにここの戦場先へ来たものだった。見るからに一ト癖もふた癖もあるが、たしかにまた一芸の士。呉用、宋江のめがねでも「よかろう」となって、さっそく今日は戦陣に加わっていた。とはいえ到底、李逵のそばにはついて歩けない。李逵もまた、新米の味方の一人など、ふり返ってもいなかった。
いやここでは、李逵を語るよりは、奉行高廉の行動を見ておかねばなるまい。――高廉は望楼から下りるまでもなく、脚下いちめん殺戮の坩堝を見、城中に入った敵の奇功を察し、もうこれまでと観念の目をふさいでいた。
下では、山将の花栄、秦明、林冲など、
「高廉は、どこ？」
「雑兵なんどに目をくれるな」
「高廉をさがせ。あの妖官を逃がすな」
と、弓の弦を引きしぼって喚き求めていたのである。
するうちに。
「――あッ」
誰かが叫んだ。眼を射られたかのように目へ肱を曲げて空を指した。
見ると、一朶の黒雲が望楼を繞って、望楼をスウと離れてゆく。――チカチカッと墨の中で何かが光った。光が眸を拒むのである。だが痛みを怺えて凝視すると、それは一本の剣の剣光にちがいない。しかもぼうっと高廉の姿も見え、太阿の印をむすび、雲を踏んでいるものだった。そしてみるみる西南の空へ移行していた。
「や、やっ」
「妖人め」
矢さけび起して無数な矢が雲を追った。雲を縫った。
しかし、ゲラゲラと雲は笑う。
このとき、これを知った宋江も呉用もまったくあわてた。指揮に声をからしても、ほどこすすべすらなかったからである。そして「一清はどこに。一清公孫勝は何をしているか」とあたりへどなった。
知らぬではない。公孫勝もこれを見ていた。
彼は州城内の一宇、霧谷観と額のある堂の真ン前に佇んで、虚空を仰いでいたのであり、師から授かった〝五雷天罡〟の秘咒に気魂を凝らしていたのだった。そしてたちまち一陣のつむじを吹きおこし、風は空へ翔け揚ッて、黒雲へ挑み、高廉をつつむ妖雲をむしり千断ッた。
すると高廉は口から火を吹いた。それは一道の奔る炎となって城頭城門へ燃えついたが、また、たちどころに、公孫勝が呼んだ沛然たる雨に打ち消され、かえって豪雨は白い電光を孕み、霹靂一声、雲のなかで爆雷となって鳴った。一箇の火の玉が破裂したかと見えたほどである。と思うまに、空は青く冴え、何かふわとした物が城外二里の地へ落ちた。――すぐ兵に拾わせてみると、それは高廉の死骸であった。
町には町を逃げまどう州兵。野には野をどろどろ落ちて行く州兵。散るにまかせて、宋江はこれを追わせなかった。
城内の一掃が終ると、彼はただちに〝布告文〟を辻に立て

た。

一　われらは良民を犯さず。犯すあらば斬らん
一　われらは妖官を懲らして法は滅さず、妖民は斬る
一　天に天神、地に地祇、人の土に稼業絶やすな、和を温め合え

山東梁山の客宋江

住民はこれを見てほっとした色だった。かつては県の押司も勤めたことのある宋公明だけに、法三章の要をえていた。

「各〻、各〻は何はおいても、すぐ柴進どのを捜してくれ。あの人の安否を確かめろ」

宋江は厳命した。急務はそれだった。たたかいの目的はそれだったのだ。

しかし、柴進の安否は全然つかめなかった。城内の大牢雑牢、地下または高楼、監禁されていそうな箇所はおよそ隈なく捜査したが見あたらない。牢番獄卒どもは、逃げ散ッていたし、牢舎中の囚人七、八十人の首カセや鎖を解いてやって、これにも質したが知る者はない。

ただ三日目に、柴進の眷族十数人が、発見された。思いがけない林の中で、急造らしい板屋葺の監房に押しこめられていたのである。ここには番人どももまだ残っており、その中のひとり藺仁という老吏から端なくこんなことが聞かれた。

「……さよう。なにさま、思い当りがないでもございませぬ。……あれはもう七日も前、ここのお城もあぶないような噂でしてな、わしらもオロオロしている日のこと。お奉行の腹心がたが、大牢から引きずり出したとみえる一人の囚人をしょっ曳いて、林のおくの方へ入って行きましたのじゃ。ヤレヤレ斬られるのだナと、怖い物見たさで、そっと遠くから見ておりまするとと、その辺はひどく昼でも陰気な場所でしてな、きっと首を斬るのが不気味になったのかもしれません……その衆たちで何か囁いていたと思うと、近くにあった空井戸の中へ囚人を抛り込んで、そのまま立ち去ってしまいましたのじゃ。……へい、それだけのことでござりますが」

「それこそ」と宋江は、息ぜわしく「……七日も前か。それを見たのは」

「へい、ひょっとしたら八日前か。でなければ、九日前だったかもしれません。なにせいご布告を知るまでは、生きた心地もございませんでしたで」

「空井戸といったが、深さは」

「それがえらい深い空井戸で、八、九丈もございましょうか」

「水はないな。……いやしかし、もはや柴進どののお命はなかろう。食べ物がないだけでも」

「いえ、だんなさま」と、老吏はこのとき初めて自分の良心を公にいえるよろこびに慄えながら言い出した。「……まだまだ、そこはわかりませぬ。死んでいるとはかぎりませぬ」

「どうして」

「じつはその、多年獄吏をやってきた罪ほろぼしにもなろうかと、獄飯やら何かの食い余りがあるたび、紙にくるんではそっと空井戸の底へ投げやっておりましたんじゃ。……が、それもお城の落ちた日からはそれどころでなくなり、以後はやっておりませんでしたがの」

するとそのとき、頓狂な声の下に、呉用の後ろから躍り出

して、言った者がある。
「宋司令。なにをグズグズしてるんだ。そんな老いぼれ相手に、首を傾げてばかりいたって始まるもんか。あっしを空井戸の底へやっておくんなせえ」
「や、李逵か」
「こんどのことの発頭人はこの李逵だ」
「なお、その自責を忘れぬだけは賞讃にあたいする。しかし」
「しかしもくそもねえ。底へ行って見届けるのが一番早ええじゃありませんか」
「いやその方法だ。どうして八、九丈もある地底へ降りて行けるかの」
「まかしておくんなさい」
李逵はどこかへ飛んで行った。と思うと手下の兵に、大きな竹籠や麻縄をかつがせて再び林の奥へやって来た。――すでに牢番蘭仁のみちびきで、呉用、宋江、そのほかも空井戸の口をめぐり合い、中を覗いて、その底知れぬ深さに暗澹と顔見合せている態だった。
「さ。退いた退いた！」
李逵は意気込んで言ったものである。
「やいやい。そこらの手頃の樹を伐り仆して来い。そして空井戸の上へ三叉を組め。それへ竹籠の麻縄をかけるんだ。……なに、籠をどうするのかッて。べら棒め、飾り物じゃあねえ。俺がその中へはいって井戸の底へ降りて行くんだ。黙って俺のさしず通りにしろい」
いうやいな、李逵は衣服をかなぐり捨て、顔より真っ黒な丸裸となって、はや竹籠の中にうずくまる。――それを見ると、みんなクスクス笑った。黒面猿がチョコンと揺籃に乗ったような恰好に眺められたからである。しかし宋江のみは、彼にしても罪を償わんとする責任感はかくも強く持っているのかと、ちょっと瞼を熱うして。
「妙案妙案。出来したぞ李逵。――だが百尺の地底からでは声も合図もとどくまい。その辺へ銅鈴を二ツ三ツ括り付けてゆけ。銅鈴が鳴ったら上から綱を引き上げてやる」
「合点だ。たのんまッせ」
はやスルスルと綱は下ろされた。そして降りて行けども行けどもまだまだ底へは達して来ない。そのうちにぶらんと途中で止まってしまった。李逵は仰向いて呶鳴ッた。
「やアーいっ。どうしたんだよウっ」
すると、上では、おそろしく遥かな声で。
「一ト休みしてろやアい。綱が足りなくなったから、いま取りにやったんだよウっ。――繋ぎ足したらまた下げるからなアっ」
やがてやっと、李逵のお尻がどすんといった。――李逵は竹籠を這い出し、そこらの冷やっこい岩肌を撫でまわした。案外ひろい。水溜りもある。するうちに、ぐしゃっとした物に触った。人間にちがいなかった。恩人柴進さまか。大旦那、大旦那と、耳のそばで呼びつづけてみた。
返辞はない。しかし、かすかに呻いた感じがする。
しめた。李逵は夢中になった。吉報吉報。
彼は竹籠の中へもどって銅鈴を鳴らした。スルスルスルスル。えいや、えいや。上へあがるやいな彼はあたりへ向って黒裸の両手を宙へ振ッて報告した。

「柴大人は生きてるぞ。まだ少しばかり体が温かい！」
「では、いたのか。やれ、天はまことの人を殺しはしなかった」と、宋江以下、どよめきを明るくして「――ならば李逵、ご苦労だがもう一度降りてくれ。そしてこんどは柴進どののお体だけ竹籠に入れ、きさまは後から上がって来い」
「ようがすとも。造作はねえ」
勇躍、彼はふたたび井戸の底の人になった。そしていわれたとおり、柴進のからだをそっと竹籠の内へ抱え入れて、銅鈴を振鳴らす。鈴は、りりりん……と暗黒の地底を残して微かな光明の一点へさしてセリ上がって行く。それを仰ぎながら李逵は心から快哉を叫んだ。――ああこれで俺の過失も柴の大旦那の一命だけは拾って幾分かはまず償い得た、と。
一方、空井戸の上ではその騒ぎも歓びもただならなかった。竹籠の引上げられる前に、宋江は人を走らせて、医師をここへ呼び迎え、すぐ柴進の体を診させた。
「……この脈搏なら」
と、医者は言った。一同いささかほっとする。
五体は傷だらけだが、致命的な深傷はまずないという。まなこは一度開いたが、またすぐ瞼を閉じてしまった。もとより気息もあるやなし。――打ち囲んで案じる人々の顔は、医師の一挙一動、また芥子粒ほどな銀丹（神薬）をその歯の間にふくませて、うまく喉へ落ちるかどうか。それさえ固唾を呑む思いで、時たつのも忘れていた。
いや忘れたのはそれだけではない。まだ井戸の底に残っている李逵のことまですっかり紛れ果てていた。気がついた宋江が、
「そうそう、鈴も竹籠と一しょに上がってしまっている。さだめし李逵が喚いているにちがいないぞ。早く上げてやれ」
と手下どもへ注意したので、急に、ああそうだったと、笑いどよめいたことだった。そこでさっそく次の段取りにかかったが、ほどなく空井戸の口から飛び出して、ここへ立つが早いか、かんかんになって怒ったのはその李逵である。半刻（一時間）の余も井戸の底から上へ呶鳴りつづけていたらしく、精も根も切らして泣きベソを掻いていた焦躁が声の嗄れにも分って憐れにもまたおかしかった。
「やいっ、何がおかしいンだ。ふざけやがってよ。俺を忘れるッて法があるか。俺だって命は可愛いいんだぞ。ひでえや。宋先生も呉用軍師もここにいながら」
「まあまあ李逵、そう怒るな。おまえは人いちばい達者だから、つい安心されるのだ」
「どうせそうでしょうよ。柴大人のお命が黄金なら、俺なんざ、屑鉄だ。虫ケラ一匹とも見られていないにちげえねえ」
「ひがむな、黒旋風の名が泣くぞ」
「もう井戸の底で、さんざッ腹泣いちまッたい」
「わははは。いや勘弁しろ勘弁しろ」
この日、柴進の療養に万全をつくす一方、城内の倉庫から山の如き財宝を取出させた。すべてこれは先に官へ没取された柴進と柴皇城家の物である。それを奪り返し、また併せて武具馬具などの分捕り品を二十余輌の車馬に積ませて、
「李逵、雷横、戴宗、公孫勝、そして新入りの湯隆の五名は、ひとまずこれを送って梁山泊へ帰れ」
と、あくる日、先発させた。

そのうえで、宋江と呉用とは、高唐州城の処理を終った。窮民には穀や物を施し、旧高廉の部下で、悪評の高い二、三を捕えて町中で斬に処し、また囚われていた柴家の眷族や、病人の柴進は、これを車仕立ての内にいたわり乗せて、やがて全軍をそろえ、凱歌をのこして、山東梁山泊の大寨へ、意気揚々ひきあげて行ったのだった。

泊の山上一帯は、これを迎えるに、どよめき立って、歓呼をあげ、さらに当夜、また、翌日へかけての、慰労の宴など、お祭り気分に染まったのもまたいうまでもない。

柴進のからだも日ごとに元の健康に復し、総統の晁蓋以下は、あらためて、彼にこの累難をかけた罪をふかく謝した。しかし、こうなったのもまた天意によるかと、柴進はあえて咎めず、かえって一同の義気を謝し、一同に請われるがまま、大寨の見晴らしのいい所へ建てられた一邸にそれからは住むこととなった。げにも浮雲の人生、人事測り知れないものがある。

## 六　禁軍の秘密兵団、連環馬陣となること

ここは開封東京の首都、汴城の九重。

かつての殿帥府ノ大尉（近衛ノ大将）高俅は、さらに人臣の位階を極めていまでは大宋国総理の地位にあった。――もとはこれ市井の間漢、一介の鞠使い高俅の出世したものである。人事測り難い一証はここにもあった。

景陽宮の深殿は、ここ燿く祇候ノ間だった。出御の金鈴がつたわると、ほどなく声蹕の鞭を告げること三たび、珠簾サラサラと捲き上がって、

「高俅。何事の急奏なるか」

と、そこの玉座から微妙道君風流皇帝、宋朝八代の天子徽宗のまろいお声であった。

「はっ。……」と高俅は伏して。「一ときたりと打ち捨ておかれぬ大事ではありますが、叡慮を騒がし奉るだん、なんとも恐懼にたえませぬ」

「まあ、申してみい。またも禁軍の輩の私喧嘩か」

「さにはあらで、天下の乱兆にござりまする」

「乱兆？　それは容易ならん沙汰じゃないか」

「かいつまんで申し上げまする。昨暁来、高唐州及び東昌、寇州の地方より頻々たる早馬や落去の地方吏が門を打ち叩き、梁山泊の賊徒のために、州城は蹂躙され、国財もことごとく奪われ、あまつさえ州の奉行高廉は虐殺されたとの報らせにござりまして」

「なに高廉。高廉といえば、たしかそちには、いとこにあたる者ではないか」

「さようにござりまする。――が、縁者の一個が殉職などは取るに足りません。憂うるところは、これが天下に及ぼす騒乱の緒をなしては一大事と存ずるのです。すでにその水泊の賊徒は、先には済州で官軍に手抗い、江州無為軍でも大騒擾をおこし、以後いよいよ、賊寨を強大にしておるもの。いまにして平げずば、国の大患となりましょう。伏して、ここに聖断を仰ぎ奉る次第にございまする」

徽宗皇帝は、びっくりしたようなお顔だった。――今も今とて、宮中の宣和画院で、当代の帝室技芸員格の画家を集めて、天子ご自身も絵絹を展べ、美しい侍嬪に絵の具を溶かせ、

それらの中でご自慢の絵筆に羞魂をうちこんでいたところなのである。――このたのしい平和に盈ちた地上のどこにそんなあぶないことが起っているのかと、むしろ不審にたえぬらしい、おん目をしばだたかせているのだった。

「たいへんだね、それは」

「まことに容易ならん異変にござりまする」

「高俅、どうしたらいい。思うところをいってみい」

「良き将軍に、勅をお降し賜わって」

「良き将軍には、誰がよいのかね」

「目下、汝寧におる呼延灼に如く者はございません。――彼は河東における開国ごろの名将呼延賛の末裔で、兵略に通じ、よく二本の赤銅の鞭をつかい、宇内の地理にもあかるく、梁山泊征討の任には、打ってつけな武人かとおもわれます」

「ではすぐ枢密院へ、朕の旨を申し、汝寧からその者を呼びよせい」

汝寧の地はかなり遠い。なれど俄な勅を拝した呼延灼は、ただちに任地から馳せ上り、着いた日、まず、高総理の衛門府に駒をつないだ。

「ようぞ早くに」

と、高俅はみずから迎え、このたびの大役と聖旨をつたえ、

「足下は、人も知る開国の功臣たる将軍の玄孫だ。再び、朝野に名をあげ給え」

と、その夜は公邸で歓待し、翌日、伴って徽宗皇帝に拝謁の儀をとらせた。

呼延灼をごらんあって、徽宗もたいそう頼もしがられた。風貌、物ごし、音声、まさに万夫不当の骨柄である。「よき手柄せよ、勝利のあかつきには、さらに重賞せん」と仰せあって、とりあえず彼への門出祝に、

踢雪烏騅

と号する秘蔵の名馬を下賜された。

烏騅とは、総身、まるで烏の濡れ羽色していたからで、蹄だけが白かった。馬卒はこれを〝雪踢り烏騅〟ともいっていた。

「総理。あなたのご推挙を感謝します。まことに今日は面目をほどこしました」

「なんの。貴公の面目はこれからでなくてはならん。ところで呼延氏、さっそくご発足だろうが、準備として、何か求められるものはないか」

「大いにあります。聞説、敵の梁山泊も昨今では一大強国ほどな兵備もあるよし。討つにはまず士気の上におく大将、次に装備で」

「その将たる器の者のお心当りは」

「目下、陳州練兵場で指揮官をしておる韓滔。これは百勝将軍とよばれていますが」

「ほかに」

「もうひとり、あだ名を天目将軍とよばれ、今、潁州の練兵指揮をやっている彭玘。この二人を左右の腕にもてば、たとえ水泊の草寇など何万おろうと、不日、きれいにかたづけてごらんにいれる」

朝を退出してきた晩の総理邸での話だった。高俅と彼とはあくる日、禁軍の練兵場で閲兵をすまし、その足で枢密院

へ行き、すぐ軍機の相談となったあとで、
「――陳州の韓滔、潁州の彭玘、その二軍人へ、ただちに召致の内命を発していただきたい」
と申し入れた。そしてこの両名もやがてまもなく着京した。あとは兵数如何。また装備如何。それを余しているのみだった。
兵員は呼延灼として、騎兵三千、歩兵八千、輜重工兵二千五百、伝令及び物見組約五百。すべてで一万四千人を要求した。
「よろしい。むしろ少数に過ぎはせんか」
と、高俅はちっとも驚かない。だが一驚を喫したのは装備の方の請求だった。
よろい三千領、かぶと五千箇、かたな、長槍三千余本、鉾、なぎなた五千丁、弓、楯などは数知れずだ。このほか火砲、石砲、戦車。さらに禁軍武器庫に眠っていた大量な〝網鎖の馬鎧〟までぞッくり装備に積んで行った。
そしてこの呼延灼、韓滔、彭玘の三大将軍がひきいる三軍、あわせて一万四千の貔貅（猛兵）がいよいよ都門をたつ日の旺な光景といったら形容のしようもない。凌雲閣上、天子もみそなわし、衛府以下八省の官人、満都の群集も堵をなして、花を投げたり爆竹を鳴らしたりした。あわれむべし、ここの庶民は、梁山泊が庶民の味方とは何も知っていない。ただ聞くがまま残忍無比、鬼畜同様な乱賊とのみ聞いている。
このあいだに、初春をまたいで、野は残雪まだらに、若草の浅みどりを呈していた。大陸の霞は渺として果てなく、空ゆく飛鴻はこれを知らなくても、何で梁山泊の油断なき耳目がこの情報をつかまずにいようやである。
「……ま、ご意見もいろいろ出たが、こんどは一州一県の田舎城を揉みつぶすのとは、ちとわけが違う。熟慮を要そう。慎重が要る」
今日もここでは評議だった。大寨の聚議庁である。晁蓋、呉用、宋江――おもなる領袖と山将のほとんどが顔をそろえている。
「軍師。さっきから再三ここで、軍師軍師と声をかけてるのに耳をすっぽかしておいでなさる」
「李逵か。なんだ」
「禁門軍の一万や二万がなんですえ。あっしを先鋒にやっておくんなさい」
「気のどくだが、きさまの二丁鉞斧ぐらいではの」
「歯が立たねえッていうんですか」
「こんどの歩騎総指揮官は、河東の名将、呼延賛の玄孫灼だ。左右両翼の将軍も名だたる人物。うかとはかかれん。宋先生には、まだご発言もないが」
「いうほどな名智も出ません。しかし待つよりは、野戦に出る。そして野戦は正しく相手の力を見せましょう。一応、そう考えられるが」
「同感です。ならばこの戦法と配列ではどうでしょう」
呉用がさいごの案を出した。
それによれば、まず霹靂火の秦明の隊を先鋒に出す。つづいて豹子頭の林冲、小李広の花栄、一丈青の扈三娘、病尉遅の孫立――などを二番三番と順次に置く。
これが、車輪となって、入れかわり立ちかわり、敵陣の先

頭を打つ。
みだれに乗じ。
右翼五将の五隊。
左翼五将の五隊。
つまり十隊二陣が鶴翼となって敵をつつむ。そしてまたべつの二隊は舟軍として水路を行き、敵の想像もなしえぬ地点から上陸して虚をさらに衝くという兵略だった。
大寨の泊兵はただちにこの兵図式のもとに泊を離れて遠く平野に出て行った。見れば、かくあらんと、敵は察知していたかのようである。柵を打ち、木戸を設け、地雷を伏せ、堅陣厚く、
「来たか」
と、剣戟の白いさざ波立てて、一瞬は揺らいだが、びくともしたさまではない。
対陣半日。はやくも気みじかな秦明は、馬を躍らせて、敵前へ立ち、
「ここらは生きた人間のいる所。なまぬるい都の風は吹いておらんぞ。何しに来たか、貢税肥りの盗ッ人めら」
「やあ、賊の一匹か」
と、官軍三大将のひとり韓滔は、その怒りを白馬に乗せ、くろがねの鎧、朱纓の馬かざり、手に長槍をかまえて、
「うごくな、賊」
と突ッかけて来た。
将と将との一騎討は、賭け物である。賭けにはそれ以外な者の手出しはゆるされない。兵はその間、かたずをのんで勝負ノ場をただ見まもっているだけなのだ。声援として折々には両軍どッち側からも、わあああ、という喊声だけは颼風のように巻きあがる。
勝負は果てしなく見えた。
いや韓滔には、百勝将軍のあだ名もあるくせに、どうもそろそろあぶなく見える。りんりたる汗が額から眼にながれている容子など、こころもとない。
「韓滔、さがれ。その相手、おれがもらった」
代って出たのは、主将呼延灼だ。
白蹄烏毛の名馬、〝烏騅〟が泊軍の目をひいたこというまでもない。
二番手にいた林冲はそれを見るなり惚れ惚れした。「あの馬を人手には」と思ったのだろう。彼が得意とする丈八の蛇矛が馬首ひくめて進んで行ったかと見るまに、
「秦明、すこし休め」
と、灼の前にたちふさがった。
「おおっ、むかし禁軍にいた豹子頭か。あわれや、泥棒仲間へ落ちたおちぶれ者」
「なにを、廟堂の冷や飯食いめ」
発矢。
空を切った閃光に何かが鳴った。
しなやかなこと、鯨のヒゲの如き薄銅の長い二本の鞭だった。鞭には西域模様の金銀象嵌がちらしてある。
これを使う妙技は天下呼延灼あるのみなので、不思議な武器と相手に立つものはみな初手に大いに惑う。また防ぎようも見いだせない。――ひゅっと鳴って伸びるとおもえばスッ

と引く。あるいは輪をなし、あるいは波を描く。――林冲もいくたびとなく蛇矛をからめ取られんとした。しかし、灼にすれば、敵の蛇矛も息つくひまもないものだった。相互、炎の息となっている。

ところへ、第三の控え、花栄が陣をくり出して来た。そして林冲に代ったのである。林冲は一ト息つく。それをしおに、呼延灼もまた、

「おとといらい」

と、林冲をうしろに、自己の中軍へ消えこんでしまった。無視された花栄は癪にさわって、「……卑怯」と、呼延灼の姿を敵の中軍近くまで追っかけて行ったがもう見えない。寄りたかって来るのは、打っても張合いのない雑兵ばかりだ。

「木っ葉どもめ、花栄さまのお通りだ、そこ退け、そこ退け」

蹴ちらしつつ自陣へもどって来る途中だった。はしなくも燦然たる一将を見かけた。天目将軍の彭玘にちがいない。三尖刀と称して四ツの孔に八つの環がさがっている大刀に血のしたたりをみせ、千里駿足の黄花馬をせかせながら、

「ざまを見さらせ！」

と、逃げなだれた泊兵の勢を後目に自陣の方へ帰りかけるところだった。――それを見ると、休んでいた林冲がまた馬を躍らせて来て。

「待った。彭玘」

「や、うぬは」

「林冲」

「げッ、あの豹子頭か。高俅大臣ににらまれて、滄州へ流され、終身刑で刑地にいるはずの、あの林冲かよ」

「悪大臣の番犬めら。驚いたか」

「しゃッ、この日蔭者」

「日蔭者、痩せてはおらんぞ」

「高総理へよい土産だ。かッ、そのそっ首を」

「しゃらくさい」

ふたりは花栄を入れなかった。馬と馬をめぐらし合い、閃々の光芒をまじえ合った。

あたりの残雪は黒い飛沫となって、ふたりのよろい、かぶと、またその面までを胡麻のようにした。

火を降らすこと二十合、また三十合、いずれが劣るとも見えない。そこへあだかも騎乗した飛天女のような戦袍の裳、袂をひるがえして、さっと割って入って来た女戦士がある。

「オ、一丈青か、あぶない、あぶない」

「いえ、林将軍。おさがりください。私の二刀がひきうけます」

「さまでいうなら」

と、林冲も花栄もパッと馬を一ト退げ退げて、

「久しぶりだ。扈三娘の双刀のさばきをここで見物しようか」

と、敵をゆずった。

たかが女とみていた彭玘は案外な思いにあせりを現してきた。しかもである。いつのまにやら勝負ノ場にはぐるりと泊兵ばかりが遠巻きにしていた。第五番手の病尉遅もすでに手具すね引いてこれへ来ていたのだ。「これはまずい！」と、ややうろたえ気味な彭玘のからだが隙を作った。間髪を入れず、一丈青の一剣が飛んだ。それはサッと彭玘の交わすところとなったが、つづいて虹のごとき紅錦の輪索が彼女の手を離れ

た。錦の蛇が彭玘の首にからむかと見えたのである。せつな、病尉遅の孫立が、
「それっ！」
と、手下の兵へ言った。その声と、どうっと、馬からころげ落ちた彭玘の地ひびきとは、ほとんど、秒の差もなかった。
「捕った。さいさきは吉いぞ。官軍の一将彭玘はいけどったぞっ」
ここでは万雷のような勝鬨が上がった。とりことした彭玘は、ただちに泊兵の手で後陣へ遠く送りこまれる。
ただし、勝ち色に色めいたのは、全く、ここではのことだった。ほかを見れば味方の影は惨としてどす黒い。鶴翼も車掛りの陣形もはやあったものではない。支離滅裂だ。官軍の精鋭らしい中軍は、深く泊兵の陣を裂いて割りこみ、あたりに敵なき猛威をふるいぬいている。
「ああ、これはいけない」
林冲も病尉遅も、おもわず嘆を発した。
「こっちの中軍にも、宋先生、呉軍師、そのほか、日頃の手だれもたくさんいるのに、まるで手込めにされているさまだ」
「どうしたことだ。この崩れは」
すると、先にとりこの彭玘を送って行った一丈青が、馬をとばして引っ返して来た。そしていうには。
「全軍、あとへ帰って中軍をかためてください。こう分散していれば、個々みなごろしになるおそれがあります。呉軍師の急命令です」
「軍師もやきが廻ったのか。いまさらここで陣替えとは」
「でも、まったく思いもよらぬ奇計が敵にあってはぜひもありません。敵の騎兵隊です。敵には特殊な騎兵隊〝連環馬軍〟というのがあって、その三千騎が一せいに馳け入って来たのです」
「なに、なに。連環馬軍？」
「さしも泊中での豪傑たちさえ、それには当りうる者がありません。雷横、石秀、孫新、黄信、いずれも傷を負い、蹴ちらされた兵といったら数えきれず、あの黒旋風の李逵までが」
「李逵までが」
「血まみれとなって、後陣へかつがれて行きました。ここの兵は少数、あなた方も、ひきあげねばあぶないと、呉軍師のご心配です」
「さても口惜しい。連環馬軍とはいったい何だ。まさか鬼神の騎兵隊でもあるまいに」
ともあれと、ここの者もいそいで中軍の陣地へ馳け争ッて行った。だが、中軍のいた地、すでに中軍の陣地でない。
見えるかぎりのものは、残雪の泥土と、るいるいたる死屍だった。破れた旗、いたずらに空しき矢柄、折れた鎗、すべては泊兵の残骸ではないか。そして味方の影は、さらに遠くへまで退却しているのだ。
しかもこの大打撃を与えた官軍の大蹄団は、すでに潮の如く凱歌と共に自陣へ引いてしまったものとみえる。腥風いたずらに寒く、曠野の夕風は青い五日月を無情の空に研ぎすましているのみだ。
わずかに、宋江と呉用とは無事をえていた。しかし、敗陣、寂として声なしの有様である。林冲、秦明、病尉遅などは、なぐさめる言葉もなく、ただ残念そうに、その前で首を垂れて

いた。
「軍師、勝敗は兵家の常とか、敵を知れば、また勝目を取る智略も出ようというものじゃございませんか。宋先生も、どうぞお心をとり直しなすって」
「林冲。よく言ってくれた。しかしこの敗れは梁山泊はじめての傷手だ。みなにすまん」
「兵略の誤算でしょうか」
「いや、一に連環馬軍の機動力を知らなかったことにある」
「いったいその馬軍というのはどういう性能の騎兵なので？」
「馬自体が鉄甲の戦車だといってよい。三千の騎兵を横列に敷き、三十頭ずつを一ト組みに、鉄の連環でつなぎ合い、自信満々、二十隊三十隊で押してくる」
「それだけなら何も」
「そうだ、それだけなら驚くに足らん。ところが、討ちとった馬を調べてみたら、馬の一頭一頭、その全身は細かい網鎖でつつまれ、すべて蹄のほかは鎧われている。騎上の兵もまた然りで、面にまで薄金の面頬という物をかぶり、全身、矢も立たぬ不死身の武装――。どうもそんなぜいたくな武装は、禁軍ならでは三千もの武者にほどこし難い。それに比べれば、わが泊兵のいでたちなどは、素裸でたたかっているのも同然だ。たたかえばたたかうほど、連環馬軍は功を誇り、味方はかばねを積むばかり……」
「へえ……」と、初めて知った敵の装備に舌を巻いて「それじゃあまるで鉄仮面をかぶっている動物と素手で取ッ組んでいるようなもの。何かいい作戦はございませんかな」
「ない。まったくない」
ぽつんと、言ったのは呉用である。呉用の口からこれを聞いては、もうお仕舞いかと、林冲、秦明ばかりでなく、幕舎のとばりに影を投げている者、みなただ腕をこまぬいて、黙然たるばかりであった。そのとき、
「おう」
と、ふと思い出したように、
「一丈青。とりこの彭玘はどこへおいた？」
と、宋江がうしろを見てたずねた。
「彭玘の身でございますか。それなら彼の疎林のうちに、きびしく番をつけて、どう暴れても、逃げることはないようにしておきました」
「そこへ案内してくれんか」
「斬るのですか」
「いいや」と、宋江は怪しむ人々の目へ言って、また呉用にむかい。「軍師、あのとりこの処置は、宋江におまかせ下さるまいか」
「おう、どうなと」
「一存でちと試みてみたいことがあります。では一丈青、彭玘のおるそこの疎林へ、みちびきを頼む」
と、彼は女戦士扈三娘を先に、ひとり幕舎を出ていった。およそ捕虜を見るなら、兵に命じて、曳かせて来るべきが作法である。人々はみな宋江の意に不審をいだいた。血迷われたナと、その後ろ姿へ、ひそかな眼をやった者もなくはない。

## 七　さらに注ぐ王軍の新兵器に、泊兵も野に生色を失う事

彭玘はおどろいた。また疑った。

捕虜の身だ。殺されるものと観念しきっていたのである。

――ところが、これへ来た宋江は、彼の縄を解いてやり、しかも礼を低く告げたのであった。

「将軍、さだめし心外でございましょうな。天子の軍をひきいて下りながら、武人として、こんな辱めに会われては」

「ぜひもない。時の運だ。武将にだって、運命はまぬがれ得ん」

「ですが、ご安心なさるがいい。われらはただ殺戮を好むものではありません。またあなたのような有能な士をいたずらに辱めようとも思いませぬ」

「待ってくれ。わしは擒人だぞ。なんでこんな待遇を君はとるのか」

「元々のこの宋江は、世間の凡の一民です。無事なれば無事で暮らしていたかったのだが、たまたま、世路の難に会い、しばし水泊に拠って、その仲間のうちで、種々雑多な人間と知りあうことになりました。……そして彼らの生い立ち彼らの受難を聞けば、みなこれ、根は素朴善良な野性の民にすぎません」

「ちッ。なにが善良なものか。梁山泊と名のある賊の集まりが」

「いや彼らでなくとも、人たれにも、魔心はあるものです。ただ彼らは賊心を抑える自制に弱く、反骨の方はやたらにありすぎる。そのうえにです。中央から地方末端の官吏にいたるまでの悪政が彼らを闇へ闇へと追いつめていた。――いうなれば、梁山泊という現代の悪の巣は、宋朝政府の腐敗そのものが拵えたといっていい」

「やめてくれ。この彭玘は天子の軍人だ。くそおもしろくもない」

「お聞きづらいでしょう。私とて天子そのひとに恨みもなし、敵対の意があるでもありません。その御方をめぐって天日を晦うしている奸臣佞吏、世を蔽う悪政の魔魅どもが敵であるだけです。それさえ打ち払うなれば、いつでも水泊の巣を焚き、頭をさしのべて、世に罪をわびる覚悟でいるのです」

「……ふウむ。ことばは立派だが？」

「信じて下さい。いやどう言ったってこれはお疑いだろう。ですからあなたを梁山泊へ送ることにします。しばらく泊中にいて、そこの男ども、組織、規律を目で見てくだされば自然判断がつくと思う。いつかまた、その上でお目にかかろうではありませんか」

こうして宋江はその夜ただちに彭玘の身柄に兵を付けて、前線から梁山泊へ送り込んでしまったのだった。

これは宋江らしい処分だが、しかし呉用そのほか、当夜の陣営に、髪をそそけ立てていた泊軍の領袖たちの間には、

「勝ってもいないこの敗け軍に、宋先生も、また、手ぬるいことをやってるものさ！」

と、必然な不満や嘲笑があったのは仕方もない。なにしろ、またもや次に敗北でも重ねようものなら、梁山泊の陸の一線

はすでに危ないと観るしかない実状なのだ。

早暁。

ここの陣立てはあらたまった。

きのうに懲りたので今日はいちばい重厚な構えで〝五雲十風ノ陣〟が組まれた。ひだりは林冲、一丈青の隊伍。みぎは花栄と孫立。まん中の先鋒隊が秦明である。

また、それを守る衛星軍としては。

随所に二百人ずつ十組の十風隊が、軍師呉用の指揮一つで変貌自在に敵へあたるという陣形だった。――が、やがてのこと――これほどな堅実さも、ほとんど、木の葉を並べたほどにも値しないことがすぐわかった。

ドドドドッ……遠くで起った地鳴りと共に、味方の頭上には火箭、石砲、薬砲の巨弾が、雨となって落ちて来る。――こういう新兵器は朝廷の禁軍ならでは持っていないもので――実際に見舞われたのも初めてなほどだった。泊軍はただなだれを打ち、はや累々の死屍を出して、

「畜生っ。卑怯だぞ」

「これじゃあ戦にならねえ。官軍め。近寄って来い」

と、呶号し合ったが、しかしこれが官軍の戦である。いかに吠えてみたって始まらない。

「ああ、これはいかん」

宋江は、慄然とした。

さんざんな砲口の吠えが歇んだと思うと、こんどは、精鋭な禁軍の弓箭陣が矢の疾風を射浴びせてくる。さッとそれが分れると、次にはきのうも見た〝連環馬陣〟の三千騎が、雲のごとく、不死身をほこる吶喊を起してきて、こなたの為すなき混乱の中を、戦車にも似た猛威で馳け巡り、また蹂躙し抜く。

ついにまた、この日も泊軍は、総退却などという程度でない滅茶苦茶な逃げを余儀なくしてしまった。

それもである。――官軍の呼延灼と韓滔の二大将に追いまくられ、あわや宋江や軍師呉用すらが、あぶなく、殲滅の危機に見舞われかけたほどだったが、

「軍師軍師。宋先生。逃げ退きならこっちだこっちだ！」

と、瀬戸の葦間から李逵と楊林が救いに現われたので、

「おっ、水軍は来ているか」

と、水岸へ目がけて走り、そこに船を並べていた味方の李俊、張横、張順、阮の兄弟らに助け取られ、いちはやく船へ移るやいな、鴨嘴灘（梁山泊の水寨）のほうへ向って、からくも逃げのびられたものだった。

ふりかえれば、官軍の連環馬軍は、なおも水路の岸に沿って、追ッかけ追ッかけ、執拗に乱れ箭を飛ばしてくるし、しかも船に収容された泊兵はいくらでもない。陸地にはまだ右往左往の捨てられたる味方の影が諸所諸方に望まれる。――宋江は惨として面を蔽った。これは梁山泊始まっていらいの大惨害、また、大危機ともおもわずにいられなかった。

いつも晴天の日ばかりはない。梁山泊にも泣きッ面を見る日はある。という戒心を彼らは今やいやというほど、どの顔にも顰め合っていた。

「なあに！　これしきのことに」

「極まり文句だが、勝敗は兵家の常。負けたのは、俺たちの

腕じゃねえ。敵にはあって、こっちにはねえ装甲馬だの火砲のせいだ」
「そうだとも！　馬に鎖かたびらを着せた三千騎の連環馬軍さえぶち破る策を考えれば――」
と、お互い、なぐさめ合ってはいたものの、泊中をつつむ悲愁の気、宛子城の一帯をおおう敗色の深刻さ、それだけは、どうにもならない。
戦野へくり出した六千余の山兵のうち、帰りえた者は三分ノ一にも足らず、あまつさえ、頭目のなかの林冲、雷横、李逵、石秀、黄信らまでが、みな負傷して、かつぎこまれて来るという惨状なのだ。
「傷者はみな山へ上げて養生させろ」と、総統の晁蓋は、こんなときこそと、おちつきを示して、
「――宋先生も、おつかれでしょう。こんどはてまえが代って戦闘に当りますから、しばらくは聚議庁で、お休みになってはどうで？」
「とんでもない。敗軍は私の責任だ」
宋江は応じなかった。――事実またそうしてもいられない。次の日には、すでに水泊の対岸には、官軍の旗がいたる所に見え出し、そして埠頭茶屋の石勇、時遷、毋大虫おばさんなども、みな敵に追われて逃げ渡ってくる始末。――まさに、ここ梁山泊も、芦荻一水をへだてるのみで、ぐるりと、彼方の岸は、官軍の猛威に包囲され終った形とはなってきた。
ここに。――この捷報は早くも開封東京の汴城の宮門へ飛脚されたので、天子徽宗は大いによろこばれ、高総理に聖旨をくだして、御感の状と、黄封の宮廷酒十瓶とを、征地の慰問に送らせた。
勅使いたる――
と聞いて、将軍呼延灼は副将の韓滔をつれ、みずから立って、これを陣門に出迎え、かつ戦果の報告では、
「賊どもの生け捕り五百余人は、不日なお宋江、呉用、晁蓋らの賊首を搦め捕った上で、あわせて都へ送り、都門大衆の中において、首斬ってごらんに入ればやと存じております」
と、誇らかに述べた。
「祝着です」と勅使も、讃嘆を惜しまなかったが――「ところで、三将軍の内、彭玘将軍ひとりがここにお見えでないが？」
「さ。それだけが残念なので、……序戦、功を急いで深入りしたため、惜しいかな、賊に生け捕られ、梁山泊に繋がれています」
「や、あの天目将軍が」
「いや必ず助け出してお見せする。ただしかし、梁山泊の地勢は、周囲すべて湖なので、陸づたいには攻めかかれん。……で、ご帰京にさいし、総理府へひとつお願いの儀があるが」
「何ですか。お望みとは」
「禁軍武器庫の副史で、かつ、砲手師範を兼ねている凌振――一名を轟天雷――ともいう廷臣がおります。これに彼が望むところの兵士と砲をさずけて、急遽、戦地へおつかわし願われますまいか。さすれば、賊巣の根絶は、易々たるものにござりまする」
勅使は、帰京するや、さっそくこれを総理高俅につたえ、

高俅は帝のみゆるしのもとに、衛府、および禁軍武器庫、それぞれの文官武官に命じて手順をとらせた。
すでに宋朝末には、火箭、石砲のほか、火薬による爆雷術なども発達しつつあったのか。ここに召出されて、即刻、征野へいそいで行った轟天雷凌振の軍隊をみるに、その装備には驚目される。
砲型は三種あり、その第一が風火砲、第二が金輪砲、第三が母子砲。それの砲架は脚立式で、砲身は台座に乗って、どっちへもうごく仕掛けになっている。
そしてこの砲兵隊の半数は、輜重馬車、幌馬車、鉄甲車などだった。戦力、思うべしである。――意気揚々、前線につき、待ちかねていた呼延灼をよろこばせ、その大歓迎のもとに、当夜は陣中で、酒盛りが催された。
あくる日、凌振の手並は、実証された。――湖畔からつづけさまに、轟然、三発の砲口が鳴ったと思うと、二発は水面で水柱をあげたのみだが、一発は鴨嘴灘をこえて、水寨のやぐらを粉砕した。
それからは、命中率もだんだんに増してゆき、夜に入るや、泊中二、三ヵ所に火災が望まれ、終夜、水も燃ゆる紅だった。
「はははは」と、呼延灼は小手をかざして笑った。
「凌砲手。さすがだな。賊の巣は、四面が水、いまに逃げ場を失うだろう」
「いや島は広そうだ。いずれ頃合いを見て、押し渡らねば、みなごろしには出来ますまい」
「どれ、いまのうちに、兵糧でも」
言っているところへ、一角の葭の洲から、物見の兵が「――大変だっ」と、急を告げて来た。暁闇の靄のうちから、泊兵の水軍が舳艫をならべて、これへ接岸して来る模様だ――と絶叫する。
「待っていた」と、呼延灼は言った。「――どうせ、やぶれかぶれと、打って出て来たにちがいない。こっちは船手不足のところ、渡りに船だ。船を分捕れ」
水陸入り乱れての接戦は小半日に及び、大軍の壁にはばまれた賊の水軍は、またぞろ、快艇三ぞう、小舟十七、八そう、大船一隻をそこへ捨て、あと数十そうは、影をみだして、水寨の方へ逃げはじめた。
「今だ！」
と、凌振は思った。砲手の働きは、味方の掩護でしかない。自分にしろ梁山泊を実地に踏んで賊首の二ツ三ツは都の土産にしなければ軍功になるまいと逸ッたのである。
彼のこの逸り気を誘き出しに来た敵の水軍であったとは、如何せん、後で分ったことだった。――とも覚らず、凌振は小舟で追ッかけ、逃げる敵の大船の中へ斬り込んだ。
これを見た呼延灼や韓滔の部下も、
「やあ、凌振にかんじんな戦功を独り占めにさせるな」
と、ばかり、水上へ乗り出し、ぐずぐずしている賊船を包囲して、われがちに乗りこんだ。しかもこの追撃に会うやいな、ぽんぽん、どの船の泊兵もみな蛙みたいに水けむりの下へ消えてしまったから、ほとんどの船上は、たちまち官兵と入れ代わりになり、そして舳艫はそのままなお梁山泊へと進んでいた。

ところが、どうしたことか。
「や、や、や？」
「船底から水が入る」
「船が沈む！」
騒ぎ立ったときはすでにどうにもならなかった。どの船も、どの船もである。いつのまにか、船底の栓が抜かれ、人間を山と盛ったまま傾き出していたものだった。
たねをあかせば、これは呉用軍師の神算鬼謀で、初めからこの一戦で勝つ気はなく、過日らい、さんざんな砲撃に悩まされた結果、
「――砲手の凌振一名をさえ失えば、敵の砲陣は空にひとしい。凌振を湖上におびき出して生け捕れ」
と、李俊、張順、張横などの、揚子江生れの水馴れた者を選んで、この策をさずけ、一挙に出てきたものだった。
すなわち、船を捨てて飛びこんだ水中の影のうちには、水を潜ること河童のごとき阮ノ三兄弟もいたのである。船底へくぐって栓を抜いたのももちろんこの者ども。そのため、溺れ去る官兵はかず知れずだが、そんな者には目もくれはしない。かねて目ざしていた凌振が、覆ッた船から泳ぎ出したのを見るが早いか、
「おッと。この人、この人」
とばかり、阮小五、阮小七、阮小二また張順、張横らまで寄ッてたかって、水中の珠奪り争いみたいに、凌振の体を手捕り足捕り捉まえてしまい、そしてやがてのこと、水寨の岸で水を吐かせると、すぐ山のうえへと、わっしょ、わっしょ、かつぎ上げて行ったのだった。

一時、したたかに水を呑んで、昏々の状におちていた凌振だったが、はっと気づくと、ここは宛子城中の一閣、賊寨の聚議庁、たしかに、虜囚となった自分に相違ない。
「しまった！」
一方の扉を蹴って、外へ躍り出ようとすると、
「轟天雷、どこへ」
と、目の前に立っていう者がある。
「やっ、君は」
「彭玘だ。まあ慌て給うな」
「かねて君も賊の捕虜になっていたとは知っていたが」
「それでだ、話がある。――じつは統領の晁蓋、宋江、そのほかのお頼みで、君を説いてくれとのこと。――どうだ轟天雷、君もここの仲間にならんか」
「ば、ばかな。……では何だな、君は潁州練兵指揮官という光栄ある官職もわすれ、いまでは賊徒に加盟してしまったのか」
「うむ。われながら、こうなろうとは思いきや――だ。しかし、おれは梁山泊をこの目で見て、その一員になったことを悔いていない。晁蓋は重厚な義人だ。宋江は世が世なればすずやかな賢人だ。そのほか、ここの人間は、義にあつく、仁を知って、お互いに情けを尊び、よく飼い、よくこれを養えば、決して悪鬼外道の類ではない。外道はむしろ、王府の都に、充満している」
「どうも変ったことをいうな。それがかつての、彭玘将軍だろうか」

「ともかく、座に着き給え、篤と話そう」
彭玘は、心から言った。さきに自分が宋江から説かれた通りを、今は凌振にむかって説得していた。――その熱意に、凌振も折れて、ついに同意を誓うに至った。――やがて両者は姿を揃えて、晁蓋、呉用、宋江らの並び居る所へ来て、
「今日よりは」と、拝を執った。そして「――おゆるしがあるなら、お仲間のうちへ加えていただきましょう。しかし、心にかかるのは、都に残してある老母や妻子です。この悩みを慰すべき道がありません」
と、悲しんだ。
宋江は、その手を取って、なぐさめた。
「お案じには及ばぬ。彭玘将軍のご家族も、当所へおつれすることになっている。あなたのご妻子も、併せて、かならず無事なご対面を計りましょう」
それからすぐ、呉用は、
「まずもって、彭玘、轟天雷の二傑を泊中に迎え得ては、時しも非常ながら、一夜の祝宴はあってよかろう」
と、この夜は、わざと大祝宴を張って、近来とみに沈衰しがちな山寨の士気に一振の気を吐かせた。
これで、敗北つづきの悲調の底からも、慨然として、奮起の色が沸いた。その熱した頃を見て、宋江が言った。
「――砲手凌振はもうわれらの友だし、敵の陣で、なお怖るべきものは、連環馬軍があるのみだ。たれかあの鎖鎧で不死身にくるまれた馬とその騎兵隊を破る策は持たないか。あれば、いかなる者の言でも、謹んでその意見を聞きたいが」
しばし声はなかった。すると一党中でも、もっとも端の方にいた先ごろ新入りの湯隆が、
「あります！　ありますっ」
と、突拍子もない大声で満座一同をおどろかせた。
「おお」と宋江は目をやって「――そう申すのは、李逵の手引きで先頃入った武岡鎮の鍛冶屋銭豹子の湯隆じゃないか」
「へい、その湯隆で」
「あるとは、どういういい智恵があるのか、こっちへ進み出て、一同の方々へ話してくれ」
「では、ごめんなすって。……どうもこう口幅ったいことを申すようですが、あの連環馬軍ってやつは、どうでも、ある一つの武器と、てまえには従兄弟にあたるその人とを使わぬことには、破れっこはありません」
「ふム。そんな特殊な武器があるのか」
「あっしの親父祖父も、家代々の打物造り、甲、兜に限らず、その道では名工といわれた人。……わけて祖父は、延安府の経略使、种閣下にはかくべつご贔屓にされ、どうして外敵が使っている連環の甲馬をやっつけ得るかッてえなご相談にもあずかって、その結果、苦心工夫のあげく、〝鉤付キ鎌鎗〟という打物を祖父が発明いたしましたんで」
「ほ、それはどんな？」
「絵図では伝わっておりますか、実物はどこにもありません。それにまた、そいつを使いこなす段になると、天下唯一人、てまえの従兄弟しかないんでして」
そのことばの真ッただ中を、横からばっと薙ぎ取って。
――林冲が、突如、言った。
「湯隆。……その天下一人の人とは、近衛の金鎗組師範、徐寧

のことじゃないのか」
「えっ、ご存知なので」
「知らないでか。拙者も元は禁軍の一人だ。都にいた頃は、よく武を談じ、技を競べあったこともあり、たがいに畏敬していた友人だったが、さあ……あの正真正銘の鉤鎌ノ鎗の一人者を、どうしてここへ迎えうるかだ。そいつがちと、むずかしいて」
「いえ、よんどのことなら、ひとつここで無理な手をつかえば」
「……どんな手を？」と、ここで宋江がまた訊くと、湯隆がここでいうには。
「徐寧の家には、世に二つとない先祖伝来の宝があります。てまえも亡くなった父と東京見物に参ったさい、徐寧の家で見せて貰った薄ら覚えが残っていますが……なんでもそれは〝鎗貫サズノ鎖小札ノ鎧〟……とかいう物で、朱革ノ鎧櫃に入れ、いつも大事に、二階の天井裏に吊ッてある。つまり徐寧にとっちゃア命から二番目の宝。――どうでしょう。そいつを一つ巧くこっちの手に奪り上げて口説いてみたら」
「むむ！　一案だな」
呉用が大きく頷いた突嗟である。またも末座から剽軽な声で、「――ほいッ、御用とございますなら、あっしを忘れちゃいけませんぜ」と人を分けて、こう名のり出て来た者がある。
鼓上蚤の時遷だった。
「おう誰かと思えば、梁上ノ君子（泥棒の意味）か。なるほど、時遷ならお手の物だろう」
「はばかりながら――」と、時遷は鼻うごめかして。「忍びにかけてなら！」
「よしっ、きさま、ひきうけろ」
「のみ込みました。ところで軍師。ほかのお手筈は」
「いまそれぞれに役割を付けて申し渡す。――楊林、薛永、李雲、楽和、それと湯隆。そしてもう一名戴宗も。――ずっと揃ってここへ列んでくれい」
呉用がたちどころに授けた一計とはそもどんな策か。一人一役、各〻の能に応じて割り振られ、ここに〝宝盗み〟の手だてと〝徐寧抱き込み〟の段どりはでき上がった。そして「物置のガラクタでも月日のうちには陽の目を見る」の譬えで、まずは先陣の蚤の時遷、日頃にも似ず張りきって、一ト足さきに山をおり、開封東京の空をさして立って行った。

## 八　屋根裏に躍る〝牧渓猿〟と、狩場野で色を失う徐寧のこと

汴城城下、花の都。冬ながら宋朝文化爛漫な千街万戸は、人の騒音と賑わいで、彩霞、煙るばかりであった。禁裡の森やら凌烟閣の瑠璃瓦は、八省四十八街のその遠方此方にのぞまれる。――で、この巷での一人の旅人時遷のごときは、一匹の蚤とも人目には映るまい。
――その日、旅籠を出た時遷は、城内の官庁街をうろついていたが、やがて太衛府の横をぐるっと歩いて来て、
「もしもし、禁門の金鎗組ってな、どこを入って行ったらいいんです？」

と、往来で会った書記風の男にきいていた。
「組ではあるまい」と、書類を抱え直しながらその男は――
「組の大きいのを班という。金鎗班なら彼方の一郭で、禁軍鎗隊の軍人ばかり住んでるところだ」
「その金鎗班のご師範、徐寧さんのおやしきもそん中ですか」
「班の門を入って、十字路のひだり側、そのうちで一番大きい黒塗りの門がそのお宅だよ」
「二階がありますか」
「へんなことを訊くな、きさま」
「いえなに。雨が漏るとかで、屋根瓦の葺き換えをたのまれましたんでね」
「なんだ瓦職人か」
「へい、屋根屋なんで」
「二階もあるよ」
時遷は、腹のうちで「まず、目ぼしはついた」と、取ッて返した。その日は旅籠へもどって、忍び道具一式を調べ、さて晩になると、晩飯もたっぷり食い溜め、真夜半、出かけだしたものだった。
巨大な門も築土も、彼にかかっては何の用も果していない。時遷はいつのまにか大きな椋ノ木の梢に、栗鼠みたいに止まっていた。どこかの城楼で時の太鼓がにぶく鳴っている。丑満すぎると何処もかしこも白々と霜がむすび、万象寂として声もない。ただ星のまたたきだけが、一個の黒い怪しい物の行動を見せていた。
その時遷の影も、いつのまにか、木の上にはない。枝から枝を這って、屋根へへばりつき、そこの二階の破風を壊して、もう天井裏にいたのである。
耳を澄ます。あるじの徐寧らしき人の声がする。妻、女中。階下と階上とを行き交う足音。どうもここの家族は夜更かしらしい。
「はてな？　いまから飯の支度などいいつけているぞ」
時遷。こいつはおかしいと、考え直した。今夜は瀬ぶみ、どっちみち二晩三晩は、通うつもりでいたのだが、家族はこれから寝るのでなく、いま起きたような様子なのだ。……としたら、ひょッとして、今夜が機会になるかもしれない。さきの不運、こっちの天運と、時遷はなおも息をこらし、天井裏を注意ぶかく、撫で、這い、そして隙間をさがして覗いてみると、
「……ふ、ふ、ふ。……あるぜ、あるぜ。朱革の鎧櫃が、ちゃんと、天井に吊ッてあら。帰命頂来、鼻の先だよ」
と、思わず北叟笑みして、天性の一種声なき快感にくすぐられていた。
「おや？　……」と、下では夫妻が天井を見上げ。
「なんだろ？　へんにゴソゴソしなかったかい」
「いいえ、べつに、……鼠でしょう」
「鼠か。つまらん。……ところで飯はまだか」
「外はお寒うございますから、召使たちも、何か温い物を差上げようと、気をつかっているのでございましょう」
「天子さまのお狩猟で、今朝は暗いうちに宮門をお出ましだ。そんなことはいっておれん。早くしてくれ」
「でもまだ、お早過ぎるくらいお早いのに」
「ま、ひと口、酒でもくれ。それそこの瑠璃杯でいい。――

これも先ごろの御狩猟で天子から拝領の物だ。――現徽宗皇帝陛下は、絵ばかり描いておられて、とんと軍事には御心をかたむけられぬ。それだから梁山泊のごとき世を怖れぬ大盗の巣窟も出来たりすると、高俅大臣のおすすめでな、このごろは朔風の野に御弓も持たれるようになってきたわけ。われら供奉の武官もいちばいここは励まなければ相成らん」

とかくするうちに、例のこの家の黒門の方で、がやがやと人声がする。班の従兵たちが迎えに来たのらしい。屋敷の召使はそれらの者にも酒飯を与えて待たせておく。こなた二階の一室では、徐寧が早や供奉の盛装を着にかかっていて。

「奥方。留守中は屋敷廻りを気をつけろよ」

「ご心配なさいますな。わけて班のご門内ではありませんか」

「いやそうでない。わが家には、先祖伝来の秘宝があるだけに、たとえ物売りだろうが、よく気をつけてくれねば困る。わけて火の元の要心なども」

言いながら、徐寧は天井をまたふと見上げる。その愛着の容子は、常住坐臥、寝てもさめても朱革の櫃の無事から寸分も心は離れない人かのようであった。

「行ってくる」

綺羅な狩猟扮装の良人に添って、妻も階下まで送りに降りて行った気配だ。――時遷はスルスルと以前の破風の穴から這い出して、こんどは二階の窓を窺い、難なく、戸を外して中へ入り込む。動作の迅さ、まるで守宮としか見えない。

「いけねえや……案外高い」

当然、吊ってある鎧櫃なので、おいそれと、手は届かなかった。そのうちに階下で、

「眠かったろうね。旦那さまももうお出ましずみだから、おまえたちも、もいちどお寝み」

召使へいっている妻女の声がする。しまった。まにあわない。時遷はふたたび窓の外へ出て窓をたてた。果せるかな。奥方はそれから独り二階へ来て、寝台の帳を引き、やがて眠りについた様子。

「夜が明けては」

時遷、気が気ではない。ふところから何か取出した。細い葦みたいな管である。つないでゆくといくらでも長くなる。窓の隙間から内へ伸びて、その先が灯台へ近づいたと思うと、ふッと、ひとりでみたいに灯が消えた。帳の内では気がついた風もない。

それからすぐどこか暗い大地のうえへ、ポト――と何か毬でも落ちたような軽い音がした。と思われてからやや後のこと。

「火事だっ」「火事。火事」と、一ト所の声でなく、あっちこっちで「火事だ、火事火事！」

これは時遷の、みずから名づけて、〝擬遠発声術〟と称する奥の手。幾人もの声みたいに響き合い、それへ犬の吠え声まで交ぜてすることもある。

多くは、見つかった土壇場でやる遁走法だが、今夜の場合はそうでない。あわせて火遁法を使い、所持の油ボロを撒いて、徐家の浴室の裏、厨房の芥捨場、ほか一、二ヵ所に狐火みたいな炎がめらめら撒かれていた。

ドドドッと、二階へかけあがった召使たちの声は口々にもう逆上っている。「奥さま、奥さま！」「たいへんっ」「お早

くしないと」「焼け死にますよ」
けれど、さすがは徐寧の妻だった。
「おまえたち、あわてるんじゃありません。わたしはいい。私はいいから、旦那さまが命から二番目としているあのご宝物。あれを早く天井から降ろしておくれ」
室内はまっ暗闇。うろうろまごまご。それ踏み台がない、いや人間梯子を組んで重ねろ。なんだかんだの大騒ぎで、目には見えずも、見えるが如きものがある。
「あっ、あぶない」
どすん、と聞えた物音は、誰か一人が鉤から外した鎧櫃をささえきれずに、手から離したものだろう。同時にまた、人間梯子となっていた連中も総もンどりを打ち合ってみな尻モチついたことらしい。時遷もまた、その中にいたとは奇怪不思議のようであるが、彼はいつのまにか屋根窓から内へまぎれ入り、そして下男の似せ声を巧みにつかって、
「だめだ、だめだ。階下に火が廻ってたらどうするだ。階段から運び出すよりここがいい。ここからなら一番無事だよ!」
と、わッさもッさを退けて、遮二無二、窓から屋根の外へ持ち出し、共にスルリと屋根上へ脱け出していた。いや出るが早いか、鎧櫃には必ず付いている荷担革に双手をさしこみ、それを背に負ったと思うと、もう例の破風を足がかりとして、大屋根の天ッ辺に立ち、
「ははは。あばよ」
たちまち、椋の大枝に両手を伸ばした。そして、ぶらんと、牧渓猿のごとき曲芸を演じるかと見えたのもほんの一瞬。あとはどこを伝い、どこを跳び去ったか、根が白浪のお家芸の素迅さ、それっきりもう行方は知れない。
開封郊外の離宮〝龍符宮〟から十里の野は、御狩猟の行幸に染められて、壮観な狩場の陣がいちめん展開されていた。
皇帝のお野立ち間近には、総理兼近衛大将高俅の陣と彼の床几がある。そこへ、
「お願いにござりまする」
と、九拝して伏した一武士が見えた。
「お、金鎗班の徐寧ではないか。何だ願いの儀とは」
「ご遊猟中を、供奉の一員として、恐懼にたえませんが、ただいま家より急な使いがございまして、妻が急病の由、告げまいりました。家族とては召使のほか、幼児一名あるのみ。数日の賜暇をおゆるし願わしゅうぞんじ奉りますが」
「なに、妻女が急病だと。それはいかんな。君辺はさしつかえない。すぐ戻ってみてやるがいい」
徐寧は再拝してひきさがり、あとは班の各組頭に頼んで、ひとり汴城の都門へ向って、金鎗を小脇に手馴れの馬を飛ばして帰った。
その間とて、彼の血相はただならない。妻の急病とは、公へのてまえで、じつはかけがえない家宝の紛失を妻から知らせて来たのである。
寝耳に水だ。彼の華やかな紫の狩衣、紅錦の陣半被、纓に飾られた冠といえど、蒼白なその憂いにみちた面には、すべて、悲調を強めるものでしかなく、珠を失った龍か、瑞雲を奪われて荒地に怒る鳳凰にも似て、焦躁、狼狽、哀れといっても言い足りない。

「ち。どうしたことだろう。いったい、どういうわけなのか？」
たちまち、わが屋敷。――この血相で妻をただした。だが、妻も召使も彼の前に打ち悄れ、泣いて詫びるのみである。火事騒ぎとかのいきさつ、前後の模様、事細かに訊き取ってはみたものの掴み得るところは何もない。
「さては、前々から狙われていたか。何奴かが忍者を使って、盗み奪らせたにちがいない」
不覚だった。考えてみれば、日頃に思いあたりはいくらもある。
徐家の薄羽ノ鎧といえば、余りにも有名なので、諸侯の武門や将軍から一見を請われたり、ぜひ譲り受けたいなどの交渉は一再でなく、わけても大将軍花児王からは、銭三万貫の値さえつけて、数度の使者が来ていたほどだ。
「ああ、ご先祖にも申しわけない」
死んだ子の通夜を傷むような一夜が明け、次の日も、徐寧は茫然、腕拱いて鬱ぎこんでいるばかり。すると、思いがけない客が、折も折、ぶらりと訪ねて来たものだった。
「お従兄さまの、湯隆とか仰っしゃるお方で」
と、いう召使の取次に。
「え。あの銭豹子か」
なんと、あいにく浮かない日ではあったが、さっそく通して、久闊をあたため、さて何用でと来意を訊くと、客の湯隆は、旅包みの中から、二夕竿の黄金、おもさ二十両を、そこへさし出して。
「どうも長いご無沙汰をしちまいましたが、願がかなって、やっとこんど東京へ出て参りましたので、今日はこれをお届けにあがりましたようなわけで」
「隆さん。何だね、この黄金は」
「亡くなった親父のかたみでございますよ。臨終のせつ、父の遺言で、これは甥の寧にやってくれといわれ、長いこと預っておりましたが、つい折もなくッて」
「へえ。叔父御から私へだって。――じゃあ叔父さんは、そんなにも、死に際まで、わしを思っていてくれたのか」
「どうぞお納めくださいまし。亡父の遺言を果し、てまえもこれで荷が下りました」
「かたじけない」と、徐寧は納めて。「……久しぶりだ、ともかく一献」
と、その夕は、酒となったが、自然、色にはかくせない徐寧の浮かぬ素ぶりに、湯隆がわけを訊くと、じつは云々、先祖には申し訳ないし、自分にとっては愛児を奪われた悲しみにも勝る、かつは世間に聞えたらいい物笑い、いっそ鎗を捨てて坊主にでもなろうかと思っているところだ――という嘆息。
じっと、聞いていた湯隆は、さも同情の念にたえないように。
「……ああ、そんなわけでしたのか。そいつは飛んだご災難。てまえも小さい頃、親父に連れられてお宅へ伺ったとき、一度拝見させてもらった覚えがありますが、じゃあ、あれですね」
「むむ、今となっては、思い出すのも辛くなる」
「もうウロ覚えになってしまいましたが、たしか立派な櫃に入っていたようでしたが」

「羊皮の紅い革櫃だ。縁は雷紋の金箔押し、四方の横にもまた精巧な彩画で、牡丹の花に、毬遊びの獅子がえがいてある……」
「えっ。紅皮に獅子のもようですッて」
「隆さん。なんだって、そんな眼をするんだ」
「だ、だって。この眼を疑わずにゃいられません。ついゆうべ、見たばかりなんで」
「げッ、見た!? どこで見たのか」
「城外四十里ほどの村の居酒屋でしたっけ。……痩せッぽちの、眼の玉のするどい野郎が、のそっと入って来て、そいつもてまえのいた床几の向う側で、オイ大急ぎで、酒と飯をくれと、せかせか呶鳴っていたんでさ」
「ふむ！ そして？」
「見ると、その野郎が、いまいった通りな櫃を側へおいて、後生大事に片肱を乗ッけています。はてな？ 風態にも似合わねえ立派な物を……と、ついジロジロ見てたもんですから、奴も気がさしたか、酒も飯もがつがつすまして、すぐ街道を東の方へ急いで行ってしまいましたよ」
「それだ！ 隆さん。東へ行ったか」
「それとすりゃあ、しめたもンだ。今からでも追ッつける。野郎、足でも怪我をしたことか、後ろ姿を見たところ、跛行をひいていましたぜ」
「奥方っ。奥方っ」と徐寧は俄かに妻を呼んで――「いま隆さんから聞くと、かくかくの次第だ。すぐ旅仕度をそろえてくれ。隆さんも一しょに行ってくれるだろうな」
「行きますとも。男の人相は、ちゃんとこの眼におさめてある。さ……お急ぎなすって」

それよりは前のこと。一方では例の〝梁上ノ君子〟蚤の時遷。あの朝、首尾よく盗みとった一物をかついで、明けがた、早くも城外の草原を低い雁のごとく飛んでいた。
「おーいっ時遷、待った待った……」
「やあ、戴院長（神行太保ノ戴宗）じゃござんせんか」
「さっそく、荷をそこへ下ろせ。呉軍師が書いた狂言どおり、これから先の手順にも、きさまはまだ一ト役あるぞ」
「わかっております。どうか中身の鎧は院長がお持ちなすって」
と蓋を開けて、中の薄羽小札重ねのよろいだけは、戴宗にここで預けた。――戴宗はそれを持って、独自の神行法で、すぐ梁山泊へと急いでしまい、時遷は空櫃だけをかついで、その日、かねて諜し合せていた街道茶店へ入って行った。
ここには、これも呉用の命で、湯隆が彼を待っていた。かくて時遷と湯隆との打合せは、事前に出来ていたのである。――すなわち、時遷は空櫃を負って、梁山泊までの陸路をただの旅人のように旅籠泊りをかさねて行く。泊り先の宿屋の軒には、かならず目印として、白墨でどこかへ丸を描いて残しておく。途中で休んだ腰かけ茶屋にも同様な印を残す。――というだけの段取りだった。
つまるところ、湯隆が徐寧の家を訪ねたのは、すでにこれらの諜し合せをすまし、時遷とも一時別れ、さてあくる日、なに食わぬ顔して城内へ入って行った午後のことだったわけなのだ。そして徐寧の誘き出しも、まずは、ここにまんまと

目的の半ばを達しかけていたもの――。
あれから二人は城外の街道を、東へ東へ、急いでいた。湯隆の目はたえず、白い丸印、白い丸印。
「あ。あった……」
「隆さん。何があった？」
「いえなに、その……茶店がですよ。あんまり腹が減ってきたので」
「じゃあ、一ト息つこうか」
ずっと入って、腹ふせぎに軽い物で一杯飲む。その間に、湯隆が茶店の亭主にこう訊ねたものである。
「じいさん。つかねえことを訊くようだが、眼のするどい、ひょろッと痩せた野郎が、朱革の鎧櫃を背負って通るのを見かけなかったかい」
「ヘエ、その男なら、昼、ここで休んで飯を三人前も食って行きなすったが」
「どっちへ」
「たしか東の方で」
徐寧は聞くやいな、先に立って。
「隆さん、急ごう！」
湯隆も思うツボと歩きにかかる。やがて宵のくち。白い丸印をまた見かけた。徐寧が夜道をかけてもというのを、まあまあと、ここで旅装を解いて一泊とする。――そして翌朝の立ちぎわ、あいさつに出て来た女将をつかまえて、湯隆がまた訊ねた。
「一見、人相のよくねえ男が、朱革の櫃をかついで、きのうこの辺を通らなかったかね」
「あらまあ、だんなさま、その人なら」
「どうしたと？」
「暗いうちに、宅を早立ちして行きましたよ」
「えっ、ここに泊っていたのか」
徐寧は地だんだ踏んだ。しかしその日の街道では、何も聞き知るところはなかった。湯隆も丸印を見なかったのである。
だが、次の日は、しばしば見かけた。そのたび湯隆は連れを誘って茶店へかける。すると何となく手がかりも聞く。――けれどそれが、いつも半日かわずか二タ刻遅れだった。かくてついつい幾日かを釣られて歩き、徐寧はいやが上にも、焦ついていた。
「ええ、くそいまいましい。今日ではや七日目。妻の急病と称えて、賜暇はいただいたものの、禁軍への届けもあれきり……。こりゃどうしたものだろうな」
「ま、寧さん。そうご落胆にゃ及びますまいぜ。下手人のホシはついてることだし」
「けれど、こう何度も、鼻ッ先を掠めながら捕り逃がしているようではな」
「こっちも息が切れるが、逃げる野郎の方だって懸命にちがいねえ。ここが辛抱のしどころ。もう一ト息ってえところでさ」
すでに道は山東に入っており、冬の日も薄れだすと、楊柳の並木影は蕭条と肌寒く、街道百里、人影を見ることも稀れ……。
「や、や、やっ？　寧さん、寧さん。体を伏せて隠れなせえ」
「な、なんだ。どうして？」

「野郎がいます。あんな所に」
「げっ、いるって」
「ほれ、街道沿いのひだり側。松林があって、チラと古廟の門が見えるでしょ」
「むむ見える」
「よくごらんなせえ。どうも夕陽のせいで眩しくッていけねえが、廟門の石段に腰をかけ、野郎が朱い櫃をそばにおいて、休んでいる風じゃござんせんか」
「おッ、しめた……」
なんの猶予があろう、もう徐寧はそれへ向ってすッとんでいた。湯隆もあとから一目散に馳けまろぶ。すでに先の徐寧は、ばッと、逃げかけた痩せ男の襟がみをつかんでいた。だが反撃を食ったらしい。とたんにそこの石段を、諸仆れに、ころころ転がりあっていた。

## 九　工廠の鎚音は水泊に冴え、不死身の鉄軍も壊滅し去ること

じつは一場の狂言――梁山泊の仲間が書いた偽計とは――金鎗手の徐寧がここで気のつくはずもない。
街道の胡麻の蠅みたいな一方の男は難なく捕り抑えたが、こいつもじつは梁山泊のひとり時遷なのだ。
だが、徐寧をこれまで誘き出してきた徐寧の従兄弟湯隆とは、ちゃんと、筋書が出来合ッていることなので、時遷にしては大いに芝居はやりいいわけだ。
「あっ。……ア痛、痛、痛。……そう首を締めちゃアしゃべれといっても、何もしゃべれやしねえじゃねえか。もう何でもいっちまうから、手をゆるめてくんねえ」
時遷の泣きッ面に、湯隆もそばからいった。
「徐寧さん、もう大丈夫だろうじゃないか。とにかく、そいつの言い分を聞いてみよう」
「よしっ、さあ吐かせ」と、徐寧は突ッ放して――「よくもわが家の宝、薄羽小札のよろいを盗み出しおったな。その朱革のよろい櫃がここにあるからには、下手人はうぬに相違あるまい。さ、白状しろ」
「するがね、大将、こいつは空だよ」
「うそをつけ」
「嘘かどうか、蓋を除ってごらんなせえ」
「あっ、なるほど空ッぽだ。中身のよろいはどこへやった！
隠しだてしやがると、素ッ首をねじ切るぞ」
「よろいはとうに泰安州へ行ってるさ。経略使の种の旦那のご註文でね！」
「ご註文だと。ひとの物を」
「金じゃあ売らぬ宝と聞いて、种の大旦那が李三ていう泥棒の名人にいいつけてお宅へ忍び込ませたのさ。俺アその手伝いとして張番にくッ付いていただけだ。おれが犯人じゃあねえよ」
「でも。何で空櫃だけをてめえ背負ってかえるのか」
「……この通り、逃げる途中で左の足首を挫いてしまい、李三の早足には追ッつけねえので、野郎が中身のよろいだけを持って、先に泰安州へ行っちまったというわけだ……。ア痛。……ちょっと曲げても足が痛む。……よろい櫃はそっちへ返

すから、俺もここで押ッ放してくれ」
「待て。そうは問屋で卸さねえぞ。……弱ったなあ、隆さん、どうしよう？」
「そいつを証人にしょッ曳いて、泰安州へ乗り込もうじゃありませんか」
「そして」
「李三を捕ッつかまえる。もし李三が分らなかったら公沙汰にし、経略使の種をあいてに訴訟するしか途はありますまい」
湯隆は頻りにすすめた。その間、チラと時遷の目が、彼の眸と怪しい交叉を交わしたが、考え込んでいた金鎗手の徐寧はもとよりそれに気づきもしない。
「ムム、それしか途はあるまいなあ！」
そこで時遷をしょッ曳いて、さらに街道の旅をつづけた。朝は早立ち、夜も暗くまで歩いて、数日なおも、東へ東へと。
すると、幾日目かの昼である。空樽を積んで街道を行く空馬車を先に見かけて、
「馬車屋のおッさん、どこへ行くのかね」
と、湯隆が追ッついて呼びかけた。
剽軽そうなおッさんである。馭者台から振向いて。
「おいよ、おれかね？　あきないで鄭州へ行き、泰安州へ帰るところさ」
「そうかい。そいつアちょうどいい。――こう、連れの一人が、跛行を曳いて、弱ってるんだ。乗せてッてくんねえか」
「また空樽が三ツ殖えるわけかい。ま、乗んなよ。骨が折れるのは、わしではない、馬だからね」
「空樽扱いはびでえな」と、三人、さっそく空樽の間へ割り込んでそれへ乗り込み――「こう見えても、ふところは空じゃねえぜ。向うへ着いたら、駄賃はやるからな、おッさん」
「お礼は先に言っとくよ」
と、おッさんは、鞭を振り振り、口笛を鳴らし初めて、
「なるべく、たんまり酒代が出ますように、ひとつ、退屈しのぎに、ごきげんを伺いやしょうかね」
と、ひなびた山東節など途々歌い出した。これまた地方調ゆたかで、しかもすこぶる美声なのだった。
気は急ぐが、道は捗どり、それに馬車屋がおもしろい。
三日目ごろには、すっかり仲間気分に醸され、馬車屋のおッさんが、こう言いだした。
「おい、旅の衆よ。毎日わしの唄ばかりでも味気なかンべ。その赤丸の印の小樽には泰安酒が半分ほどまだ残っているだよ。飲むなら飲まッせ。じつアわしの寝酒の分だがね」
「ほ……。酒があったのか。じゃあご馳走になるぜ」
ところで、この小樽の酒を、湯隆がどう巧みに、徐寧に飲ませ、時遷にもやり、また自分も一しょに飲んでみせたか。
とにかく、これは麻睡酒だった。――時遷、湯隆はなんでもなかったが、徐寧ひとりには、しびれ薬がまわって、彼は正体もなくよだれをたらしてやがて夢魔にひきずりこまれていた。
以後、どれほどな時間がたったか、彼はまったく知るところがない。――例の梁山泊のこっち岸で降ろされたのも知らず、船へ乗せられて水上を対岸へ送られた間も昏々たる姿だった。――そしてハッと目がさめてみると、あたりには見つけない男が居ならび、馬車屋のおッさんこと、じつは鉄叫子

の楽和も、従兄弟の銭豹子湯隆も、また道中で捕まえた時遷もそのなかにいて、みなニヤニヤ笑いながら自分を見ている――

「やや。ここは？　……。隆さん、いったいここはどこなのだ？」

「梁山泊の聚議庁の一房です」

「げッ、梁山泊だって」

「かんにんして下さい、徐寧さん。じつはわたしも今では仲間の一人。――今日までのこと一切は、ここの軍師呉用先生が書いた計略です。そしてわたしがあなたの従兄弟という縁故からあなたを連れ出す〝誘き役〟として参ったので」

「じゃあ、家宝のよろいを盗み出した盗ッ人も」

「そいつは、時遷がやったお家芸で」

「うぬッ、よくも」

奮然と、こぶしを握って、徐寧が突ッ立ちあがったとき、凛として、しかも猛からぬ一ト声が、

「金鎗班のご師範徐寧先生、お腹も立ちましょうがしばらく待ってください。申し上げる仔細がある」

といった者がある。

それなん、座にいた宋江であり、ほか、晁蓋、呉用、公孫勝などもみな居ならんでいたのだった。

宋江は、しずかに、事情を話した。

いま、梁山泊は、官軍包囲の中にある。

戦えど戦えど、敵の呼延灼将軍――というよりは、その装備――連環馬陣の猛威に会っては、何とも抗しうる法がない。

その連環鎖の鎧馬をやぶるにはどうするか。それが山泊の運命を今や決するところまで来てしまった。

「……為に、です」

と、宋江は礼を低うして徐寧へいう。

「あなたは、禁軍における鎗のご師範。そして家にお伝えの一流鉤鎌ノ鎗の名人であるともうかがった」

「……」

「よく連環陣の鉄騎を破るものは、その鉤鎌ノ鎗を歩兵に持たせて戦うしか破る法はないとも、そこにおる湯隆から聞きました。……で、どうしても、あなたを山泊へ迎える必要となったわけです」

「ばかなッ」と、徐寧は怒ッて。「どんな事情かしらぬが、勝手きわまる無茶な話だ。人の身を。人の運命を」

「その点は重々謝す」

「貴公も、義人宋江と、世に敬われているほどな人ではないか」

「決して、不義不仁を働くのではありません。山寨一同の志はいずれ胸をひらいて話しましょう。したが事は焦眉の急です、背に腹はかえられず、あなたを偽いてこれへ迎え、鉤鎌ノ鎗の製法、またその鎗のつかいかた、併せて二つを、ここの者へご伝授していただきたい」

「しかし拙者は宋朝廷の朝臣だ。妻子も都においてある」

「いやそのご家族も、一味の者が、すべてこれへお連れしてまいりましょう」

「えっ、家族までも」

「もはや開封の都では、あなたを班の脱走者とみなし、徐寧追捕

の令が出ている。否といっても、あなたの帰る所はない」
「ああ、それはむごい。余りといえば騙り過ぎる」
「ですが、ここには官軍方の彭玘将軍と凌振将軍のふたりも悪政府の旗を見かぎり、われらの仲間に入っています。……その二人から聞いて下されば、あなたが男の半生を託すに足る山泊であるかないかもご分別がつくでしょう。とまれ、しばらくご休息をとって、後ほどまでにご決意をきかしてください」
宋江は言って立った。
晁蓋以下の領袖たちも、わざとみな一時、座を去った。そしてそれに代るに、彭玘と凌振の二人が入って来た。
互いに、王城の禁軍では、顔見知りだった。意外な邂逅に、相互、唖然とはしたものの、だんだん話しあってみれば、そこには忌憚も何もない。
彭玘は説いた。
ここの賊は決して世にいうただの賊徒ではない、と。
彼ら一人一人の人間が、ここに到るぜひない宿命と、一つの悲願に生き抜こうとする理想とに結ばれており、因をただせば、こんな反逆の徒の巣窟ができたのも、腐爛した現政府や悪役人の罪にある。
それを膺懲し、それを正し、濁世に喘ぐ良民の味方たらんとするのが、ここの者どもの悲願とするところだ。その悲願さえかなえば宋江も晁蓋も呉用も寨を焼いて解散する――といっている、と。
こう聞いた徐寧は、
「知らなかった。そんな人間たちなのか。それが梁山泊というものであったのか」
と本来の義胆から、たちどころに、彼も腹をすえて、仲間入りの一諾を宋江まで申し出た。
山泊は沸いた。
ここに一脈の活路が見いだされ、先に戴宗が持って帰っていた薄羽小札の鎧は、当然、徐寧の手へ返された。またまもなく、徐寧の妻や家族らもここへ届けられて来た。
同時に。
まだ都に残されていた凌振、彭玘、二将軍の家族も山泊へ送りこまれて来、このよろこびも併せて、休戦一日の或る日、徐寧の入党祝いを兼て恒例の山泊祭りが盛んにおこなわれた。
すでにもう、その頃には。
徐寧の指揮のもとに、泊中の鍛冶廠では、テンカンテンカン、昼夜の火花と黒煙のなかで、無数な鉤鎌鎗が製産の作業に乗っていたし、それの出来上がるそばから、一隊二隊と、カギ鎗隊が編制され、その鎗法の調練も、あわせて徐寧が指南の下に、活発に始められていた。
「みな、見給え。――鎗を使うには、こう九ツの変がある」
徐寧みずから一鎗を持って、自由自在にそれをこなして見せ、
「直鎗とちがって、カギ鎗の特長というのは、三手が引ッ掛け、上下左右、四手が撥い、さらに突！　また分！　あわせて九ツの変という」
と、教えること、じつに懇切だった。
かつはその男振りも見事である。「雨江月」という唄の集にも徐寧をうたった歌詞があって――

六尺ゆたか
身はやなぎ
花のかざしを
かぶとに挿して
いつも行幸の鳳輦に
添うて行くのはありゃ誰か
禁門一の鎗つかい
徐寧
三ツ児も知る徐寧
聚議庁の廻廊に立ちならんで、遠くから彼の教練ぶりを眺めていた晁蓋、呉用、宋江、ほかあまたの領袖たちも、
「……見事だ」
と、見惚れて、頼もしげにみな讃嘆をもらしあった。
かくて七隊七百人の鎗隊が磨き上げられたので、ひそかに泊中では官軍撃破の秘計を練りに練り、本軍、遊軍、騎隊、砲隊、潜行隊、また水寨の水軍などもあわせて無慮八千、或る夜、忍びやかに無月の江灘を渡って総反撃に出て行った。

一方。
官軍がたの呼延灼にしても、この間、むなしくいたわけではない。
あらゆる攻勢をこころみ、偵察も出し、わけて水寨を窺ッて、しばしば船庫の焼打などにも出ていたのだったが、泊の守りはかたく、いつも失敗に帰していたのである。
それに味方の二大将、彭玘と凌振とが賊にとらわれてしまったのみか、梁山泊のために働いているらしい様子なども、自然に官軍方の警戒を神経質にさせ、特に闇夜などは、その攻勢よりはむしろ守りにかたくなっていたところだった。
「や、や。敵だっ。賊軍が江を渡って来たぞ」
「奇襲か」
「そんな小勢ではない」
「おお、いつのまにか。こりゃ凄まじい……」
「水も野も芦のあいだも、いちめんな火、たいまつの火だ！」
歩哨、幕僚たちの立ち騒ぐ声に、
「あわてるな。犀笛を吹け。全軍、即時部署につけいッ」
呼延灼は、ただちに例の〝踢雪烏騅〟の名馬にまたがり大号令をくだしていた。
副将の韓滔もすぐ馳けつけて来た。
「将軍。賊の大兵を見るに、野末をぐるぐる輪をかいて馳け、いまや、ま南へ廻ってますが」
「陽気に釣られて――」
と、呼延灼は、くちびるを噛み、
「久しく穴ごもりしていた奴らが、蛇とおなじで、穴を出て来たものらしい。連環馬軍の一隊をくりだして踏みつぶせ」
しかし、たちまち、韓滔は、さんざん敗れたていで、ひっ返して来た。
「将軍。うかつでした」
「どうした韓滔」
「敵の中心は、ま南とばかり睨んでいたら、わが連環馬が突進して行くと、声は闇の遠くに消え、代るに左右から妙なカギ鎗を持った鎗隊が襲い来たりたちまち、わが連環馬八十余騎を殲滅されてしまいました」

「ば、ばかな……」と呼延灼は耳もかさず「――そんなわけはない。乱軍の誤認だろう。一頭一頭鎖甲で馬体をかためている連環の鉄騎が、そんな無造作な敗をとるわけがあるものか」

「でも……」

ことばも終らぬうちだった。幕舎の附近で、一弾の砲火が、轟然と炸裂した。バッと黒い土砂を持った爆風があたりをつつみ、二弾三弾とまたもつづいて落ちてくる。

「しゃッ、こいつは凌振のしわざだ」

と呼延灼は、いななき狂う馬の手綱をしぼりながら――

「敵のとりことなった砲手の凌振めが、賊の手に加担しておるのだ。油断はならんぞ。韓滔、敵の砲陣へ、新手の連環馬陣をやって蹴ちらせ！」

すでに、敵味方の喊声は、野面を埋め、水に谺し、凄絶きわまるものがある。

その黒い潮の吠えは、南かと思えば北に揚がり、北かと思えば、東にどよめく。

おまけに、つるべ撃ちの砲撃は、ここ中軍の幕舎に集中してきて、母子砲の火の玉が、そこらじゅうを火の海にした。

――母子砲とは一名を鼠弾ともいって、一弾が幾ツにも割れ、その中からまた無数の小弾や油ボロが散発するという始末のわるいものだった。

「韓滔はどうしたか？」

ついに彼は帰らない。

いや彼のみか、北へ、南へ、東へ、と兵を引ッさげては出て行った幕将たちも、そのどれ一人、再び本営には帰って来ず、しかも附近いよいよ炎と化すばかりなので、ついに呼延灼もそこに居たたまらず、さいごの親衛隊と、一陣の連環馬軍とを前後に立てて、

「本営をべつな所へ移す。――彼方の小高い丘へ行け」

と、金沙灘の江畔を去り、俄に、後方の平野へ馳けだした。

こうあろうとは、すでに賊の泊軍では、知っていたことらしい。つまりお誂えのツボに嵌ったわけである。たちどころに、その行く手を声海嘯がくるんでいた。

「しまった。伏兵がいる！」

呼延灼は、前面の危急をみて、道をかえた。道なき道へ、ぜひなく馳け込む。芦、水溜り、窪地、また芦。

ところがなお、やがて縦横な蜘蛛手の縄だった。

ばたばたと、兵はつまずき、その上へまた、騎馬が来て折り重なる。

ピューッ、ピューッ、さかんなる賊兵の指笛がどこかでつンざく。――するとたちまち、カギ鎗を持った無数の影が、立ち惑う連環馬の騎隊へむかって猛然と襲いかかッてきた。

カギ鎗に引ッかけられては、さしも鎖甲の馬も不死身扮装ちの騎兵も、一トたまりさえなかった。そばからそばから、ぶッ仆れる。仆れると、あがきがつかず、敏速に起ち上がれないのは連環馬の致命的な弱点だった。

そこへまた、熊手や火煙玉を持った泊軍があらわれて、十重二十重にとりまき、いちめんな阿鼻叫喚を巻きおこした。

――あがきのわるい連環馬のほとんどは、火の早い芦原のそこかしこで、蒸し焼きに焼き殺されたかのようである。

「残念っ」

からくも、遁れえていた呼延灼は、ただ一騎で、狂気したような名馬烏騅の背にしがみついたまま何処へともなく馳けていた。

振返れば、天地すべて瞑々だ。つづいて来る一兵だにない。三軍、ここに壊滅、ことごとく、四散し去ったものとしか思われなかった。

## 十　名馬の盗難が機縁となって三山の怪雄どもを一つにする事

梁山泊は、またも一大勢力をここに加えた。

鎗の徐寧、火砲の凌振、それに彭玘将軍などの雄を、新たな仲間に迎えただけでなく、韓滔もまた官軍総敗北のさい、あの闇夜から捕われて来て、先の三名に説かれ、山泊の一頭領となってとどまることを、ついに天星廟の前で宣誓したのであった。

加うるにまた。

官軍総くずれのあとの戦利品も莫大だった。

連環馬三千騎のうち千頭は山泊の捕獲するところとなり、官軍が捨て去った糧秣、よろい、かぶと、武器の一切、ことごとく泊中へ運びこまれ、三日間ぶっ通しの山泊祭りの大祝宴にわきかえった。しかし、げにもこれはおかしな奇現象で、官はわざわざ、この賊巣へ遠くから、武器、武人、糧を送って、その驕りをいよいよ誇らすような結果をみてしまったわけである。

×　　×

さて、一方はかの敗軍の将、呼延灼。

いまさら、都へも帰れない。

麾下三軍の兵は、めどを失い、散々逃げ帰りもしたろうが、彼とすれば「何でおめおめ、この面さげて都へ」という感慨だろう。

落武者のみじめを沁々身に味わいながら、あてどもなく、二日ほど落ちて行ったが、

「待てよ。このまま山野に隠れて、郷士となり終るのも智恵がない」

と、そこで、一ト思案に行きついた。

「――青州の奉行、慕容氏には、かつて一面識がある。あちらは慕容貴妃のお血すじだ、ひとつ朝へおとりなしを願って、もういちど、雪辱の軍をなんとかしていただこう。そうだ。再起の工夫、望みなきにもあらずだ……」

気もちにゆとりを生じると、急に、身心の疲れや空腹をおぼえだした。それにもう黄昏れ頃。見れば路傍に一軒の田舎酒屋がある。

「亭主。今夜は泊めてくれい」

「だんな、うちは宿屋じゃございませぬ」

「わかっておる。どこでもいい。身を休めることさえできれば」

「じゃあ、あんな物置小屋同様な寝小屋でもようございますかい」

「わが輩は出征中の体だ、樹下石上も厭うものではない。……ただ腹が減った、さっそくそこの羊の股でも煮てくれい。そして酒だ、つづいて汁、飯、何でもいいから早くいたせ」

「かしこまりました。ま、こんなお菜で、とにかく一角お飲りなすっていて下さい」
「お、忘れていた。外に繋いでおいたのは、踢雪烏騅と申す名馬。あれへもあとで飼糧をやっておいてくれんか。そして、どこか人目につかん所へ繋いで今夜は大事に守っていてくれよ」
「じょ、冗談じゃございません。だんな。なんでわしらに、一ト晩中の保証ができるもんですか」
「どうして」
「この辺、馬泥棒は名物なんで。ヘイ……。しかもそんな宝物みたいな名馬とあっちゃあ、なおさら目をつけられるにきまっていまさあ」
「ふうむ……。この地方では、そんなに馬の値段がいいのか」
「いいえだんな、山賊村が近けえンですよ。――ここから先に桃花山というのがありましてね」
「桃花山」
「へい、打虎将の李忠、小覇王の周通、その二頭目の下に六、七百の子分がおります。強いのなンのッて、おかみの討手も、寄りつけた例はないほどでして」
「ははははは。わしは軍人だ。そんな者に恐れはせんよ。おう酒がなくなった。あとのを、あとのを……」
呼延灼は、ついつい、手酌をかさねて、したたかに酔ってしまった。さいごに、飯をと亭主が揺り起しても、そこの卓に俯伏したまま、どっと疲れも出て眠り入ってしまった態だ。
ところが、亭主の子であろう。吩付けられて、飼糧桶を抱え、裏から軒の外へ廻って行った童子が、そこで、すッ頓狂に、わめいていた。
「馬がいないよ！　馬がいないよ！　おとっさんお客さんの馬って、どこにいるのさ」
「げッ、いないって？」
「馬糞だけだよ、ここにあるのは」
「もう盗られたか」
「攫われたんだね」
「風の仕業だ、まるで黒い風の――」
この騒ぎに、呼延灼もガバと目をさまし、
「なに、烏騅が」
と、飛び出して来たが、夜は暗々、地の理はわからず、それに飲んだ酒が、顔には一瞬に冷めながら、こめかみの辺では、ぐらぐら、眸の裏側を、沸らせている。
「亭主、桃花山は、どっちの方だ」
「どっちといっても、とてもだんな、間に合やしません。さきは盗んだ馬で一足跳び。おまけに、そいつが脚の早い名馬ときては」
「恩賜の名馬なのだ。ああ……このうえ烏騅まで盗られたとあっては、いよいよわが輩の面目はない」
数日後。彼は青州へ入っていた。
奉行の慕容は、取次から彼の名を聞いたとき「はて？」と大いに怪しむ風だったが、会ってみると、まちがいのない呼延灼なので、
「将軍！　いったい、どうしたんです？」
と、仰天した色だった。
「武人として……」と、呼延灼は惨とした面を伏せて「じつ

に、面目ない始末だが、まあ聞いてください」
と、つつまず、恥を語り終った。そして、仰ぎ願わくは、もういちど、軍のご派遣をゆるされ、この身に雪辱の一戦をなさしめ給わるよう、伏して、おとりなしのほどを……と、男泣きに、九拝して、言った。
「よろしい。将軍は滅多に人へ額ずくべきではありません。将軍は将軍の権威を取りもどすべきだと私も考える」
慕蓉は同情して、さて言った。
「……がしかし、朝廷へ奏するにしても、恩賜の馬まで失ったとは申し上げ難い。それにじつは、この青州所轄の地域でも、桃花山のほか、二龍山、白虎山などの賊塞があり、猛害をふるッて熄まず、わが奉行所でもてこずっておる。ひとつ将軍がここで、烏騅をとり返す事のついでに、それらの賊徒をも掃討してみませんか。さすれば、大いに、朝へおとりなしの儀もしよいと思うが」
桃花山には近来、打虎将李忠が住みついていた。
この李忠の前身は、かつて魯智深がまだ花和尚といわず、渭州の町で憲兵をしていた時代、同じ町の辻で、膏薬売りをやっていたあの香具師の痩せ浪人の崩れなのである。
「いけねえ、いけねえ。兄き、さんざんな目に会ッちまったよ。はやく助太刀に出てくんねえ」
「どうしたい周通」
「どうもこうもねえ。青州奉行の軍隊が来たッていうんで、いつものとおり、山寨の木戸をおっ開いて、ただ一ト蹴散らしと出て行った。ところが、まったく勝手が違った。こんどの討手の大将は凡物ではねえ」
「梁山泊で敗けて来た官軍方の将軍、呼延灼という野郎だろう。……そいつが来ることは、おとといの晩からわかっていた」
「わかってはいたが、ああ強いとは思わなかったよ。双手で薄がねの鞭をつかい、そばへ寄りつくこともできねえ」
「奴のほかに、奉行所の軍兵は」
「ざッと、二千か」
「そいつはだめだ。敵いッこねえ。稀代な名馬は、先の晩に、こっちへ貰ッてあることだし、この上、ヘタな欲を掻くと、資本も子も失くしちまわぬ限りもねえ」
「といって、どうする？」
「仕方がねえ。山じゅうの寨門を堅固に閉めておいて、てめえ、二龍山へ一ト走り行って来い」
「えっ、二龍山へ」
「そうだ。二龍山の宝珠寺にいる花和尚の魯智深へ泣きつくんだ。後々には、きっと貢物をいたします。ですから、ここんとこはどうか助けると思って、ひとつご加勢ねがいます、とな」
「合点だ」
裏山づたい、一日半。
――ここ宝珠寺の破れ本殿では、時に、三人の怪人が、三ツの曲彔に、片胡坐を組みあっていた。
ひとりは花和尚魯智深である。
次が、青面獣の楊志。
もひとりは、虎殺しの名のある「行者の二郎」武松だった。

このほか。――べつに山門の方にも、四人の小頭がいた。もと孟州の牢番せがれ、金眼彪の施恩。

それに、操刀鬼の曹正。これは二龍山の下で小酒屋をやっていたあの男だ。

あとのふたりは夫婦者で、孟州は十字坡の峠茶店で、凄い商いをやっていた菜園子の張青と、その女房、母夜叉の孫二娘なのである。

これらはいずれもその後、ここに武松あり花和尚ありと知って、身の都合から集まり頼って来た者どもだった。

「……よし、わかった。おかしらたちが、何と仰っしゃるか、ま、お取次だけはしてやるから、俺について来い」

曹正は、いま山門へやって来た桃花山の周通を伴って、本殿の下へ来、使いの口上を彼と共に申し述べた。

耳かたむけていた花和尚たち三名は、何か、囁き合っているふうだったが、やがて。

「わけを聞けば、打ッちゃってもおけまいなあ」

呟いたのは、楊志である。

武松も「……うん」と大きく一つうなずいたが、花和尚だけは、渋ッたい顔をしていた。

「殺生はもうたくさんだ。ほかの山のおせッかいまではいらんことさ。それに李忠も、周通も、根ッからケチ臭え男でしかねえ」

「だが、花和尚」と、武松がいう。「――禁軍で名高い双鞭の名手呼延灼と聞けば、なんだか、ちょっと唆られるなあ。それとだ、奴が梁山泊の不名誉を、ここで取り返す気だとすれば、桃花山を破ッたあとは、かならずここへやって来る」

「それは来る」

と、楊志も同調した。

「それからでは、後手を踏むおそれもある。どうせ一ト波瀾は見るところ。それならこっちから先を取って、桃花山の願いも入れ、呼延灼にも、一ト泡吹かせた方がいい」

「む。行くか！」

と、ついに花和尚も、その重たげな巨躯を、のしッと、腰かけていた曲彔から上げた。

「あ、ご承諾くださるんで。……ど、どうもありがとうございます」

と、使いの周通は、ひざまずいて九拝した。そして連れて来た早足の子分に、これをすぐ桃花山の方へ速報した。

桃花山の李忠は、報をうけると、ただちに二龍山との策応を考え、全山から喊声をあげて、ふもとの奉行勢へ反撃に出た。

さきの呼延灼は、奉行慕蓉から二千の鎮台兵をあずかって、その先頭に立っていたのである。――山上から打って出て来た賊魁の打虎将李忠が跨がっているその馬を一見するなり彼はかっと鎧を蹴ッて進み。

「やあ、それはわが輩から盗み取った名馬烏騅。太々しい盗賊めが。よくも洒ア洒アと出て来おッたな。覚悟しろ、人民の敵」

「笑わすな。貢税の膏血でぶよぶよ肥っている廟堂の豚めが。梁山泊で赤恥かいた上、ここへ来てまで尻の穴で物をいう気か。人民の敵とは、うぬらのことだ」

「ほざいたな、尖ンがり頭の青大将」

「なにを……」
この李忠も馬鹿にはできない。大道で香具師の真似などしていたが、もとは定遠の浪士のせがれで鎗の妙手。その骨ばった青面とひょろ長い四肢は、呼延灼が言ったように、いかにも爬虫類の皮を鎧うている一個の怪そのものだ。
しかし呼延灼の双手から噴き出す二タ筋の薄刃金の鞭に対しては、とても敵であろうはずもない。――接戦の火花を見せたのもほんのつかのま、たちまち子分どもも破れて、李忠以下、深く山へ逃げこんでしまった。
それを追っかけて、山腹の寨門までせまってゆくと、こんどは待ってましたとばかり、山上諸所から鵝卵石の雨が降ってきた。ところへまた、後方の鎮台隊から伝令の兵があって。
「将軍。たいへんです。なにか、えたいの知れない大人数が、鼓を鳴らして、街道の遠くを迂回し、こっちへ向って来る様子です」
「なに。うしろの平野から」
呼延灼はあわてて山を馳けくだり、そして、一陣の砂煙を彼方に見た。なるほど、えらい喧騒轟々だ。しかもその先頭には、法衣姿に腹巻を鎧った大きな和尚が、戒刀を佩き、禅杖を掻い込み眼のさめるような白馬にまたがって来るのであった。
いうまでもなく、それは花和尚の魯智深で、迫り寄ること、両陣の間隔約五十間。まず和尚の方からいう。
「おういッ。梁山泊でぶちのめされた、だらしのねえヘッポコ将軍てなあ、てめえか」
「だまれ。呼延灼とはわがことだ。義によって、慕蓉閣下を助け、桃花、二龍、白虎の三山に巣食う害虫どもの一掃に参ったり。観念いたせ」
「だまって聞いていれば臍が茶を沸かす。義によってなんて言葉がてめえらの仲間にあるもんか。花和尚の魯智深を知らねえな」
「さては、過ぐる年、大相国寺の菜園から都の内を騒がせたあのずくにゅう坊主か」
「泣く子も黙る花和尚に、こけ脅しなんざ片腹いたい。足もとの明るいうちに、退がれ退がれッ」
「うごくな。そこを」
だッ――と馬を馳け合すやいな、双鞭の唸り、風を切る禅杖、さながら波間の魚紋そのまま、凄まじさといったらない。
ついに勝負は果てなく、どっちからともなく、銅鑼が鳴り、両勢一せいに入りみだれ、やがてまた、さッと両陣とも引き分かれた。
「和尚。こんどは拙者に代わらせてくれ」
買って出たのは、青面獣楊志である。
楊志は、いわゆる〝虎体狼腰〟といった体質。しかも大太刀の名人だ。
ところが、この楊志ですらも、呼延灼の双鞭の秘術には敵の一髪も斬ることはできなかった。
双方、りんりの汗と炎の息の間に、時を費やすのみで、ついに勝負の決を見ず、ふたたび引鉦のうちに陣を遠くへ退き、さて、つくづく、花和尚と共に、舌を巻いた。

「世間はひろい。なンてまア強い野郎もいるもんだろう」
「まさか、おれたちの腕にヤキが廻ったわけでもあるめえにな」
同様に。――一方の呼延灼の方でもまた、陣場の床几で、息を休めながら、
「いや危なかった。あいつら、どっちも、盗ッ人ずれの手並ではない。武芸は禁軍の専売だと思っていたら大間違いだわ」
と、これも胆を寒うしていた。
ところがこの夕、意外な早打が、奉行慕蓉の鎮台から馬を飛ばして来た。
「将軍。すぐ軍をかえしてください。ご命令です」
「えっ。どういうわけで」
「三山の一寨、白虎山に住む孔明と孔亮と申す賊が、城内の手薄を知って、急に押し襲せてまいったので」
呼延灼は仰天して、陣をたたみ、夜どおしで青州へ引っ返した。
とはいえ、いかに城内の手薄を知ったにしろ、白虎山の賊徒が、どうしてそんな積極的な挙に出てきたのか？　途々、使者に訊いてみると理由はこういう次第だった。
古くから、白虎山の下の大庄屋に「孔家」という名門の一家がある。
なかなか人望もあって、兄を毛頭星の孔明、弟を独火星の孔亮といい、壮丁や小作の百姓もたくさん抱えていたが、去年、町の大金持に騙されて、伝来の田地山林をのこらず法的に差押さえられ、その懸合い中に、つい若気の兄弟が、金持の一家を鏖殺するという大事件をおこしてしまった。
当然、土地にいられぬ兄弟は、白虎山へ逃げ込んで、いつか打家劫舎に変じ、官へ反抗をしめしだした。ところが彼らの叔父にあたる孔賓というのが、青州城内で店舗を持っていたので、累はこの叔父に及び、孔賓は以来、官の手に捕われて、奉行所の一牢にぶち込まれている。
「……というわけでして、つまりここんとこ、城内にはいくらも軍隊がいないと見て、孔明、孔亮のふたりが、叔父孔賓の身を、牢から奪い出そうと計って、押しかけて来たものに相違ございません」
「よしっ、わけは分った」
呼延灼は、こう聞いたので、すでに突撃態勢を作って、城下へ馳けつけた。
見れば、果たして州城は賊軍の包囲にあり、奉行慕蓉は、孤塁を守る姿で、からくも城頭に立って指揮している――
「お奉行っ、これへ呼延灼が馳けつけましたぞ。ご安堵あれよ」
彼は、高い所へ向って、こう手を振った。
そしてたちどころに、賊徒をけちらし、かつ、兄弟の姿を追ッて、城外四里の地点で、孔明に追いすがり、ついに闘い伏せ、孔明だけを生捕りとして引きあげて来た。
「将軍。よくぞ、神速に――」
と、慕蓉のよろこびと、賞め称えは、一ト通りでない。
「なんのこれしきのこと」
と、彼はかえって、謙遜して。
「むしろお恥かしいくらいです。なんとなれば、桃花山一つもまだ片づきません。甕の中の泥亀を採るようなものと思っ

ていたのがまちがいで、思いきや、二龍山から花和尚、また青面獣の楊志なんどの、意外な助太刀があらわれましたために」
「悪かった。事前に注意しておけばよかったが、そのほかまだ、景陽岡で虎退治をした行者武松なども、一味の内にたてこもっておる。……それゆえにこそ今日まで、この州城でも征伐し難く手をやいていたわけなのだ」
「いや、もはやご安堵あってしかるべしです。追ッつけこの呼延灼が、ひとりびとり、引ッ縛ってきて、ご面前に据えるでしょうから」
「たのむ。急に心も明るくなった。まずは将軍も大いに休養してください。酒庫を開いて、兵どもにも、ひとつ今夜は勇気づけさせましょう」
――場面は一転して。ここは郊外十里の野。
地は暗く、空には鋭い細月があった。
一隊の黒い流れが見える。――先なる一壮漢は、狭霧の薄戦衣に、虎頭を打ち出した金唐革の腹巻に、髪止めには銀のはちまきを締め、おぼろめく縒絨の剣帯へ利刀を横たえ、騎馬戛々、ふと耳をそばだてた。
「おいっ、物見」
「へい」
「何か地の音が遠くからする。行ってみろ」
「合点です」
すると、走った物見は、またたくまに、戻ってきて。
「親分。やって来たのは、白虎山の仲間のやつらです」
「呼延灼の部下じゃなかったのか」
「その呼延灼にぶち負けて、さんざんな態たらくの孔亮でした。なんですか、親分をよく知ってるそうで、いますぐこれへまいります」
「なに、孔亮が来るって」
武松は、馬を降りて、木に繋いだ。
俄に、呼延灼が青州へひきあげたので、これは怪しいと見、武松は一隊をつれて、今宵、城内附近の敵状を窺わんがため、密かに、これまで来たものだった。
ところへ、その青州城下で惨敗を喫したのみか、兄の孔明を生捕られ、無念やるかたなく落ちて来た孔亮の一勢と、偶然、行き会ったものである。孔亮は、武松と聞くや、なつかしそうに馳け寄って。
「武行者。私です……。お変りもなく」
「オオ、亮君か。まことに一別以来だったな」
「いちど二龍山へ、ごあいさつに出ようと思ってたんですが」
「拙者こそだ。無沙汰の罪はこっちで詫びたい。ところで兄上は」
「不覚にも、生捕られました、呼延灼のために。無念、いや面目もありません」
「あいつに馳け向っては無理もない。稀代な刃がね鞭の使い手だ。だがさ、なんだッてまた、そんな無謀な深入りをしなすッたのか」
「城中の牢に囚われている叔父孔賓を、助け出したい一心についい駆られまして」
「オ。……そんな噂はかねて薄々耳にしていた。叔父御の孔賓とやらは知らないが、あんたがたご兄弟の家には、かつて、

たいへんなお世話になったことがある。――いま梁山泊にいる宋先生とふたりしてね」
「なおご記憶でございましたか」
「ご恩を忘れていいものか。宋先生も折には思い出していなさるだろう。いや、今はそれどころではない。亮君。ここは何とかしなくっちゃなるまいぜ」
「もちろんです。ですが如何せん、微力です、白虎山には、もういくらの手下も残っていません」
「亮君、弱音を吹くな。とにかく今夜は拙者について来給え」
武松は彼を力づけて、魯智深と青面獣楊志のいる味方の陣場までつれもどった。
暁の篝火をかこみ、羊の股を裂いて、焙り焙り齧り合いながら、さて、談合の結果、
「よろしい、青州奉行の悪政に、塗炭の民が、愚痴も泣き言もいえずにじっと歯の根を噛んでる姿はすでに久しいものがある。いっそのこと、亮さんの兄上孔明と叔父御の孔賓を助け奪る事のついでに、慕蓉をかたづけ、呼延灼を生けどり、州城の庫の物もそっくり貰って、ひとつ、窮民祭りでもしてやろうではないか」
言ったのは、日頃は腰の重い不性者、花和尚魯智深なのである。
武松はもとより願うところ。それだとばかり異議はない。だが、かつて一ト度は北京軍の大名府に仕えていた日もある青面獣楊志は、さすが小首をかしげて雷同もしなかった。
「むずかしそうだなあ。そいつあ、まあ夢だろうぜ」
「楊志、どうしてそれが夢なんだ？」
「おれが見るところ、青州城ッてえのは、ちょっと不落といえそうな堅固な城だ。かたがた呼延灼も正直つよい。慕蓉ッて奴も、なかなかな出来物。それをろくすっぽ装備もねえ三山の手下ぐらいで、なんで、乗ッ取れるもんじゃねえ」
「いかにも道理だ。いわれてみれば、この花和尚にも一言なし、一言なし」
「では楊志、何かほかに、策はねえか。この武松とすれば、どうしても、孔家兄弟の恩にここで報いてみせねばならん」
「一案はある。ただし大覚悟を要するが」
「それは？」
「孔家の恩を思う人に、もうひとり宋公明があるといったね。どうだ、孔亮さんをここから急遽、梁山泊に使いにやる――。そして云々と事情を訴える。――梁山泊とすれば呼延灼は討ち洩らした官軍の首将だ、それに孔家の旧恩にたいする宋江先生の奮起もかならずありと見てよいと思う」
「うーむ。いい案だが、そうなると、いよいよ俺どもも、さいごは梁山泊入りときまるな」
「どっちみち、こう火の手が大きくなったからには、もうこの辺の小寨に殻をかぶッてはいられまい」
「それもそうだ。では、腹をすえるか」
「すべては、みんな、天星のおはからいさ」
「なるほど。おはからいか。うめえことを言やがる！」
と、花和尚は、腹を揺すって大笑いした。

## 十一　三山十二名、あげて水滸の寨へ投じる事

孔亮は、その場からすぐ、急使となって、青州を離れた。日ならずして着いた先の、梁山泊では、すぐ宋江が会ってくれて、

「おい、孔家のご次男ではないか。どうしてこれへは？」

と、彼を見ると、手をとってなつかしがった。……その宋江はまた、彼のはなしによって孔家の主はすでに亡く、孔家はつぶれ、兄の孔明、叔父の孔賓、みな青州奉行の獄中にとらわれているなどの仔細を聞いては、

「ああ申しわけない。ご恩のある旧家の災いを、私は少しも知らずにいた。ゆるしてください」

と、さんざんと涙を垂れた。

すでに、宋江の忘れない旧情が、このようであったから、孔亮の頼みは、一議におよばず、全山の仲間からも支持されて、たちどころに、

青州襲撃

の義挙も異議なくまとまった。

そこには、さきに戦場で見失った官軍の総帥、呼延灼も逃げこんでいるという。

また。味方としては。

二龍山の花和尚魯智深、青面獣の楊志。ほか桃花山、白虎山など、あわせて三山の漢どもも、ひたすら梁山泊の援けを望み、孔亮の使いの吉左右を、首を長くして待ッている場合でもあるとのこと。宋江はすすんでそれに当ろうとした。

「晁総統。おききおよびの通りです。この宋江に三千の兵をおまかせ下さい。義のため青州へ行って来ます」

「いや、宋先生」と、晁蓋は首を振った。「――こんどは、あなたはお残りなさい。ここ度々の陣務。青州へは、てまえがあなたに代って行こう」

「いや目的は、旧恩のある人々の救出にある。それを総統に代らせては、私の義が立ちません」

あくまで宋江は宋江らしい。二十人の頭目と、五隊三千人の泊兵をひきい、率先、青州の野へ出発した。

彼が、かねて江湖に噂のたかい花和尚魯智深と会ったのはこのさいである。青面獣の楊志らとも初対面であった。――三山を代表して二人は途中で宋江の軍を迎え、青州城の模様などをつぶさに話した。時にそれをそばで聞いた軍師呉用は、

「ははあ……」と、うなずきを見せて、こういった。

「青州は有名な嶮城だし、奉行慕容の権勢もまた人の知るところだが、要は、その中へ呼延灼という者が入り込んで、いやが上にも気勢を揚げているものと観られる。……宋先生、これはまず呼延灼をいけどってしまうのが、いちばんの早道でしょう」

「呉軍師。そんなうまい方策がありますかな」

「ないこともありません。――陣中につれてきた秦明と花栄とは、共に以前、この青州で兵馬総管をしていた者だったはずですから」

「なるほど」

宋江もいわれて思い出した。そこで第四隊にいたその二将を、第一隊に入れ代え、燕順、矮虎、楊雄、朱同、柴進、李俊

などを二陣三陣として、城下へせまった。
もとより秦明や花栄は、ここの地勢や、城内の抜け道にまで精通している。しかし短兵急には寄らず、連日、銅鑼や喊声をあげ、鼓譟して、逃げたりまた寄せたり、巧みに、城兵を疲らせていた。
――ついにその策に乗って、奉行慕蓉は、客将の呼延灼へこう命じた。
「将軍。――あれ、あのように、いつも賊の陣の前に立って指揮している花栄と秦明の二人は、もとこの地で兵馬総管までつとめていた軍人でありながら、官に叛いて賊の仲間へ奔った憎ッくき奴らです。にもかかわらず、日々あれへ出て恥もしらぬ悪口雑言を吐いている様、どうにもはや、我慢がならぬ」
「わかりました。あの賊の二将の首を取ッて来いとの御意ですな」
「そうだ。いちどは敗れたりといえ、禁軍三万の上に指揮をとっていたあなただ。賊将の首二ツぐらい慕蓉の前に供えられぬことはあるまい」
こういわれては、呼延灼たる者、なんで否まれようや、である。精兵八百をひきつれて、城の一門から敵中へ突進して行った。
けれど秦明、花栄は、
「それっ、おいでなすッた！」
と、これは思うつぼの様子だった。決してあわてないし、また驚かない。巧みに陣を開き、また旋回し、チラチラ、自分たちの姿をそのあいだに見せながら、次第に遠くへ退いて行った。
「卑怯っ、卑怯！」
追っかけ追っかけ、呼延灼はつい深入りしてしまった。あげくに、陥し坑へ落ちこみ、搦め捕られて、やがて、宋江のいる本陣へ、大熊みたいに、曳きずられて行ったのだった。
すでに伝令で知っていた宋江は、それを見ると、気の立っている大勢の手下を叱った。
「手荒にするなっ。縄を解け。――縄を解いて、わしに預けろ」
さらに、宋江は、その呼延灼の手をとって、幕舎の内に入れ、しかも礼を執って、こう慰めたものである。
「将軍、無残な目にお遭いなされましたな。ご胸中もお察しできる」
「やあ、きさまがかねて聞く宋公明だな。このほうに恥をかかす気か。早く首を打て」
「いや将軍。まだ人生を見限るのは早過ぎましょう。お互いはまだ若い。あたら命を、そう粗末にすることはない」
「では、生かしておいてどうする気だ？」
「あなたの勇と才能を使いたい」
「だれが」
「天が」
「ばかを申せ。使いたいのはきさまらだろうが、いやしくもわしは呼延灼だ。賊徒の道具には相ならん」
「しかし、人間と生れた宿業の尽きぬうちは、いやでも天はあなたを地上で使い切るでしょう。梁山泊は賊の巣窟とのみお考えのようだが、これなん天罡星の集まりです。天意によ

る世直しの大作用を、この土においてしているものです。呼延将軍」
「なんだ」
「さきにあなたが盗まれた名馬烏騅は、盗んだ桃花山の周通を納得させて、そこの幕の外につないである。あらためてお返し申す」
「なに。あれをわしに返すと？」
「されば、烏騅に跨がって、ここをお逃げになるならお逃げなさい。――しかし、すでにあなたは朝廷からあずかった三軍を征途に亡い、また三千の連環馬軍を殲滅され、いわば籍なき敗軍の孤将にひとしい。どの顔さげおめおめ都へお帰りになれようか」
「……」
「おそらくは、慕蓉をたよって、朝廷への帰参をとりなしてもらおうというお腹なのでしょう。ところが、その慕蓉は早や青州城を捨てて、今夜あたりは、首になるか、あるいは、都へ落ちんと、野を逃げ惑ッていることでしょう。そのほうは、おあきらめなされたがよい」
「ば、ばかなッ。いい加減なことをいえ。いいかげんなことも程々に」
「いや、あなたのつれて出た精兵も、あらましは軍師呉用の八陣の計に落ちて、そっくり捕虜にされている。その旗、その城兵を巧みに使って、今夕の宵闇にまぎれ、こちらの秦明、花栄そのほかの部隊が、城中へなだれ込み、一気に青州城を内から占領する手順になっているのです。……ま、事実を待ちましょう。やがて火の手が揚がるはずですから」

宋江の言は、嘘ではなかった。
青州はその晩に陥ちた。炎々たる城頭の火柱は、郊外十里の野づらを染めて夜もすがらな城内の人声が、赤い雲間に谺している――
「炎の下から、獄中の孔賓と孔明の二名は無事に救い出しました。また奉行慕蓉の一家は、みなごろしにいたし、あとは領民の混乱ですが、目下、それを鎮撫中であります」
こう宋江の幕舎へ、伝令があると、宋江はすぐ馬に乗って出て行った。
そして、城内の鎮撫やら指令をすませて、明けがた、再びこれへ帰って来ると、まだ幕舎の片隅に首うなだれて坐っていた呼延灼が、いきなり彼の袖にすがって言った。
「宋大人。きのうまでの自分の倨傲は、慚愧にたえん。まったく、迷いの夢がさめた。わしは梁山泊というものも、また広くはこの社会をも、見損なっていた。いまからはぜひ水滸の寨の一員にお加え願いたい」
「おう、おわかり下すったか」
「じつは昨夜、あなたがここを出たあとで、入れ代りに、旧友の彭玘、凌振、また韓滔も、揃ッてここへやって来ました。……そしてかれらからつぶさに梁山泊の内状を話され、かつまた、泊中の人達の、烈々たる理想をかたり聞かされて、真底、自分の考え方も革められてしまったのです」
「祝着、祝着」
宋江は大いによろこんで――
「では、さっそくお戻しした名馬烏騅にお乗り下さい。轡を

そろえて、城内へ参りましょう。そこには、あなたのほかにも、今日あらたに、梁山泊入りしたいと望んでいる同志の新顔がまだたくさんに待っている」

といって、彼をうながした。

城内の街々はまだ余燼濛々の騒ぎである。――だが早くも、街角には、宋江が立てさせた〝撫民ノ制札〟が見られ、一部では城壁の消火につとめ、また一隊の泊兵は、罹災民を他にまとめて、それには米や衣服やかねを見舞にめぐんでやっている。

役署の穀倉は開かれ、奪いとった金や衣は山をなし、良馬二百余頭も、一ヵ所につなぎ出された。宋江はこれの半分を梁山泊へ輸送させ、

「あとは窮民に領けてやれ」

と、土地の長老五人をえらんで、その者たちに処理を托した。――そして、即日、

「長居はまずい。梁山泊へ」

と、すぐ全軍を青州から引き揚げにかからせたが、その途すがらも、秋毫犯すことない徳風を慕って、郷村の老幼男女は、みな道にならび、香を焚き、花を投げて、歓呼した。

「……ああ、うそではない」

呼延灼は心中、つくづく、途上で感じていた――。

「かつては自分も、禁軍三万をひきつれて、征途のみちを、こうして行軍したものだが、まだいちども田野の郷民が、こんなに王軍へ歓呼するような景色に出会ったことはない……。これがまことの野の声というものか」と。

さらに彼は、梁山泊でも驚いた。

その規模の大は、さきに彼が攻めあぐねた時から分っていたが、内部の秩序、また宛子城の大会議に集まった漢どもの、いずれも一トかどな面だましいに、今さらの如く、ひそかな舌を巻いたのだった。

総統の晁蓋以下、従来の名だたる面々はいうまでもない。特にこのたびの凱旋では、新たな降人、呼延灼をはじめ、二龍、白虎、桃花の三山から――魯智深、武松、青面獣、施恩、曹正、張青、孫二娘、周通、孔明、孔亮――しめて十二名の新加盟者も居流れていたことなので、そのありさまは、なんとも壮観のかぎりであった。

「三山の者を代表して」

と、さかもりの最中に、青面獣楊志が起って、一場の挨拶をのべた。

「このたびは、梁山泊ご一同の義にたすけられ、かつまた、新参の十二名へ、かような盛宴を張っていただき、身に余るばかりか、魚が水を得たような新天地をここに見いだしました。どうぞ以後はよろしくお引きまわしを」

それにたいして、晁蓋からも歓迎の辞があった。

「かねがね、お噂のたかい花和尚魯智深、また行者武松。そのほかの方々でも、ご縁があるならこちらから出向いてもお誘いしたいほどな思いでいたのです。――それがはしなく、こんどの事件で、こう一堂にお揃いでご加盟を願えることになったのも、申さば、天のおはからいといえるものかもしれません。われらにとって、こんなよろこばしいことはない」

すると花和尚が、即座に、相槌を打って言った。

「おはからいか！　なるほど、ここへ来る前にも、誰かが同

じことをいっていた。――では、今日ご馳走の酒も、おはからいによるものとして、存分、遠慮なくいただくとしよう。諸子！　ひとつご乾杯を」

彼の音頭に、どっと笑い声が揚がり、満堂一せいに杯をあげ合った。

かくも錚々たる顔ぶれがふえたので、水滸の寨は、いよいよその陣容の充実をみせてきた。――旌旗もこれまでの物では不足し――三歳、九曜、二十八宿の旗、飛熊ノ旗、飛豹ノ旗をも新たに作らせ――山の四面には、狼火台まで築かれてきた。

泊内での、農耕はもとよりのこと。酪農から酒の醸造も今ではここで事を欠かない。老幼は養蚕をして糸を紡ぎ、漆林では漆も採る。――器用者の侯健は、やき物の窯場も設けて、陶器を焼きはじめ、武器の工廠では、連環の馬鎧からカギ鎗、葉鉄の鎧、またあらゆる兵具を、日夜さかんに作っていた。

こんな或る日のことである。

「宋先生――。ひとつ、折入って、ご相談があるんですが」

と、花和尚の改まったことばに、宋江もまたふと、その眼をニッとほそめた。

「ほ。折入ってとは、何事ですか」

「おかげでこの花和尚も、近来になく、身のおちつきを覚えていますが……」と、魯智深は、こう語り出す。「ところが、てめえの身がおちつきを得てみると、思い出すのは、なつかしい、しかも恩のある旧友でして」

「ウむ、それはいいことだ。して、思い出すそのご友人というのは」

「九紋龍の史進ていう奴です」

「史進？　……。それならこの宋江もとうに名前は聞いている」

「以前、わが輩がまだ流浪中、その史進には、瓦罐寺で助けられたことがあり、それッきり会ッちゃおりません。ところが、聞けば近ごろは華州華陰県の少華山にいるッてえはなしなんで、ひとつそこへ出向いて行き、仲間に誘ッて来てえもんだと思うのですが、どうでしょう先生」

「それは願ってもないことだ。ぜひ行ってくれ給え」

「ありがたい。それではさっそく」

「しかし、一人では、万一ということもあるが」

「いや、武松もぜひ、一しょに行こうと言ってくれてるんで」

「それなら文句はない。吉左右を待っていますぞ」

しかし、宋江は要心ぶかい。これでも心中決して安心はしていず、密かに、神行太保の戴宗に耳打ちして、二人の出立後、華州へ放った。

## 十二　木乃伊取り木乃伊となり、勅使の大臣は質に取られる事

こちらは、旅僧魯智深と、行者すがたの武松との二人。日をかさねて、はや少華山の山麓へ来ていた。

山寨には、九紋龍史進をかしらに、神機軍師の朱武、跳澗虎の陳達、白花蛇の楊春、こう三人の頭目がいる。――ところが、それに会って訊いてみると、

「どうも、せっかくな時に、おいでなすったな。……じつあ、史の若旦那（彼ハ以前、コノ近県切ッテノ大荘院ノ嫡男）は、あいにく、つい先頃からここにはおいでなさらねえんで」
と、その三頭目が三人ともに、何とも元気なく鬱ぎ込んでいる。
「なに。ここにはいないって。――ここにいなければ、一体どこにいるってんだ」
気色ばんで、花和尚がただしてみると、その仔細がまた容易でない。
ここ華州華陰県のすぐ西の方には、天下に有名な霊廟がある。
西岳の華山といって、いわば天子のご祈願所の一つ。――そこへ或る日――いやつい先ごろ。史進はお詣りに行って、その帰りに、道ばたで泣きぬれていた一人の男を見かけ、あわれに思って山へ連れ帰った。
きいてみると、男は北京大名府の者で、職は画工であるという。画工一代の悲願と、腕みがきのため、御山の金天聖廟の壁画を描くべく娘の玉嬌枝を連れて、数日間、願がけの参籠をしていたものだった。
ところが、この玉嬌枝をチラと見染めて、理不尽にも、妾に出せといって来た者がある。しかもそれが官憲だった。
父娘が泣いてあやまると、ついに一夜、暴力のあらしが娘の悲鳴をつつんで手の届かぬ所へ遠く攫ッて行ってしまった。何者かといえば、華州第一の覇権者〝賀〟という奉行がその当人だった。――たまたま、華山の霊地に詣でた賀が、ふと、玉嬌枝を見そめて「……なんでも、ぜひ、わがものに」と、その淫欲と暴とを逞しゅうしたものだった。
史進はこれを聞いて、義憤やるかたなく、
「よし、おれが懸合って、娘をとりかえして来てやる……」
と、ただ一人、県城の奉行所へ出向いて行った。――が、それきり彼も、山へ帰って来ない。今日でもう十日にもなるが何の音沙汰もないのを見れば……その一命も気づかわれる……という三頭目が逐一な話なのだった。
「ふウ……む！」
ひとたび、花和尚がこう呻ると、たちまちその満面も、背の文身の緋桜のようになる。
「おい、聞いたか武松」
「聞いた。ひどい奉行もあるもんだな」
「わが輩がもっとも憎むべき奴としている代物だ。よしッ。行って来るからな。貴公は山泊との連絡もあること。ここにいてくれ」
「えっ、どこへ行く気だ、和尚」
「知れたこと。華陰県の奉行所へよ」
「よせ。そいつア無謀だ。九紋龍の轍もあること。二の舞を踏んではつまるまい」
「じゃあ何か。史進の災難を、この花和尚に、知らん顔でいろっていうのか」
「おい、おい。喧嘩腰はよそうぜ。この武松だってそんな気じゃあない。ともに心配はしてるのだ。だが、ここは大事をとり、いちど梁山泊へ引っ返して、一同のお智恵と協力を仰いだほうがよかろうと俺は考えるのだが……」
「喝ッ……」と、花和尚はもう突ッ立ちあがっている。そし

て――「ええ悠長な。そんなこんなのうちに、もし史進の一命にまちがいでもあった日には、義として、情として、この花和尚、のほほんと生きてもおれんわ。ぜがひでも、わが輩はこれからすぐ行く！」

朱武や陳達はおどろいて、あわてて子分をよびたてた。そしてたちまちただ一人で、山を降ッて行った花和尚のあとをつけさせた。

だが、そんなものは、眼のすみにも顧みている花和尚ではない。

すでに翌々日の午後である。この異形なる大坊主は、れいの錫杖を片手に、のッしのッしと、華州城内の雑閙をあるいていて、

「こら、ちょっと訊くが、奉行所はどこだ、ここの奉行所は」

と、道行く者をつかまえては訊ねていた。

すでにその権まくからして只ならないものがある。往来の者は、呆ッ気にとられて、

「なんだろう、あの風来坊は？」

と、目をそばだてた。しかもちょうどこの日、当の奉行の賀は、街をお練りで帰って来る途中にあったが、たれも花和尚にそれが奉行だとは教えてやる者もない。

奉行は綺羅な輿轎に乗ッていたのである。輿ワキには護衛の力士が鎗を持ってつきしたがい、騎馬の与力がそのあとさきを守って往来の邪魔者をいちいち叱咤しながら行く――

これがやがて州橋の上までかかると、輿の垂れ絹の内から奉行の賀が、

「ちょっと、待て」

と、急に列を止めさせていた。そして与力の一人をそば近く呼んで。「……途々、異形な坊主が列のあとから尾けて来るようだが知っているか」

「はっ。不審な奴と見、油断はいたしておりません」

「いや、それよりもだ、いッそこうせい。……よいか、抜かるなよ」

どんな策をさずけられたのか、その与力は、馬を力士の一人に預け、あとへ戻って、花和尚の前に立ち、いやにていねいに、こう言ったものである。

「おん僧は、そも、どちらからお出でになられましたか」

「わが輩か。わが輩は見たとおりの旅僧さ。いってみれば、天涯無住だ」

「おそらくは、由緒あるお山のご高徳でいらせられましょう。ぜひ、一夕のお斎なと差上げて、ご法話でも伺いたいと申されますが」

「誰がよ」

「お奉行さまが」

「ははアん。じゃアいま先へ行った輿轎は、やはりここの奉行だったのかい。……どうもそんな臭いがと、思って尾けて来たんだが」

「何かお奉行へ御用でも」

「さればさ。ちょっくら会って、話したいことがあってね」

「それはまことに好都合です。お奉行はいたって仏心の深いたちで、有縁無縁によらず、旅の法師とみれば官邸に請じて、何がな布施のお徳を積まれるのが、まアお道楽といったようなお方。それでは、どうぞてまえとご一しょに」

と、案内に立つ。
こんなうまい機ッかけがあるはずのものではない。けれど魯智深は、渡りに舟とよろこんでしまった。――そして宏壮な一門に入って行く。すると当然、腰の戒刀と錫杖も「……お預かりを」という奥向きの侍に、つい預けるほかなくなってしまい、丸腰となって、さらに中廊下を深く一殿の内へ通された。
「やあ、連れて来たか」
すぐ帳を排してあらわれた奉行の賀は、魯智深には、ただのひと口も物をいわせぬうちに、
「者ども。こいつは梁山泊の廻し者だ。からめ捕れッ！」
と一方の手を颯ッと高く振りあげた。
とたんに、ひそんでいた力士、捕手、何十人もが、どッと出て来て、一瞬のまに、魯智深の体を高手小手にからめてしまった。一吼え、二タ吼え、猛虎の唸きさながらなもがきはその下で聞えたが、山のような人数の岩磐、さしもな花和尚もこうなっては、早やどうしようもない。無念無念と、ただ毒づくばかりだった。
「ははははは。よくよく智恵のない奴だの」
賀は笑った。――彼はこれへ帰るやいな、かねて他県の官庁から廻附されている多くの手配の牒を調べさせ、そのうちから「あっ、これだ」と魯智深の人相書を見つけ出していたのである。
かつては渭州の憲兵あがりで、関西五路の肉屋殺し。そしてまた都の大相国寺でも、大暴れをやったあげく、近くは二龍山にこもって、梁山泊の賊とともに、青州一城を全焼にしたという飛報もきている。なんで、奉行の賀が気どらずにいようやである。しかも、賀の底意には、さきにわが手で、九紋龍史進を獄にくだしていた要心もあった折のことだ。かさねがさね、こんな所へわれから踏みこんだ魯智深の不覚は不覚というよりは、浅慮だったというしかない。
またぞろ、梁山泊の内では、
「すわ。ほってはおかれん」
と、俄な大動員をここに見ていた。不幸にして宋江の予感が中ったわけである。――すなわち、神行太保の戴宗が、武松に会って、
云々、かくかく。
と、史進、花和尚、ふたりまでの災厄を聞き、ただちに、これへ注進して来たことからの、騒ぎであった。
例のごとく、宋江を総大将に、軍師呉用が参謀につき、花栄、秦明、徐寧、林冲、楊志、呼延灼、そのほか二十人の頭目、一千の騎兵、三千の歩兵、数百車の輜重、べつに一群の船団、あわせて五千余のものが、
「それッ急げ」
とばかり、疾風雲のごとく、河川を溯り、野を踏破して、昼夜わかたず、華州へ急行したのだった。
ひとあし先に、飛ぶこと鳥の如き戴宗は、すでに少華山へこのことを知らせている。――さっそく、武松は陳達、楊春などをつれて、泊軍を山の麓に出迎えた。
着くとすぐ、宋江はまずまっ先に、こう訊ねた。
「花和尚と史進の生命は、なおまだ、無事でいるだろうか？」

「まだ、おそらくは――」と、陳達が答えた。
「獄中のままいのちだけは、延ばされているんじゃないかと思われます」
「どうして、それが保証できる」
「五日ほど前、都へ向って、奉行の急使が立って行きました。ですから二人の身の処分は、朝廷のさしずを待って、おこなわれるものに相違ございませぬ」
「――軍師」
と、宋江はまた、呉用にむかって。
「何か、よいお手策がありましょうか。ともあれ、二人のいのちは、命旦夕と思わねばなりませんが」
「ま――お急ぎあるな。いちど城下へ出て、とにかく、城中の雲気を篤と窺ってからのことですよ」
呉用は、一小隊をべつに編制して、宋江と共に、その夜から翌夕にかけ、華州の城下へといそぎだした。そして城下の小高い所に立ち、折ふし時も二月の月夜、月下の城と、城のうしろ、山波の彼方まで、昼かのような、西岳華山のながめにしばし佇んだ。
空には片雲の影もない。地に光るのは水であろう。それは濠をなして、華陰城の城壁の下を稲妻形にめぐッている。
その不落をほこる城楼も巍峨たる姿だが、さすが霊山の華岳はもっと神々しい。仙掌ノ峰、雲台ノ観。斧をならべたような石峰。李龍眠の墨の画筆で〝月夜山水図〟を宇宙へ一ト刷きしたような景である。
「さても。むずかしい地勢」
「きびしい城壁？」
これでは、いかなる策もほどこしようがない感に打たれたらしい。宋江、呉用はやがて少華山へもどって来た。しかし武松へも、まだ何らの方針がついたという相談が出ない。
すると、二日目。――かねて少華山から放ッておいた子分の一人が、県境の遠くから飛んで帰って来て、はしなく、耳よりな聞き込みをこれへもたらして来た。
「いや、えらいこってすぜ。なんでもこんど開封東京の都から、天子さまのお使いで、内殿司の大臣とかいう大官が、霊山へ献納する黄金の吊燈籠を捧げてやって来るんだそうで。へい。……え。嘘だろうッて。間違いッこあるもんですか。……なにしろ、勅願のご代参だッてんで、途々の露払いもえらい騒ぎで、見事な勅使仕立て船で、黄河から支流の渭河へ入り、ずッと華州へ下って来るそうで」
これを聞くと、呉用はハタと膝を打った。
「宋先生。もう心配はありませんな！」
「え、どうしてです？」
「聞くうちに、ふと妙計が胸にうかんできたのです。天来の声とはこれでしょう。さっそく、精密なしめし合せと、その手くばりとを」
すでに、翌朝となると、いちはやく、山を降りて行った三人がある。
白花蛇の楊春を道案内とした、李俊と張順の二人だった。この二人は、一ト足先に渭河の埠頭へ行って、大小幾隻かの船を手にいれ、なにやらそこで待機していた。
つづいて翌日には、花栄、秦明、徐寧、呼延灼の四人とその部隊が来て、これは渭河の両岸に、埋伏の計をとって、影

をひそめる。
また、三度めには、宋江、呉用、朱同、李応などが見え、先に来て待っていた張順たちの船に乗り込む。この船は、埠頭へ寄せて、ただの荷船か何ぞのように見せかけていた。
かくて、ふた夜ほどは、何事もない――
三日目の朝まだきである。
まだ川靄もほの白いうちに、しきりと、鴻雁が遠くで群れ立ち、やがて鑼声鼓笛の音と共に、櫓手の船歌が聞えだしていた。近づくのをみれば、花やかな三隻の官船である。特に、勅使船の舳には、
欽奉聖旨
西岳降香
大臣　宿元景
と書いた金繍縁の黄旗がゆるい川風になびいていた。
「あっ？」
と宋江は目をそばだてた。
むかし、九天玄女の夢告をうけたとき宿ニ遇ウテ喜ブ――という一語をたしか聞いている。これかもしれない？　彼と呉用とはそれッと船を少し進めさせて、
「やあ！　お待ちください……」
と、やにわに勅使船のみよしをさえぎった。
「や、や、や？」
と官船の上では、騒ぎ立った銀帯金剣、それに紫の短い陣羽織を着た宮廷武官の面々が、二十余名、一せいに、勅使旗の下へ走り出て来て、ののしった。
「こらッ、なんじらには、この御旗が目に入らんのか」
「おそれ多くも、内殿司の大臣宿元景さまがお座船の水路をば」
「さまたげなすと、ただはおかんぞ」
「推参な下種どもめが、目ざわりだわ。とッとと船を遠くへ避けい！」
いわせるだけいわせておいて、呉用は苦笑をうかべたが、さりとて、慇懃な態度ではあった。
「あいや、お騒ぎ立ちは、なんのご利益にもなりますまい。――これは梁山泊の義士宋江です。義士宋江が折入って、御見を得に参った次第ですから」
「げッ？　……」と、一せいに白み渡って「梁山泊の輩だと！　して、きさまがその宋江」
「いえ、宋江はこちらの御仁です。てまえは、おなじく梁山泊の一員、呉学究なので」
「しゃッ。白昼は歩けぬやつらが、首を揃えて何しにここへ」
宋江が、次をうけて、言った――
「お願いのためにです。宿大臣閣下に、暫時、ご上陸いただきましょうか」
「ばかなッ。わが大臣閣下が、なんじらごとき草賊に親しくお会いになるものか」
「はて。ならんと仰せなれば、ぜひもない。――しかし、いかなる難が降ッてわいても、おさしつかえはないのだな」
「な、なにを」
「ま。おちついて最後をお決めなされたがよい。しばし、大臣ご自身の返答をお待ち申すとしよう」
ふたりの後ろには、李応、朱同、そのほかが、鎗を持って、

睨んでいる。
陸ではこのとき、花栄、呼延灼などの弓組が、官船三隻を、鏃のさきに見すましていた。対岸にいた埋伏の兵もいちどに姿をあらわしていた。だから効き目は充分こたえたものにちがいない。
「やあ、これは、これは……」
ついに、船屋形の帳を払って、自身みよしに出て来た宿大臣は、今はその沽券もすて、
「義士――」
と相手を呼んだものである。
「そも、何の御用じゃの。儂は朝廷の重臣、かつは聖旨を帯した参詣の途中での」
「わかっています。なればこそ、ていねいに、こうお迎えにまいっておる」
「はて、お迎えとは怪しからんはなしじゃが、いったい何処へ」
「近くの、山寨まで」
「えっ、山寨へだと。ば、ば、ばかげたことを」
「おいやか」
「か、かりそめにも身は……」
すでに歯の根もカチカチ言葉もなさない声音である。そこへ持ってきて、このとき、官船の横ッ腹へどんとぶつかって来た小舟がある。李俊、張順、楊春たちである。船上に躍り込むやいな、二人の警固を川へ取ッて投げた。為に、飛沫は船上をぱッと濡らした。
「あっ、ひかえろ。李俊も張順も、大臣閣下をおびやかすではない」
宋江が、せつなに、こっちの舳で叱ると、その二人はまた、身を逆さまに、どぶんッ……と沈んで行ったものである。なにしろ〝揚子江ノ三覇〟といわれた河童たちのこと。自分で投げ込んだ水中の人間を手玉にとり、水をゆくこと平地のように、やがてひらりともとの船へ上がって来た――。これを見ていた宿大臣はいうまでもなく、官人すべて、ぞうッと、肌をそそけだてた。
衣冠が燿く世界でなければ、衣冠や栄位も、一個の木ノ実、一枝の草花にも値しない。
宿大臣閣下は、供奉の随員、宮廷武官、小者など、あわせて六、七十名と共に、ごッそり、少華山の人質となってしまい、意気も銷沈、粥も水も、喉に通らぬほどな悄ゲかただった。
「大臣、――ここへ来ては、もうご観念のほかありますまい。おいのちは保証する。まあ数日は、ゆるりと、ご静養のおつもりになって」
「宋江とやら。なぶるのも程にしてくれ。たとえ命があったところで、どう朝廷へ、こんな始末を提げてもどれようか」
「いや、すべてこの宋江の罪にして、ご帰還なされたらよいでしょう」
「すでに、立帰る船もない」
「渭河のお船には、李俊、張順の二名に、手下三百名をつけて、お帰りの日まで、守らせておいてありますから」
「なんのそれよりは天子から霊山へご献納の吊燈籠だ。その

ほか、貴重な香木やら数々なお供え物など。ああ、どうしようもない」
「それとて、お案じにはおよびません。きっと、華岳の霊廟へ、つつがなくお納めします」
「いッそ、それならわしを放してくれい。儂が霊山へまいらぬことには、どうにもならん」
「いや元々、あなたは天子のご代参。ですからまた、あなたのご代参はわれわれがする。――そのため、大臣のご衣裳、お乗物、供奉員の式服。すべてをそっくり拝借申す」
「いったい、また、なんでそんな道化た芝居を演じねばならんのか」
「いずれ後ではお分りになりまする。たしかにこれは一場の劇。都へのよい土産ばなしになるでしょう」
山寨の一窟で、宋江が彼を揶揄したり慰めたりしているうちに、一方では呉用のさしずで、一切の準備は進められていたのである。
馬子にも衣裳とはよくいうこと。ヒゲを剃るやら、金剣銀帯を佩いてみるやら、宮廷武官の紫袗と称する短か羽織を引っかけるなど、さながら楽屋裏の忙しさと異ならない。
また仲間うちでも、のッぺり顔の漢をえらんで、これには、宿元景の衣服佩刀をそっくり体に着けさせる。そして、
「わあ、似合う、似合う……」
と、まるで子供みたいな拍手かッさい。
すでに儀仗の旗手もできあがり、献納燈籠を入れた螺鈿の塗り箱をかつぐ仕丁の役割もすべてきまる。かくて、これらが一せいにふたたび渭河への埠頭へさして返り、例の、勅使旗の船にひそまり返ったものだった。――するうちに、一方また、武松をかしらとした一軍が、道をたがえて、西岳の下、霊山山麓の総門へ、風のごとく、潜行して行った。
この日。――華岳の中院、雲台観（道教寺）の前に、忽然と、雲から降りて来たような男が立って、こう大声告げて去った。
「観主、観主。院司もおらんか。勅使は早や渭河の河口へお着きになるぞ。なぜ出迎えん。一山の用意は滞りなかろうな」――と。
寺内では、あっと、一同驚き騒いだ。数人の僧がすぐ外へとび出してみたが、もうどこにもその人間は見あたらない。見えないはず、これは神行太保が使いに化けて、一令を触れ、またたちまち、宙を翔け去ッてしまったものであったらしい。
しかし、天子ご名代の入山予告はとうに観へ入ってる。儀式万端奉迎のしたくにおいても手落ちはない。――ただ驚いたのは寝耳に水の、到着だった。あわてふためいて、観主以下、一山の僧、河口の埠頭へ馳せさんじてみる。
――なるほど、香花、燈燭、幢幡、宝蓋などをささげた行列――それはすでに船をはなれて上陸していた。
すると、列の先頭で、すぐ声があった。
「やあ、ひかえろ、ひかえろ……長い水路やら旅のおつかれで、宿大臣閣下には、あいにく、お病気におわせられる。観主、ごあいさつは、あとにいたせ」
いったのは、呉用である。
この呉用も宋江も、もちろん、大臣の近侍に姿を変えており、あたりの武官、警固の兵、献納燈籠をかついでいる仕丁、

小者の端まで、すべてお互い常に見ている顔ばかりだったのはいうまでもない。

クスリッ……時折り吹き出しかける奴には仲間の眼がぎょろと光った。もっとも巧妙な役者は、轎の内で、白絹のふとんに倚りかかっていた偽大臣の男である。これはらくな役でもあったがなかなか巧い。すこぶる真面目くさッていた。うつらうつらと揺られて行く。――はや森々たる華岳の参道を踏み登っていたのである。奏楽が起る。嘹々と笛の音、金鈴のひびき。そして身は仙境を思わせる香のけむりと一山の僧衆が粛と、整列するなかをすすんでいた。すでにご病中との触れなので、偽大臣はお轎のまま中庭の客院までずッとそのまま通ってしまう。――勅使旗やら内府の官服、献納物の儀仗、だれひとりこれを疑って見るものはない。

「観主」と、呉用は、客殿に大きくかまえて。

「怠りも、はなはだしいではないか。なんでお出迎えにおくれたか」

「申しわけございませぬ。まったく、万端のととのえはして、お待ち申しておりましたれど」

「叱りおくぞ。近ごろ、緩怠きわまる！」

「はっ……」

「それに奉行もまだ見えんようではないか」

「おそらくは、まだご存知なく、当寺より走らせた使いによって、仰天しておらるるものと思われまする」

「使いはやってあるのだな」

「追ッつけお見えになるでございましょう。いや取る物もとりあえず」

「ま。なんじらは、倖せと思うがいい。折ふしご勅使の宿大臣閣下には、ご不快のうえ、いたく今日はお疲れのもようで、あれあのように、まだご休憩の間でも、お轎の内を出で給わず……、為に、何らのおとがめも出ぬが、これがもし、お元気であらせられたら、ご立腹はいかばかりであったと思う」

「げに、なんとも、恐れ入り奉りまする。よそながら、ごあいさつをかねて、おわびなと……」

「ああこれこれ、近寄るまい。うるさく思し召すかもしれん。次の間より、遥拝いたせ。そこでよい、そこからで」

ところへ、あわただしげに、一群の役人が、華陰府の城中からはせさんじて来た。――奉行の賀は、まだあとから少し遅れてまいりますと、三拝九拝、階の下で、詫び入るばかり。

これにたいしても、にせものの病大臣は、轎のままで、ただ轎の垂巾の内から、弱々しげに、手をふって、こたえて見せたのみである。役人一同は「……へへッ」と、それにすら階下で額をすりつけたままでいる。

けれど、奉行の賀が来ると、これに対してはそうもゆかない。宋江が接待役に出て、正殿の廊から内へ案内して通す。そして、まずそれからである。恩賜の献納燈籠の内覧をゆるす――と、宋江と呉用とが、あたまから大きく言って、

「中書の者。御文書を持て」

と、次の間へ大きく呼ぶ。

はーっと、遠くで答えがある。絢爛な公文の箱をささげて、静々と裳を引いて出てきたのは、中書省の一官に化けていた、花栄であった。

宋江が、次を呼んだ。
「御物の燈籠をささげて、殿司寮の者、お鍵番の者、粗相なきよう、これへ出ませい！」
おーと、これもはるか遠くの返辞。やがてのこと。螺鈿櫃を抱えた宮廷人と見える者と、紅錦の袋に入れた鍵を持った鍵番とが、一歩一歩、つつしみぶかく、そこへ来て、奉行の賀の前で、その蓋をはらった。
さんぜん、眼もくらむばかりな八角燈籠があらわれた。地金すべて、黄金なのはいうまでもない。迦陵頻迦のすかし彫である。蓮の花は白金だし翠葉は青金だった。万花の彩りには、琥珀、さんご、真珠をちりばめ、瓔珞には七ツの小さい金鈴と、数珠宝珠をさげるなど、妙巧の精緻、ただ見恍れるのほか、ことばもない。
「げに、ありがたき聖徳にござりまする。かく近々と、拝させていただき、奉行の身にとりましても」
「冥加と思われるか」
「ただただ、かたじけなく」
「しかるに」と、宋江がことばをかえた。「なにゆえ、勅使のお迎えを怠ったか」
「ふしぎや、何の伝令も、城内へございませんでしたので。……どうも腑におちかねまする」
「ふしぎとは何事。ただいま、中書省の公文、恩賜の燈籠、あわせ見て、一点の疑義でもあるか」
「おそれながら、ただひとつ」
「それは」
「次室に見えまする、あの轎の内。失礼ながら、てまえには役儀上のことながら、ちょっと、そのお轎の内のお人へ直接、ものを申したい」
さっきから、じろと、そっちを眼の隅から睨んでいた奉行の賀は、さすが一トかどの者だった。いうやいな、席を蹴って、ばっとそっちへ歩きかけた。
けれど、これは彼みずから敵に絶好な、断刀一閃のいい弾みを与えたものでしかない。
鍵番の吏、すなわち徐寧は、かくし持っていた一刀の抜く手も見せず、賀の首を、斬りおとした。――それっと、これが全活動の合図となって、雲台観中、たちどころに修羅と変り、衣冠式服をかなぐり捨てた梁山泊の男たちの、跳梁の場となった。
この夕、華陰県の城中からも、火の手があがった。――総門にひそんでいた武松の一手が、賀を送って来た供の人数を囮にして、城中へまぎれ入り、一方、城下に待機していた解珍、解宝、楊雄、林冲、石秀のともがらと一致して、全城を乗っ取ってしまったもの。――また、もちろん、獄中にあった史進と花和尚の身は、炎の下から救出された。
けれど、ここにあわれをとどめたのは、絵師の娘玉嬌枝である。彼女はどうしても見あたらなかった。あくる日、城中の小者を捕えてただしてみれば、あわれこのときすでに、玉嬌枝は、父との別れをかなしみ、賀の夜ごとな執拗さにもたえきれず、井戸に身を投げてしまっていたものであったという。

## 十三　喪旗はとりでの春を革め、僧は河北の一傑を語ること

華州地方の数日間は、まったくの無政府状態、そのものだった。

なにしろ稀代な大騒動ではある。――県城から市街の半分は一夜のまに灰と化し、奉行は霊山の廟で殺され、勅使宿元景は監禁されていた少華山からコソコソ都へ逃げ帰るなど。――どう見ても、これでは政府や法律がある世上とは思われない。

しかし、梁山泊の輩は、これをもって、

天ニ代ッテ、道ヲ行ウ

ものと称し、風のごとく水滸の寨へひきあげていた。そして例のように、凱旋の宴、分捕り品の披露、新加盟者の紹介などがおこなわれ、ここだけには、独自の〝仲間掟〟も制裁もあり、また彼らだけの〝おらが春〟も醸されていた。

まもなくまた、泊中の大兵は、徐州沛県の芒蕩山へ出撃して行った。そしてこれにも打勝ったすえ、やがて芒蕩山の三魁といわれる三名の賊将をとりこにして帰り、彼らの降を入れて、即日、新顔の列に加えていた。

それを、誰々かといえば。

樊瑞――あだ名を（混世魔王）
李衮――あだ名を（飛天大聖）
項充――あだ名を（八臂那吒）

という者たちで、いずれも投げ鎗や投げ刀の達人だった。中でも混世魔王の樊瑞は、丸型の楯をよく使い、また、道教の術を究めた方術師でもあった。

「なアおい、春だよ。もう当分は、修羅場もあるめえぜ」

「まったく、殺し合いにも、少し飽きたな」

「ごらんよ、水寨の辺を。柳はみどりの新芽を吹き、杏花や桃も笑いかけてる」

「むむ、女衆や年寄りの畑打ちも始まったね」

殺伐な男どもにも、春は人並な多情多感をそそるらしい。あちこちの若草にころがって、ここ、ちょっと途ぎれていた血臭い修羅場を忘れかけていた。

ところが。

例の対岸の見張り茶屋にいる見張り役の朱貴が、ある日一人のひょろ長い痩せッぽちの男を泊内へつれて来た。涿州生れの金毛犬とアダ名のある段景住という者で、

「どうか、お仲間の端に加えておくんなさい。てまえ、なんの能もありませんが、そのかわり天下に二頭とない名馬をお土産に持ってまいりました」

と、いう。

しかし彼は、その名馬とやらを、ここへ持って来たわけではない。途中で横奪りされてしまったというのである。なんのことはない、その泣き言を訴えにここへ馳け込んで来たようなものだった。

――訊けば、事情はこうなのだ。

涿州は金国（旧、満州国）の境に近い。そこに鎗竿嶺ノ牧がある。

牧には、大金国の王子のお召料で、

昭夜ノ玉の獅子馬
と名のある雪白の優駿が放牧されていた。金毛犬の段は、これが欲しくてたまらない。それを盗んで土産に持ってゆけば、かならず梁山泊への仲間入りができるにちがいないと、かねがね出奔の望みを持っていたからだ。

そしてついに彼はそれに成功した。――盗んだ名馬の脚にものをいわせ、やがて凌州の西南、曾頭市までやって来た。

するとここに市の長者で〝曾家の五虎〟と呼ばれる五人兄弟がある。段はその輩に因縁をつけられて、せっかくな馬を途中で奪られてしまった。無念、なんとも業腹でたまらない。――どうか奴らを懲らして、稀代な名馬白獅子をお取り返しなすッて下さい。「――お願いの筋はそれなんで」と、金毛犬の段は、百拝した。

始終を聞き終った総統の晁蓋は「こいつ、どこか見どころがある」と宋江や呉用に諮って、ひとまず段の身柄は泊中にとめておいた。そして念のため、戴宗を曾頭市にやって、虚実をしらべさせてみると段のことばにいささかの嘘もなかった。

のみならず、その曾頭市では今、子供の間に、こんな童謡が流行っており、居酒屋でさえもよく囃しているのを聞くという。

曾家の鈴が鳴りだせば
影をひそめる魔魅や鬼
梁山泊など一トならし
都送りの鉄ぐるま
晁蓋とらえて抛りこみ
宋江ひねッて生捕りに
そウれ出て来い
智多星（呉用）来い
あとの小粒はふみつぶす

戴宗はなお、つけ加えて、一同へ告げた。

「――曾家の当主は、もと金国の人間ですが、これは老いぼれていて、問題ではありません。が、油断ならぬことには――総領の曾塗、二男の曾密、三男の曾索、四男の曾魁、五男の曾昇――これらがみな、なかなかの者でして、将来の栄達を誓い合い、いつかは梁山泊を攻めつぶし、その功をもって、朝廷のご嘉賞を得んものとしていることです。ですから武器、戦車、囚人車など、武庫のうちに山と蓄えておることからみても、たえず虎視眈々と、わが水滸の要害を窺っているものとしか思われませぬ」

一同は大いに驚いた。

そればかりではない。――戴宗の言によれば、ほかに史文恭という兵法家、蘇定という武術の師範まで召抱えて、曾頭市四千戸の街そのものが、いつでも曾家の濠を中心に、全市一つの要塞化となるような組織にもなっているとのことだった。

「あぶない、あぶない。いつのまにそんな大敵国が出来ていたのか」

「曾頭市はだいぶ遠地だが、しかし捨ててはおかれまい。いまのうちに、こっちから行って禍根を絶ッてしまわぬことには」

衆議、異口同音に、そうなったのは、もちろんである。

すると、首席から立上がった総統の晁蓋は、宋江の方を見て言った。
「宋先生、毎度毎度、出勢の日には、あなたにばかり戦野のご苦労をわずらわしてきた。しかしこんどこそは、この晁蓋が陣頭に立ってゆきます。どうか今回は留守をおねがい申す」
「なにを仰っしゃる」と、宋江も立って、言をさえぎった。
「――いちいちの戦に、総統自身が出ることはありません。あなたは水滸のおあるじだ。このたびもまた、この宋江と軍師呉用とに、お任せおきあらばよいでしょう」
「いやいや、心ならずも総統の首席にのぼって以来、ただの一ぺんも、自分は戦場に出たことはない。――何も決してあなた方と功を争うわけではないが、余りに何か心ぐるしい。どうかこんどはこのほうの意志を通させてもらいたい」
人々も止めたが、晁蓋は何といってもきかなかった。ぜひなく宋江もついに譲った。――晁蓋は大いによろこんで、みずから二十名の部将をえらび、五千の兵を動員して、その朝、水滸の宛子城を立ちかけた。
すると、突如、一陣の狂風が吹いて、旗の数も多いのに、わけて泊軍の象徴とする大将旗がその竿首のところからポキと折れてしまい。一同は、はっと顔色をかえた。
「あ、これはいかん、不吉な前兆だ」
軍師呉用も言い、宋江もまた、晁蓋へむかって、切に、今日の出陣を止めた。
「首途に旗が折れるなどは――どう考えても吉兆ではありません。――ひとつ、日を改めては如何なものか」
「はははは」と、晁蓋は気にかける風もない。「こんな例はまありがちなこと。いちいち御幣をかついでいたら、そのたび部下の士気を沮喪させるばかり。お案じあるな」
と、ばかり意気揚々、江を渡って、この日征途に立ってしまった。――がしかし、これはやはり悪い前兆であったとみえる。――晁蓋はこの一戦を買って出たばかりに、曾頭市の市街戦で矢にあたり、約一ヵ月ほど後、あえなき重傷者になって、故山へ送り還されて来た。
曾頭市の守備は思いのほか固く、五虎の兄弟と、二人の兵法者の下に、その兵もまたすこぶる強かった。――為に、晁蓋は苦戦をかさね、あげくに、自身も頸の根に一矢をうけて、無念な姿を、送還されて来たものだった。
「……これは重態だ。鏃に毒を塗った毒矢であったに相違ない」
水滸の寨は、このため、一同色をうしなった。さっそく宛子城の病房に入れ、金創の手当やら貴薬を煎じて飲ませるなど、日夜の看護に他念もない。しかし晁蓋の息づかいは、刻々悪化するばかりだったし、加うるに、林冲、徐寧、呼延灼らの部隊も、総大将を失った結果、支離滅裂となって、ぞくぞく、敗戦の戦場からここの泊中へ引きあげていた。
「……すまなかった。賢弟たちの忠告をきいていたら、こんなことはなかったろうに」
そうした一日のこと。
晁蓋は、身うごきもならぬ体のまま、にぶい眸で、枕頭にいた宋江と呉用の顔を見あげ、そして虫の息で……。
「あとを……あとをひとつ、よろしく頼む。……そして誰でも、この晁蓋を射た矢の主を、つかまえたら、その者を梁山

泊の次の盟主に立ててやって行ってくれ給え」
と、遺言した。
抜きとったその矢は大事にしまってある。後日のためにだ。矢柄には「史文恭」の三文字が彫ってあったのである。
「総統、しっかりして下さい。そんなお気の弱いことでは」
「いや、もうだめだ。人には天寿がある。わしの天寿はもう尽きたらしい」
言い終るとまもなく、彼は従容として死に就いた。宋江も呉用も、哀哭してとりすがったが、魂魄、ついに還らなかった。
ただちに喪を発し、泊中の者は頭巾に喪章をつけ、また宛子台の上には黒い喪旗が掲げられ――一山、哀号のうちに沈みきった。
日をえらんで、聚議庁の大堂には、霊幃の祭几が安置され、中央の位牌には、
梁山泊主、晁天王霊位
と書かれ、香花、燈燭のかざりはいうまでもなく、特に供えられた一すじの〝誓いの矢〟が人目をひいた。これなん晁蓋を殺した「史文恭」と彫りのある毒矢の矢柄なのである。
大葬の日には、近郷近郡の諸寺院から、たくさんな僧侶をよび、そのさかんなことは、一国の太守の弔いも及ばない程だった。それも一日や二日のことでなく、あとの供養も七日にわたっておこなわれた。
さて、そのあとであった。あらたまって呉用と林冲とが、宋江の前にきて、
「国に一日も君なきあたわず、家に一日とて主なきあたわずです……。どうか今日以後は、あなたがこの水滸ノ寨の上に立って盟主の座について下さい。大寨一同の声でもありますので」
「とんでもないことを」
と、宋江はかたく辞した。
「先生の遺言にも――史文恭をとらえた者を次の盟主に――と仰っしゃっておられ、しかも私には、この大寨を統御してゆけるほどな力も徳望もありません」
「いや、衆望は充分です。また、ご遺言の儀は、今が今、誰と定めるわけにもゆきますまい」
「ですが、私は器ではない」
「というて、首脳がさだまらねば、泊中の取締りがつきませぬ。とにかく、復讐の成るあかつきまで、仮に、一同のあるじの位置につくことを、曲げても、ご承諾ねがいまする」
すでにこのことは、梁党の下部から中堅にいたるまでの者が、当然のように、心で推していたことであり、ついに宋江も否みかねて、
「――では、暫定的に、仮の首席として」
ということで、承認した。
と、聞いた黒旋風の李逵などは、
「そいつはよかった！　宋先生なら、梁党の盟主どころか、大宋国の天子さまに納まッたって、ちっとも、おかしいことはねえ！」
と、放言して、はしゃぎ廻った。
だが、そんな人気的な浮評こそ、宋江がもっとも嫌ったところであり、任に就くと、彼は即日、大寨中のおもなる人物、

すべてを聚議庁に呼びあつめて、
「不肖、やむなく、一時の重任をおひきうけしたが、もとより私に神異の才があるわけではない。一心同体、人々の和と結束に待つばかり。――そこで、一そうの団結と、気を一新するため、めいめいの部署と職制をあらためる。――またこの聚議庁も、今日からは、――忠義堂と改称する。すなわち、天ニ代ッテ道ヲ行ウ――お互いの志をここに結ぶという意味で」
と、いい渡した。
そしてまた、
「この忠義堂の壁に、ただいま、新しい職制と部署の人名とを書いて貼り出すから、各〻はよくそれによって、責任を果たしてもらいたい」
とも、つけ加えた。

招くともなく、またしいて、寄るともなく、天命地宿、不思議な縁のもとに、いつかこの梁山泊には、やがてもう百人ちかい天罡星、地煞星の漢どもが、集まっていた。
ちょうど、その全部の名が、忠義堂の壁に貼り出されたこと、いまその全簿名を、ここに写しておくのもムダではあるまい。
主席、宋公明。――次席、軍師呉学究、第三、道士の公孫勝以下――すなわち次のような順位だった。
第四、花栄。第五、秦明、第六が呂方、第七、郭盛。
以上が、船つきの水寨を挟んだ、右がわの山の砦の一軍。
そして、左の関門には。
林冲をかしらに、劉唐、史進、楊雄、石秀、杜選、宋万。
正面の木戸の守りは。
呼延灼を一番に、二番朱同、三番戴宗、以下順に――穆弘、李逵、欧鵬、穆春など。
さらに。二ノ木戸には李応あり、徐寧あり、魯智深あり、武松あり、楊志、馬麟、施恩あり――という堅め。
宛子城直下には、なお、
柴進、孫立、黄信、韓滔、彭玘、鄧飛、薛永。
このほか、水軍のとりでや、船庫の備えもあって、その船手には。――李俊、阮小二、阮小五、阮小七。――それに張横、張順、童威、童猛といったような、大江の河童にひとしい面々が得意の持場にあたっている。
べつに〝山上大隊〟と称する遊軍だの烽火台の哨戒隊などもあって雷横、樊瑞、解珍、解宝があり、またその搦め手の守りは、項充と李衮のふたりだった。
なお、ずっと離れて。
金沙灘のとりでに燕順、鄭天寿、孔明、孔亮の四将がいる。
その後ろ山に置かれた小寨の守備は、王矮虎、一丈青、曹正。みぎの小山にも、朱武、陳達、楊春。――以上があらましの配置であった。
が、この軍に配する軍需や、庶務、主計などの人選も、おろそかではない。
まず、忠義堂の内の、文書課では、蕭讓が主任にあげられ、そのしたに賞罰係の裴宣、印鑑信書の部に金大堅。――また勘定方に蒋敬がおかれている。

大砲の鋳造から指揮訓練の主任。
これは、凌振以外に当る者はない。
造船廠ノ長は、孟康。
衣服、旗、兵甲などの縫工は、すべて侯健の係。造壁、築造の任は、陶宗旺。
雑事、家具、李雲。
鍛冶一切のかかり湯隆。
酒や酢のかかりに朱富。それと縁のある宴会の主事は宋清。
什器、つまり納戸役は白勝と杜興のふたりだ。いやそのほかにまだ対岸には四ヵ所の見張り茶店がある。――古顔の朱貴を筆頭に、顧のおばさん、孫新、李立、時遷、楽和、張青、孫の妻などが、それらのことはやっている。
なにしろ驚くべき組織の大世帯ではあった。このまま一小国をなしうるといってもよい。――が、それでもなお足らぬ物はある。油、漆、皮革、薬剤、砂鉄、糖蜜、またいくらあっても欲しい馬匹など。――それらの買入れには、楊林、石勇、段景住らが旅商人に化けて各地へ派出されることになった。
「新しき寨主を迎えて」
と、式が終りかけたところで、一同は起立し、
「われらは、欣舞にたえません。また仰せつけの部署に、各自、異存もありません。誓って責任をつくします」
と、宣誓の拝を執って、一せいに乾杯した。このあとで、宋江はただちに、
「一軍議をここに出す」
といって、先主晁蓋の弔い合戦の議を提出した。――自身、曾頭市へ行って、曾の五虎を打ち、また毒矢のぬし史文恭をもいけどって亡き人のうらみを報ぜん、というものであった。
「いや、お待ちなさい。それを議することすらまだ早い」
と、呉用はのっけから反対した。
そして、反対の理由としては、
「――曾家はいま、日の出の勢いにある。第二に、われから攻めるには遠隔すぎる。第三には、泊中の兵は、冬中からの連戦で疲れているうえ、先ごろも少なからぬ損傷をうけている。以上の裏を返せば、諺にもいう――上リ馬ニハ当ルベカラズ――で我れにとって歩のいい勝目は一つもない。よろしく、ここは他日を期し、まず内を充実しておくべきでしょう」
と、いった。
「お説は正しい。いまの提議は撤回します」
と、宋江は素直に容れた。
全員の色にも同調な容子がみえた。で彼は以後、故人の追善供養をただ旨としていた。すると早や七々忌の営みも近づいた或る日のことである。――泊中にはたくさんな法要僧が逗留していたが、そのうちの一人に大円という僧侶があった。
この大円和尚は、北京は大名府の、龍華寺のお坊さんである。たまたま行脚に出て済寧へ行く途中、梁山泊の近くにかかり、請われて、これへ来ていた者だが。――田舎沙門とはちがい、なかなか博識で、北京の都会話もゆたかだったから、宋江と呉用とは、茶炉に茶を煮ては、よくこの和尚と、風談を興じ合っていた。

そして、ふとした話のはずみから、
「ほう？　……」と、大円が目をまろくした。
「では、おふた方とも、今日まで、河北の玉麒麟をご存じなかったのですか」
「されば、ついぞまだ」
「これは驚いた、いやあきれましたな。ほんとうの姓名は盧俊儀――それまでをいわなくても、玉麒麟といえば、河北はおろか、四百余州知らぬ者はないはずだがの」
「そんな、どえらい人物なので」
「はあ、お家は代々北京の大商人、質屋と物産を表看板にしてござらっしゃるが、当主、盧の大旦那は、そんな銅臭の人とは全く違う。学深く、武芸に長け、わけて棒を使えば、おそらく天下無双じゃろ」
よく天下天下という坊さんである。呉用は苦笑していた。宋江は知らん顔して聞いていた。――全然知らなかったわけではなく、ふと忘れていたのである。しかし、それを思い出させてくれたのは、大円の茶話のおかげだったので、あとで二人だけになると、宋江からすぐ言った。
「軍師。今日ふと、玉麒麟と聞いたら、はっと、記憶をつかれて、思わず身ぶるいが出た。なんとかあの人物を、この梁山泊に迎えられまいか」
「造作はない。大円と話してるうちに、わしはもうそれを腹で考えていたほどだ」
「しかし北京の大名府でも随一の長者。尋常なことでは仲間入りなどしてきますまい」
「いや、人を見て法です。この呉用が三寸不爛の舌をもってすれば」
「説きつけてみせると仰っしゃるのか」
「いや、とてもとても、それだけで来るはずはない。べつに一策を立て、たれか向う見ずな者を一人供に連れて行く必要がある」
すると、物蔭にいたらしい黒旋風の李逵が、やにわに、二人の前へ出て来て言った。
「そのお供には、あっしが適役。軍師、李逵を連れて行ッておくんなさい！」
「いかん！」
宋江は、あたまから、彼をしりぞけた。
「とかく、君の悪い癖で、出場というと、すぐ自分を売り込みたがるが、短気、お喋舌、悪酒、暴力好き、一つも取り柄はありはしない。ましてこんどの行くさきは北京第一の城市。李逵には不向き極まる所だ。引っ込んでおれ。君の出る幕ではない」

## 十四　売卜先生の卦、まんまと玉麒麟を惑わし去ること

宋江に叱られて、李逵はシュンと頭を抱えてしまった。
――呉用は見て笑っていたが、
「李逵、そんなに行きたいのか」
「北京と聞いては、矢もたてもありませんや。あの有名な大名府の城市。ああ行ってみてえ……」
「それほどに申すなら連れて行ってやらぬものでもないが」

「えっ、お連れ下さるって。やっぱり呉軍師だ。話がわからア」
「だが、条件があるぞ。――第一に、道中では一切酒を断つこと、第二には、わしの童僕となって何事もハイハイと服従すること。第三……これはむずかしい。唖のまねして、決して口はきかぬことだ。どうだ、できるか」
李逵にとって、どれ一つ難題でないものはない。だが元来この男たるや、一日でも無事と退屈には居られない性質なので、一も二もなく、
「ようがす、三ヵ条はおろか何ヵ条でも、お約束はきっと守ります」とばかり誓約して、ついに呉用を承知させ、その供になって、翌る日、泊中一同の見送りをうけ、金沙灘を彼方へ渡って、北方の旅に立って行った。
幾山河、行くこと二十日余り、明日は北京の城門を仰ごうというその前夜だった。旅籠のおやじが、呉用の部屋へねじこんできた。
「お客人、どうしてくれる？　おまえさんの供の童僕めが、わしんとこの若い衆をぶン撲って血ヘドを吐かせた」
という騒ぎ。――驚いて、呉用がその場へ行ってみると、偽唖の李逵をからかった宿の男が、店の土間にへた這っている。
「この唖めが！」と、呉用はまず李逵を叱っておいて「重々、すみませんでした。きっと折檻してくれます。どうかこれで一つ、ご養生でもなすッて」と亭主と被害者には、なにがしかの銀子を与えて、早々に李逵を部屋へひきとって来た。
「こらっ、李逵」
「へい」
「そろそろ癖を出し初めたな。あしたはもう北京の城内、万一きさまがヘマをやると、わしの一命にも関わってくる。約束が守れぬなら、きさま一人でここから帰れ」
「いえ、守ります。きっと悪い癖は出しません。どうぞお連れなすッて」
ここの旅籠で、二人は入城の身支度をこしらえた。呉用は白地に黒い縁とりの道服に、道者頭巾をかぶり、普化まがいの銅鈴を片手に持ち、片手には藜の杖をついて出る――。またお供の李逵といえば、これは道者の稚子と化けて、バサラ髪を二つに分けた総角に結い、着物は短褐という袖無しの短い袴、それへ交ぜ編の細ヒモ締めて、足は元来の黒い素はだし、そして一本の旗看板を肩にかついだものである。
旗の文字にいわく。
運勢判断、八卦神如　見料一両
つまり遊歴の八卦見道者と化けすましたもので、宿を立ち出て、ほどなく、南大門にさしかかって見れば、さすが河北第一の大都・紫金の瓦、鼓楼の旗のぼり、万戸の人煙は、春の霞を思わせて、北方の夷狄に備える梁中書が下の常備軍も数十万と聞えるだけに、その物々しさなど、他州の城門の比ではない。
「こら、こらッ。道人、どこへ通る？」
「おう、ご番卒でございますか。てまえは、泰山の儒者ですが、諸国遊歴がてら、占を売って旅費とし、また諸山の学問を究めんとしている者でございまする」
「それはたいした秀才だな。して供の黒ンぼは」
「これは、李童と申す、唖の童僕で」

「唖か。道理で目ばかり光らせておる。旅券は持っておるか。うム、よろしい。……通れ」
呉用はほっとしながらも、わざと悠々、関内へ入って行く。たちまち、目も綾に織られるばかりな大名府の殷賑な繁華街が果てなく展かれ、ともすれば、李逵は迷子になりそうだった。「オイオイ李童。こっちだ、こっちだ」
「ほい！　そッちか」
「口をきくな、唖のくせに」
「う。う……。ああくるしい」
「わしのそばを離れるなよ。ただ黙ってついて来いよ」
呉用はやがて、片手の鐸鈴を振り鳴らしつつ、売卜先生がよくやる触れ口上を歌いながら、街をりんりんと流して行った。

甘羅　早や咲き
子牙は　おそ咲き
彭祖　ながいき
顔回　わかじに
みんな人物　ひとかどの者
みんな一生　同じでない
かねもち　びんぼう　運のつる
明日が知りたくおざらぬか
金一両は　お安いもの
さあさ　神易にお問いなされ

ここに紫金大街で一番の大店舗、質、物産屋の招児も古い盧家の内では、折しも盧の大旦那――綽名玉麒麟が――番頭丁稚をさしずしてしきりに質流れの倉出し物と倉帳との帳合をやっていたが、そのうちにふと、
「うるさいな」
と、大旦那の盧俊儀が、舌打ちして、番頭のひとりへ言った。
「なんだい、外のあの騒ぎは？」
「子供ですよ。いやもう、さっきからたいへんなんで」
「ふうむ？　子供が何をやってるんだね」
「いいえ、風変りな占い者が、鈴を振り振り歌って来るのを真似て、ゾロゾロ尾いて歩いているんです。へい。……それ、聞えるじゃございませんか」
「なるほど。甘羅、子牙、顔回など、史上の人物を並べて、生意気なことをいってるらしいな。ひとつ呼び入れて、からかってやろうか」
「およしなさい旦那。見料は金一両だなんて、とんでもない法螺を吹いてますぜ」
「まあいい。ものは試し。連れて来い、連れて来い」

まもなく、あたふたと、戻って来た番頭が。
「大旦那。八卦見をよんで参りました」
すぐうしろから、つづいて入って来た呉用も李逵を後えに、一礼して。
「お招きは、こちら様でございますかな」
「おうわたくしです。ひとつ、わたしの運勢を占ってもらおうと思いましてね」
盧俊儀は言った。――じろッと、呉用のひとみ、盧の眼光。何か、どっちもどっち。言外に、人を観ている。

が、盧はさりげなく、
「ここはみせさき。先生、どうぞこちらへ」
と、一方の簾を排して、客間の鵝項椅（鵝鳥の首の付いた椅子）へ呉用を請じ、そして、いんぎんに訊ね出した。
「ご旅装と拝しますが、先生、ご郷里はどちらですか」
「山東です。姓は張、名は用。談天口とも号していますが売卜は本業ではありません。郷里では儒の寺小屋をひらいており、たまたま、遊歴の旅費かせぎに、好きな筮卜をとって、特にお望みの方だけに見て上げておるような次第でして」
「そうですか。さすがどこか、街の売卜者などとは、どこかご風采も異なるものがあると思いました。ところで、私の運勢をみていただけましょうか」
「まず、お生れ年と、月日を」
「本年三十二歳、甲子ノ年、乙丑ノ月、丙寅ノ日、丁卯ノ時刻に生れました。……が先生、金が入るとか、損するとか、そんな日常茶飯事は、貴筮に伺う必要はありません。ただ男子の三十、生涯の方途如何という、そこのところの運勢を篤とみてくだされい」
「こころえた」
呉用は、香炉台を借り、香を薫じ、おもむろに算木を几にならべ始めた。そして筮竹をひたいにあてて、祈念三礼、息をつめて、無想境に入ったと思うと、その相貌はまったく人間の肉臭を払って、みるみる聖者のごとき澄みきったものに変った。盧俊儀も、はっとその真剣さに打たれてか、共に息をこらして、伏羲神農の呪を念じずにはいられなかった。
するうちに、ばしッと筮竹を割り、算木の表裏を反して、卦を現わすやいな、
「あっ。これは？」
と、呉用があらい息の下に呟いた。
盧俊儀は、横からさし覗いて。
「先生、何と出ましたか」
「はてな。……いぶかしい」
「吉ですか、凶ですか」
「ご主人」
「はっ」
「失礼ながら、てまえはあなたを、ひとかどの人物と観た。しかるに、なんとも神易の告げはよろしくない。もし、お気を悪くなさらぬなら、あるがまま、卦面の告げるところを、歯に衣きせず、おはなししようが」
「おっしゃっていただきたい。なんで気を悪くなどするものですか」
「ならば申すが……卦には〝血光の災〟という大凶が出ている。百日を出ぬまに、当家の財は崩れ、あなたは剣難に遭って一命を終るでしょう」
聞くと、盧は笑い出した。
「なるほど、当るも八卦、当らぬも八卦ですな。家は北京で重代の老舗。私は人に恨みをうけている覚えもない。……今日はとんだ春日の閑戯にお目にかかった。謝金一両、これにおきます。どうか、ゆるゆる、おひきとりを」
「いらん」
呉用は、金を押し戻した。もう身は椅子を起ち上がっている。そして、いかにも憐れむように、こう呟いたものである。

「ああ！　およそ世間から大人物だなどといわれているほどな者も、会ってみれば知れたものだ。――みんな自分に甘いお上手を聞きたいだけのものらしい！　いやまことに、小人の閑戯をお見せしてお恥かしい。では、おいとま申す。ごめん！」
「あっ、先生」
「何をおとめなさる」
「そう、ご立腹では心ぐるしい。ま、茶でも煎れましょう。もうすこし話して聞かせてください」
「だめです。ひとたび妄に晦んだお人には。――いかなる神占も耳には仇事。つまりは、それが運勢というものでな」
　こういわれてみると、人間の弱さ、盧俊儀も何か密かな危惧を抱かずにいられなかった。わけて彼には、人間を観る目がある。その目で呉用を観れば、決してただの凡庸な売卜者ではない。よけい彼がこの手管にひッかかった理由はそこにあったといってよい。
「先生。もし卦面の告げがわたくしの運命だとしたら、何とか、その凶運を避ける術はないものでしょうか」
「ないことはありません。それが易だ。易とは、過去のことをあてて足れりとせず、未来の凶にそなえて、よく身を護るべきためにあるもの。それでなくては易学ではない」
「では、どうしたらよいでしょうか。おっしゃるような厄難を避けるには」
「真実、謙虚になって、おたずねか。……ならば申そう」
　と、呉用は、巽（東南）の方を指さして。
「北京から一千里の外、巽にあたる地方へ一時身をかわしておしまいなさい。多少、驚くことにぶつかるが、自然、運が開け、明年以後は、無事なるを得ましょう」
　と、いった。
　彼はまた、謎めいた一詩を書いて盧に渡した。後日、この詩句にも必ず思い当りがありましょうと言い残したものである。――そして飄然と、ここを辞すや、旅籠においてある荷物をまとめて、次の日にはもうもとの山東への道、梁山泊をさして、李逵と共に風のごとく帰りを急いでいた。
「李固――」と、俊儀は、みせの一番番頭の李固をよんで訊いていた。
「きのうの易者は、きょうも街を流しているかね」
「いえ、あれッきり見えませんよ。あれッきり」
「妙だなあ。じつにふしぎだ」
「何がです、大旦那」
「いや何でもないが……」
　しかし、争われないことには、あれから数日。盧は、快々として、どこか心のおちつきを欠いている。
　何か、わが家の守護神が易者となって啓示を垂れてくれたのではあるまいか。――そんな気もしてくるのである。
　別れぎわに渡された詩を、彼は自分の部屋の壁に貼って見入ったりしていた。――蘆花叢裡一扁ノ舟、俊傑俄ニ此ノ地ニ遊ブ――口に誦して何べんも読んではみるが、謎は謎で、思い当ってくるふしもない。
　そして明け暮れ、気になってならないのは、〝血光の災〟といわれた家運の厄と剣難の禍いだ。煩悩は煩悩を呼ぶ。迷

うと果てはない。とうとう彼は意を決して、
「折入って、一同に相談がある。晩飯がすんだら、みんな奥の大広間へ集まってくれ」
と、いい渡した。
さて何だろう？　ただ事ではない、と。宵のくちになると、大番頭の李固以下、盧家の雇人四十幾人、二列になって、大旦那の前に出て生唾呑んだ。
わけてこの李固は、十年前、凍えきって店の前に行き倒れていたのを、大旦那に拾われて、その実直をみとめられ、読み書きそろばんも達者なところから、いまでは一番番頭に起用されていた者なので、「お家の大事」には、まず誰よりも真剣になるのは当然だった。
「李固。みんな揃ったかい」
「へい。洩れなく、揃いましてございますが」
「ひとり、あれが見えんようだが」
「お。――燕青さんだけまだ見えていませんな。どうしたのか」といっているところへ、「オオ見えた」という人々の声を割って、
「どうもおそくなりました」
と、神妙にわびながら、李固の隣へ来て、直立した者がある。
小づくりで、肉むら白く、朱唇のどこかに愛嬌をたたえ、年ばえ二十四、五かと見える、生きのいい若者だった。白衫に銀紗模様という洒落た丸襟の上着に、紅絞りの腰当をあて、うしろ髪には獅子頭の金具止め、黄皮の靴。そして香羅の手帕を襟に巻き帯には伊達な挿し扇、髪の簪には、季節の花。
さらに、これを脱げば、雪白の肌に、目のさめるような美しい刺青ももっている。
生れながらの、北京ッ子だった。
幼少、両親を亡くし、盧の大旦那にひきとられて、わが子同様に愛育されてきた者だ。
かねにあかせた名人刺青師の仕事だけに、どこの刺青競べに出ても、ひけはとらない。笛、琴、胡弓、歌、踊り、天性すぐれざるなしでもある。――かつは一を知って十を知る悧発であるばかりでなく、四川弓と呼ぶ短弓を手挟み、わずか三本の矢を帯びて郊外に出れば、必ず百禽の獲物を夕景にはさげて帰るというのでも、その技の神技がわかろう。――ともかく相撲に出ても、遠乗りの騎にムチを打っても、北京の巷では花柳の妓までが、彼の姿を見れば、
浪子燕青　浪子燕青
と、まるで酔ったように謳い囃してやまないほどだった。
――その瓊の面は、漆のひとみは、今、一同と共にじっと、盧の大旦那のくちもとを見まもっていた。
「おお、燕青も見えたな。……では、これからわしの意中を打ち明けるが、決して誰も止めないでくれよ」
と盧俊儀は、過日来の易の一条と、血光ノ災のこととを、語りだした。――そして、つくづくいうには、思うに、自分は祖先の業と財と徳を継いできたのみで、何の報徳もしていなかった。まことに不信心であった。
易者の言など、あてにならないかもしれない。しかし自分は発心した。ここから千里の外、巽の方角といえば、そこには、泰安州は東岳泰山の霊地がある。一に罪障の消滅を祈り、

二に衆生のための浄財を喜捨し、三に、あきないがてらの見物もして廻りたいと思う。……で、李固はさっそく、山東向けの商品や旅の荷を車につんで、わしの供について来る支度にかかれ。そしてまた燕青は、わしに代って、庫の鍵をあずかり、よく家事一切の留守をかたくして欲しいと、縷々、言い渡しを、言い渡した。

「大旦那。いえ、大旦那らしくもない」

と、李固は、第一に反対した。

「どこの風来とも知れぬ、あんな売卜者ずれの言を、そうまで、お気に病むことはございますまい。諺にも『易者の身の上知らず』というではございませんか」

「いや、わしには、べつな発心が生じているのだ。どんな富でも、富は浮雲のようなもの。おちぶれてから後悔しても及ばんからな」

「ですが、ご主人」

と、燕青もまた、黙ってはいられぬように、口をひらいた。

「巽とはまた、方角が悪いじゃありませんか。泰安州へ行くには、どうしたって、梁山泊のそばを通ることになる」

「ははは。噂のたかい梁山泊か。世間は恐れているらしいが、わしからみれば程の知れた草賊だよ。ま、水滸りの蛙も同然さ」

そこへ、楚々と、盧俊儀の妻の賈氏が、屏風を巡ってあらわれた。李固や燕青と共に「――そんな遠出の旅は、思いとまっていただきたい」と、すがるばかりに止めるのだった。

嫁いできてまだ五年たらず、二十四、五の美人であった。

だが盧の大旦那は、この妻のいさめにさえ、意をひるがえす色はない。また燕青はしきりに、旅先の方角が気になって仕方がないらしく、「では、ぜひもございません。が、供人には、ぜひこの燕青を連れて行ってください」と、執こく頼んだ。けれど、これもまた、

「あきないは、李固でなければわからない。おまえは留守しておれ」

と、一言の下に、しりぞけられてしまった。

ところが、選ばれた番頭の李固とくると、どうも彼は、旅の供をよろこんでいる風ではない。主人の身よりは、自分の都合か。「……じつは、このところ、ちと脚気の気味で……」などと渋りだしたものである。そこでついには、盧俊儀の大喝を食って、急に縮み上がり、否やもなくなったようなわけだった。

ともあれ、それから三日後。

十数輛の馬車と人夫と、そして先発の李固とが、貨物の商品や旅の必需品をつんで、盧家の倉前から西南へ立って行った。――ときに、盧の細君の賈氏が、その遠ざかる馬車の上を見送って、ふと、ぽろりとして、あわてて奥へひっこんだ。――ということなど、もとより盧の大旦那は何も知っていない。

あとにのこって、一夜はなお、何かと、家事の始末など留守の者にいいつけ、そして翌朝は早くから、先祖のまつりなどして、さて、旅衣さわやかに、腰には、彼が得意としてほこる棒術の一棒を横たえ、

「では、行って来るからな。火の用心と、体だけを、気をつけろよ」

と、妻の賈氏へ言い残した。
「あなたこそ……」と、妻は打ち萎れて「旅では、食べ物にも、お気をつけてくださいね。そして一日もおはやく」
「うむ、百日もたてば、帰って来る。……おう燕青、おまえにも、たのんでおくぞ」
「はい。行ってらっしゃいまし。どうも早や、こうなっては、お留守のご安心を願うしかございません。お心丈夫に」
「などといっても、おまえは元来諸所方々でちともてすぎる。うっかり色街の妓などにはまりこむなよ」
「これは、なさけないおことば。どうして、ご主人の留守にそんなことを」
「いや冗談だよ。何よりみんな仲よく機嫌よく暮らしていろよ」
彼は馬に乗った。そして馬の上から、さすがあとに残す妻の姿をふりむいた。賈氏も燕青も、その人が見えなくなるまで手を振っている。しかし賈氏のひとみには、前日、先発した馬車を見送っていたときのような瞼の濡れはさらにない――。街の空には、春の雲を縫って、雁の影が、これも巽の方へ消えて行った。

## 十五　江上に聞く一舟の妖歌「おまえ待ち待ち芦の花」

さきに、一日早く北京府を立っていた番頭の李固は、約束の旅籠で、主人盧俊儀があとから来るのを待ちあわせていた。
「オオ大旦那。お留守中の御用はもうすっかりおかたづきで？」
「む、家内にも燕青にも、わしがいないうちの万端の仕切廻しはすべて申し含めて来たからな。もう何も気がかりはないよ」
「でも、十日や二十日のご旅行ではなし、昨晩はさぞ、お内儀さまも……」
「よけいな心配はせんでもいい。馭者、人夫、商い物の貨車など、なにしろ大勢を連れての旅だ。おまえはその方の係としてそのため連れて来た者だ。気をつかうならそっちへ頭を向けていろ」
旅の毎晩毎朝、旅籠旅籠では大持てだった。
なにしろ北京一流の豪商盧の大旦那が、自身で交易がてらの泰山廟詣りというので下にもおかず、お供の端まで日々、とんだいい目のご相伴にあずかった。
盧、その人もまた、
「ああそろそろ五月だな。新緑の美しさ、谷水の麗しさ。千山万水、いまが一ばんいい季節か。立つまでは、さんざッぱら迷いに迷ったが、やはり思いきって出て来てよかった。旅はいいなあ」
と、これまた一日とて、愉しまぬ日はない様子だ。
はやくも南下二十日余り。或る一宿場まで来ると、その晩、宿の亭主が、おそろしく心配顔して、あくる日の旅を注意した。――これから、二、三日の間の道は、かの有名な梁山泊のほとりに近い。近ごろ寨首となった宋公明（宋江）は決してただの旅人衆に害を加えるようなことはしないが、でも万々、お気をつけなすって、というのであった。

「ありがとう。ご親切に」
ところが翌朝、盧俊儀は何思ったか、同勢出発という間際になって、衣裳箱の白絹を取り出してそれを旗四枚に仕立てさせ、一旒ごとに一行、墨痕淋漓とこう書いたものである。

慷慨ス北京ノ盧俊儀
遠ク貨物ヲ駄シテ郷地ヲ離ル
一心只強人ヲ捉エント要ス
那時方ニ志ヲ表サン

李固は首をさしのばして見ていたが、まっ青に顔色を変えて。
「ど、どうするんです大旦那。そ、それを……」
「お禁厭さ。十二輛の貨車の上に、間をおいて一旒ずつ立てて行くんだ」
「ひぇッ。いいんですか。そ、そんな、かえって盗賊を招ぶような真似をなすって」
「来るものかよ、盧俊儀と知れば――」
広言でなく、これは彼の自信だった。水滸の草賊、北京での噂も高いが、心ではつねに嗤っていたのである。
しかしその朝いらい、彼は家伝の一刀を腰に横たえ、棒は手に持って、ここを出た。そしてまず一日は無事だったが次の日のこと。青い海へでも入ったような原始林の道へかかると、怪鳥の啼き声を思わすような口笛がどこかで聞えた。
「そらッ、出て来たッ」
と、馭者や人夫らはみな車をとび降りて車の下に這い込んでしまう。元々、賃雇いで連れて来たこれらの雑人はぜひもない。だが、李固までが車の下でワナワナ慄えているざまに盧は腹立たしげにどなりつけた。
「たわけめ。きさまは主人がどんな人間かをこの年まで知らずに仕えてきたのか。何が出て来ようと、ここに玉麒麟の盧俊儀がおる！　わしが相手を斬り伏せ叩き伏せたら、きさまは人夫を督して、それらの賊どもを片ッ端から車の上に積んでしまえ！　泰山詣での土産として、北京府の官へ突き出してくれようわい」
すると、ことばの終らぬまに、ザ、ザ、ザ、ザッと、躍り出てきた者がある。手に二丁斧をひらめかせた黒人猿のような男だった。
「とうとう、おいでなすったネ、北京の旦那！」
「やっ、うぬは何日ぞやの」
「おおさ。旅の売卜者について、お宅へ顔を見せた唖の童僕だよ。ジツの名、黒旋風の李逵だ」
「さては何か？」
「もうおそい！　気がつくのが遅すぎらあ」
「うごくな、食わせ者」
棒が唸った。二丁斧の一丁がカンと鳴る。
とたんに、両者の戦う影に、ちぎれた草が舞い、梢の葉が雨と散る。だが、ヒラッと黒旋風は次の一瞬に逃げ出していた。それを追って行くとさらにまた、一方の木蔭から黒い薄法衣を体に巻いた大坊主が現われて、
「待った。わが輩は花和尚の魯智深。せめて、わが輩の挨拶はうけてもらいたい」
と、鉄の禅杖をつきつけて道をはばめた。
「なに、あいさつだと」

「そうだ。じつあ、お歴々な山の兄貴たちからいいつかり、おめえさんを迎えにここまで出ばって来たんだ。おとなしくわが輩と共に水滸の寨まで来てくれまいか」
「ばかなッ」
叱りとばすや否、盧は棒術の秘をあらわして跳びかかった。花和尚は逆にその下をくぐって振向きざま一颯するどく風を起す。せつなに、棒は砕け飛び、そして盧俊儀が抜打ちに薙いだ刀は、花和尚のころもの袖を切っていた。
「おッと、あぶねえ、和尚は退け」
また、違った声である。これなん、行者武松である。戦い戦い、密林の奥へつり込まれた。――まずい！　と感じて盧はひッ返す。すると、こんどは、赤髪鬼の劉唐と名のる者。没遮攔の穆弘と喚く者。またわれは撲天鵰の李応なりと、みずからいう者。あとからあとから彼を試みるように出ては挑みかかり、戦ってはまた隠れ去る始末に、さすがの盧も、全身、水をあびたような汗になってしまった。
いやそれはまだしも。――彼がその一ト汗を拭くべく小高い丘へ馳けのぼって行くと、すぐかなたなる山坂道を、銅鑼の音ジャンジャン囃しながら遠ざかって行く一群の賊の手下があり、その中には、自分の供の李固も人夫も、十二輛の貨車も、引ッ立てられているのが見えた。
「やあ、賊ども待てッ」
盧は、宙を飛んで、先の一群を追ッかけた。
数珠つなぎの人と馬とそして貨車とを追い立てていたのは、挿翅虎の雷横であり、また美髯公の朱同であった。
二人とも、盧を目前に見ると、呵々と大笑して。
「御用か。御用とあれば、もっけの幸い。この車にお召しあっては如何なもので」
「だまれっ。罪もない召使や雇い人夫。そこへおいて去れ。去らぬとあらば」
「どうなさる？」
「かッ」
と、盧は心火を燃やした。理のほかだ。力で見せ、血で物を解らせるしか、意志のとどく相手ではないと思った。だからこの一刹那からの彼のまさに名にしおう河北の三絶（傑物ノコト）玉麒麟その者の本相だった。日ごろ秘していた武芸と剛胆とをその姿に極限まで描いて雷横、朱同の二人を相手に火花をちらした。――といっても、それはまたつかの間で、彼はいつか当面の敵も手下の群れも見失い、どこか高い所でする簫、絃、鉄笛、板（一種のカスタネット）などの奇妙な楽奏の音に、はっと耳を醒まされていた。
気がついてみれば、自分はせまい一渓路に立っており、渓流をへだてた彼方、硯の如き絶壁の中層には、紅羅の金襴傘を中心に、一座百人以上な人影が立ちならんでいて、上には、
替天行道
と四大字を書いた繍縁の大旗がひるがえってみえるではないか。
「や、や、や？」
仰天する彼の姿を、彼方では笑うかのように。
「盧員外（盧は大員外トモ呼バレテイタ）どの、盧員外どの。お変りもありませんか」

こういったのは、羅傘の下に見える人物。すなわち宋江であって、右がわに公孫勝、ひだりには呉用。

この呉用へ、ヒタと眸をすえた盧俊儀は、いまや自分がなぜここにいるかも分らぬような夢幻感と憤りの中に燃えた。

「やあ、そこにおるのは、先頃の偽易者、談天口とかいう奴だったか。おのれ、よくも！」

「だましたと、お怒りか。わはははは」

と、彼方の笑い声は、谷 谺に大きく響いて。

「いまは実を申上げる。お伺いした偽易者、まことは水滸の一人智多星呉用です。これにおられる寨主宋公明には、久しくあなたを慕っておられ、梁山泊一同協議のうえ、あなたを仲間にお迎えしようものと、すなわち、呉用が一策を用いた次第でした。――不悪、不悪」

「ばかげた夢ッ、悪戯もほどほどにしろ。山野に巣食う栗鼠や貉の分際で」

「いや、野には遺賢だらけだ。あなたもこの旗の座にきてください。天に代って共に道を行いましょう」

「盗賊の道をか！　くそでもくらえ」

「仰っしゃったな。花栄、客人はまだお目が醒めぬらしい。一ト矢、ご馳走申せ」

そばにいた小李広の花栄は、これを聞くと、手馴れの弓に矢をつがえて、はッしと放った。花栄の神技、狙いはあやまたず、盧俊儀がかぶっていた羅紗笠の緋纓をブンと射切った。

これには盧も大いに驚いて、足は無意識に逃げ走っていた。すると突如、山が震い鳴った。鼓声、鬨の声である。――そしてなお逃げまどう先々の途でも、豹子頭の林冲、霹靂火の秦明、金鎗手の徐寧などが入りかわり立ちかわり、彼のまえに立ちあらわれて「見参っ」と叫び、また「ご挨拶――」と呼びかけ、各自が一芸一芸の武技をもって彼をさんざんに悩ませた。どうも、ひどいご挨拶もあったもの。

とまれ、いつか彼は渺たる水と芦のほとりへ出ていた。それや水滸の泊に近い鴨嘴灘とは知るよしもない。微かな星、ほのかな月、小道をかきわけ掻きわけ、茫と、いちめんな芦の花に行き暮れていると、

「旅の衆。道に迷ったのかね」

と、一そうの小舟の櫓音、そして、小舟の上からその漁師がなおもいう。

「……迷ったものなら仕方ねえが、なんだってこんな所にぼんやりしていなさるのかい。ここらは名うでな盗人の巣だ。それとも命の捨て場にでも困っているのかね」

「冗談ではない――」と、盧は言った。「命あっての物種だろうではないか。どこか無事な所へ着いて、ひとまず宿をとりたいのだが」

「そいつは生憎だ。ここらには旅籠もねえ。本街道へ出るまでにしても、三十里は軽くあらあ」

「駄賃はいくらでも出そう。舟で渡してくれないか。灯のある岸まで」

「乗ンなせえ。その代り銭十貫、銀でもいい、前払いで貰おうか」

盧はほっとした。過分な礼を見たせいか、船頭の櫓は気持ちよく水を切る。たちまち芦の洲を幾めぐり、水上十数町も漕ぎ去り漕ぎ来ったと思われる頃――ふと、べつな小舟が行く

てに見えて――上には二ツの人影、ひとりは長い水竿を手に唄っていた。

本は嫌いで
詩も知らず
虎のさし身に
茶わん酒
飽きりゃ水滸で
鯨釣る

美い声なので凄味があった。わけもなく盧はハッとした。いや何を思うひまもない。芦の叢からまたも一舟が漕ぎすすんで来る。そしてそれにも二人の男がみえ、ひとりの男がこう唄う。

おまえ待ち待ち
芦の花
色香はないが
欲でもない
梁山泊の上段に
すえてみたさの玉麒麟

つづいてまたも同じような一艘が漕ぎ寄せて来た。盧はギョッとして見廻すばかり……。何のことはない、三ぞう三ツ巴に、こっちの舟へ絡み絡み漕ぎめぐっている按配。

「おい、船頭。早くやってくれ、早く」

「船頭だと。へへへへ、旦那え。……船頭にはちがいねえが、俺を一体なんだと思いなさる。上は青空、下は大江、オギャアと泣いたときから、潯陽江の水を産湯に男となった混江龍の李俊、いやさ今では梁山泊のお一人だ。これほどまでにみんなが手をつくして仲間入りをすすめているのに、まだいやだと仰っしゃるならぜひもねえ」

「どうする？」

「しれたこと。命を貰うだけのもんだ」

「なにをッ」

せつなの一剣は、盧の体まかせに、相手のみずおちを見事突いたかと見えたほどな迅さだった。が、とたんに李俊のからだは、とんぼを打って水中に隠れ、舟は飛沫の中に傾斜し、剣は空を突いていた。

「や、や、や？　ちいッ、しまった」

彼は不思議な水の渦を見た。舟は独楽みたいに空廻りし初めている。のみならず、艫端に人間の腕だけが見える。盧は北京育ち、泳ぎを知らない。しかるにそのとき、

「旦那え。ご案内に来ましたよ。水底へさ。……ついでに、この面も覚えておきなせえ。浪裏白跳の張順だ！」

と、河童のような頭が船尾にぬッと見え、そしてその声も終らぬうちに、はや小舟は引っくり覆っていた。淡い星影の下に舟底は仰向いてしまい、青ぐろい渦紋のほかは、もう何も見えなくなっていた。

## 十六　浪子燕青、樹上に四川弓を把って、主を奪うこと

昏々、一夜は過ぎている。翌日の夕方だったに違いない。気づいてみると、盧は丁重に寝かされていた。肌着衣服、すべて真新らしい。口中には神気薫ばしい薬の香がしきりにす

る。
「盧員外どの。ご気分はどうです」
「ほ。あんたは？」
「神行太保の戴宗です。ご用意ができておりますが」
「ご用意とは」
「とにかく、あれにお乗りくださいませぬか。ここでは一切、何のお話もできませんので」
すすめられたのは轎である。前後八人の子分が舁ぐ。いうまでもなくここはすでに梁山泊下の一寨であったのだ。
うねうね登って行くほどに、紅紗の燈籠二、三十基が朧に彼方へ見え出してくる。おそらくは宛子城の大手か。外門を入ると、音楽がきこえ、一群の騎馬列が照らし出されている。近づけば、それは宋江、呉用、公孫勝らの出迎えであった。
さらに二の木戸、三の木戸と、高く進むほど人数は厚くなり城寨の構造は密層をかさねている。すなわち本丸の忠義堂は盧俊儀の前にあり、轎をおりた彼は、ただ茫然たるばかりであった。
「いざ、どうぞ、こちらへ」
郭中は一面燦々たる燈燭である。中央のひろい一殿に、彼は請じられた。しかし彼は、椅子に倚らず、宋江を見ると、下に坐って、
「お手間はかけたくない。こう囚われとなった以上は、さっそくご処分をしてもらおう」
と、いった。
「なんの！　お詫びは私の方ですること」
宋江もまた、下にひざまずく。わけて呉用は、最上の礼をもって、
「切に、ご容赦を」
と、北京以来の罪を平身低頭してあやまった。
宋江は彼の手を取り、起って、数歩を導いた。忠義堂第一番の上座の椅子に彼をすえようとしたのである。
「お名はすでに雷鳴のごとく知り、威徳、お人柄はかねがね深くお慕い申していたところです。さるを慮外きわまるこのたびの謀り沙汰、さだめしご不快、いやお怒りに相違ございますまい。けれどそれも、飢える子の如き、あなたへの敬慕がなさしめたことと、どうかご寛容のうちに、お笑い捨て願わしゅう存じまする」
「はて、合点がゆきません。そして一体どうせいと仰っしゃるのか」
「ここの寨首となって、おさしずを給わり、長く泊中の上にいていただきたいのでございます」
「断る！　毛頭そんな気もちは持ち合していません」
「でも、切にひとつご一考を」
「一考の余地もない。死すとも嫌だ。どうにでもおしなさい」
「さようにご憤怒では恐縮します。ではまた、明日にでも」
すでに酒宴の設えができている。衆の歓語、満堂の和気。ぜひなく盧俊儀も杯にかこまれた。さてまた、次の日も宴だった。馬、羊を屠り、山菜の珍、水産の佳味、心入れでない物はない。幾めぐり杯もまわった時分、宋江はかさねて言った。
「ここは以前、聚議庁とよび、前の総統晁蓋の亡きあと、忠義堂と改めました。そして仮に私が寨首の椅子についてい

ますが、元来、その器ではありませぬ。ぜひどうか昨夜お願いの一儀は、ご辞退ありませぬように」
「む、ご真実の色が見える。それにたいしての礼儀、私も率直に言いましょう。――不肖ですが私、かつて犯した罪とてなく、家は北京に古いし、財にもめぐまれているのです。いうなれば、生きては大宋の人、死すとも大宋国の鬼。それが望みだ。そちらのご希望にはそいかねる」
「伺えば伺うほどお慕いが増す。あなたさまも、大宋国を愛す人。われらといえ国を愛す念では全く変りもない」
「いいや、どうあろうと、かかる所に身をおくことはできません。たとえ殺されましょうとも……。は、は、は」
時を措いては、またべつな者が杯を持ってすすみ、献酬のあいだに説く。或いは情をもってすがる。或いは世情の嘆や官の腐敗を言って口説にかかる。が、盧の拒否はまるで巌のようでしかない。
「ぜひもない。無理にご意志を曲げさせても――」
ついに言ったのは呉用であった。
「しいて体をお留めしたところで、心ここにあらざれば如何せむ、だ。……では盧員外どの、せめて幾日かご逗留を願って、そのうえでお見送りといたしましょう。双方、不機嫌を残さずに」
「ならば、私はかまわんが、家にある留守の者たちがどうも……」
「いやそのお案じには及びませぬ。李固に貨車をつけて先に帰してやり、まずお宅さまへ、無事なご消息さえ伝言させておかれさえすれば」
呉用は、ここへ李固をよんで、初めて盧に会わせた。貨車、人夫、そっくりそのまま無事と聞いて、盧も腹をきめたふうである。李固へ向って、先に帰るように命じ、そしてなおこう言い足した。
「わしも数日中にはここを立つからな。妻にも燕青にも、心配するなと言っておいてくれ」
「へい、へい。かしこまりましてございます。李固がお先に戻りますからには、何のお気づかいは要りません。……へい、お内儀さまへもようおつたえ申しあげておきまするで」
李固はおちつかない。片時でも早く帰りたい帰りたいの一念らしい。翌朝、彼は早くも鴨嘴灘から船に乗りかけていた。すると子分の一人が来て、あちらで軍師さまが番頭さんを呼んでるという知らせ。行ってみるとなるほど昨夜の呉用が楊柳の根に腰かけて待っていた。
「や……李固か、ご苦労だな、こんどは」
「どういたしまして、して何の御用で？」
「じつはだな。深い仔細は知るまいが、もうおまえの主人は、ふたたび北京へは帰らんのだぞ」
「えっ。ほ、ほんとですかえ」
「おはなし合いの結果、梁山泊で第二番目のおかしらの座に坐ることにきまったよ。これはわれらの懇請にもよるが以前からあのお方のお望みでもあったのだ。その証拠には、帰ったら主人の部屋をよく調べてみるがいい。遺書の詩を書いた物が残っているはず。ただし世間には口外せぬ方がお前らにとっても身のためだろうぞ」
李固は「ひぇっ!?」と呆れたり驚いたりであったが、ぼっ

と妙な血色を、どこか顔じゅうに騒がせた風でもある。とまれ釣針を抜けた魚みたいに、蒼惶として、この日、江を渡って北京の空へと先に帰り去ってしまった。

よく悪女の深情けというのはあるが、漢仲間の深情けとなれば、悪女どころな絆ではない。前世、いかなる業の縁か、ここに、なお梁山泊にひきとめられた盧俊儀は、まったく、ほとほと弱りはてていた。

「ぜひ、もう一夜」

「もう一夕」

と、宋江や呉用のひきとめ策ばかりでなく、次から次へと、水滸の大寨にある各部門の一将一将から毎夜のような招待なのだ。

――となるとその部署だけでも数十かわからない。忠義堂だけでも、参謀室、文書課、印鑑信書部、賞罰係、勘定方。さらに宛子城の三門やら山上大隊、烽火台、教練隊、哨戒隊。――さてはまた、金沙灘その他の水軍部、造船廠、醸造局、縫工班、糧秣廠、諜報機関、楽手寮など数えていったら限りもないほどである。

だがつい、盧自身も、しまいには、断り切れぬだけでなく、興味をもって、毎日あちこちの招きに惹かれていた。というのは、それぞれの部にある局部長らの人物もみな一トかどの人物だし、それらの者との談笑裡の会飲やら話のおもしろさといったらない。

かつては、禁門の師範だった豹子頭の林冲、五台山を騒がせた花和尚、虎退治のことで世間に名だかい行者武松、あるいは九紋龍、あるいは高士柴進、または名匠気質の金大堅、鉄笛の名人楽和、大砲火薬の智識に富む凌振、といったふうに、これら何か一芸一能の奇才や豪傑は天つ星のようにいたことなので、一夕の歓談に一夕を忘れ、またつい、夜を語り明かして飽かない夜が、毎日延々と心にもなくつづいたようなわけだった。

かたがた、宋江や呉用が、あらゆる言辞で、彼の足どめ策を講じていたのもいうまではない。

だが、ひとたび、北京にある留守の妻を思い、ここに潜む魔力みたいなものをかえりみると、

「ああ、これはいかん。わしの意志が弱いのだ。決然と魔魅の袂を払わぬことには」

と、身の在る所にゾッとして、帰心、矢の如きものに襲われもする。――

家を出たのは晩春五月まぢか。いつか、月日は過ぎて、天地は秋の色だった。

そこで彼は、一詩を書いて、宋江にみせた。どうか帰してくれと改まって切に懇願したのである。

晩春　家郷に別れて　いま新秋
朝に家を想い　夜には妻を恋う
恨むらく　身に双翼のなきことを
天風よ　吾を憐んで　水涯を渡せ

「いや、このご心情を見てはもう……」と、宋江は言った。

「これ以上は、おひきとめもなりますまい」

最後の大饗宴をひらいて、莫大な金銀を餞別に贈り、翌朝、全山を挙げて、いよいよ彼を送別することになった。

「家に帰れば、不足なき身、おこころざしはいただきますが、金銀財帛はどうぞ、そちらのお手もとに」
盧はそういって、泊中の見送りを謝し、夢遊一百余日の感慨を、金沙灘の船上に吹かれながら、やがて対岸に渡り、日をかさねて、じつに久しぶりな家郷北京府に帰った。
たそがれ過ぎれば関門は閉まる。あぶなく間にあって、彼は、城内大街の灯をまばゆげに、足のうつつもないような歩みだった。するといきなり誰かその袂をつかまえて、
「だ、だんなさまっ。……ああ、大旦那だ。待ってました。どんなにお待ちしていたかしれません！」
と、果ては大地に伏して、泣きじゃくってしまう男があった。
「なんだ。乞食かと思ったら？　……。いったいおまえは誰なのか」
「こ、こんなボロ、垢面、素はだし。お見忘れも無理ではございません。私は小乙（総領むすこをいう世間の愛称）です。小乙の燕青です」
「げっ……。オオッ、燕青だ。燕青だわえ。だが、その姿はまあ、いったい何としたざまか」
「お留守中に、追ン出されました。何一つ持たせられず、裸のままで」
「たれに？」
「奥さまと、大番頭の李固から、出て行けといわれまして……。ご主人！　ここへお帰りなすっては大変です。もういちど、もとの所へお引っ返しなさいまし」
「何をいう。わしがわしの家へ帰るのに」
「でも、夏の初め頃、李固が帰って来ますってえと、その日から李固と奥さまとは夫婦気どり、おまけにご主人は梁山泊に入って賊の副統領になったから再び北京にもどることはない、と雇人一同に触れるばかりか、お上へまで訴え出て、親類がたの証判も取り並べ、財産名義の書き替えまでやりかけているんです。だんなさま、うっかりすると、お命もあぶない……。どんな罠にはまるかしれませぬ」
「ばかをお言い！」と盧はかえって燕青の正気を疑った。「――わしの家内にかぎってそんな不貞の女ではない。しかもだ。わしの家は北京で五代の旧家、家憲がある。番頭の李固にしろ、なんでさような大それたまねができるものか」
「でも大旦那、人間です、人間なんて、一つ狂うと、何をしでかすか、分ったもんじゃないってことを、わたしはこの眼で」
「まだいうかっ。あらぬ讒訴もいい加減にしろ。ははあ、なんだな、何かきさまこそ、わしの留守中に、色街の妓にでもひッかかって」
「めっそうもない！　大旦那、なさけない！」
「ええ、そうに違いないわ。離せっ。せっかくなわしの帰宅を不愉快にさせおって」
盧は、蹴放した。そして燕青がなおも何か後ろで叫ぶ声に耳をふさいで、あたふたと北京府でも目抜きな街中の大構え、質屋と物産交易を兼ねた老舗看板の金箔も古いわが家の宵の大戸をドンドン叩いた。
「俊儀だよ、いま帰ったぞ。開けないか。わしだよ、わしだよ！」

家の中では何かドタバタとあわただしい。変な気配である。大戸はいつまでも開かなかった。

が、やっと大番頭の李固が顔を出して来た。そして、さもさも、ようこそご無事で、とは迎え入れたものの、雇人一同もみな何か狐に憑ままれたような挨拶ぶり、奥に入れば、妻の賈氏は、見るなりすがったが、ただただ泣いて、良人のいない旅の留守の、余りな長さと淋しさを、口説に訴えてみせるばかり……。

「ま、お離し……。燕青はどうしたね。顔を見せないじゃないか」

「そのことでは、大旦那」と、李固はすぐ横から話を取って――「いずれ申しあげますが、あれにはいろいろ不始末などもございましてな。お帰り早々、いやなお話も如何でしょうか。ま……お久しぶりのご帰宅、さっそくお風呂にでもはいって、今夜はまあゆるゆる楽におやすみ遊ばしては」

妻の賈氏もいそいそすすめ、李固も何かともてなすので、盧は自分の小心を辱じ、その晩はわれから機嫌を直して寝に就いた。

ところが、真夜中の頃、盧家のおもて門と裏門から二、三百人の捕手がとつぜん土足でなだれ込んだ。事すでにただ事でない。一瞬の屋鳴りがやむと、はや主人の盧は縄付きとされ、家じゅう大乱脈の中を、深夜、管領庁へと引ッ立てられて行った。

北京の長官、梁中書は、あくる日、白洲にひきすえられた彼を見た。

――呼び出された賈氏、李固の両人も、やや離れて、平伏している。

「盧俊儀！」と、中書はやがて、声あららげて。「そのほう、北京に住むこと五代の由緒ある良民にてありながら、梁山泊の賊徒と通じ、不逞を謀むよしの聞えあるが、言い開きはあるまいな」

「あっ、もしッ……」と、盧俊儀はさけぶ――「覚えなきことにございまする。身の不覚より、偽売卜者にたばかられ、一時は足を入れましたものの」

「通らん。さような言い訳は通るまい。賊と密盟なきものなら、なんで百余日も梁山泊にとどまりいよう。また、賊が解き放すはずもない。すでに、なんじの女房と番頭の李固から夙に訴状も出ており、かつまた、なんじの書斎より常々反逆の意をふくむ一詩も見つけ出されてある」

「あいや、仰せですが、それはてまえの作った詩でなく、偽易者めが、先にわが家を訪れたときに、たまたま書きおいてまいったもので」

すると後ろで李固が、へへへへと、声をころすようなわざと笑いをもらしていた。

「旦那え。……大旦那え。お白洲は浄玻璃の鏡。もうそんなムダな抗言はおよしなすって、神妙にちっとでも罪を軽くしていただきなすった方がおよろしいんじゃございませんか」

妻の賈氏もまた、尾について。

「あなた……。わ、わたくしはもう、あきらめました。もしや、罪九族におよぶなどというお申し渡しにでもなったらどうしましょうぞ。後生です、お願いです、前非を悔いて、素

直に洗いざらい、お上へ、ほんとのこと仰っしゃってくださいまし。せめてそれが」
よよと、泣きみだれる彼女の態に、盧は愕然と、伸びあがってどなった。
「なにをいうか、そなたまでが。……逆上したのか、女房っ」
しかし、庁上庁下、居ならぶ役人の目ぼしいところには、すでに李固から廻した鼻ぐすりが効いていたこと。機をすかさず、与力の張が、次にわめいた。
「中書閣下、これは一ト筋縄ではいけますまい」
「ウむ。打てッ」
おきまりの拷問となった。たちまちに唸きの下、凄惨、目もくらむばかりな鮮血が白洲を染め、絶叫がつづく。そしてついに、心にもなき口書が取られ、その夕すぐ死刑囚の大牢へ送りこまれた。
この大牢の牢屋預かり兼首斬り役には、蔡福、蔡慶といって、鬼の兄弟がいた。

凌雲の気　堂々の男
誰とかなす　押牢の蔡福なれ
青鸞の帯　無角の頭巾
歩むところ　草木おののき
声きけば　哭く子もやむ
名けたりな　そのアダ名も鉄臂膊とは

これは兄の方だが、弟の蔡慶にも、街詩があって。

らんらんの眼には毛虫眉
衫衣に繍わせた　吾亦紅

あまりに人がこわがるので
髪に挿したよ　花一枝

彼はつねに帽の髪傍に何か花を挿す習慣を身につけていたので河北の人は彼を、一枝花の蔡慶とも呼びならわしていた。
「おい蔡慶。新入りはちと大物だ。番をたのむぞ。おれはちょっくら家へ行ってくるな」
その夕、弟にあとをまかせ、蔡福は大牢の路次を曲がりかけた。と、薄暗がりの物蔭から走り出た蝙蝠のような人影が、ペタと彼の前にぬかずいて。
「お慈悲です、ご主人に一ト目会わせておくんなさい。お願いします。こ、このとおりに……」
「や、おめえは、浪子燕青じゃないか。何を手に持っているんだ」
「お粥です。ご主人に食べさせたいと思って。……この小瓶に半杯の粥を、やっと街で工面して来ましたんで」
「ふーむ。主人思いだなあおめえは。……ま、いいや、自分で持って行って、食べさせてやるがいい」
蔡福は言い捨てて行ってしまった。宿なしの燕青には世間の同情があったらしい。蔡福はそんなことを考えながら大街通りの州橋を渡っていたが、するとまた、
「おかしら、うちの二階に、お待ちかねのお客さんが、さっきから見えてますよ」
と、馴じみの女が呼びとめる。
茶館の二階に待っていたのは李固だった。うしろの扉を密閉すると、李固は延金で五十両を卓においた。そして〝闇から闇へ〟の取引きを初め、蛇の道はヘビ、多くはいわないでも……と謎をかけた。

蔡福は、わざととぼけて、
「はてね。なんのおはなしで？」
「いやですぜ、大牢のおかしらが。諺にも、おなじ穴の貉は化かし合わぬ、というじゃありませんか」
「貉になれっていうわけかい。おい李固さん、お役所前の戒石に、こう彫ってあるのをしらねえな。――下民ハ虐ゲ得ルトモ、上天ハ欺キ難シ――と。真っぴら、真っぴら。後日、提刑官（監察）に睨まれて、かかりあいになるなんざアご免だよ」
こいつはいけないと見たので、李固は相場を上げた。五十両を百両にし、百両を二百両、さらに三百両とまでわれからセリ上げてみせると、もう蔡福の顔色もはっきり欲にうごいている。そこで李固が念を押したものである。
「ぜひとも、今夜じゅうに、ひとつ、首尾よくねむらしておくんなさいよ」
蔡福は、金をおさめると、すぐ立ち上がって、あっさり、こう約束をつがえて帰った。
「よし！　あした死骸を取りに来ねえ」

ふくふくな気もちで、宵闇、わが家の門口まで帰って来た蔡福はそこでふとギクとした。
たれか見つけぬ人影が佇んでいる。――
それも、どうも常人でない。びろうどの黒い丸襟の服を着、羊脂の珠のかがやく帯には細身な短剣を佩いているのみでなく、金鶏の羽ネで飾られた貴人の冠といい珍珠の履、どう見ても、王侯の香いがする。
「これは。……どなた様でいらっしゃいましょうか」
「ほ。あなたが蔡福か」
「さようで。して何ぞ、御用でも」
「奥をおかり申したい。ちと、折入ってのおはなしなので」
さて、それからの一室での密談だった。みずから名のって
いうその人とは、滄州横海郡の名族、遠き大周皇帝の嫡流の子孫、姓は柴、名は進、あだ名を小旋風。すなわち小旋風の柴進とは私であると、まず言って、
「幸か不幸か、性来、財をうとみ、義をおもんじ、天下の好漢と交わりをむすんで来ましたが、それがついこの身をして梁山泊の一員となる契機の因をなしていたのです。……ところがこのたび、当地の盧員外どのが、淫婦奸夫のはかりに陥ち、かつまた貪官汚吏の手にかかって、あえなく獄にとらわれ召された。いやすでに命旦夕の危急と聞く。……で。じつは寨主宋江先生の秘命をおび、急遽、おたすけに参ったわけだ。しかもあなたの一存でここは延ばせる。足下の侠気にすがるほかはない。寸礼のおしるしには、ここに黄金一千両を持参いたした。お受けとり給わるか、あるいは嫌か。もしまたこの柴進を縄にしようというならば、それもよし、眉一ト
すじも動かすものではございません」
いうことの立派さ。その気魄。蔡福は聞くうちにも腋の下に冷めたい汗をタラタラとたらしていた。くやしいが人間の違いか。この威圧はどうしようもない。
「河北に漢あり、鉄臂膊（蔡福）はそのお一人とうけたまわる。漢は度胸、なんのお迷い。うム、ご返辞は。なさることで見ていよう。とりあえず、持参の黄金はお収めおきを」
すっと立って、柴進は門を出てしまう。入れ代りに従者ら

しき男が一嚢の沙金をおいて風の如くぷッと去ってしまった。なんたる大人ぶり、いや肝ッ玉だろう。てんで歯の立つ相手ではない。

蔡福はさばきに困って、その暁、ふたたび大牢に帰り、弟の蔡慶に相談してみた。聞くと蔡慶は手を打って笑った。

「運はかさなるもの。いい目と出初めると切りがねえな。どっちも戴いておいたらいいさ。――梁山泊の使いだって、くれたのはあっちの思惑。なにも盧員外の身を生で渡せというんじゃなしさ。……なんとかズルズル延ばしてりゃあ、そのうち片がつこうというもんじゃねえか」

「なるほど。じゃあこうしよう。おめえは盧の旦那にこっそり事情を話せ。そして朝晩の糧も上々な物にしてあげて、おからだを大事になさいと耳打ちしておけ」

もちろん、これには蔡の兄弟にしても、上役から下ッ端までへの心づけがだいぶ要る。しかしおさまらないのは、あくる日、顔をみせた李固であった。

「まあ、李固さんよ、そうふくれなさんな。明け方、盧をねむらしちまおうと思って、獄飯の中へ一服盛ってると、急に、中書さまのご意向が違うッてんで、大まごつきさ。どうも長官閣下か、まわりの者か、そこは知らねえが、盧をころすまでの腹じゃあねえらしいんだな。ひとつ、そっちの方を運動しなせえ、こっちはいつでも、やれるんだから」

李固はてんてこ舞いした。色と欲、生涯のわかれめだ。ここで老舗の財産半分をつかっても、もとはひとの物、安い物、そんな料簡からに違いない。その日まず、管領の梁中書の公邸にちかづいてから、連日、あらゆる手をつくして暗躍にかかった。

ところが一方、副官や与力の張は、蔡福から少なからぬ袖の下をおさめていた。で、何やかやと判決は遷延してゆく。それはいいが自然、北京府内では、おもしろからぬ噂も立つ。盧俊儀その人への日ごろの人望やら同情なども抑え難い。で、梁中書も考えた。

ここで読者は、この梁中書について過去の一事件を思い出されているであろう。かつて、都の蔡大臣の許へ、その誕生祝として、夫人の名義で、時価十万貫にものぼる金銀珠玉を送り出させたあの大官である。そのときの輸送使が、かの青面獣楊志であったのだ。ゆらい梁山泊とは宿怨浅からぬ官憲の大物といってよい。それだけに彼は、盧の処分には慎重をきわめたのだ。盧に同情のつよい北京において、万が一にも、ぼろを出しては、はなはだまずい。

「そうだ、千里の先なら、耳の外だし、風まかせ」

ついに、流刑の断をくだしたのである。さきは終身刑のみが送られる滄州沙門島の大流刑地。護送役の董超、薛覇という二名は、これまた、かつて林冲を都から差立てたことのある端公だ。あれ以後、林冲が逃げた滄州事件のとばッちりから高大臣の不興をかい、この北京へ左遷されていた者たちである。

しかし流刑人送りの練達者として、この二人の端公の腕は、たしかに抜群だったものだろう。管領庁でも彼らが付いて行くからにはと万々途中は安心と公文その他一切の手順もすすめられた。

――首かせは嵌められ、二本の水火棍に小突き立てられ、

行くて三千里の道へ、盧は素はだしで歩かせられた。
木賃宿の朝夕、端公は囚人を、奴僕のようにこきつかう。これらはやさしいことである。四、五日も旅するうちには、すでに盧俊儀その人の面影はどこにもない。飢え疲れきった無力の奴隷、いやいや、そんな形容ではまだ足りない。
「おい。董公。ちょっくら、こいつの腰鎖を代って持っててくれ」
「なんだよ薛公。こんな山ん中で」
「生き物だもの仕方はねえ。用達しがしたくなったんだよ」
「ぜいたくを吐ざいてやがる。垂れ流しに歩き歩きさせたがいいじゃねえか」
「囚人じゃねえッてばさ。おれがするんだよ、おれが」
「ははははは、おめえが催したのか。それ、やって来ねえ」
腰鎖をうけとって、ぼんやり立っていると、彼方へ行ってかがみこんでいた董公がギャッと一ト声叫んでころがり伏した。
驚いた薛霸が、上を見て、あッ――といったと思うと、これまた、クルクルッと体を廻してぶっ仆れた。その喉笛にも、彼方の死骸にも、矢が立っていた。秋の深さを告げる黄色い椋や柏の葉が、同時に上からバラバラ降った。
どん！　と空から一童子が飛び下りた。いやその紅顔は童子ともみえるが年はもう十八、九の若者で、破れた衣服、鳥の巣のようなあたま、腰には残る一本の矢柄を挿し、手には四川弓（半弓）を持っている。
「ご主人！　燕青ですっ。逃げましょう。燕青の肩につかまってください」
「やっ、おまえは？　……。ああ小乙か。小乙、おまえには、あわせる顔がない」
「な、なにいってるんです、主従の仲で。が、待って下さいよ、二本の矢を抜いて来ますから。……いや先に鎖をお解きしましょう。ちぇッ、この冤罪のご主人をくるしめた首枷め」
と、燕青は満身の力で主人の首カセの鍵を叩き割り、そしてまた、三本の矢をも腰に挿し揃えてから、盧の力なき体を、わが背中に背負い、やがて飛鳥のように峰道、谷道、みるみる、どこへともなく逃げ去ってしまった。

## 十七　伝単は北京に降り、蒲東一警部は、禁門に見出だされる事

薬草採りの寝小屋らしい。深山幽谷をあるいて仙薬をさがす〝薬種掘り〟の仲間は、幾十日でも山に入っているという。そこらには、欠け茶碗がある。火を燃した跡もある。
「ああ、うまくいった。天のたすけだ。大旦那え……」と、燕青は、肩から主人のからだをズリ降ろしながら言った。「もう、ご心配なさいますな。ここなら人に見つかりッこはありません」
それからの彼は、たとえば、巣に病む親鳥へ子鳥が餌を運ぶような可憐さだった。朝夕、心から主人の盧俊儀をいたわった。仕えること以前とすこしもかわらない。
盧はそのたびに慚愧した。彼の手をとって「……すまない」といっては詫びた。燕青はまた打ち消してそれを笑う。幼少から可愛がられてわが子同様に十九のこの年まで育てられた

ご恩に比すれば、こんなことぐらいは、謝恩の万分の一でもありません、というのだ。

そして時々、彼は例の四川弓を持って、鵲や雉子を射に出かけた。また谷へおりては、川魚や川苔を採って帰った。しかしいつも木の実やそんな物ばかりでは主人の体に力もつくまいと思って、あるとき、そっと山腹の部落へ粟を買いに行った。

ところが、部落の口にも辻にも高札が立っている。――北京ノ囚人盧俊儀、及ビ、ソノ護送役人ヲ殺害シテ盧ヲ奪イ去ッタ大罪人ヲ訴エ出デヨ、という莫大な懸賞つきの布令なのだ。

「あぶねえ、あぶねえ」

燕は、あわててほかの部落へ行った。しかし、そこにも北京府の捕吏が来て屯していた。ぞっとして、彼は粟も求めずもとの巣へ逃げ戻ったが、これが足のツキ初めとは知るよしもなかったのである。

あいかわらず、鳥を射、川魚を採って、露命をつないでいたが、ある日の夕、小屋へ帰ってみると、盧俊儀の姿がみえない。あたりは狼藉、血しおまでこぼれている。さてはと仰天して、燕は夢中で追っかけた。けれど時すでに遅し。――盧は馬の背にくくられ、二百人からの土民や捕吏の手で麓へ引ッ立てられて行く途中だった。

「ちくしょうッ。ええ、どうしたら？」

しかし、どうすることも早やできない。彼は泣いた。天を恨んだ。断崖から谷へとびこんで死んでやろうか。死んでどうなる？

……ここに。夜の白々明けのこと。

范陽笠に、縞脚絆、腰に銀巻き作りの脇差という身がるな姿。

またもう一名は、古物だが、錦襴の腰帯に、おなじく大刀を帯し、麻沓の足もかろげに、どっちもまず、伊達な男ッ振りといえる旅の二人が、何か、笑い声を交わしながら峠を北へ降りかけて来た。

「オヤ。あれ見や兄哥。へんな野郎が、谷へむかって、泣いていやがるぜ」

「ほ。まだ餓鬼臭え若造じゃねえか。まさか身を投げて死ぬ気でもあるめえに」

「いや何とも知れねえよ。声をかけたら飛び込んでしまうかもしれねえ。そっと行って抱き止めてやろうか」

しかし、彼方の岩頭に腰かけていた若者は、すぐ気づいて、気づくや否、隠し持っていた四川弓（半弓）にバシッと矢をつがえて、こっちを睨まえた。

「あっ――」と、二人は矢面から飛び別れて。「小僧ッ、なにをしやがる！　てめえは身投げをする気でいたのとは違うのか」

「おじさん」と刹那に、若者のほうも、落着いたらしく、弦の矢筈を外して。「ごめんなさい。おじさん達は、旅の衆だね。北京府の捕方じゃあなかったんだね」

「や。おめえの言葉は北京語だが、そういうところをみると、もしやおめえは、盧員外（俊儀のこと）の縁故の者じゃあねえのかい。いや、安心しねえ。おれたちは、梁山泊の者だからよ」

「ほんとかい！　おじさんたち」

「なにを隠そう。おれは拚三郎の石秀。ここにいるのは病関索の楊雄だ。――仲間の一人、小旋風柴進からの知らせで、これから盧員外をどうして助け出すか。その下探りに出かけて来た途中なのさ」

燕青はこれを聞くと、わっと声をあげて泣きだした。「遅かった！　間に合わない、間に合わない！」といっては、地だんだをふんでまた泣いた。楊雄と石秀とは驚いて、こもごもにその理由をただした。

そしてこれが盧家の小僕、浪子燕青と聞いて、さらに驚きを新たにしたが、しかし盧の再度の大難が、ここでわかったのは、まだまだ、天の加護として、よろこんだ。そこで楊雄は俄に方針をかえ、燕青を連れて、梁山泊へ引っ返し、北京府へは、石秀がただ一人で入り込むことになった。――

もちろん以後の連絡をかたく諜し合せてである。ところが、これがまた第二の奇禍と、次の大波瀾とを招く逆の転機となってしまった。

しかも、その日である。その日とは、姿を変えた石秀が、北京府の関内へ、首尾よく潜入しえた当日なのだ。

わらわら、わらわら、一方へ向って、人が馳けて行く。

「何か、お祭りの花車でもやって来るんですか」

「とんでもない……」と、訊かれた方の者は、眼をとがらせて、石秀の姿をジロジロ見。「知らないのかい、おまえさんは。この北京府であんなに惜しまれている盧員外さんが斬られるんだよ。ついこの先で首斬り役人の蔡福と蔡慶の手にかかるんだよ。なんてまあ、なさけない」

「ひぇっ。断罪ですって？」

たいへんな群集である。黄色い埃りですぐ知れた。空地の草ッ原では、はや執行の寸前とみえ、正午ノ刻の合図を待って、首斬り刀に水を注ぐばかりらしい。

すぐ前は、十字路だった。角の酒館の階上では、たくさんな顔が、鈴なりに見物している。中に、石秀の異様なる双眼も光っていた。

刻の太鼓が、近くの鼓楼で鳴りだした。それッと、役人たちの蟻のような影が中天の陽の下で忙しく動きはじめる。――と、まだ太鼓の音が刻ノ数をも打ち終らないうちだった。酒館の窓から廂屋根の尖端へおどり出した一箇の怪漢が、片手には剣、片手に拳を振りあげて大音声をふりしぼった。

「待てーっ。盧員外に手でも触ると命はないぞ。梁山泊の勢揃いを知らねえのか。そこらには、梁山泊の者が大勢来ているのを！」

もちろん、嘘である。だが、これしかほかに策はなかったのだ。叫ぶやいな、石秀はそこをとびおりて刑場内へ斬りこんだ。そして、うろたえ騒ぐ刑吏や獄卒をけちらして、一瞬の旋風の如く、盧のからだを奪い去った。肩にかついで逃げ出したものである。

たしかに「梁山泊の勢揃いだぞ」といった機智が、功を奏したものにはちがいない。が、一枝花の蔡慶も、兄の蔡福も、全然これを、意識的に見のがしていた傾向がある。――さきに梁山泊の密使柴進から沙金千両をもらっていた礼心でもあったろうか？

けれど、じつは折角なその効いもなかった。なぜならば、

石秀はまもなく、高い城壁下のどんづまりに追いつめられて逮捕されてしまったからだ。――いかんせん彼は北京の案内に晦かったし、白昼のこと、隠れ場もなかったらしい。当然、盧と共に、彼も大牢へぶちこまれた。そして、こんどは二人並べて、二頭一断とする、次の用意がなされていた。

するとその日、南区の奉行、王という者が、一枚の伝単（ちらし）を持って、管領庁へ出むいてきた。いや同時に、ここで拾った、かしこに落ちていたという伝単が、北奉行や町廻りの手からも、何十枚となく届け出られていた。

長官の梁中書は、それを一読するや、顔の色を失ってしまった。気魂、おののきふるえて、天外に飛ぶの態だった。

伝単の文にいう。

梁山泊ノ義士　宋江。　大名府、及ビ天下ノ人士ニ告グ　今ヤ、大宋国ニアリテハ上ハ濫官、位ニアリ　下ハ汚吏権ヲ恣ニ、良民ヲ虐グ

北京ノ盧俊儀ハ善人ナリ　衆望　人ノミナ慕ウ所ナリ。然ルニ　賄賂ニ毒セラレタル官コレヲ捕エテ　却ッテ淫婦奸夫ヲ殺サズ。抑〻天命ヲ逆シマト為ス者ニ非ズシテ　何ゾヤ　即チ　天ニ代ッテ吾等ノ道ヲ行ワントスル所以ナリ　若シソレ　盧俊儀ト石秀ノ二人ヲ故ナク断刑ニ処サバ　梁山泊数万ノ天兵ハ　タチドコロニ北京ヲ焼キ払ワン　且ツ悪吏ノ一人タリトモ　鬼籍ノ黒簿ヨリ除キ　ソノ命ヲ助ケオクコト無カラン

銘記セヨ　曾ツテ梁党ノ宣言ニシテ　必ズ行ワザルハ無キ事ヲ。

サラニ又　愕クヲ要セズ　孝子　仁者　純朴ノ善民マタ清廉ノ吏ニ至リテハ　是ヲ敬イ愛スルモ　誓ッテ是ヲ困苦セシメズ　乞ウ善大衆ヨ　御身等ハタダソノ天誅ヲ見　ソノ職ニ安ンジ居ラレヨ

「さーて？　これは容易ならんぞ。のう……王奉行、どうしたものだろう」

「どうも、ゆゆしいことに相成りましたな。何せい、朝廷直々の掃討軍ですら、たびたび打ち負かされて手を焼いているあいつらのこと」

「もし北京軍をあげて、戦うとせば」

「とても、だめでしょう。ヘタをすれば朝廷からの援軍もまにあいません。――ま、愚見をいってみれば、このさい、大牢中の二名は、生かしておくだけの形にしておき、第一には、急遽、都へ早打ちをお出しになること。第二には、北京軍をくりだして、一応、城外遠くの要路を塞ぐこと。――これが手おくれとなりますと、お手持の軍は失い、朝廷からは譴責をうけ、人民は足もとから騒ぎだすなど、収拾もつきますまい」

「む。余も同感だ。さっそく、大牢の番役人、蔡福、蔡慶にも、申しふくめろ」

そしてまた、即日。

北京府の兵馬総指揮官――大刀聞達と天王李成という正副の二将軍――が城外百余里の地、飛虎峪とよぶ山、また槐樹坡とよぶ街道の嶮に、布陣すべく、大兵で出勢して行った。

これがすでに、秋も半ば過ぎ――

梁山泊では、さきに神行太保の戴宗を走らせて、雲の上から伝単を撒き散らさせた直後において、北京出勢のしたくは

していた。
それも、こんどは、かんたんでないと見た用意のもとに、充分な馬匹兵糧を携行し、人数もまた、梁山泊全員を二つに割って、全兵力の半分を出動させた。
宋江の下に、軍師呉用。
ほか、歴戦の猛者が、幾十隊の部将となってくりだしたが、中には紅一点の女頭領、一丈青の扈三娘も、こんどは一軍をひきいて行った。
朱地に「女将軍一丈青」と金繍した軍旗は、やがて敵のあらぎもをひしいだ。
槐樹坡のたたかい。また飛虎峪の激戦。
されば、すさまじいものだったが、結局、北京軍はついにさんざんに打ちやぶられてしまった。そして大刀聞達も、副将李成も、それぞれ、残兵の中に押し揉まれながら、まるで身一つのようなぶざまで逃げ帰って来た。以後、北京の関門に命からがら辿り着いた兵を数え入れても、発向の時の三分の一にさえ足らなかった。
「なんたることだ！　これではまるで、殲滅に会ったも同様な惨敗にひとしいではないか」
梁中書は、驚きのあまり、床を踏み鳴らして、その弾みに、沓を飛ばした。沓は飛んで、報告のため、階下に畏服していた李成の顔に当って落ちた。
「どう仰せられても、面目はございません」と、李成は沓を拾って捧げながら――「このうえは、再度の早飛脚で朝廷のご急援を切に仰ぐこと。――次には、近くの各県に合力を下知せられること。――またここは、聞達が第二の新手をくりだしておりますから、一そうそれを強めるため、城壁にはさらに塁をかさね、砲石、踏弓、火箭、目つぶし、あらゆる防禦物を揃えて、守備に怠りないことです」
寄手の泊軍、宋江の指揮下では、もう短兵急な猛攻は止めていた。東、西、北の三門はかたい包囲下においていたが、わざと南大門の一方だけはあけておき、自由に往来させている。――なお交渉の余地あることをわざとそこに見せておいたのだ。――城中の大牢にある二人の者の露命につつがなかれと、切に祈る気もちから。
だがこれは、双方にとっての微妙なかねあいだ。梁中書も、獄中の者を殺しはしない。時を稼ぐためにである。
中書の急使は、その南大門を忍び出て、はや昼夜、都へ向って、馬にムチ打っていた。使者は腹心の王定という者だった。日かずもまたたく、彼は帝都開封東京の汴城に着いた。だが、宮内府の一門にたどり着くやいな、気のゆるみでか、気絶してしまった。
大臣蔡京は、憂いにみちた眉色で、白虎節堂の大臣席に着席している。
ほかに五大臣、また、枢密院長の童貫、枢密院の全議員、各司庁、司署の長官らが、しいんと、満堂にみちて、彼の口もとをみまもっていた。
「みな、聞かれたであろうが」
蔡京が言った。
「……いま、北京府の急使、王定が訴えに聞けば、これを一地方の擾乱とだけでは見過ごせん。天下の兇事、大宋朝廷の

ご威厳にかかわる」
沈痛な語気だった。
この蔡大臣、かの梁中書には岳父にあたるひとである。つまり中書夫人の実父なのだ。――当然、私の情愛と心痛もある。
しかし、彼が最も胸をいためたのは、現皇帝の徽宗陛下が、夜は管絃、昼は画院の画家たちを相手に絵を描いてのみおられ、いっこう天下の変もよそにしておられることだった。すでに、北京からは先にも禁軍の救援を求める早打が来ているが、それにも早速なご会議のもようはなく、またつづいての、王定の請願を奏上すれば「――よきにしておけ。枢密院の衆議にまかせる」というのみの御諚だけだ。
「諸卿」
と、彼はふたたび発言して、全議員の上を見わたした。彼のわたくしの心配も、国を憂える肺腑のひびきと聞えなくもない。
「なにか、策はないか。第一に人だ。軍を派すにしても、その人を得ざれば、だ。これと思う人物があらば、遅疑なく、推挙してもらいたい」
依然、たれも沈黙している。求めて重大な責任を負うことはない。といったような尻込みなのだ。
するとここに、防禦保儀使の宣賛という者があって、はるか末席から直立して言った。
「大臣。――ご推薦したい人物があります。彼こそ隠れた傑物と信じるからです」
ところが、彼の大真面目な進言も、あちこちでクスクス笑う声にもみけされた。保儀使といえば軍人でも佐官に過ぎない。のみならずこの宣賛は、西蕃との混血児である。ヒゲは赤く、ちぢれ毛で、鍋底のような顔にまた念入りにも雄大なる獅子ッ鼻ときている。
かつては、或る西蕃王の邸にいて、郡馬（王の女婿）となったが、その黒い姫君すらも、彼を嫌って、振り抜いたとかで、自分からそこを追ン出てしまったため、以来、〝醜郡馬〟という名誉あるアダ名すら貰っている宣賛だった。――だから誰もその発言に本気で耳をかそうとしなかった。
しかし、蔡大臣は、宣賛の大真面目なところを買って、
「む！　言って見給え。君が推すその人物とは？」
と、傾聴すべき容子をみせた。
「はっ」と、宣賛は、直立不動のまま――
「目下、蒲東にいて、警部長の現職にある者ですが」
「なんだ、そんな下級の警吏か」
「はいっ。……ですが家系は古く、三国時代の後漢の名臣、関羽のただしい子孫にあたり、苗字を関、名を勝といい、よく兵書を読み、武技に長け、黙々と、田舎警部を勤めてはいますが、もし彼に地位と礼を与えるなら、きっと天下のお役に立つにちがいありません」
と、口を極めて、ほめたたえた。
これは〝掘り出し物〟かもしれない。蔡大臣はやや意をうごかした。が、重大なる任命だ。ひとまずその日の会議は閉じ、人事院をして調べさせた。その結果、ついに宣賛を蒲東にやって、ともかく関勝を宮内府へ呼んでみることにした。
洛外、蒲東は小さな田舎町である。

そこの警部局へ、ひょっこり訪ねてきた宣賛の姿に、
「やあ、これはおどろいた。何年ぶりだろう。いったい何の用で？」
と、関勝は狭い役室の中に立って、友の手を握り、まずと、汚い椅子をすすめた。
「じつは、その……」と、さっそく用向きを切り出しかけたが、関勝のそばには、べつな一人の男がいた。何者だかわからない？
「いや、先に紹介しよう。宣君、ここにいるのは僕の義兄弟で、郝思文という変った姓名の人でね。このひとのおふくろが、井木犴（二十八宿星の一ツ）がお腹に宿ると夢みて産れたというんだから、生れつきからして変っている。しかも武芸十八般の達人だ。以後、よろしくたのむよ」
「それは、どうも。……拙者は関君の古い友人、保儀使の宣賛という者です。いや、ちょうどいい時に居合せて下すった。——どうです、ひとつごいっしょに、帝都の内閣まで来てくれませんか。というのも蔡大臣閣下のお招きなんです。仔細はこのお召状の内にありますからご一見の上で」
関勝はそれを読んで感激にふるえた。郝思文に相談すると、これもまた否やはない。——俄に、家族を呼び、家事のあとを託して、三名はその日のうちに東京へ急いだ。
まず官邸に入る。
蔡閣下との対面は、例の白虎節堂だった。ただし、関勝ひとりだけの謁見で、階の下に、拝を執る。——蔡京がつらつら見るに、なるほどすばらしい偉丈夫だ。身ノ丈八尺余、髯美しく、まなこは鳳眼——。気に入った。
「関警部長。お年は幾つだの？」
「三十二に相成ります」
「兵学、武芸、すこぶる素養に富むと聞くが、どうして田舎警部などで満足していたのか」
「いや蛟龍も、時に会わねば、いたしかたございません」
「その〝時〟を汝に与えよう。梁山泊の暴徒が、先頃から北京府の城をかこんで、良民を苦しめておる。その害をのぞく自信があるか」
「なきにしもあらず、です。水滸の賊が、われから、本拠の泊巣を離れて遠く出たのこそ運の尽き。——北京の難を、直接、救わんとすれば大きな犠牲を要しますが、彼らの留守を襲って、先に、梁山泊を陥してしまえば、元々、烏合の衆、あとは苦もなき掃討でかたづきましょう」
「なるほど。——魏ヲ囲ンデ趙ヲ救ウ——の策か。さすが達見。よろしい、今日以後、君を推して征賊の将軍とする。この一生一期の大機会を君もよく活かしたまえ」
その日に、上奏、また枢密院の任命式なども行われ、ほどなく、一万五千の大軍が、都門を立った。
郝思文が先鋒、宣賛が殿軍、段常が輜重隊。そして総司令関勝は、中軍という編制。——これが満都の歓呼と注目をあびて汴城を立つ日の巷に歌があった。

漢代の功臣
三国の良将の末裔
いま赤兎馬に似たるに跨がり
繍旗、金甲、燦として征く
行く手の雲や厚く

搏浪の水涯は嶮し
自愛せよ、大刀の関勝
関菩薩（関羽ノコト）の名に恥じぬ
義あり勇ある今日の好漢

十八　人を殺すの兵略は、人を生かすの策に及ばぬこと

北京の天地は、そろそろ冬の荒涼を思わせ、遠山はすでに白い雪だった。

城外の野に、軍幕をつらねて、朝夕、ひょうひょうの寒風にはためかれている一舎の内に、宋江は今日しも、深い思案に沈んでいた。

「ああ、どうもすこし戦略を過ったようだ。一気に城中へ攻め込めば、大牢にいる盧員外と石秀の命があぶない。……と手加減しているまに、いつか冬となってきた。いや冬のみならず、各府県の援軍が来て、城壁の守りもいよいよ固い。……もしこのうえ京師の正規軍が大挙して、これへ下ってでも来た日には？」

ところへ、呉用が顔を見せた。

「宋先生」

「お。軍師」

「お驚きになってはいけませんぞ。意外な変となってきた」

「どうしたのですか」

「梁山泊があぶない！　危機に瀕していると、たったいま、神行太保の報らせです」

「えっ。では泊内から裏切りでも」

「いや、東京の蔡大臣が、蒲東の大刀関勝という者を抜擢し、彼に大軍をさずけて差しくだしました。ところが、この関勝は、有名な後漢の名臣関羽の子孫。なかなか勇武奇略があるらしい。北京へ向って来ずに、われらの留守をついて、いきなり梁山泊をとりかこんでしまったというわけなので」

「しまった。それこそ〝魏ヲ囲ンデ趙ヲ救ウ〟の策……。やられましたな」

「だが、まにあわぬことはない。留守の張順、張横、李俊、童威、童猛、阮ノ三兄弟、そのほかも、必死で防戦中とのこと。ともあれ、さっそく引き揚げましょう」

しかし、これがまた一大難事だ。

城中では、すでに京師からの密令で、このことは知っている。――必然、宋江軍の総退陣を見越して、一挙に、追い打ちをかけんとしている気味合いが歴々と見えていた。

それも覚悟の上として退くしかない。

宋江は、小李広の花栄、豹子頭林冲、また呼延灼などに、殿軍を命じて、一角の陣から引き揚げを開始した。……と見るや、敵は城をひらき、どっと飛虎峪の嶮まで猛追撃してきたが、ここにも伏兵がおかれていたので、逆に彼らは大いたでを負って、逃げもどってしまった様子。それからは、一路、留守の危機へと帰りを急ぐ、梁山泊数千の山兵とその頭領の面々だった。

そして早くも水滸の寨を彼方に望みうる近くまでは来たが、偵察によると、

「沿岸は諸所、関勝の陣地で、これから先は、蟻の通る隙もありません」

と、物見はみな口を揃えて、官軍のゆゆしさをいう。
はたと、行軍は行きなやんだ。第一には、どう泊内との連絡をとるかであった。ところが、その晩のこと、細い水路を辿り抜けてきた一そうの〝忍び舟〟がある。捕えてみる、これなん味方の一人、浪裏白跳の張順だった。
「おう張順か。泊内の士気はどうだ。まだ一ヵ所も破られてはいないだろうな」
宋江に問われると、張順は面目なげに言った。
「さ。それが……必死の防ぎで、からくも、鴨嘴灘から金沙灘の岸まで、保ちささえてはきましたが、残念なことに、兄弟分の張横と阮小七の二人が、関勝の手に捕虜とされてしまいました。……で、留守隊一同、首を長くして、お待ちしていたわけなんで」
「なに、張横、阮小七のふたりが敵にいけどられたと。……はて、それは戦法が難しくなったな。下手に出れば、たちまち、陣頭の血祭りにされるだろうし」
なお、仔細をきいてみると、張横は得意の水戦を用いて、敵の攪乱に出かけ、かえって敵の計におちて捕われたもの。また阮小七も、その復讐戦を挑んで、逆に、関勝の奇計に引ッかかったものだという。
「なにさま、敵将の関勝というのは、よほど奇略に富む者らしい。……軍師、なんぞご名策はありませんか」
呉用は、さっきから、髯を撫して、そばで聞いていたが、
「ともあれ、当ってみましょう。その戦ぶり、また、その人物を見てからの上の勝負だ。……いかなる智将といえ、その兵略には、限界もあるし癖もある。彼に得意な戦術があれば、その智を用いて智の裏を掻く……」
次の日の早朝。
まず味方の花栄を先陣にくり出して、敵の堅陣へと、ぶつけてみた。
その手の官軍方の将は例の、醜郡馬宣賛だった。乱戦半日の果て、小李広の花栄と醜郡馬とは、互いに面をあわせての接戦となったが、弓の花栄といわれた彼の射た一箭が、カン！
と醜郡馬の背なかの護心鏡にあたったので、
「これは」
と、きもを冷やしたか、さすがの宣賛も陣を崩して逃げなだれた。
しかしそれは〝新手がわり〟の扇開陣かと見えもする。
――蜘蛛の子と散ったうしろ側の二段の陣には、旌旗、弓列、霜のごとき矛隊が、厳然として控えていた。そしてその真ん中には、炭火のような赤い馬にまたがり、手に青龍刀の烈々たる冷光をひッさげた偉丈夫が、眼をほそめて、全戦場を見わたしている。威厳、いやその絶妙な陣容、たとえば底知れぬ深淵のごときものがあって、とても、うかとは近づき難い。
――時しも、すでに紫の夕雲が、水滸の蕭条たる彼方に真ッ赤な日輪をのんで沈みかけている。やがて、吹き渡る薄暮の暗い風のまにまに、相互とも、事なく退き鉦を打鳴らしていた。
露営の天幕には、夜の霜が降りた。宋江は、すっかり何かに感じ入っている。彼はよく人を観る。
「さすがは、漢代の功臣の末裔――」

と、一、二度ならず呟いた。
「まことに、関勝とは、聞きしにまさる武人ではある。ちかごろ稀れに見る人品骨柄」
これを、そばで聞いていた林冲は、すくなからず不愉快な顔をして、
「はて、宋統領としたことが、なんだって、敵にそんな気おくれを持たれるのか。自体、宋先生は人に惚れ過ぎる癖がある。ようし、明日の戦いには、関勝をおびき寄せて、統領の目の前で、関勝のだらしなさを、この林冲が見せてやる」
と、心でちかった。
そして翌日の激戦で、彼は思いどおりに関勝をひきよせた。だが、関勝の方は、彼をあしらうのみで、眼中にも入れている風ではない。
「宋江、出でよ」
と、喚きつづけ、
「水溜りの子孫どもに用はない。宋江、みずから出て、勝負を決しろ」
と、陣前へ来て、近々と呼ばわった。
引き止める人々を排して、宋江はサッと馬を乗り出し、すぐ馬を降りて、関勝へ向い、まるでふだんのような礼をした。
「元、鄆城の小役人、宋江です。漢の代の良臣のご子孫、お見知りおき下さい」
「やあ、汝が宋江か。なんで世を紊し、朝廷にたてをつくぞ」
「世をみだす者は、われらではありません。朝廷ご自体。いや讒佞の権臣、悪官吏のともがらです。されば、私たちは天に代って」
「黙れッ、黙れッ。天とはここに臨んだ錦旗をいう。身のほど知れ、この鼠賊め。ただちに、兇器を投げて、降参いたせばよし、さなくば、みじんにいたすぞよ」
これを見、宋江の卑下と関勝の傲岸に腹をたてた林冲、史進、秦明、馬麟などの連中は、小癪な！　とばかり前後から、関勝ひとりをつつんで、喚きかかった。
いかに関勝の青龍刀たりといえ、これにはおよぶべくもない。もちろん、官軍方からも、
「わが関将軍を打たすな」
と、どっと助太刀には出て来たが、あわや、関勝あやうし、と見えた。
ところが、宋江は急に、鉦を打たせて、味方の猛者をひきとらせてしまった。さあ、彼の身辺は、不平、ごうごうである。中には、
「なんだって、かんじんなところで、いくさをお止めなされたのか。これでは、いくさにも何もなりはしない」
と、突っかかって来る者さえある。
宋江は、屹となって、たしなめた。
「諸君は相手を殺すのが勝ちだと思っているが、私は、人を生かすことをもって勝利としている。われわれの仲間は、世に忠義をむねとし、人に仁と義をもって接するのが、本来の約束ではなかったか。いわんや、関勝は忠臣の子孫、その先祖は神に祀られている者だ。もし彼に徳と智とまことの勇があるなら、宋江はいま預かっている統領の椅子を、彼に譲ってもよいとさえ思っているのだ」
打てば響く。――宋江にあったこの心は、関勝の胸にも何

かを呼び起していたにちがいない。――彼はその夜の陣営で、ひとり密かに考えていた。

「はてなあ？　宋江というやつは解せん男だ。おれの危なくなった刹那に、戦を止めさせたのは、なんのつもりか？」

その魂胆が気になって仕方がない。だが解けなかった。で、とうとう部下に命じて、かねて捕虜の檻車へ放り込んでいた囚人の張横と阮小七とを引っぱり出させ、宋江の人となりを問いただしてみた。

ふたりとも、口を揃えて、憚るなく、宋江の人間を称えた。

「いま頃まだ、及時雨の宋公明を、知らねえなんざ、よくよくお前さんは、世事の盲か、軍人なら軍人のもぐりだろうぜ。山東、河北では、三ツ子ですらが知ってらあ。義にあつく、お情けぶかく、だれにも慕われなさる人民の中の光明みたいなお人としてだ」

関勝は、かえって、なにか辱じてしまった。つまらない糾問をしたとは思いながら快々と、こころも愉しまず、幕舎を出て、独り寒月を仰いでいた。すると――

「将軍、ここにおいでですか」

「歩哨兵か。なんだ」

「ただいま、賊将にしては、いやしからぬ人品の者が」

「なに、敵中から」

「はっ。抜け出して来たものらしく、ひそかに、関元帥にお目にかかりたいといって来ましたが」

「ひとりか」

「はっ。ただ一騎で」

「ふうん……？　ま、連れて来てみろ」

密々、この夜、彼をここへ訪ねて来たのは、呼延灼であった。

会うのは初めてだが、関勝もつとにその名は知っている。有名なる元、禁軍の一将軍だ。――禁軍の連環馬軍をひきいて遠征し、敗れて、ついに梁山泊の賊寨に投じ、こんども敵中にいることは分っていた。

「御用は？」

と、関勝の眼は冷たい。

「じつは……」と、呼延灼は、声をひそめ「待っていたのです。今日の日を」

「それは、おかしいじゃないですか。君は今や、賊将の一人でしょう。僕は朝廷の使軍の将だ。いますぐ君に縄を打って、都へ押送することだって出来る」

「いや、それがしとて、本心、賊に降伏していたわけじゃない。――今日、現に戦場であなたの急を救った者は、じつはこの私なのだ。――あのさい、林冲、史進、秦明などに囲まれて、御辺の身、危うしと見たので、突嗟に、退き鉦を鳴らさせたので……あとでは、さんざんに、宋江から怒られたが」

「ほ。さては、そんなわけだったのか」

「なお、疑わしく思われるかもしれんが、機会があったら、官軍へ投じて、帰順したいものと、ひそかに諜し合っている同志の者は少なくないのです。――林冲も秦明も、共に元は都出の軍人。……どうです元帥、彼らにその機会を与えてくれませんか」

要するに、もとこれ同根の誼み。つい、関勝は彼の口車に

乗ったのである。だんだんにうちとけて、その夜は、呼延灼と共に、陣中鍋をつッつきあい、大いに飲んで、旧情を、いや偶然なる新情と邂逅とを、よろこびあった。

そして呼延灼のすすめるままに、翌晩、彼はめんみつな布陣を先にととのえおき、身は、単騎軽装となって、呼延灼を案内に、敵中深くへ忍んで行った。

「叱っ……」

と、延灼は、ほどよい地点で、関勝の駒を制した。

彼のいうところによれば。

このへんで、火合図する——

すると、元、青州の総司令をしていた黄信や、また帰順の腹のある林冲、秦明らも「待っていた！」とばかり、賊軍の内から裏切りを起す。

そこを、その機を、かねて、言いふくめておいた郝思文と宣賛の二軍が、敵の両わきから、一せいに、こぞッて出る。さすれば賊の陣は、夜討の不意と、内応の混乱とに、めちゃくちゃとなって、四分五裂するにちがいない。——宋江、呉用、の大物から以下の賊将どもまで、一網打尽とすることは、まさに今夜にあり——という計だった。

しかし、この戦法は、すこぶる妙にして、じつは大あて外れだった。

まさしく、内応のうごきは見えたが、宋江も呉用も、ここの陣中にはいず、一だん遠い彼方の小山の嶺に、紅火点々と、その在る所を見せている。

「しまった。申しわけありません。……這奴らは、何かさって、襲われる寸前に、彼方へ退がったものとみえます」

延灼は、言って、詫びた。けれど、全然、功がなかったわけでもない。内応によって官軍は勝ったのだし、一陣地は奪取したのだ——そのうえ、内応の賊将、黄信、林冲、史進、秦明などは、挙げて彼の馬前へ来て、投降していた。

「あの山には」

と、関勝は、投降者を見廻しながら訊ねた。

「防備があるのか。かたい防寨でもきずいてあるのか」

「そんな物はありません。裸山で——」

と、延灼はさらに言った。

「あわてて、仮に逃げ退いただけのものです。ですから、四方へ逃げ散った賊兵が、まとまらないうちに、かしこを突けば、宋江を生け捕ることは、明け方までに遂げ得られましょう」

そこで、再度の潜行に出た。もちろん、宣賛、郝思文のふた手も連れて。——ところが、すでにこれが宋江の術に落ちていたものだった。——関勝は途中でとつぜん馬もろとも陥穽にころげこんだ。同時に、周囲にいた黄信、史進、秦明らが、たちどころに、彼の上へおいかぶさり、そのよろいも甲も剥いで、捕縛してしまった。

郝思文もまた、べつな所で、山兵の埋伏に出会って捕われ、例の、醜郡馬宣賛も、翌朝、湖畔に追いつめられて、いけどられた。その湖畔の官軍本営といえば、すでに迂回路をとって出た撲天鵰の李応が、先にもう占領していた。

そして、檻車のうちに放り込まれていた、味方の阮小七、張横の二名も、無事に救い出されている。

かくて、一葦帯水の梁山泊へ向って、その朝、ただちに、

――戦サ止ム、吾レ勝テリ、船送レ
の合図がなされた。水は歓声に沸き、留守の山は、歓呼に震ッた。
金沙灘のあいだを、一日じゅう、大船や小舟の群れが行き来した。官軍の陣跡からめしあげた軍器糧米の量から馬匹などでもたいへんな数量である。
すでに山兵のあらましを、呉用そのほかの頭分も「――まずは」と、無事な泊内を見て帰っていた。宋江は、忠義堂にいて、さっそく、関勝とほか二人の虜将を目の前に曳いて来させた。
「これは、さだめし、ご窮屈でしたろうに」
と、宋江はすぐ、自身の手で、三名の縄を解いてやり、とくに関勝の腕を扶けて、中央の椅子へかけさせた。
関勝は、うろたえた。
「なんでまた、わたくしを」
「いやいや、やむをえずとは申せ、流離亡命の宋江の如きが、錦繍の帝旗にてむかい、あなたへも、さんざんな無礼、どうか平におゆるしを」
そこへ、呼延灼も来て、あやまった。
「関元帥。憎いやつと、お恨みでしょう。ですが、敬愛するあなたのため、また、宋統領の命で、やむなく、おだまし申したこと。どうか悪しからず水に流してください」
関勝はしかし、それに答えず、暗然たるままで、同憂の宣賛と郝思文を見て言った。
「君たち二人には、じつに気のどくなことをした。僕さえいないものだったら、二人とも、この難には会わなかったろうに。……が、かんべんしてくれ給え。こうなったからには」
「いや、あなたのせいではない。朝廷のためだ。世のためだ。なんとも思っているものか」
「では、覚悟をしてくれるか」
「百も覚悟はしているさ」
「ありがたい」と、関勝は身をただして宋江へ、言い払った。
「いまさら、よけいな手間暇はいるまい。わが友はみなかくの如しだ。……さ、はやく首を刎ねてくれ」
「斬れません。生はあなた方のもの、宋江の自由にはできない」
「なんの、こっちは、囚われの身。どうにだって出来ようが。僕も関菩薩の子孫だ。恥をかかせてくれるな」
「なぜ、生きてその言を、身にお示しになろうとはしないのか。関菩薩が哭いていましょう。世のみだれ、官の腐敗、民の困窮、目をおおいたいばかりではありませんか。私たちはそれに義憤を感じる者です。ここの天星廟にちかいをたてて天に代って道を行なおうとしている者です。関将軍、またご両所、篤と、生きても長からぬ漢の一生をお考えください。いまとはいいません。――それなる呼延灼、黄信、彭玘、林冲らとも、よくおはなしあってみてください。その上で、わたくしどもにお力をかそうというお心になってくれたら、泊中一同は、よろこんであなた方を迎え、義の友として、今生を共にするに、やぶさかな者ではありません」
関勝は、いつか、その首を深くたれていた。郝思文と宣賛も、また、沁々と聞いていた。
この三名が、やがて、梁山泊のどんなものかを知って、翻然

と、仲間入りを約したのは、いうまでもあるまい。いや、この三者ばかりでなく、官軍の虜兵幾千という者もまた、これに近い寛大な処置に浴した。

老兵やら、年若い少年兵には、かねをくれて、それぞれの故郷へ返してやり、望む者だけを、泊兵の内に入れた。――さらには、薛永、時遷などを、ひそかに東京へ派して、蒲東にある関勝の家族たちをも、ひそかに、梁山泊へひきとる手配なども、忘れられてはいなかった。

こうして、いつか冬も、深くなっていた。

それにつけ、宋江は、いまなお、大牢のうちに幽囚されているであろう盧員外と石秀の身を思いやって、北京の空のみが、たえず胸のいたみであった。

「ま、そうクヨクヨなさらないで」

と、呉用はなぐさめ、

「――今日、関勝の方から申し出ました。一命をたすけられたうえ、何もせず、暖衣飽食にあまえているのは心苦しい。宣賛、郝思文と共に、先鋒をうけたまわって、再度の北京攻めには、ぜひ一ト働きいたしたい、と。ひとつ、それを先手に、春を待たず、出勢しようではありませんか」

と、言った。

「この雪に」

「そうです。雪中の行軍は、困難極まる。けれど、それだけに、北京府では、油断しているだろうとも思われる」

その日も、霏々たる雪だった。水も芦も遠い山も、雪ならぬ所はなく、雪の声と、鴻の啼き渡るほか、灰色の空には、毎日、何の変化もなかった。

## 十九　はれもの医者の安先生、往診あって帰りはない事

北京の空の下では、そのご、はかばかしい戦果もなかった。

毎日が雪である。なんといっても、厳冬の攻撃はムリだったのだ。守るに利だ、攻めるには困難が多い。――敵を打つには、誘き出して、これを撃つしかない。

そのうえ、城外三十里の野に、朝夕、吹きさらされている露営の凌ぎも容易でなく、宋江はこのところ、風邪ごこちだった。食がすすまず、微熱がある。

――で、ついにその日は司令部の幕舎のうちで横になってしまった。謹厳な彼として、陣中、昼の臥床に仆れるなどは、けだし、よくよくであったらしい。

すると、幕門の衛兵長、張順が入って来て、しきりに彼をよびおこしていた。

「総統総統。ただいま、軍師の呉用大人と、先ごろ梁山泊へ入った関羽の子孫の関勝とが、二人づれで、戦場のご報告にとこれへ見えましたが」

聞くと、宋江は刎ね起きて、すぐさま軍衣の容をただし

「――これへ」と、つねのごとく、呉用と関勝の二人に会った。

関勝は、まず詫びた。自分がすすめた出兵なのに、今日までなんらの功も挙げえないでと、恥じるかのように言ったのだ。――すると、呉用はそのそばから、

「いやいや、宋先生、さすがは関勝でした、賞めてやってい

ただきたい。じつは昨夜来の戦いで、敵を南門外におびき出し、関勝は、敵の急先鋒索超を手捕りにしたばかりでなく、索超を説いて、われらの仲間へ入ることを承知させた。――功がないどころか、見上げたものです。やはり関羽の末裔関勝だけのものはある」

と、報告した。

「それは、すばらしい」

宋江もよろこんで、共に、彼の軍功を賞めたたえたが、どうも調子がへんである。唇の渇きや皮膚の血色も常ではない。呉用は目ざとく、すぐ訊ねた。

「宋先生。どこかお加減が悪いのではありませんか」

「いや、たいしたことはないでしょう。ただここ七日ほど微熱を覚えて、どうも食がすすみませんが」

「そりゃいかん。大熱にきまっている。眼底が赤い」

「眼が赤いのは、じつは今、午睡をとっていたからです。ああそれで思い出した。張順に起されたとき、私は夢を見ていたようだ……」

「どんな夢を？」

「死んだ晁蓋天王が、枕元に立って、ひどく心配そうな顔をしているのです。そして梁山泊の方を指さして、しきりに、帰れ帰れとでも言っているようでしたが」

「そこを呼び起されたわけですか」

「ええ。醒めてみると、ぐッしょり汗をかいていました。妙な夢をみるものですな」

「はアて。ただの夢とは思われん。総統、あなたは大事なお体なのだ。つまらん我慢はしないでください」

「いや、夢は、五臓の疲れ。おそらく、風邪でしょう。ご心配はいりません」

宋江はあくまで軽く言っていた。しかしその晩、降参の索超を加えて一酌汲もうと約していたのに、彼はその席へすら出ず、もうたいへんな苦しみ方だ。人々が驚いて体をみると、なんと、背なかの一部に、大きなはれものができていた。癰だったのだ。癰といえば、命とりである。呉用は愕然として言った。

「夢はまぎれもなく正夢だ。梁山泊へ帰れとのお告げなのにちがいない。ここにいては宋先生の治療もかなわず、全軍もまた危殆に陥ちよう。すわ大事、すわ大事」

俄に全軍、引揚げと急にきまった。けれど、梁山泊にも名医はいない。医師はどうするか？　評議となった。

すると、浪裏白跳の張順が、その役目を買って出た。――自分の郷里、潯陽江のちかい所に、江南随一というはれもの医者が住んでいる。そいつを捜して、梁山泊へ連れて行きましょう、というのだった。

「おお、そんな名医がいるならぜひ行ってくれい。一日も早くだ。手違いのないように」

と、呉用は彼に、かねで百金、路銀三十両をあずけて、その場から西へ立たせた。――そして即日、戦野の幕舎千旗を払って退却に移ったが、北京府の城内では、この変を知っても、たびたび奇計に懲りていたので、

「またも騙しの手か？」

と、狐疑したままで、ついつい、追撃にも出ずにしまった。

一方は、旅を急ぐ一人の男、張順。

幾十日の風雪を凌いで、やっと揚子江のほとりに出ていた。この日も雪は梨の花と散りまがい、見れば、江岸の枯れ芦の叢から、一ト筋の夕煙が揚っている。
「おウウい、舟の衆。渡船じゃねえのか」
「そうだよう。渡船じゃねえよーっ」
「いくらでも駄賃はハズむぜ。潯陽江まで渡してくんねえ。恩に着るよ」
「かねとなら相談にのッてもいいがね。うんと出すかい」
「出すとも、いうだけ出そうじゃねえか」
「よしきた！　乗りねえ」
苫をかぶせた漁船だった。船頭は二人いる。
案外な親切者で、張順の濡れた着物を火に焙ッてくれたり、寒いだろうといって、雑炊鍋の物を馳走してくれ、また自分の小夜着と木枕を出して、
「潯陽江じゃあ、だいぶ間がある。ま、客人、一ト寝み、横になってござらッしゃい」
と、すすめるなど、張順もつい、旅のつかれと、人の情けに温もられて、いつか波上の身をも忘れていた。
――ところが、目がさめてみたときは、もう遅い。体は荒縄でしばられていた。そして、船頭の一人は、自分の肌から抜き取ッた胴巻を口に咥え、手に薄刃のだんびらをひっさげていた。
「やっ？　ち、畜生。おれに毒入りの雑炊を食わせやがったんだな」
「あたりめえよ」と、もうひとりの若い者は、張順の体を船ベリに抑えつけて「――縁もゆかりもねえ野郎に、なんで、得もねえ親切気など出すものかよ。……だが兄哥、こんな薄野呂にしちゃあ、存外な大金を持ッてたものだな」
「やいやい。よけいなことはいわねえでもいい。このだんびらで、俺がそいつの素ッ首を叩ッ斬るから、てめえも、すこし船ベリの際へ出て、そいつの背中をぐッと前へ突ン出させろ」
「よしきた！　こうか！」
「そうだっ」
言ったと思うと、船頭のだんびらは、意外にも、仲間の男を、一颯のもとに斬り殺し、そしてまたすぐ、張順の頭上へ、次のやいばを振りかぶって来た。張順は体がきかない。振り下ろしてきた相手のものをかわすやいな、相手の腰の辺りを足で蹴とばして、身は、揚子江の流れへむかって飛びこんでいた。

元々、張順は、ここの生れだ。揚子江の水で産ぶ湯をつかい、大江の河童といわれたくらいな者で、水の中に浸ったままでも二タ晩や三晩は平気な男なのである。
縛られてはいたが、流れにまかせながら縄目を咬み切り、やがて南の岸へ、鮫のごとく、波を切って、泳ぎついていた。
「ううッ。陸のほうが、よっぽど寒いや」
張順は、火を見つけた。馳けだして行って見ると、一軒の田舎酒屋だ。
「わっ、助かった。火にあたらせてくれ。凍え死ぬ」
「おや、お客人、どうなすった？」
「じいさんよ。えれえ目にあっちまったよ。船の上で、毒を噛

まされ、路銀持ち物、みんな巻き上げられてこの裸さ」
「おまえさんは、山東のお人らしいが」
「ことばつきで分るのかね。元は、この地方の生れなんだが」
「山東から生れ故郷へ帰って来なすったというわけかの」
「ま。そんなわけだが、じつは建康府に、安道全ていう、はれもの医者がいるだろう。……あの先生をお迎えに来たんだよ」
「へえ、どちらから」
「だからよ、山東からだ」
「あっ、そうですかい」と、酒屋のじいさんは、独りで、なにか呑み込み顔して「――そうですかい、それでわかりました。はい」
「何がよ、じいさん」
「おかくしなさるには及びません。あなたは浪裏白跳の張順さんでございましょう」
「げっ。どうして分る？」
「梁山泊へ突ッ走りなすったと、一ト頃はもうえらい評判。それにまた、この寒中、揚子江を泳ぎ渡って来るなんてえお人は、そうザラにあるものじゃございませぬ」
「隠すまい。その通りだ。じつは山寨の大親分さま宋公明というお方が、癰をおわずらいなすッたんで、はれもの医者の安道全を迎えに来たのよ。ところが、船強盗にうッかり嵌められ、路銀から医者に渡すかねまですっかり奪られてしまい、いや、俺としたことが、途方に暮れているところなのさ」
「おやおや、そんなことでしたら、張順さん、ご心配にはおよびますまい。ひとつ伜に相談してごらんなされ」
「じいさんの、お伜かね」
「へい。兄弟中での、六番目のやつで、名は王定六、アダ名を活閻婆といわれております。こいつは毎日、酒桶を担って、揚子江の船着きという船着きを売り歩いておりますから、およそ船頭仲間のことなら何でも耳にしておりますでな」
「そいつは、ありがたい。さっそくひき会わせてもらおうか」
その晩は、ここに泊まり、あくる日、その活閻婆の王定六に会った。そして定六の話によれば、張順をだました船頭は、名うてな悪者、截江鬼の張旺にちがいあるまいとのことだった。
「だがね、もう一人いたよ。若いのが」
「その若い方は、孫五ッてえ野郎でしょう」
「けれど、その截江鬼が、どうして、仲間の孫五を殺したのだろう？」
「知れたことじゃありませんか。だんなの胴巻を奪って、中を見ると、思いがけない大金だ。そこで野郎、急に孫五と山分けするのが惜しくなってきたんでさ」
「なるほど、ひでえ悪党だな」
「きっと、野郎はあっしが見つけ出しますよ。それよりは旦那、急ぎの、御用の方が大切だ。だんなは少しもはやく安道全をお捜しなさい。こいつもまた、医術はうまいが、呑ン兵で助平で暢気坊ときているフラフラ医者。いつも家にいるとは限りませんでね」
王定六は、自分の着物から十両の銀子まで貸して、張順を、一日も早くと、建康府へ立たせてやった。それに力をえて、彼が、城市では槐橋のそばと聞いた、安道全の宅まで来てみ

ると、折もよく、ちょうど店の一ト間に薬研をすえて薬刻みをしている彼の姿が見えた。
「こんにちは。……どうも先生、お久しぶりで」
「はてね。おまえさんは？」
「お忘れかもしれませんが、たった一ぺん、おふくろの腫物を癒していただいたことがございましてね。はい。潯陽江の張順と申すんで」
「げッ、ではあの、梁山泊へ入ッた？」
「大きな声をしなさんな。じつは、宋公明さまが云々なわけで、命旦夕にせまっている。あっしと一しょに、すぐ行っておくんなさい」
「そ、そいつはムリだ」
「無理を承知のお願いです。この通りに」
「でも、じつは、わしの家内も病気でな」
「ご家内は、まさか、命旦夕ではございますまい。帰ったあとで、ゆっくりと、女房孝行して上げればいいじゃございませんか」
「じゃというて、山東の遠くでは」
「おいやですかい。そうですか。ぜひもございません。では仕方がねえ！」
「あっ、な、なにをなさるんで」
「ほッといてくれ。俺ア、この店をかりて、身の処置をつけざアならねえ。俺がここで自害したら、役人が来て、梁山泊の張順だ、さては安道全も一味の仲間かと、おまえさんにも嫌疑がかかるかもしれねえが」
「じょ、じょうだんではない。役所沙汰などはふるふるだよ。金看板もだいなしになってしまう」
「いいや、俺もこのままでは山東へ帰れねえ。気のどくだがおまえさんを抱き込んでここで死ぬ。ここは仲間の隠れ家だと言って死ぬ。観念しろよ、安道全」
「待ってくれ、行くよ、行くよ。覚悟をきめて」
「ええ、では承知してくれるか」
「宋公明といえば、天下の義人。ほかならぬお人のことだ。仕方もあるまい。だがの、今夜一ト晩ぐらいは、待ってくれてもいいだろう」
「そのまに、どろん……か」
「とんでもない。じゃあ、一しょに来なさるがいい」
家内の病気とは嘘らしい。元々この安道全は、医者の女好きという方で、建康府の花街には、大熱々となっている妓がある。
妓は、李巧奴といって、一流の歌妓ではないが、気転がよく、男惚れのする肌合いで、いつも濡れているような睫毛は濃くて翳が深い。
「……いいわ、もう。知らないわ、わたし」
と、妓は拗ねる。
絃の音に更けた新道の路次の一軒。夕方から飲みはじめて、すでに安道全先生は、海鼠のようになっていた。
ここは李巧奴の妓家で、通い馴れてもいるらしい。口説、いろいろあって、先生はひそかにうれしくもあり、持て余し気味でもあった。
「おい、巧奴、どうしたんだよ、飲まないのか」
「知りませんよ。どうせわたしなんか、あんたにとって、何

でもない女なんだから」
「なにをいうのじゃ。山東といったって、一ト月か、ふた月の旅。すぐ帰って来るからと言ってるんじゃないか。さ……きげんを直して、きげんよく立たせてくれ。心にもない女なら、なにもわざわざ別れになど来やせんよ」
「じゃあ、山東行きなんか、お止めになったらどうなの」
「それができるくらいなら、何も苦労は」
「……おや、まあ」
と、巧奴はこのとき、座敷のすみの一卓に、独りぼっちで飲んでいた男の方へ、その流し目をジロとやって、
「忘れていた。そこにはお差合いの人がいたのね。もし、お連れさんえ」
「なんだい」と、張順は空嘯ぶいて、ニヤニヤ笑う。
「ご親切ね、あなたは。人の心を知らないで、うちの先生を、一ト月もふた月も、遠いところへ、ご案内して下さるなんて」
「そうお礼ではいたみ入りますよ」
「ふン。真にうけてるよ、この人は」
「どうか、ゆっくりと、今夜一ト晩は、噛みつくなりとも舐めるなりとも、痴話口説のかぎりをおやりなさるがよい」
「よけいなお世話というもんよ。……そんな粋に気がつくなら、おまえさんこそ、さっさと消えて行ったらどう？」
「なるほど、そいつア一本参った。……では安道全先生、また明朝」
と、眼で念を押しながらひきさがった。男として胸くその悪さといったらないが、ここが我慢のしどころと、婆やにまで、小馬鹿にされされ、火の気もない小部屋にもぐって、寝込んだのだった。
すると、ま夜中すぎである。いちど、しいんと寝しずまったはずなのに、どこかで人のささやく声がする。そして中庭越しの向うの部屋には明りが灯いた。
「……はてな？」
油断のできる体ではない。張順は中庭へ潜んで窺ッていた。情人でもないらしいが、酒肴が運ばれてゆく。客はつまりこわもての客とみえ、婆やもなかなか気をつかっている。
「あら、いやだ。張旺さんたら、妬いてるんだね。いいえ、巧奴姐さんは、すぐ来ますからさ」
「だれだい。奥へ来ている旦つくッてえな、巧奴の情人か」
「とんでもない、ほれあの……槐橋のそばの、やぶ医者ですよ。なんでもあしたから二た月ほど、旅に立つとかいって」
「ああ、安道全か。あいつは小金を持ってるからな。だが婆さん、この截江鬼の張旺だって、いつもそうそう、素寒貧じゃねえんだぜ。巧奴にも言っといてくれ。これだけあったら当分は通いづめでも費いきれめえッて」
「おやまあ、たいしたお金を……」
「叱ッ。大きな声を出すな。それよりは、はやく巧奴を呼んで来な。あいつも、眼を細くするにちげえねえ」
婆やがいそいそ出て行くと、入れ代りに、しどけない女の影がちらと部屋へ入って行った。張順は引っ返して、厨所から料理庖丁を手にかくして来た。江上稼ぎの悪船頭、截江鬼をここで見てはもう見のがしておけないという気になっていたのである。
だが、彼が部屋の扉を開けたとたんに、灯は消されて、一

方の窓から、当の張旺はすばやく外へ逃げてしまった。「待てッ――」と、追わんとするのをまた、女が、必死にしがみついて来たのである。弾みで、張順はつい、殺す気もなく、女を刺し殺してしまった。――こいつはまずい！　と一瞬、悔いたがすでに追いつかない。

「婆や、ばあや。……巧奴、巧奴」

と、奥ではこの物音に目をさまして、安道全がうろうろしていた。腰でも抜かしたか婆やの声も返辞もない。やがて聞えたのは張順の声だった。

「先生、お目ざめで？」

「何だい？　今の物音は」

「その蝋燭を持って、先生、あっしの後からついておいでなさいよ」

「どこへ。なにしに」

「ひと目、巧奴に会って、きれいに、お諦めをつけて行った方がいいでしょう」

「えっ。巧奴が、どこにいるって？」

何気なく尾いて行ってみると、そこには男の飲みちらした卓があり二つ枕が帳台に見える。

いや安先生が、仰天したのは、当然、女の血まみれな死体であったが、もっと驚いたのは、張順が書いたらしい部屋の壁に見えた一行の血文字であった。

〝コノ淫婦ヲ殺シテ去ル者、槐橋ノ安道全也〟

## 二十　元宵節の千万燈、一時にこの世の修羅を現出すること

ここは江畔の一軒。例の田舎酒屋のじいさんと、せがれの王定六とが、いまし方、店を開けたばかりのところだった。

「お早う。先日は、どうも、何かと」

「おや張順さんか。オ、首尾よく、安道全先生のお供をして来なすったね」

聞くと、張順の後ろにいた旅姿の安先生は、首を振り振り、痛嘆した。

「ああ、分らんものだ。わしも多年病人の脈は診てきたが、自分の運命が一夜にこう変ろうとは、予見も出来なんだわえ」

「先生、どうして、そんなに悄気るんですえ」

「どうの、こうのッて、おまえたち。これが悄気ずにいられるかい。わしの可愛がッていた妓を亡くすし、おまけに、その女を殺した下手人みたいにされてしもうたんや。もう二度と故郷へも帰れはせん」

「いいじゃありませんか」と、王定六はヘラヘラ笑った。「槐橋先生といえば、はれもの患者も癒しなすったが、ずいぶん、女遊びや極道もやり尽しなすったはず。ここらが年貢の納めどきですぜ。やがてわたしたちも店をたたんで梁山泊へ行くつもりですから、以後よろしくお頼み申しますよ」

「なに、おまえらも、梁山泊へ」

「へい、先日、張順さんにもお願いしてあるんです。そうそう言い遅れたが、張順さん、ついさっき、截江鬼の張旺のや

つが、ここをあたふた通って行ったぜ」
「ふウむ、野郎、通って行ったか」
「一ト足ちがい、まったく惜しいことをした」
「いや、俺は大事な使いの途中、けちな仕返しには関ッていられねえよ」
「でも、あんな悪党を、みすみす逃がすのは、天道さまのおはからいに反くから、オイ截江鬼、今日は酒の仕入れに、北岸まで行きてえんだ、おめえの船で渡してくれろと、巧くだまして、彼方の渡口に野郎を待たせておきましたよ」
「そうか。そいつアほんとの渡りに舟。じゃあすぐ出かけよう」
もちろん、張順も安先生も、頭巾や笠で面を深く隠したから、一見、誰とも分らない。これを店のお客と偽って、王定六とじいさんとは、やがて待っていた截江鬼の船にのりこんだ。
ほどなく、大江のまん中へかかる。張順、帆綱の加減を取っている截江鬼のそばへ来て、着ていた蓑笠をかなぐり捨てた。
「張旺っ。ちょうど、この辺だったな。いつかの晩、てめえが俺に、うまい雑炊を食わせてくれたのは！」
「あっ、うぬは」
「覚えていたか、俺の顔を」
野太刀の抜打ちに斬り下げて、張順はその死骸を、ごみのように江の流れへ蹴おとした。
北岸へ着くと、王定六の親子は、いちどその船で元の住居へ返り、店や世帯の始末をすまして、後から追いつきますと言ってすぐ去った。
「待ってるよ、じいさん、王定六。おめえさんたちは恩人だ。きっと、梁山泊でみんなにひきあわせて、こんどのお礼はするからな」
張順は、手を振って別れ、あとは安先生とふたりきりで、道を急いだ。が、さて急いでも急いでも、山東までは前途遥かだ。
ところが、梁山泊の方では、宋江の病状がいよいよ重く、それも昼夜の苦しみなので、ついに神行太保の戴宗を、迎えに出したものであろう。――二人はこの戴宗と途中で出会った。そこで安先生ひとりだけは、戴宗の飛行の術に抱えられ、先に、山東の空へと翔けた。
水滸の泊では、人々、わんわんという出迎えである。それッとばかり、すぐ宋江のいる一閣の病室へ彼を通す。色街では海鼠のような安先生も、ひとたび重病人の生命に直面するや、さすが別人のように、どこか名医の風がある。
「なるほど、あぶないところだったな。しかし、手おくれではない」
診断がすむと安先生、委せておいてくれといわぬばかりな態である。その自信ぶりを見て一同ホッと安堵の胸をなでおろした。
吸出し膏ともいうべき物か。まっ黒な練薬の貼布。爪の先みたいな医刀による手術、灸治の法、強壮剤らしい煎薬などで、宋江の容体は、みるみる快くなり、二十日もたつと、元の体になりかけていた。
この間に、張順も、王定六とじいさんを連れて帰山し、泊

中は、一時に雪も氷も解けてきた観がある。
事実、冬もすでに終りに近い。かつは体も本復してみると、宋江はまた、北京の空に思いを馳せ、
「――ああ、獄中の盧俊儀、石秀は如何にせしぞ。二人の身こそ案じられる」
と、ついに呉用に胸を語って、自身、再度の出陣を言いはじめた。
「とんでもない、まだ瘡口もふさがったばかり、もし再発でもしたら」
と安道全が、たって止めれば、呉用もまた、かたく止めた。
「こんどはひとつ、ご養生かたがた、大寨の留守を願うといたしましょう。獄中の者の生命は、お案じには及びません。関勝の投降いらい、開封東京の蔡大臣は、北京府へたいして、とかく弱腰な指示をとっているようです。おそらく、梁中書もまた、獄の二名を、よう殺しきれますまい。――機会があれば、それを交渉の囮に使うつもりでいましょうから」
それから半月ほど後だった。
「冬が去り、春のはじめ。ここに一案が立ちました」
呉用が、宋江へ、その秘を語った。
「――春となれば、元宵節もまぢかです。北京府では毎年、年にいちどの大賑わい。その夜を期して、城市の内外から、一挙に事を果たそうという計ですが」
さらに、ことこまかな計略の内容を聞き、宋江は手を打ってよろこんだ。規模の大、敵の意表外を突くの策など、すべて兵法の、天の時、地の利、人の妙用などに、かなっている。
ここで所は北京府の公館、管領庁の一殿に移る――。
長官の梁中書は、兵馬総指揮の天王李成、大刀聞達、そのほか、南北の両奉行、以下の役人らを、ずらと目の前において。
「そうかなあ。わしは禁止がよいと思ったが、聞達、李成はじめ、多くの意見は、その逆か」
「はいっ……」と、李成が一同を代表していう。「ご高見にも、一理はありますが、なにせい、昨年から人心は極度な不安に落ち、政府の威信をすら疑っております。……そんなばあい、もしここで、彼らが一年の楽しみとしておる元宵節の行事までを、禁止すると発令したら、またも不景気の様相を一倍にし、怨嗟、蔭口、果ては暴動にもおよばぬ限りもありません」
「厄介なもんだなあ、じつに人民というやつは」
「ですが、その人心も、政治の持って行き方では、案外、他愛のない一面もあるものです。思うに、むしろ今年などは、前年よりも、元宵節は盛んにすべし、とご布告あってしかるべきかと存じられまする」
「なるほど。それもいいな」
「すなわち、祝祭は陰暦一月十三日から十七日までの、五日間となし、ご城内でも、高楼に百千の燈籠をかざり、門という門は、これを花と緑でうずめ、閣下もまた、吉例の〝春祭りの行列〟へおくり出しあるなど、人民と共に楽しむ事実をお示しあらねばなりません」
「大きに、そうだった。北京市は河北第一の大都会。四方の県や州へたいしても、威信を失わぬことが肝要だったな。よろしい。元宵節は例年以上にも盛大なる規模のもとにこれを

行え」

ここに、はやくもその日は、あと幾日と、せまっていた。

わけてことしは、大々的な元宵節になる見込みということが、四隣の州や県にも響いていたので、各地方の商人は、はや、ぞくぞくと、北京一都に雲集してくる。

旅館、小旅籠、素人宿。これもまたすごい前景気で、およそ五日間は、すでに予約ずみとなり、近県からの見物目あても、田舎土産をさげたりして、親類縁者、あらゆる手づるの家へもう泊りこんでいる。

こうして、いよいよ、当日となれば、つねの人口の倍にもふくれ上がったかと見える北京中の街は、万戸、花燈籠を軒にかざりたて、わき立つ歌や、酒の香やら、まさに歓楽の坩堝と化す。

たとえば、

富豪の家などでは、表へ向って、五色の屏風をたてならべ、書画の名品や古玩骨董の類を展観してみせたり、あるいは花器に花を盛って、茶を饗し、または〝飲み放題〟の振舞い酒をするなどもあって、この日に限り、日頃のケチンボといえど、よろこんで散財する風習がある。

また各町内ごとに踊り輪をつくって、これがジャンジャンドンドン、夜も昼も音頭と囃子で練りあるく。子供らは花火に狂い、わけて投げ爆竹の音は絶えまもない。

すべて祭りに暮れ祭りに明ける五日間なので、盛り場の人出はいうまでもなく、州橋通りの賑わいなどは言語に絶し、社火行列（祝いの仮装行列）だの、鰲山（燈籠で飾った花車）の鼓楽だの、いやもう、形容のしようもない。銅仏寺でさえ山門をひらいて、百千の花燈をとぼし、河北一のお茶屋と評判な翠雲楼ときては、とくに商売柄、その趣向もさまざまであり、花街の美嬌と絃歌をあげて、夜は空を焦がし、昼は昼で彩雲も停めるばかり……。

しかもこれらは城下だけのことで、北京城の城には、五色の祝旗が立ちならび、大名府、管領庁楼以下の官衙にも、例外なしに、緑門が建ち、花傘が飾られ、そして辻々には、騎馬の廂官（左右・南北の奉行役人）が辻警戒にあたり、ひどい酔ッぱらいは拉して行ったり、押し合う群集の交通整理などにもあたっている。

こうして、すでに、まつりも五日目。

遊び疲れ、飲みくたびれ、人も街も爛れ気味の黄昏れとなっていたが、なおまだ、

「ほれ！　今夜かぎりだ。あしたは知れぬぞ」

「踊れよ、踊れ」

「踊らにゃ、損だぞ」

「踊る阿呆に、見る阿呆」

と、熱に憑かれた男女の群れが、社火行列の仮装とも一つになって、北京全市の辻々に狂舞の袖と輪を描き、いよいよ、爆発的な本能図絵に地を染めていた。

すると、踊りの輪をツイと抜け出した若衆姿のひとりが、道ばたで籠を仕舞いかけていた物売り男の背を一つポンと叩いて耳もとへささやいた。

「青面獣。そろそろ、行くかね」

「あ。花栄か」

「叱ッ。廂官がこっちへ来た」

ふたりは、籠を抱えて、飛燕のごとく、たちまち、人波の中へ消え込んで行った。
すると、ふいに、
「御用だ」
と、そのうしろへ、追ッかけて来た者がある。
「ええ、びっくりした。蚤の時遷じゃねえか」
「はは。楊雄もあすこにいるぜ」
「みんな俺について来い」
と花栄は言って、また先へ走り出した。
時を一つにして、銅仏寺の前では、雲水姿の花和尚魯智深と、行者武松が、人待ち顔にたたずんでいた。
そこへ、乞食すがたに身を窶した劉唐だの、飴売りの王矮虎だの、また、小粋な茶屋女に化けた一丈青と、顧のおばさん。さらにお上りさんに変装した鄒淵、鄒潤。ほか十人以上もの人影がいつのまにか集まって、これもほどなく、夕闇まぎれ、どこへともなく消え去った——。
ところで、これはやや宵の口に入ってからのこと。
おなじく梁山泊の一員で、元来、貴人の風格のある例の小旋風柴進は、衣冠帯剣の身なりで、九紋龍史進と浪子燕青のふたりを供人に仕立て、大名府の小路の角に、さっきから、かなり長いことたたずんでいた。
折ふし、この夕、華やかに扮装った鉄騎五百人と軍楽隊との〝元宵の行列〟にまもられて城中の〝初春の宴〟から退がってきた梁中書の通過を、男女の見物人とともに見送っていたものらしいが、やがて群集が崩れ散ると、早足に、管領庁の門を、颯爽として入って行った。
「……」
はっと、門衛はそれに敬礼した。
怪しむにも怪しみえない大官と見えたものにちがいない。だが、庁内もずんと奥の、大牢門と呼ぶ獄界の境まで来ると、ここではふとスレちがった男が、
「おやっ？」
と、巨眼を光らして、振返った。
柴進も、ぎょっとして立ちどまる。が、それは死刑囚あずかりの押牢使蔡福だった。——かねてこの蔡福、蔡慶の兄弟には、その私宅で柴進から莫大な砂金が賄賂されていたことである。——蔡福はジッと相手を睨まえてはいたが、
「……」
何もいわない。
いや、黙って行ってしまったばかりでなく、足もとへ何かチンと落として去った。
拾い取ってみると、それは大牢の鍵だったのである。「よし！事すでに成る」と、柴進はよろこんだ。そして燕青、史進をひきつれて、死刑囚ばかりのいる大牢長屋へ馳けこんだ。
「あっ待てッ。通るのは、何者だっ」
「蔡福の弟。蔡慶か」
「いかにも一枝花の蔡慶だが」
「わしは梁山泊の柴進だ」
「げっ、柴進？　……。かねて兄貴から、名はきいていたが」
「ならば、委細のいきさつも聞いていよう。また、これにいる浪子燕青も顔見知りのはず。すぐ大牢を開けて、獄中の盧俊儀と石秀のふたりをわれらに渡してくれい」

「そいつはだめだ。鍵はいつも兄貴が肌身を離したこともねえ」
「いや、鍵はここにある」
「えっ？　オオほんとだ。どうしてこれを」
「蔡福はもう梁山泊入りと覚悟をきめ、今頃は家に帰って、家財家族の始末をしているにちがいない。君もすぐ家へ帰り給え。そして、兄と共に身支度を急げ。まもなく、北京全市は炎の海と修羅になるぞ」
いかに柴進が言っても、ことばだけでは、蔡慶には信じられなかったが、しかし、じつにこの時といっていい。夜空にあたって、奇怪な火の粉と、魔の雲に似た黒煙が見えだしていた。
城楼からの出火だった。按ずるに、火の原因は、昼、初春の宴に、たくさんな花籃が持ち込まれており、上には、蝶花の祭り簪がたくさん挿してあったが、籃の底には、硫黄、焔硝末、火薬玉などが、しこたま潜めてあったのではあるまいか。
そして、これを繞ッて、余興を見せたのは、掀雲社（遊芸人のクラブ）の連中だったが、中には地方芸人も交じっており、たとえば、解珍、解宝、鉄叫子の楽和といったような人物が、そのうちに紛れ込んでいなかったとは限らない。
かつは、方術師の公孫勝がいるし、火薬の智識にかけては凌振もいる。それに、蚤の時遷も、得意の忍びを用いて、あれから後、城の天主へ忍び入っていたかもしれない。
いずれにせよ、こんどの元宵節を機して、梁山泊の輩が、その一芸一能と変幻出没な化身のもとに、上下、あらゆる面の人中へ浸々と紛れ入っていたには相違なく、北京城頭の三層楼にあがった炎は、その目的行動の合図をなす第一火だったものであろう。
これを望み見るや、城外の闇の遠くにあって、鳴りをひそめていた梁山泊軍は一せいに、鼓を打ち、声を合せて、野を馳け出した。
第一隊、豹子頭の林冲。馬麟。
第二、鄧飛。孫立。
第三、大刀の関勝。宣賛。郝思文。
以下、第八隊までには――秦明、欧鵬、黄信、燕順、雷横、施恩、穆弘、鄭天寿、黒旋風の李逵――。上には、軍師呉用の左右に、裴宣、呼延灼、韓滔、彭玘らが付きしたがい、
「無辜の庶民は殺すな」
「放火はつつしめ」
「一隊はすぐ、盧俊儀の家へ向って、淫婦、姦夫を捕り逃がすまいぞ」
「ほかは、梁中書」
「また一手は大牢の獄へ」
と、呼び交わしながら、たちまち南大門を突破し、さらに東門西門を打ち破る鬨の声も一つに、すべて、五千余人の歩騎兵が、どっと、その夜の六街三市へ洪水の逆巻くかと見えるばかりに流れ入った。
万戸の燈籠は一時に消え、歌舞の絃歌は、阿鼻の叫や悲鳴に変った。逃げまどう乙女、母を呼ぶ子など、目もあてられず、炎は路を照らして赤く、その中を、疾駆、馬上に人を抱えて馳け去った二騎の影と、それを守護して行く十数騎とが、

あたかも、天から降りて来た十二神将の像のように見えた。
それこそ、後に思い合せれば。
盧俊儀をかかえた浪子燕青と石秀を助け出してきた柴進、史進らであったらしい。
盧俊儀のかつての店舗と住居の一廓は、あれよというまもなくぶち壊され、番頭の李固と、盧の妻の賈氏は、逃げも隠れもできないうちに、どこへとも拉致されて行った。――これを見ていた近所界隈の住民は、身の恐ろしさも忘れたように、わっと快哉の声をその人旋風の行方へ送っていたという。
ここにまた、九死に一生を得たともいえる者は、かの梁中書であった。一時は狼狽の極、あぶなかったが、李成とその部下に守られて、からくも死地を脱し、満都の火光をあとに西へ西へとやみくもに逃げ走っていた。かえって、あとに残った中書夫人や、官邸の召使いたちの方が、よほどひどい目に会っていたろう。
この夜、蔡福と蔡慶の兄弟は、家族を先に山東へ立たせたあと、軍師呉用のいる所をたずねて来て、こう頼んだ。
「軍師。北京の民に罪はない。なんぼなんでもこの犠牲は大き過ぎましょう。一般の者は助けておくんなさい」
「もちろんだ」と呉用は言った。「庶民を泣かす気などは毛頭ない。むしろこのあとは、よくなるように祈っている。もう目的は達したから、あとは、全軍に命じて、諸所の消火にあたらせよう」
かくて、夜明け方には、市中の火は、あらかた消しとめられたが、なお焔々と燃えてやまないのは、北京城の瑠璃の瓦、黄金の柱、官衙の建物などだった。
呉用は命じて、城中の財宝、穀物、織布などを取り出させ、これを罹災の民と貧民に頒けてやり、また残余の物と軍需品は、馬や車輛に積んで、梁山泊へ持ち帰った。
水滸の大寨は凱旋した仲間を迎えて、歓呼に沸いた。なにしろ、北京の府は、四百余州中でも屈指な城市であったから、これを陥すには、じつに多くの犠牲と困難があった。それだけに、泊中全山の沸き返り方といったらない。
大宴、三日のあと。
宋江は、盧俊儀を、忠義堂の上座に厚く迎えて。
「あらためて、おわびします。すべては水にお流しください」
「いまは何をか申しましょう。何事も水の流れと観じて忘れております」
「では、私どもの初志をいれて、大寨の頭領の位地にお就き下さることも、併せて、ご承知くだされようか」
「それはいけません。自分の才にないものは」
「いや。呉用以下、われらすべての望みなのです」
「何と仰っしゃられても、その儀ばかりは」
どうしても、盧の意志は、うごきそうもない。で、ぜひなく当分は、客分の名で別格な座にあがめ、そして何かの相談にはあずかるということで、ひとまずここはおさまった。
「ところで、番頭の李固と、その李固と密通していたご家内の賈氏は、どうご処分なさいますか」
「見たくもありません」と、盧はいった。「――とるに足らない虫ケラども、燕青の手にまかせておきましょう」
後日、浪子燕青は、この淫婦姦夫の身柄を貰って、水寨の畔へ連れて行き、楊柳の幹にしばり付けたふたりを、短刀のた

だ一ト突きのもとに成敗した。
また蔡福、蔡慶の兄弟は、裏山の一端に耕地をもらって、家族らと共に住みついた。かつては、大牢の囚人たちから、鬼と呼ばれて恐がられた兄弟だったが、ここでは牢というものがなく、自然、牢屋の用もなかった。

## 二十一　直言の士は風流天子の朝を追われ、山東の野はいよいよ義士を加える事

飛報が都へはいったのは月のすえで、まずその詳細を第一に知ったのは、宰相官邸で早打の使者を引見した大臣蔡京であったこと、いうまでもない。
書翰は、彼のむすめ聟、梁中書の筆である。
北京府の大半は匪賊のために灰燼となり、官民の死傷は万を超え、自分たち夫妻が助かったのもまったく奇蹟なほどで、いまもって恐ろしい悪夢からさめきれないほどである――と書面は委曲をつくしていた。
「これはいかん。梁山泊の賊とは、そうまで強大なものだったのか。これではもう伏せてはおかれまい」
驚愕も驚愕だが、蔡大臣があわてたのは、ほかの理由からでもあった。北京の乱も彼だけは夙に知っていたのである。だが、わが聟に鎮圧の功をあげさせてやりたいとする私情から、今日まで援軍の派遣をはからわず、朝廷へも「――いや、梁中書がおりますからには」と、半ば嘯き、半ばフタをしていたものだった。
蒼惶と、彼が参内するとまもなく、景陽楼の鐘が鳴り、祗候ノ間には、ぞくぞくと、文武の群臣があつまった。
やがて玉階の御簾が高々とまきあがる。道君徽宗皇帝の姿は珠の椅子にあった。逐一を聞きとられると、さすが風流天子の眉もふかい憂色に沈んで見える。……と、諫議ノ大夫趙鼎が、列座からすすみ出て奏上した。
「これはもはやただごとではありません。いまにして大策をめぐらさねば、一波は万波をよび、全土の兇乱ともなりかねますまい」
「ゆえに、いかにせよと、諫議はいうのか」
「暴を伐つに、武をもってしては、火を消すに火をそそぐようなものでしょう。加うるに、彼らは水滸の要塞に拠って、野性放縦、とても手におえないことは、これまでもしばしば差向けられた討伐軍が、いたずらに損害また損害のみうけて、いちどの勝利も得てないのに見てもその愚がわかると思います」
「だから、どうせいというのだ、諫議」
「よろしく慰撫の沙汰を降し給うて、彼らの罪を赦され、彼らの不平をして、逆に世のための意義ある仕事に役立たしめるよう、ここに皇徳の無辺をお示しあらば、元来が単純一片の草莽、なまなか闕下の恩寵に狎れている都人士などよりも、あるいは世の公に役立つ者どもかとぞんじられます」
諫議はすずやかに述べた。いかにも直言の士らしい。
ところが、大臣蔡京は、
「なにを申す！　諫議ノ大夫ともあろうものが」
と、満面に怒気を発して叱りつけた。
「水滸の草賊どもを朝に入れて、官人なみの扱いをせよとい

うのか。ば、ばかな意見を。――かりそめにも宋朝廷が匪賊に降っていいものか。あいや皇帝」
と、彼は玉階のほうへ、身を一揖して。
「おどろき入った諫議の献言です。かかる悪思想を抱くやからは、一日も参議の列に加えおくわけにゆきますまい。列臣の心を荼毒するもの、怖るべきものがありまする」
「職を剥げ。――免職する。――趙鼎、堂を退がれ」
即座に、彼は官爵を解かれて、悄然と退場した。
蔡京は、つづいていう。
「私の愚見を申しあげます。凌州の団練使、単廷珪と魏定国という二大将は、とみに近ごろ勇名のある者、これに郷軍の大兵と、禁軍の精鋭をそえ、水滸討伐の勅命をくだし給わらば、よも敗退をふたたびするようなことはなかろうと存じまするが」
「大宋の下、英雄は無尽蔵だな。よきにいたせ」
徽宗皇帝は立つ。
議は枢密院に移り、勅を奉じた使いは、すぐ凌州へ馳けた。
事は、はやくも風のごとく、梁山泊の早耳にきこえている。
だが、さきにここへ仲間入りしていた蒲東の関勝は、自信をもってそれに当る先鋒軍の役を買って出た。
「なにさま、凌州の団練使（師団長）単廷珪は有数な大将ですし、魏定国も人物です、……ですがその志や人間はよく分っている。なぜならば共に少壮軍人であった頃、自分とは都で一つ釜の飯をくったこともある仲です。きっと彼らを説き伏せて、われらの仲間へ投降させてみましょう」
彼のこの広言は、なかなか広言どおりにたやすくはいかなかったが、しかし凌州の野で、二箇月にわたる戦いのすえ、ついに呉用そのほかの助勢もあって、関勝はそれに成功し、魏と単の二大将を、とうとう梁山泊の仲間へ誘い入れてしまった。
それのみでなく、この凌州の戦いによる副産物として、黒旋風の李逵が、枯樹山の山賊、喪門神の鮑旭と、相撲とり上がりの没面目の焦挺という二人をも仲間につれて帰って来た。
「めずらしいこともあるものだ」
泊中の仲間は、みな笑った。
「李逵ときたひには、人間も鶏も見さかいがなく、つぶすことは知っても、卵から殖やすなんて芸当は知らねえ奴だ。そいつが仲間を殖やしたんだから、こいつは一つの天変地異だぜ」

この年。
梁山泊では、もひとつ一大快事を仕果たして、凱歌をあげた。
なにかといえば、それは春も半ばの頃、かねてから遺恨鬱々と時をうかがっていた曾頭市の豪族、曾一門を討って亡き前の総統晁蓋の無念ばらしをしたことだった。
その曾頭市は曾一家の勢力で私領化され、ほとんど全市一大要塞をなし、武術師範の史文恭をかしらに、曾塗、蘇定、曾密、曾索、曾魁などの一族でかためられ、じつに苦戦は苦戦だったが、しかし初めに、
「ひとつ、てまえに働かせてみて下さい。山へ来てから、ま

だいちども、これという働きもせずにいるこの盧俊儀に――」
と先陣の苦闘をあえて自分から買って出た彼の努力に、その帰結は大いに負うところが多かったのだ。
で、曾一族のことごとくを殺し、また、生け捕った史文恭はこれを山寨にひきあげてから斬に処した。そして一同して首と生肝とを亡き晁総統の祭壇にそなえた。
そのさい泊中のおもなる頭目は、みな喪服をつけて居なら び、宋江は、聖手書生の蕭讓に命じて書かせた〝晁蓋の霊を弔う〟の祭文を壇にむかって読んだ。しゅくしゅくと、男泣きの悲哭をもらす者さえある。――終ると、宋江は座について言った。
「ここの者はみな、お忘れではあるまい。晁天王の遺言には、誰でもあれ、かたきの史文恭をとらえてわが妄念をはらしてくれた者をもって、次の梁山泊の統領にせよとあった……」
盧俊儀は、はっとして、宋江のことばも終らぬうちにあわてて言った。
「いけません、いけません。曾頭市を陥したのも、てまえ一人の力ではない。かつは私は徳もなし才もない」
「いや！」と宋江もまたそれを抑えて。「盧大員には、いくたび言っても、いつもご卑下あるが、この宋江をごらんなさい。正直、私は三つの点であなたのお人柄には及びもつきません」
「どうしてですか」
「第一に、私は色が黒く体も小さい。風貌において、あなたの大どかな貴人の相とはくらべものにならぬ。第二には、私はもと小役人の出身で罪を犯して逃亡のあげく自然ここに身をよせているに過ぎない人間。しかるにあなたは北京府の富家に生れ、かさねがさねの天祐を蒙っている。天運おのずから衆に超えているものです。――第三には、私は浅学、あなたは学古今に通じておられる。のみならずじっさいの武技もあり智略勇胆に秀でています。すべてその才徳は大器というもの。あなたを措いて誰がここの上座にすわる者がありましょうか」
「ああ、迷惑です。ご過賞に過ぎる」
「いや、ここの者どもも、生涯このままではいられません。いずれ時あればおかみに帰順して、世に功業を捧げねばならぬ。罪ほろぼしの善を地に植え、時により官爵を帯ぶる身となるやも知れぬ。だが私はすでに分にあらずとかたく腹はきめているのです。どうか山寨一同の願いを入れて、いまはおききとどけ下されたい」
しかし、盧はついに、椅子を降りて、身を下に置いてしまった。
「どのように仰っしゃられても、それだけはお受けできません。死すともできません」
あとは座中、私語騒然と、思い思いな声や囁きになってしまった。
要するに、ほとんどの者の本心は、やはり宋江に主席となっていて貰いたいのだった。軍師呉用からしてそうらしい色に見える。人情、心服、信頼感、そして盧よりも古い一つ釜の飯。どうにも理屈ではなかったのである。
これはいけないと見たか、宋江がここに一案を提出してみなに諮った。
「このうえは、天意に訊いてみようではないか。あくまで盧

大員を主座に仰ぐべきか、不肖、どうしても私がよいのか」
「天意。それはまた、どうなさるので」
「ここからひがしに、東昌府、東平府の二城市がある。ゆたかな城街だが、かつてわれらもそこだけは侵したことがない」
「なるほど」
「城戸の民はみな沃土と物産にめぐまれ、官民和楽してよく暮らしていると聞いていたからだった。ところが近年、奉行が変ってからはひどく苛烈な税をとりたて、賄賂悪徳の風が幅をきかして、ために良民は汗に痩せ、無頼のやからと小役人だけが肥え、一般はもってのほかな困窮だという」
「そこで？」
　と、呉用は宋江の面を見つめた。
「二府へたいして、銭糧を借りたいと申し込む」
「もちろん先は断りましょうな」
「知れている。だがそれは口実。それを名分にうたって二途二軍勢で同時に二つの城市へ攻めてゆく。つまり一方の首将には盧大人になっていただき、一方の指揮には私があたる。――そしてどちらでも先に相手の府を降伏させた方を梁山泊のあるじとするのだ。この案はどうであろうか」
「さあ、それもよいでしょうが？」
　と、呉用は盧俊儀のほうばかり見て、可否をいわない。当の盧俊儀もまた、ひとえにそれは逃げて、うんという気色もなかった。
　で、せっかくな一案もお流れに終って、現状そのまま、つい半年余を過ぎてしまったが、晩秋の頃、どうしても、銭糧借款の申し入れをせねばならない状況が再燃していた。
　というのは、その夏の旱魃やら秋ぐちの大洪水で、特に、水滸の周辺は五、六百里にもわたってひどい飢饉を来したのである。で、宋江はこんな時とばかり泊内の穀倉をひらいて難民の救済にあて、蓄えの物は糠もすくい出し、羊、鶏、耕牛までも食いつぶしていたのだった。
「このうえは、東昌府と東平府を食うしかない」
「もう銭糧を貸せなどと手間暇かけているのは愚だ」
「さもなくば、この梁山泊の者もみな乾あがってしまう。こんなところを官軍に見舞われたら一トたまりもないぞ」
　事実、泊中の炊煙がもう細々になりだしていたのである。馬糧、兵糧、少しでもあるうちにと、全員の声が高い。
　ここにおいて、盧俊儀もついに一方の大将をひきうけ、また一軍は宋江が首将となった。そしてかつての一案にしたがい、どっちでも先に向う所の城市を陥落させた者が、梁山泊のあるじとなることもまた約束された。
「では、先だってまず、先主晁蓋の霊堂で、いずれがいずれへ向うか、籤を引いてきめましょう」
　これも宋江の発言だった。
　その結果。
　盧俊儀が東昌府をひき、宋江は東平府をひきあてた。
　盧の麾下にしたがうもの、呉用、公孫勝、関勝、呼延灼、朱同など水陸七千人――
　宋江の下には林冲、史進、花栄、劉唐、徐寧、燕順ら、これも水陸七千人――
　日をかさねて、めざす汶上県へも、はや七十里という、安

山鎮の嶺まで来ると、
「では、盧大員君」
「宋公明先生」
「おたがいの前途を祈って、ここで再会までのお別れとしよう」
「よきご武運を」
「あなたも」
と、両将は、手を握って、西と北、二た手に道を別れた。
そうして宋江の軍は、東平府へ打ち入り、日かずにして約二十日あまりで、東平府を陥してしまった。
もっとも、それは決して易々なんていうものではなく、東平府の総指揮には、双鎗将の董平という万夫不当な将軍があって、よく兵を用い、二本の短鎗を使い、戦のかけひきには神出鬼没で、これには寄手の宋江軍もさんざんな目にあったのだが、そのうちに敵にはひとつの〝隙〟――つまり弱点――があることを知ったのが勝因だった。
奉行の程万里。
これはもと都の大官童貫の邸で家庭教師をしていた者で、根ッからの佞官型であるうえに、着任いらいは、私腹を肥やし、権勢をかさに着、人民泣かせをただこれ能として省るところもないのであった。
ところで、この上官を迎えた双鎗将の董平はといえば、これは軍人気質の生ッ粋だったが、しかし程万里には一人のきれいな娘があって、それに想いを寄せていたため、程奉行の悪政には不平も、つい心からの意見もいえずにいたのである。
狡獪な奉行の程は、またそこを見抜いていて、
「董将軍。まずよく防ぎ、よく戦い、賊兵を追ッぱらって、宋江の首を持って来給え。それを聟引出として、君にわしの愛娘をやろうじゃないか」
と、猛獣使いにひとしい狡さで彼を戦場へとケシかけていた。
ために董平は、たびたび、身を死地に抛ッて奮戦した。宋江はこれをながめて、彼を惜しんだ。密書をやって誘ったのである。
〝――董将軍。この地で聞けば、あなたには風流将軍の別名もあって、その純潔を尊ばれている。
しかるに惜しむべし、将軍の若さは騙されておいでだ。
奉行の程が、真に、あなたを愛し、愛する娘を、あなたにくれる心なら、なんで将軍をかくもたびたび、死地の苦戦に駆り立てるのか。
見給え。程自身は一ぺんも、危険な陣頭へは姿を見せたこともない。
われら梁山泊のうちではそんな不義卑劣はゆるされない。天に代って良民の塗炭の苦しみを救うのが梁党の目的だ。もし君がわが党へ来るなれば、よろこんで迎えたい。
のみならず、君の欲する女性を共に城中から奪って、水滸の平和郷に、ささやかだが、新しい一家庭を、君のために贈ろう。賢判、いずれを君は選び給うか。〟
董平は、夢のさめたように、宋江の陣門へ来て降った。
宋江も弓を払って、他意なきを示し、共に、謀計をしめし合せて、奉行の程を城外へ誘い出した。そしてこれを殺し、程の娘を、城中から奪ったのだ。

――こうして、首尾よく東平府を陥したので、宋江は官の倉庫を開かせ、また程の私有財物なども、すべて沢山な米や穀類と共に、これを車馬に積んで梁山泊へ運ばせた。

そして、先に盧俊儀と別れた安山鎮までひき揚げて来たが、盧の軍はまだ、凱旋してここを通った形跡がない。

「諸君。道をかえる！」

と、宋江はそこでとつぜん鞭を西へさした。

「東昌府はまだ陥ちていないらしいぞ。われらはまだ山へ帰るわけにはゆかない。宋江につづいて来給え」

七十余里、それからまた息もつかずに、

「盧俊儀の籤運のわるさよ！　万一を思って、呉用や公孫勝までつけてやったのに、いかなる難戦へぶつかったのか？」

と、加勢に急いだ。

行ってみると、むりはない。この日もまだ、東昌府全面の空は、戦煙濛々で、地は喊声のまっ盛りだ。しかも敵方の旗色のほうが断然いい。

「どうしたのです？　呉軍師」

「やあ、宋先生か。東平府の方は」

「はや、かたづきました。ところで、ここの戦は？」

「ごらんの如く、東昌府は、すっかり捏ね損なッてしまった形だ。序戦に二度も失策をかさね、あげくに、おそろしい傑物がいた」

「傑物が」

「もと彰徳府にいた虎騎隊の指揮官で、あだ名を没羽箭といい、苗字が張、名は清」

「ああそれは有名な軍人です」

「しかも、部下には中箭虎の丁得孫。花項虎の龔旺などという猛者もいて、あたるべからざる勢い。……しかしきのう、巧々と陥穽におびき込んで、その二人だけは生け捕ったが、なおまだ、かんじんな張清のほうは、あれあのように、戦塵漠々と乱軍の中を馳け廻って味方をなやまし、ほとんど、彼の前に立つ者はない」

「ひとつ、見たいものですな、どういう男か」

「いや、それよりも、敵はまだ、ここへあなたの援軍が加わったとは知らぬようだ。すぐさま、新手を間道から敵の後方へ廻していただきたいが」

「こころえた」

と、宋江はただちに、部下の花栄、史進、林冲、一丈青、解珍、解宝らの麾下あらましを、敵のうしろへ潜行させた。

一夜は明け、ふたたび、曠野は戦塵と鬨の声で埋まッた。

が、その凄烈さは、前日の比ではない。

敵将、没羽箭の張清は、はや決死のかくごだったとみえる。たのみにしていた両翼の龔旺と丁得孫のふたりはすでに搦め捕られていた。――のみならず賊軍の数は倍加している。

――きのうまでは何の異常もなかった後方にあって、万雷のとどろきがするのもみな、それは梁山泊軍の鼓噪ではないか。

だが、彼は決して、猛獣が度を失った如き者ではない。

ついには仆れるまでも、山東の兇賊ども、一人でも多く、あの世へ連れて行くぞ、としているようだった。

次の日である。いよいよ、彼の馳駆をゆるす戦線も圧縮されてきた。――宋江はたのしんでいた。「今日こそは、張清の阿修羅な姿を、近々、この目で見られようか」と。

はや黄昏れ近い。
張清は一河川の岸に追いつめられ、突如、河中の船からおどり上がった泊兵の水軍にどぎもを抜かれた。湿地を脱するだけでもやっとだった。しかし、奮然このときに最期のはらを決めたのだろう。あたりに残る部下の精鋭わずかと共に猛然たる勢いで、
「盧俊儀に見参ッ。呉用はどこに？」
と、泊軍の本陣を目ざし、そこの旗門へ真ッ向に突進して来た。
「むむ、なるほど、ただびとでない！」
宋江は見た。
その没羽箭張清の勇姿をたたえたものには、「水調歌」という時の流行曲に、一ト節の詞がある。

鍍金兜に、照り映える
茜の纓は、花に似て
狼腰を、鞍つぼに
片手づかいの左太刀
右手には持てり、石つぶて
つぶて袋の底知れず
打つや流星
放てば飛電
矢つがえ無用、強弩も要らぬ
たてがみ青き、駿足に
靡け行く、雉子の尾羽ネの駒飾り
葵花のあぶみよ、揺れ鳴る鈴よ
没羽箭、ああ、去るところ

風は蕭々たり、敵屍あるのみ
「ころすな！　討つな！　手捕りにしろ」
宋江は、旗の下から馳け出して叫んだ。
けれど、すでに味方の群雄も、門旗をうしろに、必死だった。なかんずく盧俊儀は、
「この敵に背は見せられん」
と、あわや馬を張清へ向って駆らんとしている。
むらがる諸将は「盧大将を討たすな」と、これまたわれがちに彼を庇う。そして代って躍り出た金鎗手の徐寧は、近づきもえぬまに「あッ――」と眉間を抑えたまま落馬し、つづいておめきかかった錦毛虎の燕順も、相手の投げたつぶてにどこかを打たれたらしく横ッ飛びにあらぬ方へ馳けてしまった。
そもそも、没羽箭張清の得意とする〝礫〟ほどやっかいな物はない。近づけば左手の閃刀が片手使いのあしらいを見せ、離れればたちどころに、一塊の小石を発矢と飛ばしてくる。しかもその石たるや小さいけれど鉱石みたいな稜角と堅質を持っているので、中り所が悪ければ死ぬ。あるいは骨もくだける。
次々に、この礫でやられた。
彭玘、韓滔、醜郡馬の宣賛。
また、呼延灼。花和尚の魯智深。
わけて、劉唐などは、片目をつぶされ、青面獣楊志さえも、かぶとの鉢に、ガンとこたえた弾丸力に驚いて退きしりぞいた。
みるみる梁山泊の部将格、前後十五、六人というものが、

傷を負ったのだ。
宋江はこれを見、舌を巻いて、そばにいた呉用や公孫勝へこう言ったものである。
「五代の頃、大梁の王彦章は、日影のまだうつろわぬうちに、唐の将三十六人を、矢つぎ早に射て仆したというが、張清のつぶては、王彦章には及ばぬまでも、たしかに当代の神技、ひとかどの猛将といってよいのではなかろうか」
しかし、こう話を向けられても、人々は苦々と口を緘したきりだった。――とはいえ、それほどな張清でも、天を翔ける鬼神ではない。ついにこの夕、力つきて、まっ黒な人間の怒濤の下に生け捕られた。

## 二十二　百八の名ここに揃い、宋江、酔歌して悲腸を吐くこと

宋江が、彼を営中に見るや、これを迎えるように、みずから縄を解いてやったことはいうまでもない。
しかし、営内から旗門のそとでは、ごうごうたる不平と抗議の呶罵だった。
「宋司令。没羽箭を渡し給え。ずたずたにしてくれねば腹がいえん！」
と、わめくのである。
頭を繃帯している花和尚、片目をつぶされた劉唐。そのほか、生け捕るために、傷を負ッたり、またクタクタに骨を折らせられた連中だ。無理はない。
だが、宋江は叱って言った。
「君らは自分以上な者を敬うことを知らないのか。思うに、天罡星が相会する重大な機運が来ているものと思う。諸君の望むわたくしの成敗などはゆるされない」
すでに、張清も観念の色だった。彼も、東平東昌二府の奉行、程万里の悪行には、ひそかな同情を人民によせ、決して官途に安んじていたのではなかったのである。
「ですが、東昌府には惜しい人間がひとり残っています。なろうことなら、その者も共に、梁山泊へひきとっていただけますまいか」
張清は、推薦して措かなかった。
訊けば。
姓は二字の皇甫、名は端。
年ひさしく府城の馬寮に勤めてきた実直なる馬医師であるという。
「本来は幽州の生れで、ひげは、黄色く、眼は碧く、どうみても西蕃人そっくりなので、あだ名も紫髯伯といわれています。……が、稀代な伯楽で、馬相を観ること、馬の病をなおすことでは、まず天下一品の馬医といえるでしょう」
宋江はよろこんで、さっそく彼をやって、城中から皇甫端を招きよせた。なるほど碧眼紅毛の異人種だがりっぱな風采は見るから神医の感をうける。――張清から途々、話は、きいていたとみえ、これへ来ると、拝をして、彼もただちに仲間入りの誓いをたてた。そして、「これは私のみやげです」といい。馬寮から曳いて来た吐蕃の斑白月毛、北地産の捲毛駿の二頭を献じたりなどしたのである。宋江は、そこで一同へまた告げた。

「はからずも、東平、東昌の二府を討って、幾人もの人傑を新たに迎え、また、稀代な神馬が二頭も手に入るなど、まことに天の冥助、奇瑞としか思われん。されば天をおそれて、無辜の民を、このことで苦しませてはなるまい。良民の助けを急ぎ、そのうえで山へひきあげよう」

異論はない。全軍は府へ入って、城中の官倉を開放し、民生を励まし、窮民をいたわり、余るところの銭糧はこれを車馬に積んで水滸の寨へ持って帰った。

かたのごとく、山では山じゅうの凱旋祭りと、忠義堂では、主なる頭分だけの祝宴がもよおされ、乾杯にいたって、宋江が、そのあたまかずを数えてみると、まさに百零八人となっていた。

「百八人！」

彼は、この数にふと、なにか、天扉の神鈴を聞く気がした。

そこで彼は一同へ告げた。「何かは知れず、油然といま、いま胸に抑えがたい感慨がわいた。天意が私を通じていわしめるものかもしれない。――しばらくご静聴ねがえようか」と。

「おう、仰っしゃってください。なにごとでしょうか」

一同は、襟をただした。

「ほかでもありませぬが」

と、宋江は満座を見ていう。

「いまふと、かぞえてみるに、いつかここに相寄ッてきた数奇なる運命の漢どもは、まさに百八人に達している。宿縁、まことに奇と申すしかありません」

「……」

ああそうだったのか。百八人になっていたのかと、急に自他を見まわして一同もまた粛と、感慨に打たれたようなふうだった。

「……が、このうちには、ただひとり欠けた人があった。前の統領、托塔天王ノ晁蓋です。しかしいま思えば、それも上天の意だったものでしょう。われらを冥界から見まもってくれるために……。さもなくんば、白業黒業、さまざまな難を経つつかくも百八人がつつがなく一堂に揃うようなことはないでしょう。ひとえに神明の加護によるものと私は思う」

「……」

「しかるに、われらは暗黒の世とはいえ、ぜひなくも、いくさの都度にはたくさんな人をころしています。その罪業は怖れねばなりません。で、ここらでひとつ、敵味方のわかちなく、戦没した者、横死した者、水火の難に厄死した者、無数の霊をとむらうために、羅天大醮を、とりおこない、あわせて、兄弟分諸君の義魂と正義のいよいよ磨かれんことをいのり、また二つには、朝廷におかせられて、よく今日の政治の濁悪に目ざめられ、われらの罪をゆるして、このわれらをして、天下鍛ち直しの大善業に向けしめ給わるよう。思いを下天に凝らし、誓いを上天にささげ、七日七夜、つつしんで祈りの行に服したいと思うのですがどうでしょうか」

「おう」

みな太いためいきの下に賛同した。

「なんで異存がありましょう。大追善です。大供養です。やりましょう」

しかし、越年もすぐまぢかにひかえていた。で、年明けから、春の四月までにそれは準備された。すなわち、その月の

十五日から、七日七夜の長きへかけて――。
一切の司祭は、道教において一位に次ぐ道位をもっている一清道人の公孫勝がつとめた。忠義堂の前には四ながれの旛がつるされ、堂上には三層の星辰台がみえ、三聖の神像をなかに、二十八宿、十二宮辰の星官たちの像も二列にならんでまつられている。
ちりばめたような無数の灯やら香のけむり、花、花、花。そしてくだもの、五穀、くさぐさなお供え物など、いうまでもない。
いよいよ、まつりの第一日。
月白く、風すずやかな夜から始まる。
公孫勝を大導師に道士四十九人、立ちならぶ中を、まず宋江、盧俊儀、呉用の順に、長いこと壇下にぬかずいて伏し拝む。
そして瑤の台に願文をささげ拈香十拝、花に水をそそいで静かに退がる。
順次百八人のものみなこれに倣って、壇を巡り、そして、あかつきへかけては、導師以下の修法になった。
修法は日ごと二回おこなわれる。このあいだ、一同は穢を厭み、口をきよめ、念誦一心、一歩も忠義堂を出ることはない。そこに寄りつどったきりなのである。
こうして七日目の満願の三更だった。誰もが神気朦朧としているうちに、宋江は夢とも現ともなく一炬の白い光芒が尾をひいて忠義堂のそとの地中に墜ちるのを見た。それこそは上天の啓示にちがいない、すぐそこを掘らせてみようと、公孫勝以下の道士が鋤鍬をもって掘ってみると、はたせるかな、一面の石碣が掘りおこされた。
「これはおそろしく古い物らしい」
「神代文字だ。何か彫ってあるが、てんで読めぬ？」
すると道士のうちに何玄通という者があって、自分はつねに太古の蝌蚪文字古代文字を解読する一辞書を持っているが、これに照らせばどんな古代文字といえど読み解けぬことはないという。そこでさっそく何道士にそれを取寄せさせて、読ませてみると。
「――わかりました。碑の左右にある二聯の文字の一方には〝替天行道〟とあり、一方には〝忠義双全〟と読めるのであります。そして上にずらりと書いてあるのは、すべて南斗、北斗の星の名まえ、下にはその星の性をもった人間の名が記されておりまする」
「や。しかも？　……」と宋江は碑に顔をよせて「碑のうらおもてにかけて、それはちょうど百八行だが」
「そうです。おもての蝌蚪文字三十六行は天罡星でして、うらの七十二行もまた、すべて地煞星の名。そしてその星それぞれの下に、すなわち性を個々の身に宿した宿命の人名が書いてあるのでございまする。もしお望みなれば順にそれを読み上げてみますが」
「オオ願おう。一同もこれに集まって粛と下にいて聞くがい。そうだ、蕭讓は筆をとって黄紙にそれを書き写せ」
ここで読者はすでにお読みになったはずの序編水滸伝第一章〝百八の星、人間界に宿命すること〟のくだりを想起していただきたい。
いま、何道士が読むにしたがって、蕭讓が黄紙に写しとっ

ていた石碣の星の名は、すなわち幾世前の天変地異でそのときに地にこぼれ降った百八星であったのである。――すなわちその星の生れ代りなる梁山泊の天罡星三十六人とは、

天魁星　呼保義の　宋江
天罡星　玉麒麟の　盧俊儀
天機星　智多星の　呉用
天間星　入雲龍の　公孫勝
天勇星　大刀の　関勝
天雄星　豹子頭　林冲
天猛星　霹靂火　秦明
天威星　双鞭の　呼延灼
天英星　小李広　花栄
天貴星　小旋風　柴進
天富星　撲天鵰　李応
天満星　美髯公　朱同
天孤星　花和尚　魯智深
天傷星　行者の　武松
天立星　双鎗将　董平
天捷星　没羽箭　張清
天暗星　青面獣　楊志
天祐星　金鎗手　徐寧
天空星　急先鋒　索超
天速星　神行太保　戴宗
天異星　赤髪鬼　劉唐
天殺星　黒旋風　李逵
天微星　九紋龍　史進
天究星　没遮攔　穆弘
天退星　挿翅虎　雷横
天寿星　混江龍　李俊
天剣星　立地太歳　阮小二
天平星　船火児　張横
天罪星　短命二郎　阮小五
天損星　浪裏白跳　張順
天敗星　活閻羅　阮小七
天牢星　病関索　楊雄
天慧星　拚命三郎　石秀
天暴星　両頭蛇　解珍
天哭星　双尾蝎　解宝
天巧星　浪子　燕青

といった人々であり、また裏面にあった地煞星の七十二名とは、次のような面々だった――

地魁星　神機軍師　朱武
地煞星　鎮三山　黄信
地勇星　病尉遅　孫立
地傑星　醜郡馬　宣賛
地雄星　井木犴　郝思文
地威星　百勝将　韓滔
地英星　天目将　彭玘
地奇星　聖水将　単廷珪
地猛星　神火将　魏定国
地文星　聖手書生　蕭讓
地正星　鉄面孔目　裴宣

地闊星　摩雲金翅
地闘星　火眼狻猊
地強星　錦毛虎
地暗星　錦豹子
地軸星　轟天雷
地会星　神算子
地佐星　小温侯
地祐星　賽仁貴
地霊星　神医
地獣星　紫髯伯
地微星　矮脚虎
地急星　一丈青
地暴星　喪門神
地然星　混世魔王
地好星　毛頭星
地狂星　独火星
地飛星　八臂那吒
地走星　飛天大聖
地巧星　玉臂匠
地明星　鉄笛仙
地進星　出洞蛟
地退星　翻江蜃
地満星　玉旛竿
地遂星　通臂猿
地周星　跳澗虎
地隠星　白花蛇

欧鵬
鄧飛
燕順
楊林
凌振
蔣敬
呂方
郭盛
安道全
皇甫端
王英
扈三娘
鮑旭
樊瑞
孔明
孔亮
項充
李衮
金大堅
馬麟
童威
童猛
孟康
侯健
陳達
楊春

地異星　白面郎君
地理星　九尾亀
地俊星　鉄扇子
地楽星　鉄叫子
地捷星　花項虎
地速星　中箭虎
地鎮星　小遮攔
地稽星　操刀鬼
地魔星　雲裏金剛
地妖星　摸着天
地幽星　病大虫
地伏星　金眼彪
地僻星　打虎将
地空星　小覇王
地孤星　金銭豹子
地全星　鬼臉児
地短星　出林龍
地角星　独角龍
地囚星　旱地忽律
地蔵星　笑面虎
地平星　鉄臂膊
地損星　一枝花
地奴星　催命判官
地察星　青眼虎
地悪星　没面目
地醜星　石将軍

鄭天寿
陶宗旺
宋清
楽和
龔旺
丁得孫
穆春
曹正
宋万
杜選
薛永
施恩
李忠
周通
湯隆
杜興
鄒淵
鄒潤
朱貴
朱富
蔡福
蔡慶
李立
李雲
焦挺
石勇

地数星　小尉遅　孫新
地陰星　毋大虫　顧大嫂（顧のおばさん）
地刑星　菜園子　張青
地壮星　母夜叉　孫二娘
地劣星　活閻婆　王定六
地健星　険道神　郁保四
地耗星　白日鼠　白勝
地賊星　鼓上蚤　時遷
地狗星　金毛犬　段景住

聞き終って、みな、おどろいた。

すでにこの身この名まえが、古代文字の古い世頃の石ぶみに誌されていようとは。

「ふしぎ、ふしぎ。これで見れば、宋江さまには、すでに上天の星の上座とさだめられている。そしてわれらの順位まで」

「これによれば、もう順位には何の文句もいざこざもないはずだ。天地の理数に決まっていたもの。従うほかないではないか」

この日、公孫勝をのこす以外、道士一同は飄として去り、翌日、宋江は軍師呉用や朱武たちと諮って、忠義堂の扁額のほかに、こんどの一奇瑞を記念して「断金亭」という大きな額をかかげることにした。

また、一座の霊廟が、断金亭のうしろ、小高き所に築かれて、晁天王の位牌がまつられ、その御殿のみぎひだりから周囲の八地域にわたって、宋江以下、諸将の住む甍がいっぱいに建て並べられた。もちろん、各所の水寨や望楼台などにある部将の住居はべつでここにはない。

かくてその年の秋ともなると、山上の景観はいよいよあらたまって、断金亭の大廂のまえには、つねに刺繍金文字の二旒の長い紅旗がひるがえり、一つには、「山東呼保義」一旒には「河北玉麒麟」としるされていた。

また、総司令部のたてものを中心としては、各営に、朱雀玄武旗、青龍白虎旗、白旌、青旌、黒旌、黄旌、緋纓の大幡など、へんぽんと梁山のいただきから中腹までを埋め、北斗七星旗から八卦旗、一百二十四流れの鎮天旗まで、およそここになびいて見えざるはない。

こうして象だけでなく、陣容もきまった。

すなわち、山寨の最上位――総司令の地位には、宋江と盧俊儀のふたりがつき、軍師も呉用と公孫勝のほかに、副軍師として、神機軍師朱武があらたに加わった。

銭糧部の主宰には、柴進、李応。――五虎ノ大将、騎兵八彪隊の将、歩兵、斥候、輸送、情報、水軍など、すべての役割に、その人と特技とを配して、

「義にむすばれた大小の兄弟諸君、おのおの命ぜられた役目をもって、おたがいに誼みを傷つけないで自重して欲しい。そむく者は容赦なく衆判にかけて処断する」

宋江は、その表を断金亭に貼りだした日、一同をまえにこう誓わせた。

表の終りには、

宣和二年九月秋

とある。

誓いの式がすむと、みな異口同音に、ねがいをともにし、生々世々、生き代り死にかわり、この土の友となって、この

再会を、よろこびあわんと言い合った。
九月九日は重陽の節句である。この誓いの式は「菊花の会」につづき、山も風流な宴にいろどられた。月明の下、馬麟は簫を吹き、楽和はうたい、また燕青は箏を奏でた。

――菊見酒

汲めかし兄よ弟よ
こころ温めん座を分けて
黄なるを折らん　白妙の
香もまたよけれ　愛ずるべし

さあれ弟よ　友垣よ
黄がねや玉の　何かせむ
醜の醜ぐさ世に満ちて
そとに夷のうかごうを

ああ　やる瀬なの　わが胆や
など　この憂いのとどかざる
鴻雁告げよ　大ぎみの
御夢に通え　野の心

もし　天日の雲洩れて
汲ませ給うの　詔
野の子を招きあらしめば
酒ほがい――

わが祈ぎ事のかなえる日なり
菊をや簪し　舞い酔わん
舞うて向わん　御代の御為に

燕青の箏にあわせ、この夜めずらしく大酔した宋江が、こう自作の即興を歌ったのであった。

すると、宴の末席のほうにいた武松、李逵などが、突として、宋江の歌にたいして、野蛮な憤懣をぶちまけた。
「ちぇッ、くそおもしろくもねえ。また宋司令の天子さま礼讃が始まったよ。いったい、詔だの、お招きだのと、何を待とうッていう寝言なのか」
「そうだとも、武松兄哥のいう通りだ。おれっちは根っからの野育ち野郎。そんなものには、縁もゆかりも持ッちゃあいねえや。へん、おもしろくもねえ！　誰か、陽気な唄でもうたえよ！」
俄然、せっかくな菊花の会は、白け渡った。

## 二十三　翠花冠の偽役人、玉座の屏風の四文字を切抜いて持ち去ること

「武松、もののわかっている君までが」と、宋江は菊見の杯を下において――「李逵と一しょになって〝大義〟の何であるかも解さないとは余りに情けないことではないか。ああ、じつに困ったものだ」
と、暗い顔をして心から嘆いた。
「いや、宋司令」と、魯智深はその横から「たれも天子を馬鹿にはしていませんが、しかし、天子のお招きなどをあてにしている奴はこの梁山泊にはいますまいぜ。李逵や武松の悪態はお耳ざわりかもしれねえが、また、むりでないところもある」
「どうして」
「だって、現朝廷の腐敗、悪政、その下に泣かされている辺土

の民、いまさらでねえが、ひでえものだ。それはみんな天子が悪いからじゃあありませんか」
「いかにも、世の怨嗟はみな天子に帰する。だが」
と宋江は、坐り直した。
「いい機会だから今日は一つみんなにもいおう。たしかにそれは天子のご不徳ではある。けれど宋朝の今上、徽宗皇帝は元来お人のよい公正なおかたなのだ。文雅風流の道に傾きすぎるきらいはあるがまず聖明な君と申しあげてよい。ただ困るのはその君側の奸だ。奸佞な侯公や悪臣のみが政治を自由にしている」
「だから、それの分らねえ盲天子じゃ飾り物じゃありませんか」
「といって、だれを一天の至尊と仰ぐか。ともあれ宋朝の御代はこんにちまで連綿と数世紀この国の文明を開拓してきた。その力はじつに大きい。しかるにもしその帝統がここで絶えるようなことにでもなったら、それこそ全土は支離滅裂な大乱となり、四民のくるしみは、とうてい、今のようなものではなかろう……。いや、もっと心配なことさえある」
宋江のことばには、ようやく、国を思う熱意のほとばしりと憂いとに荘重なひびきをおび、彼をのぞく百七人の、耳をすまし心を打たずにおかなかった。
大宋国の北から東の大山脈をさかいとして、その彼方の蕃地には遼（韃靼のわかれで契丹ともよぶ）という大国がある。
遼は、南下の野望がさかんで、つねに辺疆を侵しては、山東、山西をおびやかし、河南、河北を掠め、またあらゆる手段の下に、いつかは物資文化の花ゆたかな宋へ攻め入って、これを併呑してしまおうと侵略の機をうかがっているのだ。
ところが、それも思わぬ大宋の朝廷やこの国の上下は、めぐまれた土壌と文化の上で、腐敗と乱脈をみずから演じ、長夜の夢を貪っているが、こんな現状をなお長くしていたら、ついには蕃土の遼から攻め入られて、あっというまに、宋は遼に変ってしまうにちがいない。
それでいいのか。生を宋の国にうけたわれらが、それでいいとしていられるか。
「誤解しないで欲しい」
と、宋江はさらにいった。
「――いつの日か天子のお召があれば、欣舞してそれにお応えしたいと私が歌ったのは、私の多年の宿望には違いないが、しかし、一身の安穏や栄達を願うためでは決してない。ただ国を思うからだ。そしてわれらの称える〝天ニ替ッテ道ヲ行ウ〟その志を遂げるには、天子の大赦をえて、勅の下に働かねば、どうしても、誠の働きは発揮しえないからでもあるのだ。諸君、わかってくれたであろうか」
「……なるほど」
百七人、みな、うなずいた。
それきり宋江の至誠を嘲うどころか、みな恥じる色だったが、いかんせん、せっかくな重陽の宴は理におちて、浮かれず仕舞いの散会となってしまっただけはぜひもない。
が、梁山泊にとって、記念すべきこの重陽の会は、決して無意味ではなかった。それは宣和二年九月九日のことで、明ければ、
宣和三年一月。

宋江は、思うところがあって、俄に、宋朝廷の都、開封東京へ行くことになった。

もちろん、人目を忍んでの旅行である。

同行は十人。――二人一ト組となって、戴宗は浪子燕青と、武松は魯智深と、朱同は劉唐と、史進は穆弘と、そして宋江は柴進と連れ立ち、年暮うちに山を出て、正月十五日の元宵節を前に、一行は帝都の万寿門外の旅籠に着いた。

宋江の目的が、燈籠祭りやただの都見物でないことは明らかで、要は他日のためだった。輦轂の下の人心も知っておきたいし、王城内外のじっさいも見ておきたい。

元々、彼は山東に古い地方官吏の子であるが、まだ一ぺんも東京は見ていなかった。それにしても、いちど冤罪の罪でも兇状持の金印を額に打たれた身が、どうして京師の人中へ出られたろうか。これは名医安道全が山にいたおかげだった。〝美玉滅斑〟という道全の外科手術と神薬でいつか人目にはわからぬほど巧みに消されていたのである。

宋江と柴進とは一見、非役の地方官吏のような服装して泊っていたが、万寿門の外の旅籠で一夜を過ごしたあくる日のこと、

「宋先生、万一があってはいけません。てまえがまず燕青一人だけ連れて入城し、あなたは明十四日の晩、元宵節の人出にまぎれてお入りになってはどうでしょう」

と、柴進が言い、宋江もまた、

「そう願いたい」

となったので、柴進は燕青とふたりだけで、まずその日、ひと足先に、帝都東京の街中へ下見に入った。

州は汴水と号し、府を開封とよぶ。

黄河の上流にあたり、渭水の下流に位置し、旧き呉や楚の国と隣りあい、遠くは斉と魯の境につらなる水陸の要衝だった。――山河の景勝はいうまでもなく、郊外千里に霞む起伏の丘を四方に、古都の宮城は朝映え夕映えの色にかがやき、禁門の柳、官衙の紫閣、大路小路、さらに屋根の海をなす万戸の庶民街にいたるまで、さすが宋朝の古き文化の色や匂いは、道を行く婦女の姿の一つにもわかる。

「燕青、ひとつ、どこかで休もうか」

「ここは東華門のそと、すぐこの中はもう宮城のお苑でしょう」

「なにしろ、人に酔ったよ。田舎者はな」

「あそこに、静かそうな酒楼がみえる。ひとつ昼寝でもなさいますか」

二人はそこへ上がったが、欄干から往来をながめていると、内裏へ入って行く宮内府の役人がしきりに目につく。――みな頭巾や冠のはしにこの日は〝翠葉花〟という簪を挿していたからである。

「オッ、燕青。いいことを思いついた」

「なんですか」

「耳をかせ。……どうだ。……この一案は？」

「なるほど。ひとつ、やってみましょう」

燕青は、なにか、のみ込み顔をして、往来へ出て行った。そして、東華門へかかる一人の役人をよびとめて、いと丁寧に。

「これは、張先生でいらっしゃいますか」
相手は、怪訝な顔をして。
「何をいう。わしは王だが」
「あ、失礼を。そうそう王先生と申されました。じつは私の主人がそこの酒楼でお待ち申しておりまする。さ、どうぞこちらへ」
「これこれ、お下僕。いったいそのお方とは誰なのだ」
「お目にかかればお分りでございましょう。とにかく、たいそう旧い時分のお友達だったそうで」
一方、こなたの柴進は、酒肴をととのえ、簾を垂れてとりすましていたが、そこへ燕青が連れて来た一官人を見ると、
「ほう、ようこそ」
と、立って席へ迎え、
「王君でいらっしゃるか。実にお久しいことだ。いや。ご出世を見て私までがじつにうれしい」
と、眼を細めてなつかしがった。
「はて？　どなたでしょうか」
「おわかりにならんかな？」と、いよいよ親しみをこぼしながら「どこか幼な顔というものはお互いにあるものです。思い出してみて下さい」
「では郷里の」
「そうです」
「あなたも楚州のおかたですか」
「だんだんご記憶が浮かんでこられましたな。とにかくあなたが都で進士の試験に通ってめでたく官途につかれたということは、私は遠い北京にいて聞いたのです。いやお別れしたのはそれいぜんお互いにまだ一つ童塾へ通っていた頃ですからな」
「ああ、ではあの准安の小学塾で」
「ま、一献まいりましょう。なにしろ、話がそこへ行ったら限りがない……」と、さっそく杯をすすめ、話の綾を巧みに縫いながら、柴進がふと問いかけた。
「その冠の花は、元宵節の何かですか」
「そうです」と、王は得意になって「班にして二十四班、五千八百人の官吏に洩れなく、天子さまからお祝として、時服一ト襲ねと、この翠葉金花の簪が一本ずつ下賜されます」
「なにか小さい金の小牌が付いておりますな」
「四つの文字に『与民同楽』と彫ってあるので」
「なるほど、今上の大御心は、そこにあるのでしょうな。お……小乙（燕青）。熱いのをもひとつ持っていらっしゃい」
「はい」
その小乙といい柴進といい、どう見ても人品のいい主従なので王もすっかり安心してしまったらしい。ところが、さいごの酒瓶には痺れ薬がいつか混ぜてあったのである。たちどころに、王は麻酔におち、柴進は王の着ていた錦袍、帯、剣、はかま、たび、そして花冠まですっかり自分の体に着け換えてしまった。
そして王が持っていた御用包みの何かまで小脇にはさんで。
「燕青、あとはたのむよ」
「行ってらっしゃい。こっちは、どうにでも巧くごまかしておきますから」
柴進は、すうっと出て行った。店の者も気がつかない。

しかも実物の王よりは柴進のほうが、鞋の運びまでが立派であった。東華門、正陽門の二衛府を通ると、内裏もいわゆる鳳闕のまぢかで、瑠璃のかわら、鴛鴦（おしどり）の池のさざなみ。生々殿の長廊はその果ても知れず、まったく、ここもこの世かを疑わせる。

いつか彼は、文徳殿の庭から紫宸殿のほとりへ来てたたずんでいた。禁門のいずこでも咎められはしなかった。けれど深殿のおもなる所はみな錠がおりているので立入ることはできない。そのうちに凝暉殿の廻廊の橋からふとみると、

叡思殿

という金文字の額が仰がれ、ふと見れば、そこだけは朱の障子が開かれている。

「あ。天子のご書見の間だ」

柴進は、われも忘れて、人なき玉座を巡ってみた。お机には、端渓の硯、龍華紋の墨、文房具の四宝、いずれも妙品ならぬはない。そして「大宋国山川社稷之図」という大きな構図の絵屏風が立てめぐらしてあり、屏風の裏面は白無地だったが、ふと、柴進がそのうしろにまわってみると、何と、国内四人の大寇（むほんにん）として、天子直筆で、四名の名がしるされていた。

山東宋江　淮西王慶
河北田虎　江南方臘

「……ああ」

柴進は、眺め入った。

「われわれが国をさわがすので、つねにこうまで、み心にかけておられるのか」

彼はすばやく短刀をぬいて「山東宋江」の四字だけを切り取り、さっと内苑から姿をくらまして、元の酒楼へと帰って来た。

「燕青、階下の帳場へ行って、すぐ勘定をすましておけ。そして、みせの者たちに、祝儀をやって、あとに一人残しておくが、こうこうなわけでと、そこはおまえの口でうまく」

「わかりました」

万端、のみこんで、燕青が店の者をまろめ、元の二階へ戻って来てみると、もう柴進は自分の衣服に着かえて、借物の花冠や官服などは、そっくり王の体の上にかぶせてある。

――王はまだ、昏々と、麻酔からさめていないのだった。

彼が正気がついたのは、日没の頃である。何が何だか分らない。また何一つ失くなっている物もない。恥かしいのか、給仕人のことばもそら耳に、衣服や冠を着直すやいな、あわてて店のそとへ出て行った。

その王は、あくる日、自邸で客の口からふとこんな噂を聞かされた。

「なにしろ奇ッ怪なこともあるもので、叡思殿のお屏風から『山東宋江』の四文字だけが、何者かに、切りとられているというのです。いやもう禁門の内外は、そのご詮議でたいへんらしい」

「ほほう？」

さてはと、王は、背すじの顫えにぶるッとしたが、一切、口には出さなかった。

一方の柴進は、はたごへ帰ると、さっそく宋江へ「山東宋

江」の宸筆を見せ、またつぶさに、禁裏の様子もはなして聞かせた。
宋江は、宸筆を見て、ああ……と浩嘆してやまなかったが、明ければ十四日、この黄昏れを外してはと、まつりの人波にまぎれて、城内の中心街へ入りこんでみた。
連れは、柴進と戴宗と、そして浪子燕青だけをつれ、あとは自由行動にさせておいたのである。いわゆる六街三市の人口やその殷賑は、さすが大宋の帝都で何とも讃えようがない。空には月があり、ぬるい人いきれも匂うようで、封丘門、馬行街などはわけて灯の海か燈籠の花園さながら、不夜の城とはこれかと思われるばかりだった。
「おや、ここは色街ではないのか」
「ええ、たぶん廓でしょうよ」と、燕青は根が北京育ちのいなせで伊達な若者だったので粋な道にも通じていて――「道の両側をごらんなさい。ずらと木札に四季の造花を飾って女の名前が書いてあるでしょう。みんな花魁の廓名であれを〝煙月牌〟と申しますのさ」
「ほ、一軒のこらず、いずれも両側はお茶屋らしいの。こころみに、どこかへ登楼って、ちょっと一酌いたそうか」
宋江にしてはめずらしいことだ。燕青が小粋な若党姿であるほかは三名ともみな歴乎な非役の武家か官人といった風な身なりなので、茶屋では上客と見たか、下へもおかない。
しばらくは、妓をよんで、いわゆる通な〝きれいごと遊び〟に時をすごしていたが、そのうち斜向いの、わけて一軒すばらしい大籬の揚屋に、チラと見えた歌舞の菩薩さながらの人影に、
「おや、豪勢なお取巻きだね、あの花魁はいったい誰？」
妓と妓は、顔見合わせて、まるで耳こすりでもするように、宋江へ囁いた。
「あれが廓一番の、李師々大夫さんですのよ」
「へえ、李師々大夫」
「だめですよ、岡惚れをなすっても」
「どうして」
「だって、今上の天子さまがお馴染みで、毎度毎度、お通いになっている高嶺の花、いいえ、お止山の花ですもの」
「ははは、じゃあ何ともわれわれでは仕方がないね」
「だから、妾たちにしておきなさいよ」
「どういたしまして、君たちでも、もったいない」
「うそばッかり。お杯もくれないで」
いつのまにか、燕青はここの席から消えていた。何事かを宋江から耳打ちされて、斜向いの大籬の門へ、すうっと、入って行ったものである。
内は前栽から玄関もほかの青楼とはまるで違う上品な館づくりだ。長い廊から廊の花幔幕と、所々の鴛鴦燈だけが艶めかしいぐらいなもの。
「あら哥さん、あんた誰？　どこへ行くの？」
「才、禿さんか。じつはね、ご内緒のおっかさんに会いたくって来たんだが」
「おっかさんなら、あそこでお客さんと話しているわよ」
「ほ。……あの肥えた女のひとがそれかい」
内庭の向うを覗くと、なるほど、斑竹のすだれ越しに、花瓶の花、四幅の山水の掛軸、香卓、椅子などが透いてみえる。

――燕青は禿の女の子の手へ、そっとおかねを握らせた。
「たのむから、べつな部屋へ、ちょっと、おっかさんを呼んでくれないか」
やがてのこと、ご内緒のおかみは、燕青が待っている前へやって来たが、もとより知っているはずはない。まじまじと、ただ怪訝顔である。
「ああ、お久しぶりです、おっかさん。ひと頃より、少しお肥りになりましたね」
「たれなのさ、いったいおまえは」
「張ですよ。いやだなあ。忘れちゃっては」
「張って？　……張だの、王だの、李なんて名は、世間にありすぎるよ」
「ですからさ、幇間の張のせがれの、張二なんで」
「じゃあ、太平橋のそばにいた、あの唐子髷でチョコマカしていた子がおまえかい」
「へえ、そのご東京を飛び出しましてね」
「どこへ行ってたの」
「北京府の紫雲楼で一ト修業してまいりました」
「紫雲楼といえばおまえ、北京では一流のお茶屋じゃないか。だけど去年、焼けたというはなしじゃないか」
「へえ、それで田舎茶屋を稼ぎ歩いていますうちに、燕南から河北では一番の大金持ッていう旦那のごひいきになりましてね、久しぶりに、旦那のお供で、当地へやってまいりましたようなわけ。……ところでひとつおっかさんにも、よろこんでいただけることがあるんですが」
「なんなのさ、いってごらんよ」
「その千万長者が、たった一度でよい、そしてなにも、泊めてもらわなくてもいいから、李師々大夫と話がしたいというんです。ちょっと手土産がわりという纏頭でも、百両千両はきれいにお撒きになるお大尽。おっかさん、どうでしょう？」
欲には目もないのが廓の慣わし。わけてここのご内緒ときては、強欲の名が高い。おかみはさっそく、李師々をよんで、燕青にひきあわせ、李師々はまた、品よくおかみのはなしを聞き終って、
「お話し相手でよいことなら、いつでもお渡りくださいませ」
と、いう返辞。ではさっそくと、燕青はすぐ走り戻って、向いのお茶屋から宋江、柴進、戴宗を迎えて来た。
席は、李師々の部屋か、すばらしい一亭である。楽器の供え、芙蓉の帳、そして化粧室の華美など、いうばかりもない色めかしさだが、しかし酒は出さない。茶を煮て、金襴手の茶碗に、それもほんの少し注いで、彼女の手で各〻の前に、すすめられたのみだった。
「おおこれは四川の名茶。田舎者の私たちには、めったにいただけない玉茶だ。なんとも、すずやかな香味ですわい」
「さる高貴なおん方の賜り物です。これがお分りなれば田舎者どころではございません。お目にかかれてうれしゅうございます」
「てまえこそ、近頃の倖せ。お名の高い大夫には、こうしてお話ができたし、またお手ずからなお茶までいただいて」
「ごゆるりと遊ばしませ」
李師々大夫は言ったが、折ふし、わらわらと禿や新造が小走りにそとまで来て。

「大夫さんえ。お上が、裏の御門へお成りでござんすぞえ」
「ま。あいにくな」
と、李師々は、宋江へ、気の毒そうに、
「あすならば、お上も上清宮へ御幸なされて、ここへはお渡りもございませんのに。——どうぞ、これにお懲りなく、また」
と、その雲鬢花顔に、一顧万金の愛想笑みをこぼして、金簪瑶々と立って行った。
宋江たちは、やがて外へ出て、小御街から天漢橋を渡りながら、
「さすが、目にのこるような美人だったな」
と、李師々の噂をしながら、橋畔の樊楼のまえまで歩いて来た。
すると、樊楼から出てきた二壮士がある。酔歩まんさんと、何か歌って行く。歌は、三尺の剣、志をえず、いたずらに泣く——といったような物騒きわまる悲歌だった。
「おや、史進と穆弘じゃないか。こんな人中の大道で」
宋江は舌打ちをならし、柴進はかけ出して、
「おい、ご機嫌になるのも、程にしろ」
と、二人の肩をどやして、たしなめた。
二人は恐縮して、あとに尾いて、旅籠へ帰った。ところが留守のうちに一人部屋へ入ってふて寝をしていた奴がある。こんどの行に洩れた黒旋風の李逵で、無断であとから追ッかけて来たものらしい。
「ごめんなさい」と李逵はあたまをかかえこんで言った。「お叱言はかくごの前だアね。だけどさ、宋先生、もう来てしまったものは仕方がないでしょ。ねえ、来てしまったものは」
「この、黒猿め」
宋江も苦笑のほかはなかった。百八の性は、百八人、その容貌の異なるように違っていたが、まったく、集団生活の規律はおろか、箸にも棒にもかからないのは、この男ひとりだった。

## 二十四　徽宗皇帝、地下の坑道から廓通いのこと。並びに泰山角力の事

翌晩は上元の佳節、一月十五日の月は、月さえふだんよりも大きく美しく見える。
「おやまあ、よく来たこと。ゆうべの張二さんじゃないか」
「これは、おっかさん、昨晩はどうも……」と、燕青は揚屋構えの朱壁の大玄関に、つつましく腰をかがめて、
「おかげさまで、てまえもすっかりいい顔になり、お大尽もまた、えらいおよろこびでしてね、へえ、都一の李師々大夫にも会えて東京へ来た効いもあったと、たいそうなご満足。ですが、ゆうべは、つい、おっかさんにお礼もせずに戻ったし、いずれ郷里からも何か珍しい物を送らせるが、これはほんの寸志、よろしくと、おことづけを頼まれてまいりました」
お内緒へと、こがねで二百両。楼中へと、べつに五十両、帛紗にのせてそれへおいた。
「あら、これを」
「どうか、お納めなすって」
「まあ、お義理がたいお大尽さま。いまはどちらにいるのだ

え」
「河岸を代えて、廓の入口のお茶屋に休んでいらっしゃいます」
「なにサ、まあ水臭い。そこまでお出でいながら、顔も見せてくださらないなんて。張二さん、はやくお連れしておいでよ」
「だって、いいんでしょうか」
「上元のおまつりだもの。大夫もこん夜はつまらないお客は断わって、あとであたしと飲もうと言っていたところなんだよ」
燕青は、しめたとばかり、飛んで帰って宋江に首尾を話す。もちろん、初めから宋江のさしずであったのはいうをまつまい。
この夜、宋江は、例の柴進と戴宗のほかに、もひとり厄介者を連れていた。李逵である。
だが、その李逵と戴宗は、玄関の供待ち部屋へ残しておいてずっと奥へ案内された。こよいのやかたは、また一だんと、ゆうべの席よりは奥ふかい。
とくに今夜は酒も出て、おかみのとりなしはもとより、李師々の艶めかしい廓言葉も、すっかり打ち解けきっている。
「これも宿世のご縁でしょうか。大夫と口がきけるなんて、夢にも思いませんでした」
「まあ、いやですわお大尽さまは。さっきから妾をまるで天人みたいに仰っしゃって」
「どう見ても、あなたの美しさは、あたりの模様、ここは下界とも思われません」
「銀のお杯はお飽きでしょう。おっかさん、瑠璃杯か、金盃をもって来て」
そこへ、女が小走りに来て訴えた。供待ち部屋にいる〝奴さん〟と、もひとりのお供が、なぜ俺たちも座敷へ通さんかと、当りちらして、手がつけられないというのである。
柴進は聞いて、これは危ないと思った。宋江もすぐ目くばせする。燕青が心得て、すぐ二人を連れて来た。
「あら……」と、李師々は、李逵の風貌に恐れて、宋江の腕にすがった。
「まるでお閻魔さまに仕えている小鬼のようね」
「なあに、あれで気がいい奴だから、なにもこわがることはない。李といって、子飼からのわが家の下僕さ」
「おや、苗字は妾とおなじなのね。わたしはよいが、李太白（唐朝の大詩人）さまは、さぞ……ホ、ホ、ホ、ホ」と、その花顔を袂の蔭につつみながら「ご迷惑がッていらっしゃるでしょうね」
「うまい、よく言った！」
みなどっと笑ったが、ご当人の李逵だけには何の意味か分っていない。
もう次の間で飲み初め、嫉けてくるのか、すこぶるご機嫌がなめである。戴宗も大杯で仰飲るし、柴進も負けてない。いや宋江もめずらしく大酔し、酔うと彼の癖で、筆硯を求め、楽府（絃にのせて歌える詩）の一章を、墨も、りんりと書き流していた。――するうちに、突然、
「お上が、いつもの御門からお見えなされましたぞえ」
と、楼中へ告げまわっている声がした。聞くと、李師々大

夫の心はもうここにない容子ですぐ立って行ってしまうし、あとの座敷をかまっている女もいない。
「……叱っ。静かに」
宋江と柴進とは、これを機に、台臨の間の中庭へ忍んでゆき、ほかの面々も、影をひそめた。巷間、その当時の隠れない取り沙汰では、時の風流天子徽宗は、禁中から廓まで地下道を坑ってしげしげ通っていたものと言い伝えられている。
蘭燈の珠の光や名木のかそけき香いが、御簾ごしに窺われる。やんごとないお人の影と向いあって、李師々の白い横顔も紗の中の物みたいだった。そして折々、中庭の暗がりへ男女の囁きだけがこぼれていた。
「天子さま。きょうは、上清宮へお詣り遊ばしたのでございましょう」
「そうだよ、宣徳楼では、毎年、万民の福祉と四季の天候を祈る式があるのでね」
「さぞ、おつかれでいらっしゃいましょう」
「終日、群臣にとりまかれて、くつろぐひまもないからなあ。せめてここへ来て、そなたとこうしている一刻ぐらいが」
「あれ、もったいのうございます。わたくしはうれしゅうございますが」
「いや、ほんとだ。でなければ、画院にこもって、絵筆を把っている日だけだね。自分が自分なりに居られる時は」
「いつかお絵を拝見させてくださいませね！」
「おおそのうちに何か描いてやろう。ま、いつもの葡萄の美酒に瑠璃の杯。ひとつそなたの白い手で酌いでくれぬか……」
中庭の木蔭にかがんでいた宋江は、このとき、胸もはずむ思いで、柴進の耳へ諮ってみた。
「天の与えだ。咫尺へ進んで、直々に、われらの微衷とみゆるしを、おすがりしてはどうだろう」
「いいや」柴進は顔を振った――「まずいでしょう、いい機会ではありますが、ここはその場所でない」
すると、このせつな、どこか別な部屋の方で、
「あっ、何者だッ」
という大喝と共に、どたんと、床を打ったような響きが聞えた。
これは、天子の侍者として、廊のそとにいた楊大臣が、何気なく一室の扉をあけてみたところ、そこに大酔した李逵がふんぞり返って寝ていたので、驚いてとがめると、とたんに、躍り起った李逵が楊大臣の巨きな体を、いやというほど床へ叩きつけたための物音であったのだ。
「しまった」
宋江と柴進とは、とっさに、やかたの外へ走り出したが、時すでに、李逵は楊大臣以下の宮廷人らを相手に例のごとき持ち前の暴勇をふるい出し屋鳴り振動のうちに、過って、どこかでは火を失し、焔、黒煙、その中を、帝は、裏の坑道を、あわただしげにご帰還となった様子――
「火事だ」
「李師々のやかただ」
廓内は、一瞬のまに、大騒動となり、かえりみれば、月の夜空は、火の粉をちりばめ、どこかでは早や、軍隊がうごいている。

かねて、内裏の叡思殿に起った一怪事から、禁軍の警戒は、密々諸方へ手配されていたもので、その総指揮には、かの高俅――すなわち徽宗天子の無二の寵臣、高大臣がみずから当っていた。

「燕青、李逵はおまえがあとから引っ張って来い。ぐずぐずしていると、東華門の脱出もむずかしい」

事実、城門は諸所で閉めかけられていた。宋江の身を案じて、史進、穆弘は血まなこで探しており、朱同と劉唐とは、例の旅籠で待っていた。なにしろ一刻もはやく、城外遠くへ逃げるしかない。

ところが、高俅の兵は、すでに八道の関門から街道の旅籠旅籠の詮議にまで手をまわしており、宋江はいくたびか逃げ道を失った。で、ぜひなく裏街道の陳留県へ道をかえてくると、はからずも、

「宋司令、お迎えに来ました」

という梁山泊からの味方に出合った。

山の五虎ノ将――関勝、林冲、呼延灼、董平など――の一軍で、どうせこんなことも起ろうかと、軍師呉用が、変を見越して、かくは差し向けてよこしたものだという。

「やれやれ、せっかくな都さぐりも……」

宋江は大いに悔やんだ。しかし、あとの魯智深や武松なども、やがてみな、虎口をのがれて、無事に揃って山へ帰り得ただけでも見つけものと思わなければならなかった。

「何事も時が熟さぬうちは成り難い。自然、深く慎んでいれば、やがて天子のみゆるしと招安の沙汰もあるだろう」

そのご梁山泊は、いと静かだった。が、ただひとりこの春日を檻の中で、もがいていたのは李逵である。李逵は罰として、百日の禁足を食い、それが解けて、檻から外へ出されてみると、春は弥生（三月）の花の霞だ。

「あ、あ、あ、あア……。ひでえ目にあわせやがったな……」

李逵は、思うさま大きな欠伸を一つした。

すると、ちょうど、その日のこと。

腰に柄太鼓を挿し、肩から斜に、包みを背負ったいなせな旅商人ていの若者が、すたこら、麓の方へ降りて行くのを見つけ、

「はて。山では見かけねえ身装だが、誰だろう。おやっ、燕青だ。おうい、どこへ行くんだよ。小乙」

と、李逵は飛ぶがごとく追っ馳けて行った。

この三月二十八日は、例年、泰安州東岳廟の大祭で、また例年きまって、有名な「奉納相撲」がおこなわれる。

ことしもまた、その奉納相撲には、鳳州生れの力士で、アダ名を擎天柱といい、相撲名を〝任原〟という者が、弟子、贔屓の旦那など、数百人に打ちかこまれ、

「どうせ、三年勝ちッ放し。今年も山と積まれた懸賞はただもらいさ。すまねえこッたなあ」

と、人もなげな大言を払って、すでに乗り込んでいるという。

燕青は、李逵へ話した。

「癪じゃあねえか。泰州といえば、山東の鼻ッ先だ」

「むむ、そいつは生意気な野郎だなあ」

「だから宋先生と盧俊儀さまにお願いして、おゆるしを得、

俺はこれから、その泰岳へ出かけて行くのさ。二十八日の奉納相撲で、天下無敵とかいってやがる任原の野郎を、数万人の見物の中で投げ飛ばしてやったら、さだめし胸がスーッとするだろうと思ってね」
「ちょ、ちょっと待ちなよ」
「なんだい」
「おめえは、浪子燕青とかいって、四川弓を持たせちゃ、巧いもんだそうだが、体ときては、山ではいちばん小ッけい方だ。先はいずれ仁王のような大男だろうに、自信はあるのかい」
「黒旋風、見損なッちゃいけないよ、これでも北京の春相撲、秋相撲には、一ぺんだって、負けたことはないんだぜ」
「よし。万一ッてえこともあらあ。おれが助太刀に行ってやろう」
「まっぴらだ。みんなも言ってたよ。李逵が顔を出すと、ろくなことは一度もないって」
「いや、こんどは俺も考えたさ。百日もお灸をすえられれば沢山だろう。連れて行けよ。なあ燕青。まったくこのところ、世間の匂いも嗅いでいなかったんだ」
すがられると、燕青はあわれにもなって、つい条件付きで、連れて行くことになった。
日をかさねて、泰州に入る。
四山六岳のお社廟を彼方に、泰山街道はもうえんえんと蟻のような参拝者の流れだった。多くは相撲の噂でもちきりである。そして麓町まで来ると「太原之力士、擎天柱任原、茲有」と大幟が立ててあり、幟の下には「拳ハ南山ノ虎ヲ打チ。脚ニ北海ノ蒼龍ヲ蹴ル」と二行に書いた立て札まで建っている。
「ちッ、目ざわりな……」
と、燕青は札を引ッこ抜いて、発矢と、かたわらの岩へ打つけて、叩き割ってしまった。
「やあ、たいへんだ。えらいことをしやがったぞ」
「ことしは、札を叩き割った相手が出てきた」
この噂は、嵐のように、大岳じゅうの人から人へつたわった。
それも、どこ吹く風かの顔をして、燕青は一軒の講中宿に寝ころんでいた。
初めからの条件なので、李逵は病人をよそおって、頭から夜具をかぶったままで口かずも余りきかない。そして相撲の当日も、一切、見物の中でおとなしく見ているという約束なのだ。
そこへ、どやどやと近づいて来た大勢の足音と共に、案内して来た宿の番頭らしいのが、
「へい、へい。関取のお弟子さんがた。その、腰に柄太鼓を挿した若い旅商人というのは、この部屋のお客でございますがね」
「うむ、ここか。おうっ、若いの」
「なんです。人の部屋へ」
「てめえだろう。町の入口で、親方さまの立て札を、叩き割った野郎というのは」
「知りませんね、そんなことは」
「嘘をつけ。見ていた者が大勢あるんだ。大それた真似をす

るからにゃ、たしかに、任原関取の向うに立って、勝負を挑むつもりだろうな」
「へへへへ」
「何を笑う。やいっ、そいつを確かめに来たんだよ。相撲名は何というんだ。その日になって、どろんをきめ込もうとしても、そうはさせねえ。俺たちの眼が光っているんだぞ」
「もし、お弟子衆――」と、番頭はそばから言った。
「なにか、お間違えじゃありませんか。どう見たって、こんな小柄なただの若造、そして旅商人風情の男が、あの任原親方の、小指にもさわれたもんじゃございますまい」
「ウム、そういえば、そうも見えるな。……おやもう一人、隅で蒲団をかぶっている奴がいるじゃあねえか」
「おうっ、引っ剥いでみろ」
と、ほかの一人が、飛びかかって、夜具をめくッた。
「……？」
李逵は、ぬうっと、顔を上げて、坐り直した。黒奴特有な油光りのしている皮膚に、ギョロと、眼が白く、唇は厚くて赤い。
燕青との約束で、彼は口をきかなかった。それがまた不気味に感じられ、任原の弟子たちはタジタジとした。「どうせ、相撲の当日には、分るこった」「まあ、今日は見のがしておけ」「覚えていろよ」などと口々に言いながら、ごそごそと、いちどに外へ出て行ってしまった。
「ふ、ふ、ふ」
「あはははは」
そのあと、二人が手を打って、不敵に笑い合ったのを見て、宿の番頭は、胆をつぶしたように帳場の方へ素ッ飛んで行った。
翌朝燕青は、その番頭をつかまえて。
「任原は、どこに泊っているんですか」
「関取のお宿は、迎恩橋のそばで、門前町でもいちばんの大旅館ですが」
「その迎恩橋というのは」
「もっとずっと、お山に近い中腹なんで。へい、なんでもお弟子衆の二、三百人を、毎日に半日は、えいや、えいや、揉んでやっているということですよ」
「おもしろそうだな。ひとつ見物してくるかな」
「お連れの、黒いお方は？」
「あれは病人だからね、今日もふとんをかぶって留守番だ。そっと寝かしておいてください」
なるほど、迎恩橋まで来てみると、旅館は任の一行で貸切とみえ、旗、幟、牌、造花で縁どられた絵像の額など、たいへんな飾りたてである。
それに裏庭では今、さかんに稽古をつけているところとみえ、歓声、拍手、見物の笑い声など、人の出入りも自由と見えたので、燕青も大勢に紛れて中に立ちまじっていた。
「あれだな」
燕青の眸は、任原だけしか見ていない。
さすが、ちから山を抜く、という形容も不当でなく、大力士らしい貫禄は充分だ。弟子どもに大汗を拭わせながら、床几でひと息ついている様子は、そのまま巨大な金剛像といってよい。

するうちに、弟子のひとりが、彼に何か耳こすりしていた。燕青の顔を見おぼえていた者だろう、任原は聞くやいな、やにわに、砂場の真ン中まで歩き出して来て、猛虎の吠えるようにこう言った。

「片腹痛いが、ことしは俺の牌を割った奴がある。健気な奴だと賞めておこう。あしたはきっと姿を消さずに出て来いよ」

そして、じろと、燕青の方をにらみ、大地も揺るげとばかりしこを踏んでみせた。

燕青は、さっさと、自分の宿へ帰って来た。顔を見ると、さっそくに、李逵は愚痴と不平で、とめどがない。

「もういけねえよ、もう辛抱はできねえよ、いったい、俺は何しに来たんだ」

「いや、あしたは、いよいよ奉納相撲。こんどは、柄になく、よく辛抱をしなすったね」

「じゃ、今夜一ト晩か。飲もうじゃないか」

「うん、飲むのもいいが、少しにしてくれ。はれのあしたを控えている身だ。俺は精進潔斎をしなけりゃならねえ」

宵のうちに寝て、夜半をすぎると、燕青はもう起き出していた。裏へ出て、水をかぶり、湯をもらって、髪に櫛を入れ、持ってきた練絹の白いさるまた、新しい腹巻、襦袢、縞脚絆、すべて垢一つない物にすっぱり着代えて、朝飯をすますやいな、「黒旋風、さあ、行こうぜ」

と、立ちかけた。

李逵もまた、

「そうだ、俺もこいつを持って行こう」

と、例の二丁斧を、取出して手に持った。しかしそれはいけないと、燕青が切に言って止めさせた。――梁山泊の黒旋風と人に感づかれたらすべてぶちこわしになってしまう。

「そうかなあ？」

不承不承、李逵は布にくるんで、それは旅籠の帳場に預けた。――すると番頭を初め、泊り客の三、四十人が、ふたりが鞋の八ツ乳を結んでいる間じゅう、口を揃えて言い出した。

「ねえ、お若いの、悪いことは言いませんぜ、相手は、なンたって、無敵の任原だ」

「あいつに、ぶつかるなんて、犬死にだよ」

「いっそ、物笑いになるだけのことだ。若気だろうが、考え直して、ここから姿をかくしたがいいぜ」

燕青はニコとして言った。

「大勢さま。ありがとうございます。ですがたぶん、山のような懸賞の褒美は、こちらの物になるでしょう。そしたら皆さんにも、晩には、おすそ分けをいたしましょうかね」

「あっ、あんな大口を叩いて行っちまった。……かわいそうに、ちょっと、愛嬌のあるいい若者なのに、またことしも一人、血ヘドを吐くのか」

唖然として、そのたくさんな顔も、やがて鞋やわらじをわれがちに穿き込んでいた。そして泰岳の上ではもう暁をやぶる一番の刻の太鼓につづいて、玲々と鳴る神楽が霞のうちにこだましていた。

## 二十五　飛燕の小躯に観衆はわき立ち、李逵の知事服には猫の子も尾を隠す事

泰山はこの日、人間の雲だった。わけて東岳廟を中心とするたてものの附近は社廟の屋根から木の上までがまるで鈴なりの人である。

奉納大相撲はそこの嘉寧殿とよぶ高舞台でおこなわれ、例年のごとく、ことしも州の長官閣下とその妻女やら役人だのが桟敷に見え、波のごとき群集はのべつ揺れ騒ぎながら一ト勝負ごとにさかんな喝采や罵声を舞台の力士へ送っていた。

土俵はない。

勾欄を繞らした高舞台そのものが土俵である。

やがてばんかずも進むうちに、勾欄の一角に錦繍の幟が立った。わアっと同時に四山六岳もくずれんばかりな歓声が揚がる――。いよいよ天下無敵と称する擎天柱任原の出場なのだ。見れば嘉寧殿の宝前にも山とばかりこの一番へ贈られた賞品が積み上げられた。

「退いた、退いたア」

露払いの声につづいて、弟子や介添えの大勢をうしろに、やおら任原は舞台の一端に登場した。すぐ腹巻や頭巾を解く。そのそばから弟子は蜀錦の半被を着せかけ、手桶の神水を柄杓に汲んで任原の手に渡す。

がぼ、がぼ……と二タ口三口うがいして、あとの一ト口をがぶりと飲みほした任原は、社廟の奥の灯へむかって一礼するやいな、ばっと蜀錦の半どてらをかなぐり捨てて、

「いで、ござらっせい！　今年のお相手」

と、掌につばして二ツ三ツ打鳴らしながら舞台の真ん中へ歩み出してきた。

髪は紅元結で短くしばり上げ、金の型模様をした薄革の短袴に玉の胡蝶の帯留を見せ、りゅうりゅうたる肉塊で造り上げられたようなその巨体は生ける仁王とでもいうほかはない。

行司役の年寄りがそばからいう。

「東西東西、四百余州の国々からご参詣の皆さまがた。任原関にはご当地でもすんでに二年間の勝ちッ放し。ことしで三年目。来年はもう泰山には見えられませぬ。腕に覚えのある新顔のお相手には、今日一番がさいごの機会だ。さあ、出たり！

出たり、幾人でも名のッて出なされい」

任原もつづいて言った。

「不戦勝ちの只貰いでは、あっしも張合いがねえし、あれへ山と積まれた賞品のお贈り主にも申しわけがごわせん。誰か、この任原へ当ッて来るご仁はないか」

行司がまたいう。

「ここには、南は南蛮、北は幽燕の境におよぶ所までの、相撲好きという相撲好きはお集まりのはず、従って、われと思う大力の衆も必ず中にはいようというもの」

「ええ、焦れッてえ！」と、任原はついに持ち前の豪語のありッたけを吐いた。

「こわいのか。たった一人の角力取りが。なるほど、天下無双の任原と聞いては、皆の衆のオジ毛立つのもむりはないが、なにも、相手と見たらみな腕を折ッぴしょッたり血べどを吐かすとは限っていねえ。よい程にもあしらッて進ぜますだ。

こんなに言っても出て来ねえのか。いやさ相手はいないのか」
　すると、どこかで。
「ここにいる！」
「やっ、何か言ったな？」
「ここにいるといったのだ。やい任原、あまり世間に人もないような大言を吐ざくなよ」
　そのとき、舞台横の小高い所から、人のあたまから頭をまたいで、泳ぐように進んで来た者がある。はやくも床下柱から勾欄をよじ登って来て、
「さあ来い、任原」
　とばかり彼の応戦者として立った。
　これを見ると、わあっと全山は笑いに揺れた。肉のひきしまった色白な若者だが、背は任原の三分ノ一ほどしかない。しかも一個の素町人らしい。しばらくは嘲声がやまなかった。しかしそれが止むのを待って、やっと行司は真顔で訊いたものである。
「お若いの。お名まえは」
「山東の張ッていう旅商人だよ」
「どういうお覚悟で出なすッたのか」
「覚悟。べつにそんな物ア持ち合わせねえさ。ただあそこにある賞品が欲しいのでね」
「げっ。正気か、哥さん」
「行司さんよ。おめえは行司だけが役目だろうぜ」
「退いた」と、時に任原も横手を振って行司の年寄りを遠くへやって。「――おお若いの。よく出て来た。角力とはどんなものか、望みとあるなら味をみせてやろう。ただしだぞ、首の骨が折れたの、血へどを吐いたのと後でいっても、角力道に泣き言は追ッつかねえのが約束だ。おふくろは合点なのか」
「ふざけるな。勝負はしてみなければわかるまい。てめえこそ、死顔にベソを掻くな」
「よし、いったな、支度をしろ」
「おお、いわれるまでのことはねえ」
　燕青は、頭巾を払った。今朝、櫛目を入れておいたきれいな髪――。脚絆、肌着、わらじまで、一瞬のまに解いて丸めて隅の方へ投げすてる。
　とたんに海騒のような観衆の鳴りはハタと唾を呑んでやんだ。燕青の真白な肌に藍と朱彫のいれずみが花のごとく見えたからである。任原もまたそれを見て、「――おや、こいつ、ただ者ではないぞ」と、ちょっと、怯気に似た警戒を心に生じたかのようだった。

　さて。どうしたのか。
　土俵上の、いや舞台のうえの両力士は、いざと見えながら、なかなか取組となる様子もない。なぜかといえば、州長官閣下たちの見える桟敷からとつぜん役人や近習の一ト群れが走り出して来て、
「待った」
　と、上意の声がかかっていたからである。
　要は、州長官夫人の胸から出たものらしい。健気ではあるが見るからにまだ少年といってもいい花の若者。虎の前へ投げられた一片の肉ほどな歯ごたえも任原には感じまい。不憫すぎる。むごたらしい。若者にはその意気に愛でて賞品の一

部だけを与え、退き下がらせよ――というありがたい仰せつけであるという。
「どうじゃな任原、そちに異存はなかろうな」
「ごわせん。だが命冥加な野郎でごわすな。おい若造、お桟敷の方へ向って、三拝九拝して引ッ込め」
「たれが」
「知れたことを」
「気のどくだが、いちど上がった舞台、てめえを叩きつけて、ご見物に得心をつけるまでは、ここを退がるこっちゃあねえんだ。……ええ、お侍さまたち」と、一方へ向っては小腰をかがめ「まことにお情けはありがとうございますが、殿さまにはよろしくお伝え下さいまし。こんな薄汚ねえ獣を、天下無敵の何のと吐ざかせて、この日下を人もなげに歩かせておくわけにはまいりません。へい、男はここに一匹いるのですから」
燕青はどうしても承知しない。のみならず、騒ぎだしたのは数万の見物である。「やらせろ！」「よけいな水はいれるな！」「役人どもは引っ込め」と、喧々囂々、木の実を投げる、石が飛ぶ。まちがえば暴動にもなりかねないような狂気めいた騒ぎだった。
桟敷からはまた、追ッかけの使者が走ッていた。「ぜひもない、引きさがれ」という旨らしい。で一同は颯と桟敷の方へひきあげる。見物はこの様子に、わが意を得たかのごと万雷の喝采を起して、よろこぶこと限りもない。すでに舞台では、任原があらためて屹立していた。対するは、花の刺青。山の如き相手にたいして、なんと小さく見えることか。
行司は、観衆へ向って、もいちど開催を告げ直し、両力士に対しては、相撲道の宣誓文を読み聞かせた。「遺恨を残すまじきこと」「卑怯の手を用いまじきこと」等々、七ヵ条ほどな誓約である。終ると、再び観衆の方へ、
「片や、任原。片や山東の張」
と、名のり触れを触れ渡し、
「用意ッ。見合ッて！」
と、先がササラになっている青竹で舞台の床を大きく叩く。さっと、それが阿吽のあいだに上がるのが合図だった。
いちめん、狂瀾のような声がわき起った。見物はまったくもう酔ッているのだ。任原の巨体はいきなり飛込んできた燕青の体を脇の下に抱きこんだまま身ゆるぎもしていない。ジリと二、三寸は踵がうごくかと見えただけである。刻々と、燕青の皮膚の色が変っていた。見物はそろそろ案じだした。このまま息のねを止めてしまわれるのか。相撲もこれだけのもので終るのかもしれない、と。
が一瞬に、二つの体は相搏ッて反りあっていた。燕青の仕掛けが効いて、さしもの任原も腰をちょっと浮かせたらしい。間髪、さらに隙を突いて、燕青の肩か頭が、相手の鳩尾へ体当りを与えたかと思うと、任原は二ツ三ツしどろ足を踏んでよろけた。観衆がわーッとよろこぶ。任原は吠えた。猛虎の勢いで、
「うぬっ」
と、つかみかかったものである。
しかし燕青はむしろ相手自体の動力を待っていたのだ。身を低めるやいな任原の体を肩ぐるまにかけて投げとばした。

が、任原もさる者、片足でよろめき止まって、奮然とふたたび躍りかかる。するとまた一方は、飛鳥と交わす。そして戸惑う大きな臀を突き飛ばした。もう任原は逆上気味だ。何度目かには、燕青を腹の下につかまえた。燕青は盤石の下の亀の子にひとしい。ところが、岩盤は四肢を伸ばして宙へ持ち上げられていた。燕青が担ぎ上げたのだ。信じられぬような怪力である。ダ、ダ、ダッと燕青の足が床を鳴らして走った。そして高舞台の勾欄の端から下を臨んで、

「勝負あった！　勝負は見たろう！　くたばれッ任原」

と、叩きつけた。

そこは最も高床の懸崖だった。投げられた任原はクシャッと一塊の肉と血飛沫になったきりで動きもしない。仰天したのは万余の見物だけではない。任原の弟子数百人は、一瞬、呆ッけにとられていたが、

「野郎っ。逃がすな」

たちまち、燕青のまわりをおおいつつんだ。素早い奴は、早くも懸賞品の山へむかって掠奪に殺到する。また桟敷そのほかも総立ちになる。

あとの格闘と混乱はもう形容のしようもない。――燕青危うしと見るや、さっきからすぐ舞台わきにいた黒旋風の李逵が、

「さあ、こんどは、俺の出番だ」

とばかり躍り出して、以来、我慢に我慢をしぬいていた持ち前の暴勇を奮い出したからでもある。彼と燕青が駈け廻るところ、まるで人間の木の葉旋風が飛ぶようだといっても決して過言でない。

すると、どこからともなく、

「梁山泊だ、梁山泊の人間だ。さっきの若いのも梁山泊だったに違いないぞ」

という声が嵐のように立ち初めた。それも当然で、この時、群集の中を割って、かねて燕青の身に万一があってはと案じて山寨から密かにこれへ来ていた――玉麒麟の盧俊儀、九紋龍の史進、魯智深、武松、解珍、解宝などの男どもと手下が、いちどに姿をあらわして、「もうよい、ここの目的は達した、一時もはやく山泊へ引きあげろ」と、殺傷を避けるべく、ふたりを守り囲んで泰岳の麓へ走り出していたからだった。

けれど燕青と李逵とは、旅籠に預け物をおいてあるので、

「それを取ってすぐ追いつきます」

と、途中で別れ、そして燕青だけは、すぐ仲間の一行に加わったが、どうしたのか、李逵だけは後ろに見えない。

すでにこの時、州長官の手勢と役人たちは、梁山泊の徒とあっては聞き捨てならず、全山の警邏を招集して、四方に配備を布いていた。ぐずぐずしていれば県道の城門を閉められる惧れもある。盧俊儀は李逵一人にかまってはいられないと思った。

「どうぞ、ご一同は先へ行ってください」――言い出したのは穆弘である。「どうせ、李逵のこと。何か道草を食ってるに違いない。てまえが探して連れ戻ります」

「たのむ」

と盧俊儀たちは、穆弘にあとをまかせて、一ト足先に梁山泊へ引き取った。

ところで一方の李逵は、例の、二本の斧を旅籠から受け取

って両手にぶらさげ、いつか道を間違えて、寿張県の役所の前へ来てしまった。まるで方角ちがいへ来たのだから後から慕って来る捕手もない。それにちょうど午飯時か、役所の門を覗いてみると、ここはいたって、しんかんとしていた。

「ほ……。飯時か。道理でおれの腹も減っている」

のそりのそり、彼は中へ入って行った。

「ここは空家か。人間はいねえのか」

李逵は、両の手の二丁斧を卍形に持って、役所の玄関口に突っ立った。

出て来たのは受付の小吏らしい。一ト目見るや腰を抜かしかけた。寿張県は梁山泊の所在地から最も近い町なので、黒ン坊猿の李逵といったら誰知らぬ者はない。何もいわず、もんどり返しに小吏は奥へ逃げこんでしまった。

「ちぇっ……」と、李逵は舌打ちして「なんで俺を見て逃げやがるのだ。おういっ、役所中の小役人ども、黒旋風李逵さまのおいでだぞ。なぜ首を揃えてお出迎えに出てうせねえのか」

廊下をずかずか、右、左をねめ廻して通って行くが、李逵と聞いただけで、書記室も登録局も白洲の控えも、急にそれまでの笑い声や雑談を消し、猫一匹いるような気配もしない。

「よしよし、どいつもこいつも、挨拶に出て来ねえな。……ふうむ、ここが知事室か。知事はいるだろう」

扉を排して、内へ入った様子である。

あっちこっちの隅に、ふるえ上がって隠れていた役人たちは、そっと首を外へさしのばして、

「おや、黒ン坊猿、何かごそごそやってるぞ」

「知事閣下はどうしたろう？」

「いやな奴が来たとばかりすぐ裏門から馬に乗って官舎の方へ消えちまったさ」

「そいつはよかった」

「よくはないよ。李逵のことだ、ただは帰るまい。こっちはどうする？」

「そうだな、放っておいたら暴れ出すかもしれないぞ。いや、呼んでる呼んでる。余り怒らさないうちに誰か三、四人行ってみろ」

恐々と逃げッ尻を揃えて李逵のいる一室を窺ってみると、なんと李逵はそこらにあった革梱のふたを引っくり返して、緑袍の知事の官服を出してすっかり着込み、腰に革帯佩剣を着け、足にはこれも官人用の皂靴、そして手に、槐の木の笏をにぎって、

「はてな？　まだ何か足らねえな。そうだ帽子帽子」

と、冠掛けに見えた冠をつかんで、無理に頭へ冠っていた。そして、がたんと足で次室の扉を開け、

「ははあ、これがいつも知事がいる卓だな。なるほどこいつア悪くない」

と、椅子にかけて、頬杖ついた。

見ると、印鑑筥がある、書類がある。李逵は官印の一つを取って、ぽんぽんと書類を問わず次から次へ捺し初めた。しかしそれにもすぐ飽きて官印を抛り捨てると、

「こらっ、誰かおらんか。書記、監察、どいつでも目通りへ罷り出ろ」

「うへっ。な、なにか御用で」
「なんだ逃げ腰を浮かせやがって。やいっ、弁当を持って来い、弁当を。わが輩は空腹なのだ」
「へいっ」
と役人たちはむしろほっとした。まずまずそんな程度ならとさっそく昼飯を卓に供える。すると李逵は、一目見て、
「気のきかんやつだ。酒を持て、酒を」
と、呶鳴る。その量がまた、ちょっとやそっとの酒量ではない。運んで来るそばから碗を傾けて、およそ一斗も飲んだろうか。気がすむと今度はたちまち飯をがつがつ平らげて、ゆらゆらと立ち上がり、
「こら一同の者、法廷へ出ろ。一匹でも逃げ隠れなどすると、引きずり出して首を捻じ切るぞ」
と、破れ鐘のような声でこうご託宣をくだしたのである。そして彼は広間の法廷に出て、壇の中央にある知事席に腰をすえ、大真面目で、槐の笏を胸のまえに構え込んだ。
炊事場の爺や婆やから小使、書記、諸役人らは仕方なしに、みなぞろぞろ来て壇下の床に首を揃えて平伏した。李逵は突如、本ものの県知事閣下になったような気がして来たらしい。睨み渡して、
「一同っ」
「へへい」
「どうだ、似合うか。俺の官服姿は」
「ようお似合いでございます」
「ところで、これから裁判を開くぞ。みんな面を上げろ。この中に泥棒がいるだろう」
「じょ、じょう談ではございません。てまえどもはみな役人で」
「わかっておる……だが泥棒がいなくては裁判にならん。うむ、前列の四番目におる奴、きさまは人相が悪い。召捕れッ。こら、なぜ縄をかけん。庇う奴は同罪だぞ」
「あっ、ど、どうぞおゆるしを」
「だまれっ。おかみのご威光もおそれず、なんじは到る所で強盗を働いたろう。そもそも法律を何と心得るか。この生れ損いめが！　盗ッ人野郎、きさまのような奴を人間の屑というのだ……」
と、威猛高に卓を叩いて罵ッたが、
「いけねえ、どうも少し俺に縁がありゃあがる。放してやれ。泥棒ばかりが悪党じゃねえや。裁判は止めたよ。さあ退け退け」
蹌踉と彼はその身なりのまま往来へ出て行った。空腹へ入った昼酒がまわって、すこぶるいいご機嫌のていである。
――役人や捕手は物蔭から首を出して見送っていたが、ゆらい梁山泊の近県では泊中の手なみを知っているしまた飢饉などの時には逆に助けられてさえいるので、官民ともに積極的な敵意は持たず、いわば触らぬ神にたたりなしとしていたのであった。
「おや、寺小屋だな。こいつはなつかしい」
童蒙村塾とある一家屋を見かけると、李逵はそこへも酔狂に入って行った。驚いたのは先生であり学童たちである。蜂の子みたいに騒ぎかけたが、
「しずまれ」

と、李逵は槐の笏で号令をかけながら教壇へ上った。
「おい、きみが教師か」
「はっ、さようで」
「俺がわかるか」
「へ？」
「わかるかよ、この俺が」
「どこかの、知事さまで」
「そうだ、そうだ。今日は一つ小学塾の視察に来たんだが、なにを今、教えていたのか」
「神農の話を聞かせておりました」
「神農とは何だ」
「天地の始めに人間たちへ病を癒す薬草や喰べ物を教えてくれた仙人なので」
「古い古い。そんな講釈よりは、おお、みんなの机の上に筆硯がおいてあるじゃないか。習字をさせろ」
「はっ、いま習字は終ったところですが」
「いいからさせろ。そうだ、そこの壁に大きく黒旋風とお手本に三字書いて、子供らに書かせるがいい。おれも習うから」
「へえ。黒旋風とは」
「俺の名だよ。俺はまだつい自分の名が書けずにいるから、ちょうどいい。ここで一つ覚えて行く」
李逵は空いている一つの机に向って本気で手習いをし始めた。それを見ると子供たちは忽ち組しやすいおじさんだと見たか寄ってたかってキャッキャッと笑い出した。字にも何にもなっていないからである。
「こいつら、なにを笑う」
李逵は墨をぶっかけた。すると学童たちは、俄然、このおじさんへ向って恐い物知らずに筆や墨汁を投げ返して来た。椅子、机はひっくり返る。
李逵は足を拯われて転ぶ。先生は右往左往する。
子供らは手を叩く。近所では何事かと往来へ飛び出す。
――こんなところへ、ちょうど穆弘が通りかけて、ここにいたかと、李逵を塾から引っ張り出して、酔歩まんさんたる彼の腕を小脇にかかえ、遮二無二、山寨へ連れて帰った。
「なんだい、李逵か、あれは？」
「まるで知事の化け物だ」
泊中では、彼を見る者、笑わぬはなかった。
すでに燕青もまた盧俊儀以下の者も、みな山上の忠義堂に帰っており、そこへ穆弘に伴われて来た李逵を見ると、腹が立つよりはまず腹を抱えて笑わずにいられなかった。
「李逵か。百日の禁足が解けるやいな、誰にも無断でどこへ行っていた？」
宋江から一喝の叱言をあびると、もう酔いもさめはてていた李逵は、さすがに悄れ返って平あやまりに謝りぬいた。また百日の禁足でも食ってはと、いつもの彼の元気もない。燕青は見て気の毒になり、しきりにとりなしをしてやると、盧俊儀もまたそばから言った。
「穆弘の話を聞くと、珍しく李逵は一人の人間も殺めず、いつもなら血を誇って帰るところを、今日は学童たちに墨汁を浴びせられ戻って来たそうです。彼としてこれは善行の方でしょう。賞めるわけにはゆきませんが、まあ、今日のところはゆるしてやってください」

初めて、一同は目をみはった。なるほど、よく見ると、李逵の顔は墨だらけだ。しかし、ちょっと分らないほど彼の地膚(じはだ)も黒いのである。宋江はつい吹き出した。すると李逵も白い歯を出して笑った。

これでは罪を責めて折檻(せっかん)のしようもない。

珍しいのは李逵の神妙さばかりでなく、ここ梁山泊の浅春二夕月ほどもめずらしい。泊中はなんとも毎日なごやかで、水寨(すいさい)に矢たけびなく、烽火台(のろしだい)に狼煙(のろし)の音もしなかった。しかし、中央から地方へかけて官軍のうごきは、決して万里春風(ばんりしゅんぷう)の山野、そのままではなかった。